果樹園　九十五号　昭和三十九年一月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

果樹園

第95号

詩人、その生涯と運命　小高根二郎
彼岸花　浅野晃
鉄砲　浅田二三男
路上　吉本青司
村堀之内　歴
ヘリック詩抄　森亮
貸室　萩原葉子
わが師　田中克己
浄罪詩篇ノオト　竹越三男編
編輯後記

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄（八十三）

小高根二郎

十二月中旬、伊東は独文学者高橋重臣氏に次の書簡を送ってゐる。

「美しい詩集ありがたうございました。「晩夏」や「モデル」が好きでした。そして全体に新鮮な気持がしました。又お作たまつたら見せて下さい。田中さんがそばにおいでですから、もう、いうことはありませんね。大阪においでの折には一寸、中学にでもお立寄り下さい。

この間中からとても気分悪い日がつづきお礼がこんなにおくれてしまひましたお許し下さい。」

（一二月一六日、住吉中学校より奈良県天理図書館内、高橋重臣宛はがき）

これは高橋氏が自筆詩集「小歴史」を贈つたことに対する礼状である。文中、田中とあるのは田中克己氏である。同じく天理図書館に勤めてゐたのである。書簡の末尾で伊東は不快な日の続いた由を述べてゐたが、おそらく肺細胞が蝕ばまれだしてゐたのであらう。

高橋氏宛と同日に酒井ゆり子さんにも次の書簡を出してゐる。

「このごろ　なんだかひどく気分がわるく（頭痛や食欲消失）お便も怠つてばかりゐます。ゆり子さんはお先気ですか、元気を出して生きて下さい。

こちらは関西大地震の警告が出たりして不安です。特にわたしの家は、すでに傾いた廃屋なので。

詩集はもう見本は出来ましたので、旬日中には発売されると思ひます。わりに、こつた美しい本になつたやうです。お送りいたします。

冬はいやですね、頭もからだもまるで動きませんね、それに陰気で。

私は二十四日ごろから休みです。」

（一二月一六日、住吉中学校より東京都上馬、酒井百合子宛はがき）

同じく身体の不調を伝へてゐるが、百合子さんを励ます気持を失つてゐない。第四詩集「反響」を贈呈する由を伝へてゐる。この気持も「わがひとに与ふる哀歌」以来いさゝかも変つてゐないやうである。

歳末つぎの書簡を田中克己氏に送つてゐる

「拙著「反響」、本屋から差出させましたきたない本になりました。

大毎から知らせがありましたが、中島さんの公報がいよいよは入りました由、まことに痛恨至極です。大毎でも何か中島さんのことについてプランがあるやうで、井上靖君（学芸副部長）から会ひたいと言つて来ました、明日行つてみるつもりです。

抽著を肥下さんと保田さんに送らうと思ひますが、住所がわかりません。至急教へて下さいますまいか、おねがひします。学校ずつと忙しく、やつと明日位から解放されます。

十二月二十七日　」

（一二月二七日、大阪府黒山村より奈良県天理図書館内、田中克己宛はがき）

伊東は『反響』の装幀や製本に非常に不満を抱いたのは有名な話である。（伊東は自分が発案した『夏花』の装幀以外は全部不満であつた）白地に藍のワクを描き、その中に金の焔と臘燭を押印した図柄。いつものくせで出来上りより伊東の夢が勝ちすぎてゐたためだらう。

伊東は中島栄次郎が昭和二十年五月比島ルソン島で戦死した公報を大毎から知らせてきた由を報じてゐる。大毎での企劃とは、中島の遺著を出版するとでもいう話であつたのだらうか？　井上靖氏の尽力にかゝはらず実現をみなかつたのは遺憾であつた。

伊東は末尾で「コギト」の発行者であつた肥下恒夫氏と主宰者であつた保田与重郎氏の住所を照会してゐる。ほゞ一年前の清水文雄氏宛書簡（昭年二一年一一月一四日附）に「ひとりの友を失つて、他の多くの友をも遠ざかつてゐたい気持」と書いてゐたが、その気持をまだ変らず抱きつゞけてゐたわけである。

明けて昭和二十三年の一月上旬、伊東は栗山理一氏に次の書簡を送つてゐる。

「お葉書ありがたう。この十日から（ママ）突然清水さん家にこられ、少しお酒のみ、色々お話しました。東京の皆様の御近況も少しわかりなつかしかつたです。お酒のんでゐますか。一緒にのみたいものですね、清水さんは白髪ふえ、少ししよぼしよぼして見えました。お互に年とつてゆくのですね、池田さん元気ですか、住所わからぬままに本も送らずにゐます。よろしくよろしく申して下さい。今年は大山定一氏と一緒にすこしまとまつた仕津する計画ですが、物ぐさですので、今からいやになつてゐます。」

（昭和二三年一一月八日、大阪府黒山村より東京都大蔵町、栗山理一宛はがき）

旧臘伊東は身体の不調を伝へてゐたが、休暇で元気を恢復したのであらうか、正月らしく酒の話なぞでて元気の様子である。しかし伊東は満四十二の厄年を迎へたわけである。

末尾に大山定一氏と一緒にまとまつた仕事をする計画を伝へてゐるが、それはヘルダーリーンの翻訳を大山氏の援助のもとで進めることであつたやうである。

「伊東静雄の晩年に、ぼくはヘルダーリーンの翻訳をすすめた。かれの好きな詩を、十篇でも二十篇でもいいから、ぜひともかれの言葉で日本語にしたものが読みたかつた。かれはかなり乗り気になつていた。語学上の問題や註釈などで相談に応じてくれれば、翻訳してみようと、こころよく引きうけてくれた。だが、仕事はついに実現をみずに、すべてが終つてしまつた。まことに遺憾の極みである。」（『伊東静雄全集』、大山定一）

――伊東静雄とドイツ抒情詩

当時、大山氏は『手帖』という雑誌を出してをられたが、それにでも伊東訳のヘルダーリーンを掲載するつもりであつたのだらう。

昭和二十三年の一月、伊東は次の作品を『舞踏』八号『手帖』第三冊に発表してゐる。

彼岸花

浅野晃

彼岸花　彼岸の道に
ひとかたにかたまつて咲いてゐる
かなしい顔を寄せて
涙がいま乾いたばかりの顔を

彼岸花　花のたしかさ
長い首をしかと保つて
夕映のなかにもまぎれずに
心づよく夜を待ちつつ

花よ　人を送つて　花よ
いつまでそこに立ちつくす
いつまでもいつまでも
この坂のこの松のもとに

日は落ち風立ち
私に慰めの言葉はない
言葉はある　いくつかある
けれどどうして口にできよう

彼岸花　彼岸の道に
泣き飽いて涙の乾いた
花の顔
さびしい顔

だまつてローソクの芯をつついてゐる青年を
今度はまつすぐに見て少女はいふ

（明晩もうひと晩
青年がここに泊つて
反射鏡づきの
その明るいランプを見てゆくことを
作者は祈る）

明るいランプ

わたしたち何故今まで考へなかつたのでせう
ランプのこと
どこでもランプを使つてゐるのね
少女は急に熱心に母の方にいひかけて
ちらと青年の顔を見る

（学校を卒へた青年に
けふ電報が来て
田舎の両親は早く帰つておいでといつてゐる）

ローソクのゆれる火影に
母親は娘を見　それから青年を見る
よくお店で売つてゐるわね反射鏡のついたランプ
あすあれ是非買ひませうよ
あかるいわよきつと

かつて『春のいそぎ』期の「誕生日の朗興歌」で、わが誕生祝ひに、空屋になつてゐる隣家の庭から、山茶花の枝をへ折つておいでまあ子〉と歌つたことのある長女まきちやんは満十二になつてゐる。この詩の主人公である娘にしてはいさゝか年輪のゆかぬ感もないではないが、たまさかに立ち寄つた親戚の青年に、ひとなつかしさを覚える齢頃と見てもよささうである。

好意を抱く青年に、なにはなくとも、せめて明るい光なりともてなさうと、蠟燭の代りに反射鏡つきのランプをせがむ一途な娘に、父母の反応の微妙な相違が、この詩の核心になつてゐるのである。

揺れる焔のなかに娘を見、青年を見てゐる母親は、すでに二人を対象として、比較し、計量してゐるやうな即物的な客観性がある。この母親の客観性に対し、父親は娘と一緒になつて浪曼的に、主観的に燃えてゐる。彼はランプをせがみつゝへちらと青年の顔を見る〉娘の一瞥は、すでに青年の助言や支援を予期した甘へであることを知つてゐる。さらに焔を明るくしようと芯をつゝいてゐる青年をへあかるいわよきつと〉と真直ぐ凝視する彼女の目は、明らかに青年の決心を要請してゐるのだということも知つてゐる。彼女がそれ

となく訴へてゐる要請を、父親は娘に代つて、明晩もうひと晩、泊つていつてやつてくれ……と願つてやつてゐるのである。一説には、この詩の主人公は、伊東が父親代りとなつて面倒を見た、白築家の長女幸子さんであるとも言はれてゐる。

伊東は一月中旬。次の書簡を高知なる吉本青司氏に送つてゐる。

「『朝戸』いつも有難うございます、たのしみにして拝見してをります。私もこのごろは手さぐりでぽつり、ぽつりと、詩のやうなものを書きつづけてゐます。身体の工合もよく、身心を充分とととのへて、しつかりした仕事をしたいものだとのぞんでゐます。」

（一月一四日、大阪府黒山村より高知市西新屋敷七五、牧原猷記（吉本青司）宛はがき）

吉本氏は『コギト』の読者だつた。彼は私や、高橋幸雄、林富士馬、波田光夫、真鍋呉夫、山脇哲臣、吉村淑甫諸氏を寄稿同人として、コギト調の復活を意図して『朝戸』という季刊誌をだした。伊東は「詩のやうなもの」を書きつづけてゐると極端に卑下をしてゐるが、浪曼派時代の愛読者に対するはにかみを表現してゐるわけである。

五日後、伊東は次の書簡をファンである三洋電機の亀山氏に送つてゐる。

「亀山様

取急ぎ前略御免。急に願の（但し俗用）筋があり、可及的速にあなたにお会ひしたいのです。お呼び立てして大へん無礼ですがお暇を作つて下さつて学校まで御足労下さいますまいか。毎日二時ごろ迄学校。それ以後は家。但し、日時を指定して下されば、何時迄でも学校に居ります。又どこかに私が出かけてもよろしいです。念のために京都の下宿にも同文の速達いたしおきました。

十九日　伊東静雄

（一月一九日、大阪府黒山村より大阪府枚方町、亀山太一宛封書）

急な俗用の願ひごととはなにのことかわからない。亀山氏の務める三洋電機は、当時自転車用の発電ランプや停電灯で売出してゐた頃であるから、「明るいランプ」の反射鏡付ランプの代りにそれを世話してくれ……という話であれば面白い。昨秋、田中光子さんのために、住中附近に貸間を発見けたことがあつたが、その附帯施設としての光源の準備であると仮定すると、この空想もちよつと面白い。

五日後の一月下旬、中島栄次郎の戦死公報に関して、次の弔問の書簡を明子未亡人に送つてゐる。

「お手紙ありがたうございました。公報参りました由、大毎の井上靖氏より既に通知があり存じ上げてをりました。いよいよ決定的な報知のあつたことを知り、万一を期待してゐました私は、長大息いたしました。私の半生の中の最も立派な友人を失つたのでございます。中島さんは私の文学の先生と申していい方で、私はどれほど頼りにし導かれて参つたことでせう。しかも、お手紙にありましたやうに、私の作品の一番信頼するに足る批評家と存じてをりました。詩を書き初めましたころは、中島さんの一言一言を、どんなに喜びや落胆を以てきいたことでせう。その上私共は性格上の一致と理解がありました。いつも、ひかへ目に、にこにこしてをられた中島さんを、どれほど親しみぶかく、なつかしく敬愛してゐたことでせう。この戦争で生き残つたわれわれは人悪く、小ざかしい気が自分でするのでございます。一流の才能を有つた友人をわたしは失つたわけです。

も一人私は蓮田善明君といふ、いい友人をこの戦争でなくしました。同君は昭南で自殺したのださうです。

この二人のかけがへのない友人をなくして、私はほんたうに孤独な感がいたします

（特に文学の上で）。もう私は四十三歳で、この後新しい友人の出来ることは全然期待出来ぬ年齢でありますので、その感が一層深いわけです。

中島さんの遺作のことで話し合ひたいといふ井上氏からの通知がありましたので、大毎に参りましたが、二回とも面会出来ませんでした。近日中に是非会つてみたいと思ひます。今日田中克己さんから、養徳社で出版の計画ある由ききまして、ほんたうにうれしくございました。是非その内、昔の友人ら集つて、思出の催したいものだと田中さんも言つてをられます。私もそれを熱望いたします。心には色々思つてゐますもののその日の生活の重荷によろめいてゐて、御遺族をお見舞することもなく、何のお力になることも出来ず、実にはづかしく存じます。

どうぞ、御健康でゐて下さい。少しでも平安でいらつしやることを祈らずにはをられません。

一月二十四日　伊東静雄

中島明子様

（一月二四日、大阪府黒山村より、奈良県添上郡楊本町藤谷方、中島子宛封書）

ちなみに、中島の戦死公報は次のやうなものである。

……

公第　号

死亡告知書（公報）

本籍　大阪市生野区南生野町一の六八

陸軍兵長　中島栄次郎

右は昭和二十年五月二十七日比島ルソン島リザール洲イポで頭部砲弾破片創により戦死せられましたのでお知らせします

なほ市区町村長に対する死亡報告は戸籍法第百十九条により官で処理します

昭和廿弐年拾月廿参日

大阪府知事　赤間文三

妻　中島明子殿

……

昨年十月末に書かれた公報が三月ちかくもかゝつて空しく帰還を待つ伴侶のもとにとゞけられたのである。収める物とてない遺骨箱でも、もつともらしさを整へるための準備に手間がかゝつたのだらうか？

中島は『コギト』同人中で最も精緻な頭脳

鉄砲

ある老百姓がいう
「鉄砲ちゆうもんは、一発ならすとあとがしいーんとするので、あと何発でも、ならしとうなるもんや」

浅田　二三男

うっすら緑青をつけた
手ごたえのある重さの薬莢を
村田銃に装填し
どこにいるのかわからぬ
まっくらやみの猪にむかって
ひきがねをひく

蛙や虫たちが
ぴたっと歌いやめ
山々をたしかめて
こだまがかえってくる
闇はおり重なって倒れ
底が破れた静けさは
なおいっそう深くなり
穴の底に落ちこんだ
たった独りの百姓は
ふたたびかまえる
そこからはい上るために
つづけて一発
——夜明けまで

を謳はれてゐた。私はいくどか中島の精緻な思考を讃へる伊東の言葉を聞いたことがあつた。その脳細胞をむざんにも射抜かれたのである。さういへば蓮田善明も同じ脳細胞を自ら射抜いて死んだのであつた。

伊東の脳裏にゆくりなく昭和十四年の夏の日が思ひ出されたに相違ない。伊東と中島は『文芸文化』の清水・栗山両氏の招きで北軽井沢に遊んだのである。この四人は木崎湖畔から中支の野戦なる蓮田に慰問の寄せ書をかき送つたことがあつた。その慰めた者のうち一人と、慰められた者とが、仲よく脳細胞貫通銃創で死んだわけである。その北軽井沢での或る日、中島は恩師である田辺元博士と敵策の途次たがひに知ることもなくゆきすぎたことがあつた。中島の後をゆく伊東や清水・栗山氏等は博士だとさとつた。眼を地に落した沈思の姿勢での散策である。さういへば中島も恩師と同じく地に眼を落しての散策である。哲学をするほどの者は頭脳が重いんであんな姿勢になるんだね……。誰いうとなく、そんな冗談もでて三人は笑つてしまつたが、伊東にとつてその日ほど中島の頭が大きく印象された日は他になかつたはずである。受弾率も人一倍よかつたわけである。

書簡の末尾に井上靖氏が中島の遺作の出版に関し伊東に照会を出してゐる模様だが、大毎出版局の企劃の一つにでも予定されたのだらう。丁度、同じ頃に養徳社からの話もあり、結局どつちつかずのまゝ、早い時潮に流され忘却の淵に置きざりをくつて現往にいたつてゐる。僅かに『思想』に執筆した「詩の論理と言語」が『現代の詩論』（昭和二九年、村野四郎、木下常太郎編、宝文館刊）に収録されているていどで、伊東が絶讃を惜まなかつた「完璧な詩人伊丹の貫鬼」（「コギト」昭和四年四月号）等の珠玉はすでに時代の塵埃の下に埋もれてゐる。

二日後、伊東は次の書簡を林富士馬氏に送つてゐる。

「お葉書ありがたう。かなしくてしかたなかつたといふ感想わたしにもよくわかります。しかし、私はひそかな、自信のある道に発足したやうな気持でもゐるのです。その道の辺の果実を、あなたの前にやがて示したいと思つてゐます。

斉田君がいろいろお世話になります、気の弱いところもある人ですから、いらぬ心づかひはせぬやうにさせて下さい。

あなたも出来るだけ身心をととのへて、小文壇を越えた仕事を皆に見せてやつて下さい。」

（一月二六日、大阪府黒山村より東京都江戸川区西一之江一の三四二柴田六次方、林富士馬宛はがき）

この文面だけでは明確ではないが、伊東の第四集「反響」の読後感を林氏が書き送つたことに対する返事のやうである。同集は既刊三集から選んだ作品に、戦後作を「小さい手帖から」の副題のもとに「野の夜」「夕映」「雲雀」「訪問者」「詩作の後」「中心に燃える」「夏の終り」「帰路」「路上」「都会の慰め」の十篇を収めてゐる。ザツハリツヒなこれらの戦後作は、ひゞきと光彩において昔の作品に比していさゝか劣るところがあるやに感じられた。処女詩集以来の伊東の熱愛者である林氏には、特に詩質の変化だけでない一種のかなしさを感じたのはやむをえなかつたゞらう。事実、私自身も或る種の幻滅のかなしさを感じたのである。しかし伊東は「道の辺の果実」をやがて示したいという自信を示してゐる。道の彼方の目標がすでに心奥にできてゐたのかもしれない。

しかし二月初旬に仙台なる桑原氏より伊東に書き送つた書評は、前述の林氏のかなしさを裏書きするやうである。

「長い間ごぶさたしました。お変りありませんか。この間は「反響」をありがとう。さつそくお礼をと思つたのでしたが、一月

中旬京都へ遊びに行つたので、あるいはそのときお会ひできるかと思つたりもしたので、却つておくれました。貝塚君が文化賞をとり、そのお祝いで酒をのむ会が重なりレンラクしてお目にかゝる機を逸したのでした。三好は月末までいましたから、あるいは創元社のはからいでお会いかと思います。

詩集は近ごろ珍らしく感動をもつて読みました。実はこの間「改造」に「路上」を見たときお手紙を出そうと思つてゝ、怠けたのですが、あれはいい詩です。しかし本当をいうと私は、古いものの方が好きです。三好君は巻頭にある近作をよしとするので、彼のそういう意味はよくわかるのですが—そして芸術家に向つて近作より旧作が好きだということが、いかにも失礼かということも知つていますが（白秋も晩年「思

路上

吉本青司

友だちが
インド美術の本を借してくれた
シバの交歓はすばらしい
それは神々が
まだ孤独を知らなかったころか
孔独に耐えられなかったころのことだろう
ぼくは　今もある
へと思うのは記憶の中だけかも知れない〉
シバのことを想いだした
越知から薬師へゆく山路で
戦死者墓地をすこし曲ったところ
自然に仕組まれた石室があって
そこに孔のあいた石が置いてあった
ぼくらはそれをシバ神とよんだ
姉の嫁ぎさきへいく独り途
さびしい山路にかかるそこで
ぼくはかつて母に教えられたとおり
路傍の小枝を折つてそなえた
それが　ぼくらを旅に誘う神であり
旅びとを守る神だと知つたのは
ずっと後のことだった
むろん象徴的な石室や
孔のあいた石の秘密など知るわけもなかった
たえず出発がつづき
いつも帰らなければならない
毎日の路上で
焦燥や
失意や
憤りを
幾度ちぎり捨てたことだろう
そして
どこからともなくやってくる
元気や
決意や
誓願に
何度励まされたことだろう
ハミのいる山路にかかる
ヒノキの林のそばに
今もあるオブジェ
たとえその信仰の時は過ぎても
あの石室と孔のある石の交歓
そこにある宇宙
それらをぼくは
忙しい日のなかで想いだす

い出」などをほめる雑誌記者には原稿をやらなかつたそうです）卒直にいう以外に手のない私としては、正直にいつてみるほかありません。お許しねがいます――私はあなたから第一詩集以来すべての詩集を頂だいしていますが、今の集を通読するまで、あなたの初期の作品のよさがわかつてはいなかつたことを覚りました。何かムズカシスギル、言葉に無理がある、というようなさまつな点にばかり引つかかつていたのでした。ところが今度よんでみて、曠野の歌、帰郷者、わがひとに与うる歌、河辺の歌行つてお前のその憂愁の深さのほどに、等の中にある厳しくしかもロマンチックな精神の高さに打たれました。むかし住吉であの詩集をいたゞいたとき、よくわからなかつたことをお詫びしたい気持です。（三好君も今度あなたの初期のものの美しさが理解できた、という点ではぼくと同意見でしたが、彼はそれにもかゝわらず近作をよしとする、近作の基礎として旧作をよしとするいうのです。）野間宏に会つたら、彼はこの辺の作を一ばん好きといいました。それから朝顔、八月の石にすがりて、早春なども好きですが、私の個人的趣味からいうと、このあたりから、あなたの詩はなだらかになつてきた。叙景的になつてきた。日本化した。それもあなたの心の落着きを示すのかもしれぬが、初期の作のような、迸るものを構成したような、時としてキツクツな骨格が消えたことを残念に思いました。また例の高見の見物的批評（？）といわれるかもしれませんが、私にあなたがもう一度今の技功をもつてきびしいロマンチズムを歌われんことを切望せずにはおられません。妄言多謝。

あなたは小野十三郎君の「詩論」はどうですか。私はあの論の趣旨は賛成ですが、同君の作品にはまだ賛成できません。

西下中湯川秀樹君と「改造」のために対談、大分無知をばくろしましたが面白く話せました。そのあと「世界文学」でムリヤリに小林秀雄と座談させられました。（ぼくはもう彼とは話しあう気持はあまりせん）。彼の怪辯にかきまわされ、ぼくはやゝ食われた形ですが、彼の才能は十二分にみとめるけれども、あゝいう封鎖的な独断精神からは、もうわれわれに役にたつものは生まれまいと思いました。私自身は近ごろ科学的なこと、社会的なことの方に興味がつよく、文学も、そういう広い面から、凡人の立場で見てゆきたい気持です。一度バナルな立場に迫ることが却つて文学を、やがてはよく捉えうるのではないか、と期待したいのです。そしてこの期待の成否は私の勉強と才能によるだけですから、他人のメイワクにならぬからよいと思うのです。

勝手なことばかり書いてすみません。春か夏ごろまた西下の予定あり。その折はレンラクして一度ゆつくりお話ししたいと思います。

お子たちは大きくおなりでしようね。こちらは女五人みなピチピチしています。

家内からもよろしく。

二月三日夜半　　武夫

伊東静雄様

（昭和二三年二月三日、仙台市北五番丁桑原武夫より大阪府黒山村、伊東静雄宛封書）

この書簡ほど適切な「反響」評はない。昔

理論社の名作プレゼント
星の牧場
庄野英二 作
長新太 絵
¥620
東京都千代田区神田神保町一ノ六四
理論社
振替東京 九五七三六

村

堀之内歴

月明の　夜更け
街は　村になった
プラタナス樹のちゞれ葉一まい
烏となって　舞い下りた
睡りこけているもののパノラマ
木（き）　金（かね）　土（つち）　石（いし）　コンクリート
ろ路の小犬に至る
屋上の旗と　俺の影だけ　ときどき……
路上の俺一人　さて何をすればよい
俺だけが〈時〉を持っているのは
傍に光る小石　掌にとると
まるく冷たく笑んでいた

――「一九六三・十一・二七」――

を知るほどのものには、今のなだらかで、叙景的な抒情がものたらぬのである。詰屈な骨格が目ざはりであつたが、それを超克してほとばしる浪曼的・或ひは自然的な情熱が構成する昔の作品のほうがなつかしいのである。

しかしその反対の場合もあるのである。三好達治氏のやうに、近作をよし……とする立場から昔の作品も認めようという考へである。換言すれば近作が判つたから旧作もどうやら理解の域に到達した……といつたほうが正確であるかもしれない。今までも幾度か既述したが、伊東にとつて三好氏の理解をえられぬことは生涯の気苦労だつたのである。それは『わがひとに与ふる哀歌』出版記念の席上での萩原朔太郎と三好氏の意見の対立以来の気苦労であつたのである。後日招かれて三好氏も主宰者の一人だつた『四季』に同人参加したが、同じ傘の下にゐて互ひにそつぽを向いてゐるやうな気まずさが伊東の気苦労を倍加したのである。「互ひに同じ方角を目ざしてゐるのに一向に理解を示さない」。それが三好氏に対する口癖の不満であり、私も聞かされたが、、桑原氏も幾度か聞いたことがあつたのだらう、「反響」の出版元である創元社を介して桑原氏は伊東を三好氏に斡旋するところがあつたのである。

それにしても、桑原氏が全い理解を示してゐない小野十三郎氏の作品を伊東は昨秋生徒達の前で解説してゐた。先の林氏宛書簡で伊東は「道の辺の果実」を約束してゐたが、伊東は桑原氏の理解よりもなは遠く変貌を意図してゐたのかもしれない。

伊東は十日ほどして桑原氏に次の返事をしたゝめてゐる。

「お手紙たいへんうれしく拝見しました、私の初期の作は、萩原先生や保田君の強力な推輓にかからはず一般には全然公認されてゐなかつたもので、漠然とした不信にとりかこまれて今日に及んだものですので、今日のあなたのお目であんなに認めて下さつたことは、非常な喜びでした。ひき合ひに出して下さつた白秋の「思ひ出」とはずゐぶん条件が違ひますので、大へんうれしかつたです。私自身、不評の中に、懐疑的にならざるを得ぬ時もありました。私は最近の自分の作を、初期のものの「解説」といふ風に考へてをります。しかし昔に帰ることは、到底無理なやうに思はれます。あの頃のやうな、意識の暗黒部との必死な格闘は、すつかり炎を消して平明な思索に移らうとしてゐるやうに自分では考へてをります。しかし三好さんから近作を認めても

らつたこともやつぱり私の虚栄心を満足させます。『反響』はこのお二人によつて、自分には意義があつたとうれしく思つてをります。

三好さんと会へるやう色々お骨を折つていただいたこと後でしり、ほんたうに有難かつたです。電報が堺の旧居の方からまはつて来たのが、ずゐぶん後で、次の日曜に京都に行つて見ましたが、もう居られず、二月の八日かに三好さんが大阪の創元社長の宅（武庫の荘）に見えられた時、やつとお会ひ出来、一緒に食事しながら、ゆつくりお話を承ることが出来ました。会ひたいと思ひ初めてから十年を経過しました。評論や随筆から気むずかしい印象をうけてゐましたのでびくびくしてゐましたが、案外気楽に話せました。老成した人のやうな、ゆつたりした感じをうけました。親るゐの家に泊つてゆけとすすめて下さつたのですが、学校があるので、不本意でしたが別れて帰りました。今度大山定一さんと、年刊詩集のやうなものを創元社から出すことになり、三好さんにも相談にのつていただくことになり、又近々、三人で会ふ機会が出来さうで、酒でも持つて行かうと楽しみにしてゐます。

方々からの噂によると、桑原さんが京都の方に帰つておいでになるのも近いのぢやないかと想像され、もしさうなれば、どんなにぎやかになるだらうと楽しみです。早く帰つておいでなさい。

このごろ学校の方が迚も忙しいのですが、もういいかげんにして、自分のことをやらねばいけないとも考へてゐます。

いい気になつて自分のことばかり書きました。御近況は御作で充分わかつてゐますので、こんな風になりました。

奥様にどうぞよろしく

二月十三日　伊東静雄

桑原武夫様」

（二月一三日、大阪府黒山村より仙台北五番丁、桑原武夫宛封書）

貸室 XXVII

その三

萩原葉子

私は耳を疑うほど喜んだ。鬼林が引越してくれるなどこんな好都合のことが、実際に起ったとは！　彼一人のためにどんなに困り、怖い思いをして、家の中も暗かったか知れないのに、願ってもない幸が起ったのだった。

母の話では、酒の入らない青い顔でやって来たので、かまえていたら妙に静かに、仕事の都合で秋田県にやられることになった。いよいよお別れになってみると、おおやに済まないことをしたと思い、一言お詫びをしたい。それで帰るまでに一度、ぜひ私に会わせてくれと頼んで帰ったというのである。

一難去ってまた一難である。せっかく好物の赤飯も上の空の状態になった。母はおもしろそうに

「ちょっと会えばいいじゃないの？」と、言って笑っているが、それどころではない。もしまた酒が入っていれば元のような怖い人間になるだらうし、油断はできない。母に代りを頼むと、いよいよからかい調子で、

「だって鬼林は若い方のおおやに会いたいというご指名なのよ。あたしのようなばあさんじゃ嫌なのよ」と言う。

仕方なく引越しの前の晩、夕飲もそこそこに行くことにした。心配で食事ものどを通らなかったが、一ケ月分の敷金を返しながら、引越しの話でもすれば、私の役目も終るだらうと思って勇気を出した。

鬼林は私のことを〝よくできたおおや〟と、母にほめたそうだから。なにも怖がることはないのだと、思った。

ヘリック詩抄（三十六）

森　亮

泉

泉の水は熱を冷やすと聞いてゐるのに
わたしの熱を鎮めようと来てみたら
両・三度わが身をひたしてもちっともつめたくはない。
噂に聞いたあらたかな効き目をあらはさない。
おもへば、泉よ、ただならぬ熱に悩んで
お前の水は
わたしとおなじ脈搏の激しさで滾々と脈打ち、あへぐ。
お前自身をいたはり癒やすがよい。わたしは睨んでゐる、
お前が恋をたぎらせてをり、それがわたしの恋に劣らないと。

ヘリックの詩は典雅なことが特色で、たとへ心は乱れても形はくづさない。しかも彼も時代の子で十七世紀の詩に多い機知に富んだ比喩的表現を用ゐてゐることがある。さういふ奇想が生かされてゐるのが例へばこの「泉」（四一四）である。

鬼林は私を見ると、玄関の猫板にぴったり座って挨拶した。

「勝手なことばっかしおおやにいってすまんでした。どうかまた帰って来たら遊びに寄らせてください。」

私は上の空でぴょこ、ぴょこおじぎをしていた。いつもとまるで違う態度に安心と同時に、妙な感激を覚えていた。

「ぜひまたお遊びにいらっしてください」

「ご縁があったら、もう一度へやを借して頂きたいので……三年たったら帰ってきます」

私は握っていた敷金を返しながら

「ええ、どうぞまた、その時には、また」

自分でも訳の分らないことを言っていた。

帰ろうとすると、鬼林は米ビツをかかえて来て、残りもので失礼だが秋田へ持ってゆくこともできないし、向うへ行けば知り合いの農家もあるので、食べてもらいたいと言うのだった。

米ビツを抱えて帰り乍ら、私は鬼林の善意にいよいよ感激していた。あんなに偉張っておきながら三年後にまた部屋を借してくれとは、虫がよ過ぎるとは思っても、一生懸命の好意が嬉しかったのである。もともと悪い人ではないのに生活の疲れで、酒乱になるのだらうと、考えた。これからまた秋田に行っても、娘を困らせたり、おおやを困らせたりすることも繰返すのに、ちがいない。鬼林が良い奥さんでも見つけて幸せになってくれればと、私は思うのだった。

翌朝、私は米のお礼ながら餞別に娘の似合いそうな、支那ふうのブラウスを鬼林に渡すと、まもなくトラックに乗せた荷物を一緒に、父娘は貸室を後にして走って行った。鬼林はかってKさんの引越しの紙屑のことで、私にひどく怒って来ただけに一片の塵も残さずに、始末が届いていた。「たなこの引っ越しにはおおやは立ち合うもんだ」とも言われたが、鬼林の帰った後の部屋は、酒の嗅もなくなってほっとしたのだった。ただ壁に映画女優の写真が粘ってあり、部屋がいかにも品が悪くなっていた。

鬼林が行ってしまうと、あまりのんきになって母は張り合い抜けがしてしまったと言うほどであった。だが、ふと似た風貌の男に合うと、反射的にギクリとしたり、はっとしたりして自分ながら苦笑することがあった。

鬼林がいなくなって数日めに、母は自分の知り合いの娘を空いた部屋に入れてもよいかと、言った。もちろん、身元の判った人の方が安心なので、賛成した。

初めは商売と割り切って、部屋の人とも無関係にするのが私の理想だったが、いまはかなり考えが変っている自分だった。たまには部屋に遊びに行ったり、来たりするのも良いし、その位のことのできる人がいたら随分たのしいに違いないと、思っていた。母の話は願ってもないことであった。

母は私の家に来るまでは、貸室の人達と友達になって暇つぶしをしたいと思っていたところが、母の相手になるような人は一人もいないのに、がっかりしていたのであった。いくら強気でも鬼林ではかなわないし、中谷均や雨宮のような得体の知れない男達では、一層困る。

知り合いの娘が入ることは、何より良いのだと思った。貸室といっても名ばかりの、たった四部屋のものである。階下に中谷と雨宮がいて、二階には会社員のBがいるだけである。

母は娘と一緒に会社員のBに挨拶に行き、今度隣りに入るからよろしくといった。Bはもう永くいるが、めったに顔を合わせたことのないおおやの母が挨拶に来たので、びっくりしたようだった。そのうえ〃この娘は真正面で男を連れ込むようなことはしませんから、よろしく〃と言ったのには、更に驚き〃ぼくの方こそ女など連れて来ませんからよろしく〃と言ったという。当てつけと思ったらしい。

次に中谷均の部屋を訪ね、また同じことを言ったところ、

「いやでございますわ、アタクシそんなことちっともかまいませんもの、ホホホ」と、笑い、そして〃鬼林さんがいなくなったのでとても静かで、うれしいんです〃と、言ったそうだ。

母は中谷は得体が知れないへんな男だが、面白いから時々行ってみようかと言ったり、もう一人の雨宮はいつも留守のようだから、一度はっきりたしかめてみると、言ったりする。母にあまりうるさく干渉されると困るし、Bのような真面目な人にあんなことを言ったのでは、さぞ迷惑に思ったろうと私は気になった。

母は娘の部屋に毎日出掛け、帰って来ると中谷と雨宮の二人がおかしいと、私に報告した。他人がどうしていようと、他に迷惑がかからなかったら良いと思って聞き流していると、或日いつかの雨宮の奥さんが、またやって来た。先日と同じ子供が後ろに立って怖びえていた。

〃あのう、主人は相変らずこちらに入り浸っているのでしょうか？〃いきなり見当外れを言われて、おどろいていると、

〃主人を私共に返して頂きに上りました〃と、険しい眼をして私を伺っている。

返すも返さないも、ご主人のことなどまるで知りませんと答えると、女はいよいよ険しい顔で子供の手を握りしめながら

〃どうしても、こちらで返してくださらないなら、出るところへ出るより致し方がありません〃と言う始末。

ばかばかしいやら、おかしいやらで気違いじみている女を相手に、困っていると母が外から帰って来た。母は開き直って言った。

「あまりおかしなことをおっしゃる方は、一一〇番を廻すことになっていますから」

それから女と母の一問一答が、始まった。母の大声は相手の言葉を押さえつけて、一言も言わさず、雨宮の部屋の荷物を廊下に突き出してしまった。

女は、荷物をまとめてリヤカーを呼び、一応片附いて帰るまでに、それほど時間も経っていなかった。いったい雨宮という身体の大きな男は何者なのだらうか。中谷とはどういう間柄なのだらうかと、母の興味はつきないようだった。

ともかく中谷の連れて来た男だから、報告

をしておく必要があると言って、母は中谷の部屋を訪ねた。

戸を敲こうとした時

〃鏡はどこに置きましようか？〃

〃そうですわねえ、ここはどう？〃

〃もっとこっちがよろしいわ〃

〃ではここら辺にしましようよ〃

誰かとしやべっている様子に、来客がいるのだろうと気を利かせて帰ろうとした時、内から戸が開いて、中谷が出て来た。廊下から部屋の中はまる見えの状態になっていた。

その瞬間中谷の部屋はきれいに片附けられて、誰もいないことが分ったのである。母は気味悪くなって早々に引きあげてしまったという。

いつかも中谷の部屋から

〃アタクシ、お待ちしていたんです、それなのにあんまりよ」中谷の声が聞こえ、恋人に囁やくような妙なものだったので、雨宮と話しているのだと思っていた。

誰もいないのだとすれば、あれは誰に言っていたのだらうか？一人言にしても返事までするとは、変っている。

だがいづれにしても、鬼林も雨宮もいなくなったことは、良いことであった。

あとは心配の種になる人はいないし、もう安心だと思った。中谷は変っているだけで、迷惑をかけてくるわけでないから、心配することもないであらう。

家の中は久しぶりの平和がやって来たようにほっとして、いまは鬼林の噂も気楽に話せるし、雨宮の奥さんのヒステリーにも同情を寄せるゆとりも出来たのだった。

考えてみると、貸室を建ててから三年余りに、いろいろの人が出たり入ったりした。一ケ月でも入った人は、やはり忘れられない何かの跡を残してゆく。どの人も出る時は申し合わせのように自分の都合ばかりを考えて、おおやの私を計算と引き替にしか見ていないのが、情けないことだった。

だが小峰少年だけは私の方に借りがあるようで、自分の心に釈然としないものが残っていた。何とか小峰の行先を捜して、安否をたしかめたいと気になっていたが、毎日の生活に押し流されていたのであった。

わが師

田中克己

おろかな私とて、ゆくところ会ふ人みな師であるが、学校の師とのみ限つても多くの良き師を得た。中で小学校の先生はお二方（水田先生、西角先生）御健在のことは、父葬儀（大阪での）に御参列いただいたので、承知した。大学の先生は偶ね道山に帰りたまうたが、この六月に亡くなられた和田清先生のことを書きたく思ふ。

先生は私の入学当時。まだ助教授であったが、頭髪すでになく光頭といつた感じであつた。教授には三年の時になられたかと思ふ。卒論の感想で、私自身「不勉強で」と申上ると「さうだったね」と仰しやつたので「しまつた」と感じた記憶がある。

その後、数年間とだへた師弟の誼が昭和十三年に家族づれで私が上京した時また始まつた。先生は私の無暴をお咎めになつて「くちないよ」と仰せられたが、御心配いただいた証拠に、翌年、蒙古研究所へ御紹介いただいた。所長は忘れた。先生の仲好しの白鳥清先生の下で私は働くことになり、この誼で翌年に新設された亜細亜文化研究所に勤めることとなつた。（その間のいきさつは略する）。

昭和二十一年、敗戦で華北から帰国した兵士の私を先生は慈眼でお迎へ下さり、天理図書館に奉職中もたびたびおたよりをいただいた。二十四年かに大学授教の資格審査といふのがあり、私は「合格」を得たが、これが先

生の審査の結果だつたことはいふまでもない。私は先生にヒィキされたのである。

さて昭和三十二年、私は上京ときめてから先生に東京での就職を依頼した。実は先生に失言あり、私が彦根の県立短大に勤めた時、「辺地に置くは惜しい」とたよりをいただき、それを根にした依頼だつたわけであるが、もとより先生お答へなく、しかも私は上京する。お目にかかつての御挨拶へのお答へは「君の勤め先はよくないが、まあその中に良い所が見つかるよ」とであつたらう。私は良し悪しはかまはず、東洋大学の夜学の専任教授として一心に教へた（つもり）である。

東洋大学、一名をバーヨー大学といふ（これも私の上京後はじめて知つたことである）。動揺の結果、私は一年ではふり出された。委細は略するが、先生は私の生活を心配して下さつた。立教大学の大学院は手塚教授が見つけて下さつた。成城大学は栗山理一博士が世話して下さつた。防衛大学は先生の御心配を知つた青山定雄博士が電話をかけて来られて決定した。聖心女子大学は、先生のお言葉では「原田淑人先生がわざわざ雪の中を二度もお運びいただいて」決定した。原田博士は東洋考古学の世界的権威で、和田先生にも恩師に当る。喜寿の後も矍鑠として聖心女子大学におつとめである。私には就職決定のあと、ゆつくりと御自身の未就職時代の御心境をお話しくださつた。ありがたいことである。（故藤田亮策先生の御学恩については別にしるす。）

ともかく四大学の非常勤講師として、なんら責任を負はないかはり、手当は僅少であつて、私と妻とは苦労した。福地君に予言者が語つた「東京へ行けば皆凶」の予言が当つたわけである。

聖心女子大学では和田先生と同日同時間の勤務で、これが楽しかつた。ある日、私が講義をすまして悠々と帰つて来ると、先生はがらんとした講師室で私を待つておいでだつた。大学院の学生が来なかつたのでもあらうか。これ以後は私もなるべく早めにすますこととする。

師弟そろつて坂路を下り、都電の停留所までの途は、誰きくものもない会話の箇所である。先生はある日とんでもないことを仰しやつた。「田中君、僕は人生を誤つたね」。「失敗だつた」との仰せだつたかもしれない。私はわが耳を疑つた。いかにも先生は一高でも稀なる俊秀であつた。官界に進まれたら満鉄総裁、企画院××、いくらでも前途は拓けてゐたらう。しかし学界は？、先生はいま羽田博士、ペリオ、グラネ、マスペロなきあと、ヒルト以来の東洋学界を担つておいでるのだ。何たる自己喪失。第一、私と先生とは学問以外にどうして結ばれたらう。先生のお顔には何らの表情はうかがはれなかつたが、私は欝々として坂路を下りた。

塙選書 32

俳諧史

栗山理一著

本書は単なる俳壇史ではない。俳諧の歴史の転回点で作者の名と業とがふりかえられ、新たな生産のバネとなる事実を、近世には芭蕉、蕪村、一茶、近代には子規をみながらその展開のあとをたどる。

六一〇円

文部大臣賞受賞

東京都文京区春木町二ノ二三
塙書房
振替東京 八七八二

先生の御病名が脳軟化症とわかり、二十年ごぶさたのわが妻をして、「あんなにおなりになつて」と嘆かしたのは翌年の夏だつたらうか。先生はその後も病床においでで、亡くなられたのは前掲のごとくこの六月のことだつたのである。

わたしはヒィキの学生として、この一文を書きたくてならなかつた。無礼を先生の咎めたまはざらんことを。

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」B

竹越三男編

③

〈この部分は大きな×じるしで抹消してある。「話」を書きかけて中止したらしい。〉

話は対話体で
夢みるやうな春の日くれがたであつた、一疋のモンモスが彼のドレイなる人間をつれて、郊外散歩をした（すでに前世紀にはモンモスは地上の王であつた故に）
奇怪なる奇蹟と神秘とにその巨体を包まれてこの神聖の四つ足と彼のドレイなる人間、狡猾と惻量と現実の化身なる二本足の動物とは夕日にそまつた遠い山脈やその上に落ちかゝつた朱益のやうな太陽や、紫色の森や林や河や牧場やすべてそういふへ×じるし、ここまで〉

話

〈これは大きく書いてある。この話はぐつに後で書くというしるしであろう。〉

この珍らしい話は実は私のつくり話である、（これは断じて詩といふべき種類のものではない、ほんのたとへ話である）
言ふまでもなく○○とは私自身である、○○とは真理である。＊

＊朔太郎は○○と○○との対話体の「話」を書かうとしたらしい。彼は「感情」創刊号の「虹を追ふひと」のほか、大正五年までに二三の対話体の作品をのこしている

④

○前に述べた如く詩とは無限の空間と無限の時間をパッスする一刹那の幻影である、これを捉へることの出来るものは詩人だ、
けれども、考へてみろ、それを確実に捉へたところで何になる、よしんば今後私の心霊の触手が充分鋭感になり、詩作上の技効が完全の域に達するまで洗練され、そして遺憾なく影をば詩といふ劫久性の乾板に納めたところでそれが何になる、
単に私の感得しえたるところのインプスレーションを他人にも完成に感電しうるといふまでの話ではないか、
他人は私の乾板より復製した影を頭上に押し載いて喜悦する、未知の真理を発見して感謝する、単にそれだけだ、他人を喜ばすまへに私は私自分を悦ばさねばならぬ、私自分の皿に手をつけねばならぬ、私自分真理の玩弄物であってはならぬ、第一に私自分が聖霊の「のぞきからくり」であることに不足を言わねばならぬ、
併しそれが詩人の天分だといふものがあつたらどうする、私は躊躇なく御答へする、私は詩人ではないと、役は役不足だ

△何もしないのではない、祈祷して居るのだ、

⑤

孤独

密房の中に彼は居る
彼に於て免かれ難きものは天上縊死である
彼に於て免かれ難きものは草木姦淫である
此手の奇怪なる
然しながら極めて必然なる犯罪及び行為は
彼に於て全く独創の生活である

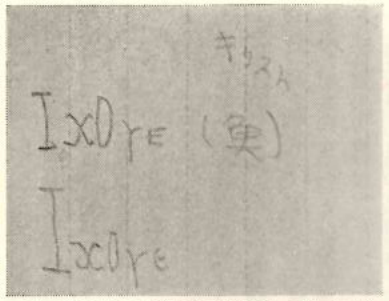
何となれば彼は単独である故に
彼は信仰する
愛するがために信念するのではなく恐るゝが
ために信ずるのである
孤独者にとりて神は「罪」であり、「愛」は
「血」である故に、
彼は全く単独である、故に彼は「我」以外の
何物をも有して居ない、

疾病

雪山の絶頂りんりんたり
この冬のあひだ、人は疾患する
疾患しつつ天にひるがへるところのたましひ
がある
病人の書いたましひ(ママ)がある
懺悔者のふるへるたましひがある

生物のうへに水ながれ＊
＊大四・4「アルス」発表「春夜」の中の一行。
鴫は木ぬれに光る＊
後出の〈はかりかねたる汝の心だ〉で始まる詩に〈木ぬれを透きて　鴫は樹上に光るまで〉という行がある。
右二行はそれぞれべつの時に思い浮んだ詩の行をメモしたものらしい。
⑥

秋から冬にかけて詩人は疾患する、熱病のうたゝねのさびしい夕ぐれの寝台の窓に白い水差が並んで居る、
母上とも、または知らぬよその少女ともおぼへない、たそがれのものうい影は夢のごとくにきて夢のごとくにしぬび去る、はねぶとんのまくらに接吻の淡い名残をのこしてゆく、
しみじみと薬の香のなつかしい夕だ、初冬のうららかの暖炉の影にもの思ふ〔葵〕の花にさへ
懺悔するものゝまへに月がある、
懺悔するものゝ祈れるものゝ肩の上にも月がある
〈抹消「月には」〉蒼白い水がながれる



〈右の詩はノートA⑩に出ている。「懺悔者の形の発端」が「かの」の姿「ものしまた」の「罪形」の端「いま」と「竹」の「向」の「習」の「作」と「第二」の「肩」の「春」の「春」の「春

な心もとなさと、ある空々しさ――いい気らしい一足とびのかげの脱落とを感じた。（私の不敏と低さとから、と今はそういい改めなければならない）当時のみならずその後も永く私はそれを感じた。その点、萩原さんとは意見が合わなかつたし、伊東の同感者桑原武夫君とも話は合わなかつた。後年伊東と初めて出合つた時にも、私はまだその卑見を持ちつづけていたので、伊東にもそれを告げた。こういう片意地は時間が治療をしてくれるまではなかなか改まらないものである。私が前言の非をさとつたのは極めて最近のことである。」（昭和二八年三月二三日「大阪朝日新聞」三好達治――伊東静雄君を悼む）

書簡の末尾で伊東は三好・大山氏と三人でなにか企劃をもつやうに書いてゐるが、それが実らなかつたのは当然かもしれない。

伊東は六日後、次の書簡を田中光子さんに送つてゐる。

「あの日約四十分、（電車の故障で）お約束におくれて、たうとうお目にかかること出来ず残念に又すまなく存じてをります、深くお詫びいたします。家においで下さるのではないかと、次の日曜までお待ちしてをりました。今度関西にお下りの折には是非々々私の家にも泊るやう予定して下さい。

あなたのお作に就いても色々お話し合ひたく存じます。私の詩集よんで下さつて、うれしく存じました。このごろ学校の勤めがひどく忙しく中々詩作の余裕も少くいやになつてゐます。色々計画は立ててゐるのでありますが。（創元社から、大山定一氏と二人で編輯して詩に関してクォータリーのやうなもの等）

今度はいつ西下なさいますか。おいでの折は是非知らせて下さい。先日久しぶりに大塚さんにお会ひしてなつかしくありました。しかしまた先年いろいろお世話になつたままで御無沙汰してゐたこと心苦しくもありました。

今度あなたが御西下なさつた機会に是非大塚さんともゆつくりお会ひしお話し伺ひたいと存じます。

二月十九日　伊東静雄

田中光子様

（二月一九日、大阪府黒山村より横須賀市逗子山野根三八二・田中光子宛）

三好達治氏に出会つて十年の宿願を果して快的な気分に浸つてゐた伊東は、待ちかねてゐた女弟子・田中光子さん西下の報に浮き〳〵したこと必定である。電車の故障で駅頭での出会ひはかなはなかつた模様だが、文面にはいさゝかはしやいだ気分が漂つてゐる。

不自由な家であるにかゝはらず、彼女の宿泊の用に供しようとまでいう過当な好意は、それを裏書きしてゐる。庄野潤三氏かの尽力で部屋も用意できてゐる。大山氏と共編予定の季刊誌は充分ではないが舞台の役を果すだらう。後は歩みゆくまゝに道の辺の果実を摘むことができるであらう。それにしても、東京教育大から同志社大学に転勤してきた模様の大塚氏に妙に伊東が遠慮してゐること敗戦前と変らない。あたかも負目を意識しなければならぬ義理でもあるかのやうに……。

三月中旬伊東は次の書簡を詩人志望者である堀之内歴氏に送つてゐる。

「先日はお手紙ありがたう。何と返事していいものかと迷つてゐる内に布施からのお葉書。近所の本屋のことなど気にするには少しも及びませんよ。元気を出して、いい家庭生活の出来るやうになさい。その内ひよつこりお訪ねするかもしれません。奥様も是非見たいですね。休みが近づいたので私も漸く元気。

詩のこと忘れず書いて下さい。私も書きます。

三月九日　」

（三月一一日、大阪府黒山村より布施市下小阪六八〇、堀之内歴宛はがき）

堀之内歴氏はもともと富士正晴氏の弟子であつた。兄の博氏は富士氏の友人で眼科医で

あつた。そんな関係で帝塚山で開業してゐた博氏の眼科治療を夏樹君は受けるのを習慣にしてゐた。弟の歴氏は宗教大学を出て古本屋を始めようとした。それには親兄弟の反対があつた。その賛否を伊東に訊ねたのでこの書簡冒頭のやうに返事に困つたのである。伊東の返事を待たず彼は古本屋大進堂を駅前に開店した。開店して気がついたが近所に老舗があつた。その老舗への遠慮やら、共存の心配やらを再た伊東に書き送つたので、この激励となつたのである。新婚の夫人を伊東は「見たい」と書いてゐる。これは伊東の最大の敬意を表した挨拶なのである。

伊東は三月下旬、三島由紀夫氏から次の長い書簡を貰つてゐる。

「お葉書うれしくありがたく拝見いたしました。あまり御無沙汰して了つて、拙著を差上げるのも憚られる位ゐでございましたが、快くお受け下さり安堵いたしました。御壮健の由は斎田君などよりもしじふ伺ひ、御作詩は諸雑誌でいつもなつかしく拝誦いたしてをりました。

狭くなつた日本の国土では、浪花の便りは、遠い西の都からはる〳〵と私の手に落ちてきたといふ、何か貴重な偶然性をさへ感じさせ、この日以来、このお葉書が私の幸運のしるしのやうに思へ、心あたゝかな毎日を送ることができます。御迷惑なことかもしれませんが、西の空から得難い詩人の星のやうな目が私を見てゐて下さると感じることが、どんなに私に力を与へるか、はかりしれないものがございます。

久々のお便りに愚痴もいかゞかと存じますが、東京のあわたゞしい生活の中で、高い精神を見失ふまいと努めることは、プールの飛込台の上で星を眺めてゐるやうなものです。といふと妙なたとへですが、星に気をとられてゐては、美しいフォームでとびこむことができず、足もとは乱れ、そして星などに目もくれない人々におくれをとることになるのです。夕刻のプールの周辺に集まつた観客たちは、選手の目に映る星の光など見てはくれません。たゞかれらの目に美しくみえるフォームでとびこんでく

白い死

堀之内　歴

――キヌ女の霊に――

来てみたら
貴女はすでに　死んでいた
たった一日で
でもよかった　貴女は死ねたのだ
誰をも待たないで　清潔孤高の死
往年七十七　手仕事の手が止んだ時
一人うなずいて死に就いたか
私は　その〈時〉に遅れた

冬には暖かすぎる日がつづいていた
オーバーが泥のように重く
心も足も乱れた
いま枯れつきて白いあなたの
本来の面目を前にして　立っている
愛する人　わが頬に涙と微笑

京は北白川の里で　一人孤庵を守って
人の援けは一切を拒ばみ
水とコッペパンで　晩年をすごした
あなたの前では〈近代〉も色あせてみえた
金閣寺裏のレンゲ谷　冬陽覗く谷合いに
一本の高い煙突　カマド番人が言う
〈この人の骨は白い〉　あゝ!!

―一九六三・十二・二七―

れることを要求するのです。

『第一私が行を起すのは絶体絶命のあきらめの果てである。つまり、よいものが書きたいとの思ひを、あきらめ棄てゝかゝるのである』川端康成氏にかつてこのやうな烈しい告白を云はせたものが何であるかだん〳〵わかつてまゐりました。しかも川端氏のやうなこの一言が云へる境地に、一体達することができるかしら、とたえず不安に見舞はれます。

東京では印象批評が滅び去りました。たとへば中里恒子や北畠八穂のやうな美しい女流作家が不遇です。川端康成氏が評壇から完全に黙殺され、日夏耿之介氏はますます「枯坐」して化石してしまひさうです。横光利一氏の死に対してあらゆる非礼と冒瀆がつづけられてゐます。私の愛するものがそろひもそろつてこのやうに踏み躙られてゐる場所でどうしてのび〳〵と呼吸をすることができませう。

斎田君も今の東京で仕事をすれば苦しむことがわかつてゐます。美しいものが美しい故に死刑に処せられるのです。マリー・アントワネットの最も華麗な言葉、『人民は何をさわいでゐるの？　パンがないからですつて？　それならお菓子をたべればよいのに』といふ言葉はギロチンへみちびかれる他はありません。

ギロチンへみちびく民衆は笑はない民衆です。おそろしくシリアスな、ニイチェ的笑ひとおそろしく無縁な民衆です。共産党系の雑誌や新聞に出てゐる漫画は笑ひを凍らせます。かれらはデスマスクをかぶつた民衆です。美の死刑執行人であるといふ自負すらもちえない精神なのです。

銀蠅が芥箱から出てきてそこらをとびまはつてゐます。ブンブといひて夜もねむれず、といふところでせうが――かれらは『海』とは無縁な精神です。蠅は海のまへで引返します。かれらは翼をもたないくせに翅を翼だと思つてゐるのです。

非詩の跳梁、詩精神に代る非詩精神の借主の君臨、詩に対するさまざまの甘言、よく鼻につまづいて転ばないものだと思ふほどの己惚れ、

――たゞ一意専心、あの未知の国から一条の光をこの地上へもたらせば私の仕事はすみます。

どうぞ時々お暇な折に励ましの御言葉をいたゞきたうございます。詩人に対し要求することは罪であると知りつゝ、敢て（『要求』とは失礼ながら）お願ひいたす次第でございます。

くれ〳〵も御体をお大事に

三月廿二日　　三島由紀夫

伊東静雄様

二伸美しい書体のお葉書に対して醜い文字と文章をお恥かしく思います。

どうかお忍し下さい。」

（昭和二三年三月二三日、東京都渋谷区大山十五　平岡梓内　三島由紀夫より大阪府黒山村伊東静雄宛封書）

三島氏は近著『岬にての物語』（昭和二二年一一月桜井書店刊）を伊東に贈り、伊東から想はぬ敬重な礼状が舞ひこんだので、折返し三島氏からこの書簡を出したものだらう。それにしても三島氏が「幸運のしるし」と喜んでゐる伊東書簡が失はれて、こゞに掲載できぬことはいかにも残念である。

三島氏は四年前の昭和十九年五月十七日に伊東を学校に訪問、さらに翌十八日にも訪問して夕食まで共にしてゐた。その折も三島氏は礼状を出してゐたが、伊東日記を見ると「面白くない。脊のびした無理な文章」とすこぶる同情的でない感想が書きとめられてゐた。

しかし昭和二十一年九月十六日附酒井百合子さん宛書簡では「三島といふのは、僕が云つてゐたその人です。このごろ小説方々に書

いてゐます」と、辱知の友としての表現に変つてゐた。

そのまた二年後に書いた伊東の感想だから、激励の言葉の籠められた敬重の意が充分に表されてゐたであらう。後日、三島氏は「伊東静雄氏の詩は私の青春の師であつた」（昭和三五年『果樹園』一〇月号、三島由紀夫――伊東静雄全集推薦の辞）と回顧してゐるが、その敬意を右の書簡に汲みとることができる。

昭和二十三年五月の『文芸春秋』に伊東は次の作品を発表してゐる。

婚約

福地邦樹

以前に僕はこんな事を考えた時がある
僕のお嫁さんになる人は
この日本のどこかに住んでいて
遠い見知らぬ町か村で
歯をみがいたり
御飯を食べたり
お風呂に入ったり
大きな声で笑ったり
新聞を読んだり
あれやこれやと
きっと僕と違った
女らしい生活をしているに違いない
考えてみれば可笑しな事だと
さて僕らは間もなく結婚する身だ

おまえにはそのサファイアの
婚約指輪がよく似合う
おまえは娘時代を
万葉集に出てくる
岡山の牛窓の海辺で育った
田舎の優しい娘を嫁にもらいたいという
僕の希望がかなった
こんな大阪のような荒んだ都会に
連れてくるのは可哀そうなくらいだ
時々おまえの口から
素朴な岡山弁が飛び出すと
僕の眼には
あの海辺の青い屋根のおまえの家と
社会主義者の好人物のお父さんと
よく気がついて
すぐ人に物をやりたがる
気さくなお母さんが浮かんでくる
おまえは一人娘なのに

立派な御両親のもとで
そんなに素直に育っているのが
何よりも僕を満足させる
そしておまえの丸顔と
おまえの柔和な声も気に入った
僕は男特有の気ままと
気短かさを持っている
それに身体も余り丈夫でない
貧乏教師の身で物質的にも
恵まれそうにない
ただ　おまえに対して
思遣りだけは持ちたいと思っている
そしておまえの御両親に対しても
僕の出来る限りの事はしてさし上げよう
どうか　扶佐子
おまえの名前のとおりに
僕に力を添え
僕をたすけていただきたい

野の樫

野にひともとの樫立つ
冬の日の老いた幹と枝は
いま光る緑につつまれて
野の道のほとりに立つ
往き還りその傍らをすぎるとき

あかるい悲哀と
ものしづかな勇気が
ひとの古い想ひの内にひゞく

この樫は余部から黒山にゆく途次、西除川の堤に丈高く立つてゐた。夏樹君、まき子さんに案内してもらつたときはすでに伐られてゐた。〈往き還りその傍らをすぎるとき〉とあるが、それは黒山高等女学校に通勤する花子夫人の方で、反対の方角の萩原天神に出る伊東には関係がなかつた筈である。散策の往還に仰いだと見るべきだらう。それとも夏樹君、まき子さんの記憶とは違つて、萩原天神の境内のそれをさしてゐるのかもしれない。そのいづれにしろへ古い想ひの内に〉へあかるい悲哀とものしづかな勇気〉がひゞいたというのである。〈あかるい悲哀〉はへいま光る緑〉、〈ものしづかな勇気〉はへ老いた幹と枝〉の反応であらう。敗戦以来……動乱した伊東の思想も、ようやく恢復を示しつゝあるやうである。先の三島由紀夫氏の便りに「私の愛するものがそろひもそろつてこのやうに踏み躙られてゐる場所でどうしてのび〳〵と呼吸をすることなどができませう」とあつたが、それは現代の反射である〈あかるい悲哀〉にほかならぬ。伊東が痛めつけられた老いた幹と枝に勇気を感じだしてゐるのは、かすかな希望を明日に託しだしたわけであらう。

この五月、高野山大学に入学した教へ子の谷口卓男氏に次の書簡を送つてゐる。

「荻原さんのお宅にをられるのですね。あなたのお作とお手紙は大へん気持がよかつたです。あなたがいい生活をしてをられることがよくわかりました。あなたのはげしい性格がいま美しい調和を保つてゐることがよくわかりました。高野山に行かれたのは、大へんよかつたと思ひます。お作には、才能もあります。（あなたがお尋ねですからこんなにぶしつけに申します。）これは決してお世辞ではありません。時々又見せて下さい。お作は大切に散逸せずにおきなさい。いつか一まとめにして批評をしませう。きつと。荻原先生によろしくお伝へ下さい。私は阿倍野高校に転任しました（元のアベノ高女で目下は住吉中学に同居してゐます。）

（昭和二三年五月、大阪府黒山村より和歌山県高野山南谷荻野清方、谷口卓男宛はがき）

谷口氏は高野山大学教授の荻野清氏（京大国文で伊東の一年先輩。芭蕉研究家）宅に身を寄せてゐた。「いい生活」をしてゐると伊東が褒めてゐるのは、その事実をも含めて言つてゐるのである。彼は伊東から高野山大学に進学したことを祝福されかつまた才能を認められてゐたにかゝはらず大学を中退し詩筆も折つてしまつた。残念なことである。末尾で伊東は阿倍野高校への転勤を伝へてゐるが、同じ頃亀山氏に送つた次の書簡に詳しい。

「ほんとに永くお会ひせずにゐますね、一度うんとおしやべりしたいですね。私は男女共学で今度旧アベノ高女（新アベノ高校）に転任しました。住吉の男生徒三百五十人、教員十五人と一緒。そのために、この二ケ月位ごたごたして神経衰弱、一種の恐怖症みたいになつて閉口してゐたのですが、この四、五日やつと気持がおちつき喜んでゐます。アベノ高校は、北畠の二つ手前の停留所松虫下車、真東に約五、六分のところ、すぐわかります。毎日三時ごろまではゐます（金曜日は休み）。ほんとに一度お会ひしたいです。あなたから指定して下さい。出かけます。委細は面談。」

（五月八日、大阪府黒山村より守口市日吉町二丁目五五三　三洋電機製作所内、亀山太一宛はがき）

五月下旬、伊東は次の書簡を富士氏に送つてゐる。

「ずゐぶん永くお会ひしませんね。この、お会ひしなかつた間、私はいろんなことが

原因で、すつかり意気沮喪して暮してゐました。大阪においでの折は、一度お会ひしたいですね。

先日は「山繭」ありがたう、大へん立派な品位のある本になりました。今のところあなたのお作を拝見しました。

又、「三島君の本」、「明日」、「高安さんの本」等も先きごろたしかにいただき、本屋の方にお礼状出しといたのですが、お目にとまりましたかどうか。

私は今度アベノ高女に転任しましたが、六月の初めごろ、同校が男女共学で、住吉中学に同居することになりますから、六月三、四日ごろまででしたら、アベノ高女の方においで下さい。

このごろは一つも詩出来ません。昨日やつと半年ぶりに一つ書いて気持が少し楽になつてゐるところです。

とにかく一度お会ひし、毒舌や大皮肉ききたいです、思ひきり。

五月二十二日　伊東静雄

富士正晴様」

（五月二二日、大阪府黒山村より大阪府阿武野村、富士正晴宛封書）

伊東はこゝに意気沮喪してゐる由告白してゐるが、それは先の亀山氏宛書簡に見えてゐた、転勤のごたごたで陥つた「神経衰弱、一種の恐怖症みたい」な精神状態をさしてゐると思はれる。昭和四年いらい丸二十年つとめあげた住吉中学から放りだされることは、古巣から追はれる古狸同様の驚ろきであつたに相違ない。昨年秋の二十五周年記念の住中新聞に教師の一覧表が紹介されてゐたが、伊東の序列は校長から八番目、校務は生徒係長と二年一組担任、校友会の文芸同好会部長であつた。もともと伊東は教師としての立身出世を放擲してゐたから、年功で当然あてがはれる地位より低かつたに相違ない。従つて発言力も弱かつたに違ひない。それにしても詩人教師という名物性が、いさゝかも俗悪な行政や処世に対する力となりえなかつたことに悲観したであらう。それが神経衰弱となり、意気沮喪の主因であつたと想はれる。

伝票

吉本青司

生徒がガラスを割って
修理伝票をたのみにくる
ぼくは
ペンをとって　クラス　氏名を
聞き書きしながらいう
〈モノを愛するってこと
わかる？〉
〈……〉
〈身近くのものから　だんだんと
遠くのものをも愛さなくては〉
このごろ　生徒のガラス破損は
大変な数にのぼる
ガラスは　割れるものだ
といってしまえばそれまでだが——
モノを愛することを教えるのが
教師の務めなら
コトバの愛を実践するのが
詩人の仕事だ
ぼくは伝票をちぎって
生徒の手にわたしながら
〈この伝票を受取るひとは
誰なのか〉
と自分に問う

〔訂正〕九五号「路上」第二聯四行「孔独」は「孤独」

伊東が立派な品位のある本としてゐる「山繭」（昭和二三年四月明窓書房刊）は富士、野間宏、井口浩三氏の合著の詩集である。「三島君の本」とは既述した「岬にての物語」。「明日」は竹内勝太郎詩集（昭和二三年一月明窓書房刊）。「高安さんの本」とは「バヴァリアの森から」（レユティフ高安作昭和二三年五月養徳社刊）である。右の四冊の本の著者はなにらかの意味で富士氏に因縁のある人だから、富士氏が関係してゐる模様の明窗書房に礼状を出したというわけだらうか、いさゝか論理性を缺いてゐるか、文脈が乱れてゐるやうに見うける。三島氏には直接礼状を出してゐたこと既述のとほりである。やはり神経衰弱の徴候を示すものだらうか？　その徴候を富士氏の毒舌か大皮肉で療治しようという算段である。

伊東は昨日半年ぶりに一つ詩ができた由を伝へてゐる。「家庭と料理」十一月号に発表した「薪の明り」ででもあらうか？　それにしても制作時と発表時との間に距離がありすぎるが、パンクチュアルでなかつた当時の出版事情から、さう推定させていただく。

薪の明り　散文詩

冬になるとよく思い出す詩がある。誰の作か忘れたが、「捨てられた下女」と題するドイツの詩である。

寒い冬の朝、人も家畜もまだぐつすり睡つているまつ暗な時刻に、はやひとり起出て、かまどの前にうずくまつて、その顔を薪の火に照らされながら、かすかにひとり言をいゝ、涙を流す、

それは男に捨てられた下女の悲しみをあわれんだ詩である。

子供の時三里はなれた町の中学校に通学していた私もそういう時刻にふと目ざめて、御飯をたいている母や姉の姿を、かまどの明りの中に度々見た。

そんな時、「もうしばらく寝ていなさい。」と彼らは言つてくれた。

今私は、田舎に罹災疎開したまゝ、まだ都会に帰れずにいるが、曽ての母や姉の代りをしてくれるのは、妻だ。

暗い冬の朝、かまどの前、まきの火の明りの中にうずくまる女の姿ほど、あわれなものはない。

ザッハリッヒそのものの作品であるが、ザッハリッヒということの苦しさを裏書きしてゐるやうな作品である。

六月中旬、亡夫の遺著のことで来校した中島明子未亡人に次の書簡をしたゝめてゐる。

「前略

御来校いただいた翌日、早速『毎日新聞』に出かけて見ましたが、丁度井上氏は休暇をとつて、六月の中旬頃（二十日すぎ）迄出勤されぬことになつてゐる由にて会へませんでした、自宅を訪ねようと思ひ、住所をききましたところ、新聞社では、社員の住所は人には知らせぬことになつてゐるとのことで、きき出せませんでした。で、仕方なく、二十日すぎ、もう一度訪ねてみようと存じをります。

右一応御報告まで。

六月十四日　伊東静雄

中島明子様」

（六月一四日、大阪府黒山村より奈良県橿本町極楽寺内、中島明子宛封書）

井上氏が一ヶ月も休暇をとりだしてゐるのは、一月に「猟銃」を脱稿してから本格的に小説の執筆を意志だしてゐるからであらう。それにしても、早い時潮にブームであつた出版業界にぼつぼつ衰褪の徴候があらはれだした頃であつた。

一週間後、伊東は大村中学の同期生で詩人である蒲池氏に、次の書簡を送つてゐる。

「お手紙ほんとになつかしくありました。大へん永くお会ひしませんね、お作、『至上律』で拝見してゐましたので御元気なこ

正月

浅田二三男

なんにもないが
火にあたってくれ
ほんまに
なんのあいそもない
いやいや
火が
なにより の
ごっつぉうさんや
そういいながら
としよりたちは
寒い顔をして
座っている
いつもと
おなじ着物をきて

とはわかつてゐました、東京にももうだいぶ永く出ません。堺の家が焼け、ここにもう三年程ゐます。大阪から高野山にゆく電車の沿線の農村で、ひどい家に住んでゐます。子供は女の子が十三、男の子が六つ。いやな世の中なので学校と家を往復するだけで、出来るだけ人の中にも出ず、友人とも離れて暮してゐます。手紙書くことも、詩を書くことも段々少くなつてゆきます。詩の書き方も忘れたのぢやないかと時々は思ふ位です。深い深いところで打撃が大きかつたのだといふことが日増しに強く感じられてゆきます。それに年輩も、身心にいろんな変動を自覚する時期なのでせう。そしてひとの文学を読んでも感動することや興味を覚えることが段々少くなつてゆくやうでさびしいです。拙作を何か書いて送るやうにとのお言葉ですが到底そんな気になれません。てれくさくて自分で書く気などになれません。宿題にしておいて下さい。その中、東京にでも出て、お酒でものんだ時一緒に書いて交換しませうよ。

『至上律』はいい雑誌ですね。あれに次々にお作のるのを期待します。

お妹さんがなくなられたのですか。いつか酒井さんからとてもいいお嬢さんだ、君の弟のお嫁さんに申し込んだらどうだと切にすすめられた、あのお妹さんでせうか、結婚していらつしやつたのでせうか。冥福お祈りします。出版の方大へんでせうね、しばらく自重し我慢して頑張つて下さい。私も四十三になりました。学校でも、主になつて働かねばならぬ年頃になりましたが、そんな気になれず、仕事を避けるのにいろいろ逃げ廻つてゐます。教師としても立派になれず、又詩人としても中途半端で、この一年間位、壁に顔をつきあてたやうにゆきづまりを感じ苦しんでゐます。このごろの学校の教育といふものがまた大へんなもので、到底他に仕事を持つてゐるものにやれるものではありません。今迄の生涯が大へんなまちがひであつたやうに疑惑されます。どうも愚痴になりましたからやめます。又書きます、皆様によろしく。

六月二十二日　伊東静雄

蒲池欽一様」

（六月二二日、大阪府黒山村より東京都杉並区和田本町七一四、蒲池欽一宛封書）

蒲池氏は北海道から出てゐた『至上律』（真壁仁、更科源蔵編輯、青磁社刊）に関係してゐた。したがつて伊東にも比較的よく情報が伝つてゐたのである。蒲池氏は近況報告かたがた伊東の作品を色紙にでも書いてくれるやうにたのみ、伊

東は近況報告をしつゝその申し出を断つてゐるのである。その断りの理由として、自分で自分の作品を写す照れ臭い心境をあげ、酒でも一緒に将来呑んだときに酔余の一筆を交換しようと提言してゐる。さらに伊東は、詩がだんだんできなくなる理由に、「深い深いところで打撃が大きかつた」ことをあげ、その痛みが日増しに強く感じられるといつてゐる。さらに末尾では「教師としても立派になれず、又詩人としても中途半端」な立場をあげ、こゝ一年間ぐらゐ壁に顔をつきあてたやうな息苦しいゆきづまりの心境を歎いてゐる。

蒲池氏は竹馬の友であるからかう洗ひざらひ愚痴つてゐるわけであらうが、一月前の富士正晴氏宛書簡でも同じやうな悲観的な心境がのべられてゐた。詩人教師を志したことが生涯の間違ひであつたのではないか？ という根本的な疑惑に、変調の多い中年期の身心がゆすぶられてゐるわけだが、そのゆさぶりにたへがたいほど、すでに衰弱が肉体の奥所に巣くつてゐるためかもしれない。

五日後、伊東は京大国文の後輩に当る山根忠雄氏に次の書簡を送つてゐる。

「京都の学校に御就職の由、またお会ひ出来ますね、お暇の時、遊びにいらつしやい

小島君の詩は神経のいきとどいた作ですね。大へんな経験だつたらうと存じます。」

（六月二七日、大阪府黒山村より京都市中京区西ノ京西京商業学校、山根忠雄宛はがき）

詩人教師という立場に疑惑をもつてゐる伊東は、西京商業学校の教師となつた山根氏をあまり励ましてゐない。「小島君の詩」とは教へ子の作品のことである。末尾に「大へんな経験だつたらう」とあるのは、初めて教壇に立つた経験に同情した言葉なのである。伊東自身、「乞食」という仇名をさつそく献呈され、顕原先生に「生徒達が何とかかとか言つてはやし立てます」と訴へた二十年の昔を思ひ出したのだらう。

七月初旬、伊東は京都に移住した田中光子さんに、次の書簡を送つてゐる。

「京都にお住ひの由、急に近いところにおいでになつたので驚きました。御移転大へんだつたでせう。お疲れでしたでせう。前々からあんなにたのまれてゐました御詩に就いてゆつくりお話合ひ出来る機会が容易に得られさうで、責任果せるやうに思はれて、私もうれしいです。しかし、このごろは小説に興味を感じていらつしやる御模様で——大塚先生からもさやう承りました——もうさう詩の方には熱意もおありぢやないかと存じますが。

私もいよいよ本格的に詩書けぬやうになつて参つたやうです。又詩書くには大へんな時代でもありますね。京都は近いのですが、中々行く機会がありません。友人もゐませんので。

お疲れが直つたら一度大阪にいらつしやつて下さい。つもるお話承りたいです。金曜日は学校に出ません。七月中は勤務します。大塚先生にはいつもどうかして先年のお礼申上げねばと存じながら今日までずぼらしてゐます。あなた様からもくれぐれよろしくおわびして下さい。小説お作はいかがですか。川端さんは何と云つてをられますか。

とにかくお会ひしてお話したいものです。委細はその折にゆずります。

四日　　伊東静雄

田中光子様　　」

（七月四日、大阪府黒山村より京都市北白川瓜生山二番、田中光子宛封書）

貸室 XXVIII

萩原葉子

貸室を建ててからもう三年も経っていた。

考えてみると、始めに心配したような、悪いことばかりあるものでもなく、そうかと

ヘリック詩抄（三十七）

森亮

恋人を亡くした若者の慰め

どうして歎くことがあらう、
聖（きよ）くたふとい人びとに交じって
彼女がひとつの座を占めたので
　あってみれば。

限りない喜びにひたって、
今や彼女はかつて地上で
したこと、言ったことを
　思ひ出さない。

彼女の目には涙が映らぬ。
お前の深いため息も
うめき声も、彼女はもはや
　耳にしない。

又、お前がそのかみ
心やさしかったことも
彼女の胸から跡形もなく
　消えてゐる。

あの高い所で変りはてて、
かつて地上ではお前の恋人の
彼女が、あそこではさうでは
　なくなってしまった。

だから我慢するんだなァ。
どんなに深い悲しみでも
お前はそれを寝せつけて、
もう泣かないことだ。

ヘリックの恋愛詩には詩人が恋する男で特定の名前を持った女性がその相手であるらしく歌ったものが一番多いが、第三者の恋愛の種々相を歌ふこともある。「恋人を亡くした若者の慰め」（一〇二五）は後者に属する作品であるが、詩人が自分に「お前」と呼んで言ひ聞かせてゐるやうにも読めるところが面白い。天上に去った恋人のことはダンテやペトラルカが美しく歌ひ、後には中世趣味のロセッティが「浄福の乙女」に擬った趣向で歌ってゐる。中間のヘリックのものが最も現実的であるのは彼の人柄の然らしめる所であらう。

いって良いこともなかった。

友人に入ってもらって親しく交際できるのを期待したことも外れ、結局はどの人も〝おおやとたなこ〟の関係に過ぎないのだった。

親しくなるのを避ける心配もなかったほど、行きずりの人ばかりだった。

だが、小峰少年だけは別であった。急に黙って出て行ってしまったのは、私の態度にそうさせるものがあったのに、違いない。

なんとか小峰の行先を捜してみようと、私は思うようになっていた。このまま小峰を〝行きずりの人〟にさせてしまうのは、自分の心が釈然としなかった。

私は、前の就職先に電話をかけてみようと思った。なぜこんな簡単なことを早くしなかったのだらうと、自分ながらの怠慢さを悔やまれた。

北区のある印刷会社に小峰がいることが判ると、私は思いきって尋ねてみようと思った

しかしそうは思ってみても、小峰にまた反撥されたりしたらと心配でもあり、一日一日と延ばしていた。

毎日の忙しさに流されて、そのまま月日を過ごしてしまえば、小峰のこともいつか忘れてしまいそうであった。そうなることを私は避けたかった。

或る日、暇をみつけて私は小峰のいる北区の印刷所へ出掛けてゆく決心をした。家から一時間半もかかるので一日潰れる覚悟であった。

普段行ったことのない土地で、人に尋ねながら行ったものの、あまりの不案内さに引き返してしまいたくなるほどであった。やっとのことで捜し当てた時、前にも小峰のために××画報の寮を尋ねた時と同じ状態だと思った。あの時もやはりこんな見知らぬ地を小峰のために捜して歩いたものだった。

突然就職を変えては引越してしまい、その度に心配するのは、私なのだ。何故こうも自分は小峰のために、気持が動くのだろうかと、不思議でならない。私の息子と幾つも違わない年頃の少年という思いが、母性的なものを誘発させるからだろうか。その上〃お母さんと思っている〃などと言われたので、責任感が伴ってきたのだろうか。いづれにしても普段の私らしくないことなのである。

受付で、案内を乞うとナッパ服を着た男は、じろじろと私を伺った。小峰がいるともいないとも言わない態度も、××画報の寮を尋ねた時と同じである。〃知り合いの者〃と言うと、男は不機嫌に奥へ向つて小峰の名を呼んだ。印刷工場のやかましい音が、男の声を消し、男はいよいよ不機嫌に小峰を呼んだ。

小峰は青い顔で不審そうにやって来た。ナッパ服を着て、機械油に汚ごれているところは、もう、いっぱしの工員であった。

私に気付くと、はっと緊張して頬を上気させ、頭を下げた。それから急に緊張を解いた、なつかしそうな笑顔を見せた。そして小さく「すみません」と、言った。いつもの非難めいた口調はなく、素直なものであった。その様子には現在の仕事に満足しているものが、感じられるのだった。

昼休みの合図のベルが鳴り、若い工員達がぞろぞろ出て来ては、小峰と私を見比べた。

私は思いきって小峰を外へ誘い出し、一緒に食事をしようと考えた。かなり勇気のいることであったが、小峰の素直さに安心したからである。

レストランに入ると、私はぎこちなくありふれた質問をしていた。仕事の様子や健康状態、沖縄の母親のこと等を訊いては、訳の判らない返事をしていた。皆無事に順調にいっているらしかった。私は、ほっとした。この様子では小峰はもう無事やってゆけるものに、思えた。気付くと「何か困ったことがあったら、いつでも相談してほしい」と私は言っていた。そしていままで忙しいことに負けて何のめんどうも見なかったことをすまなく思って、詫びた。

小峰は感激をいっぱい表わし、素直に頷いた。暫く会わない間にどことなく大人っぽく、依古地なところも無くなっている。いつか、ケーキをどうしても食べようとしなかったのが、まるで嘘のようで、食事を一粒残さず食べて〃こんな美味いものは初めてです〃と繰り返して言った。

同じ料理でも私の息子の食べ方との違いを、私は痛いほど見つめて、出来るなら毎日でも食べさせたいと思った。こんな素直な小峰を見るのは何ヶ月ぶりであろう。〃お母さん〃と言って泣いた頃のことが昨日のように思い出されて来た。

これからも小峰が困っても、また遠慮して連絡をさしてくれなければ、これっきりになってしまう気がして私は、寮の電話番号を尋ねてみた。すると番号を言った後、言い難そうに

「女の人からだと、うるさいんです」と言った。私は驚ろいていると、

「ぼくの方から掛けますから……」と、まるで私を慰めるように言うのだった。

了

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」B

竹越三男編

⑦

＜抹消「愛は血である　神は、真理は怨である」＞

＊下の二字は大きな字で書きつけてある。　峻烈＊

計量器の二つの皿の上に座りこんで居る

偶感

——シャガール展を見て——

美堂正義

林泉に初冬のこぼれ日が洩れ
松の影を映してひつそりしてゐる
観光ルートから離れた寺には
なにもかも忙びて静かで
道路から少し入ったこの名もない寺
　には
猥雑の届かない清潔に洗はれて
街の物音も遠い潮騒のやうにかすかである
山茶花の散ってゐる蔭に目を映しながら
空に青い魚の浮んでゐる絵を考へた
屋根の上を歩るく人の恋しい顔を反芻した
花束と男と女との交りが
明るさと暗さとの奇妙な色彩の混交のなかで
絵のどこからともなく匂ふやうに画かれてゐた

それは絵ではなかつた
願望でもなかつた
まして祈願でもなかつた
現代の病根と呼ばれてゐるやうなものが
絶望して雪国の空をさまよひ
空中をはひづり廻つてゐる
童心と呼ぶには余りも悲しく
夢と仮称には惨めである
しかし　あの魚をこの庭の空に浮べ
大きな男となつて京都の街の上を闊歩するの
　は
きつと愉快ですばらしいに違ひない
この煙つた空を切開いて
七本の指を持つた手が下りてきたら
ひとは驚歎するだらうか
ゆふぐれの坂を街に下りながら
一市民として融けていく宿命をうけとめなが
　ら
あれは絵だらうかと
泥のやうに重たく沈んでいく

恐ろしく几帳面な様子をした滑稽な程厳粛に見へる表情をして二つの人格が座りこんで御座る、
肉の人格の重さ
霊の人格の重さ
「バランスを失へ」第一の者がいふ
「バランスを失へ」第二の者がいふ
実際二つの人格はこの安定なる然も不安なる各々の現状について退屈しきつて居たのだ
安定の永続は詩人を固死せしめる、ことを恐れる、あまつさへ＜抹消「平和は危険である」＞

光る銀の鉄砲だ
何のために彼がそれを磨くのであるか
彼は鉄砲磨きではない
光る洋銀の鉄砲だ
彼は第一に

冬の日のある朝

＜抹消「光る銀の鉄砲
　光る白い鴨を撃つために
　雪白の薄い料理皿が
　食卓の上で廻転を始めました」＞

食卓の上の白い皿がしぜんに廻転を始めました
しづかに

物悲しく
なんの音もなく
光る雪白のあまたの皿が
光るまつ白の肉皿が　〈追記〉
食卓のへりをめぐつて居る光況ですママ
しづかにもうら哀しく
さて窓の外にはちらちら雪がふつて居ますが
このしんに涙ぐましい心もちで　朝餉のあと
で〈この六字追記〉
ひつそりとあなたをたづねてきました
だれも知らない山路をこえてから
雪の路をばはるばると
今朝お別れを告げにきました
夫人よ
とこしなへに　さよなら

家　空家

まつ白の肉皿が
食卓のへりをめぐつて居る
しづかに
物哀しく
なんの音もなく
光る薄手の皿が
食卓のへりをめぐつて居る
さて窓の外では
ちらちら雪のふつてる光景ですが
それもしづかに
まるで音もなく
どこかの広間にかくれて居て
白いたましひが祈つて居る

〈右の二篇の詩は共に創元社版の「全集」「断片」の部に出ている無題詩（食卓の上の白い皿が）と同じものの習作〉

⑧

私にとつて、このいちばん哀しい出来ごとは、言葉の紛失である、
言葉に羽が生え行く方も知らに羽が生え
遠い虚無の世界へと失踪する、日くれに及び
嘲笑と悔〈一字不明〉と絶望との谷間に残されて居る詩をつくらざる詩人がある、
祈る、その祈祷の断末魔、
みよあらゆる美しいもの、光輝あるものは失はれた、
夜間に及び月の出るまへに銅像がある、変質せるところの、純金より酸廃せるところの醜い銅製の怪物がある。言葉を失へる詩人がある、悲惨なる、頽廃せる、自分自身の呪ふべき幻影がある
私は健康を愛する
けれども疾患を愛する
疾患においてその実体を変質されたるところの物象は、より多くの霊性とより多くの光輝性とに於て全く新らしい有機体を化成する
何となれば私の疾患は私自分の恋魚と交歓する理由を以て光らないで却つて犬、猥、魚及びその他もろもろの動物、菊、松、菫その他もろもろの草木と交歓会食する由所に於てそれ自身の霊性を発光するがためである。

道は蝕金光路である　〈この三行の全体を囲んで大きな○が書いてある〉
祈祷は白熱され
感傷は疾患する

コギトの思ひ出

田中克己

十二月十三日、小高根二郎氏より九日消印の葉書をいただいた。「四季」「コギト」に関する記録を連載しろと、森亮氏と御両人で希望との意味である。「果樹園」を九年間もお世話していただいたわたしとしては否応なしである。「四季」のことは後まはしとして

、まづ「コギト」の思い出を記さしていただく。わたしは記憶をなくしたが、幸ひ日記があってまんざらの嘘も書かないだらうと思ふ。

コギトの結成に関しては、それの母胎になった「炫火（かぎろひ）」（以下カギロヒと記す、漢字制限のためである）のことを述べねばなるまい。ただカギロヒは手もとに一冊もなく、同人や同人費など全く記憶からなくなってゐるが、わたしの日記（「夜光雲」と題した）の昭和五年十二月十日の条に廃園「カギロヒ」戯頌といふのがのってゐる。これは明らかにカギロヒの廃刊といふよりは実は三年生のわれわれが編輯をやめたことを証明してゐる。たぶん九月号までわれわれが出したのだと思ふ。われわれといふのは、この戯頌で湯原冬美、三崎皎、大東猛吉、鋭二、厚見壮吉（西川英夫、東京建物重役）北能（友真久衛、判事、死亡）佐波とだけあかしされるが、その他にいま弁護士の丸三郎、八戸市助役の中野（本宮）清見もゐたことは間違ひない。さてこの湯原冬美が保田与重郎、三崎皎が杉浦正一郎（故人、九州大学教授）、大東猛吉が故人松下武雄、鋭二が中島栄次郎（比島で戦死）であるといへば、このプリントの歌誌がコギトの母胎であつたことが証明されよう。

翌年三月われわれは高校を卒業して大学に進んだ。松下、中島の二人が田辺哲学を研鑽するため、京大に進んだのを例外として、旧カギロヒ同人はみな東大に入った。クラスの三分一を占めた文科入りは、ほとんど全部みな文学を志向した。その結果が昭和七年三月のコギト発刊である。

カギロヒの同人ではなかったが、このころ肥下恒夫が富豪であり、また文学に一番熱心であることは皆に知られてゐた。彼は東大文学部の美学美術史学科（保田も同じ）に入学すると同時に、結婚して家を構へ、同時に文学をやると宣言したのである。正月に一度われわれは原稿をもつて肥下の家に集まった。自分のことはなるべく言はないことにするが私はこの時、評論をもつて行つた。カギロヒの時からすでに理論的に指導者であつた保田は、コギトといふ雑誌の名を提案し、ついで原稿を一瞥して、創刊を一月のばすこととし

暮れゆく海

浅野晃

くれてゆく海は
記憶のねぐらである
これら大きなうねりは黙し
祈りをささげる
○
芦笛が吹いてゐる
かう吹いてゐる
さやうなら
さやうなら
男の子が吹いてゐる
まだ吹いてゐる
さやうなら
さやうなら
○
うつくしい国土よ
わが祖国よ
去つてゆくな
どこへも行くな
わが父母よ

た。（私は原稿をとり返し、その後つひに評論家たることを断念した。）

昭和七年三月一日付コギト創刊号には、同人が全部顔をならべた筈である。当時われわれの同人の定義は、同人費（コギトは各人毎月十円で、足りない分は肥下が負担することになっていた）の納入のほか、配本（店頭に置くこと）、発送（読者ならびに寄贈者へのみな手分けして行なひ、また原稿は毎号かならず書き、書いたものは出来の良し悪しに拘らず、各人の名誉にかけてのることとなつてゐたのである。

創刊号の表紙の装幀も保田の案であらう。白地でコギトと活字を用ゐる。ナンバーだけが薄緑になつてゐる。これより簡単な装幀はないが、われわれみな当時の他の同人雑誌の装幀にくらべて、その特異なのを自慢としたことをおぼえてゐる。

さういへば、コギトといふ名そのものが特異だったので、デカルトの「われ思ふ故にわれ在り」から採ったこの誌名は、われわれが配本に行った本屋でよくコギトと預り証に写された。（各人地域をきめて、主な本屋に頼んで置いてもらひ、次の発刊のとき取りかへてもらふのである。）わたしは阿佐ケ谷地区を受けもたされ創刊号すでに売れたことを知つた――散歩の時たちよつて引っくりかへして冊数を見るのである――が他の地域でも売れたことは他の同人が売揚げをもちよつたので証された。然り、コギトははじめから売れたのである。而してその主なる理由は、装幀が当時ほかに見られぬ清楚なものだったからだつたらうと思ふ。

本末顚倒ですまないが、内容は肥下、保田、若山隆（大阪学芸大教授相野忠雄）薄井敏夫（故人）、三崎皎、園玲治（室清、明治生命秘書室長）の小説、沖崎猷之介（中島栄次郎）と私と山内しげる（産経大阪支店、中田英一）の詩、それに保田の印象批評といふエッセー、服部正巳（現大阪市大教授、文博）の「ジンメルの言葉」の訳（これは言語学科の服部が保田に強要されて訳したのである）がのり、すでにこの創刊号で、翻訳（訳そのものよりも訳する対象の指定）とエッセー欄の特異性が見られてゐる。（つづく）

編輯後記

十二月二日。三島由紀夫氏より本号所載の伊東宛書簡の掲載許可をいただいた。鬼才の風懐ゆたかな名文である。お蔭で拙論に光彩を添へえたことを深謝申し上げる。

十二月五日。井上靖氏より昭和十八年十一月の大毎所載の「『春のいそぎ』評」は氏の筆であつた由確答をいたゞいた。同じく拙論に光彩を添へえたことを感謝申し上げる

十二月二十日。新潮社に片岡久氏を訪ね拙論定稿をお渡しした。切り貼りではつきりしないが二千枚ぐらゐはあらう。完結に丸七年を要した。感無量なものがあった。

十二月二十二日。三枝康高氏著「戦後文学の流れ」を頂戴した。倒錯した価評が盛行した戦後を反省するためにも必読の書であらう。有信堂版。定価四三〇円である。

十二月二十三日。「週間新潮」掲示板欄で朔太郎研究の久保忠夫氏より昭和十八年一月の「文芸」に発表した伊東の作品は「わが家はいよいよ小さし」であった由教示をいたゞいた。万謝。

十二月二十三日。たまさかに訪れた米子の法城寺で思ひがけなく生田春月の墓碑にめぐりあった。

十二月二十四日。天野美津子さんから詩集「零のうた」をいたゞいた。女流には珍らしい才能である。女手一本でお子さんを育てゝきた彼女の言葉は楢と創のやうに磨かれて美しい。近頃の詩集中での白眉であらう（O）

果樹園 第九十六号（毎月一回一日発行）
昭和三十九年二月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼発行者 小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 四十円 送料十円

果樹園 九十六号 昭和三十九年二月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

果樹園 九十七号 昭和三十九年三月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

果樹園

第97号

「寒色」受賞記念詩特輯号

詩人、その生涯と運命　小高根二郎
断章　浅野晃
目をつぶつて　杉山平一
家庭　天野忠
ヘリック詩抄　森亮
橋　天野美津子
書跡　吉本青司
現認証明書　平光善久
挿話　美堂正義
霊魂　堀之内歴
浄罪詩篇ノオト　竹越三男編

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄（八十五）

小高根二郎

田中さんがいつのまにか京都に移住してゐたことに伊東は吃驚したことだらう。マチュー・ド・ノワイユの卵だと信じてゐた彼女がいつのまにやらジョルジュ・サンドのそれに早変りしてゐたことも驚ろきであつたらう。すでに川端康成氏に師事してゐるのであるから三島由紀夫氏と同門というわけである。門の外に鳴いてゐたと思つた燕がいつのまにか川端氏の鳥籠に留つてゐるわけである。

伊東の教へ子である西本裕氏の語るところによると、戦後の一時期伊東は帝塚山あたりに家を借りて、そこを根城にして若い連中を集め、文学青年のやうな生活をするんだと張りきつてゐたことがあつたという。既述した田中さんのために借間をしたことが、それに当るわけかもしれない。

もう「詩の方には熱意もおありぢやない」と断じ、自分でも「本格的に詩書けぬやうになつて」丁度好都合……という口吻ながら、「つもるお話承りたい」という熱意の底には、まだ未練に似た心情がどこか動いてゐるやうである。

三日後、伊東は中島未亡人に次の書簡をしたゝめてゐる。

「前略

七月五日にやつと、井上氏と連絡とれ（それまで三度新聞社にゆきましたが会へず電話でもうまく話出来ず）二、三日内に本屋を小生の方に差向けることになりました。本屋の条件をよくきき野田さんに相談した上で、適当に決めて、御報告なり御承諾なりを得たいと存じます。

七月七日　伊東静雄

中島明子様」

（七月七日、大阪府黒山村より奈良県櫟本町、中島明子宛封書）

伊東はやつと井上靖氏と連絡がつき、さしむけられる本屋に条件をよくきゝ、さらに中島の高校・大学の先輩である京大助教授である野田又夫氏に相談したうへで、明子未亡人の承諾をえようというのである。もともと中島の遺著の出版は井上氏から話がでたやうである。その話が妙にぼやけたやうに感じられるが、それは中島が「日本浪曼派」の創刊同人であつたという事実が、次第に時潮的な障碍を呼んだのではないか？　と想像される。伊東はまだその事実に気附かないかのごとくである。

同じ日、伊東は次の書簡を田中克己氏に送つてゐる。

「田中克己様

前略

先日は「ハイネ詩抄」ありがたう存じました。大へん楽しげなお仕事にて、読んでゐて、こちらも楽しくなりました。

このごろはお作あまり目にとまらずさびしく思つてゐます。私は気持だけではありますが中々作れません、しかし大好きな夏が来たので、元気になりつつあります。

毎日同じ勤め、同じ疲れ、何もお知らせするやうなこともありません、今日はお礼のみです。

七日　　伊東静雄

（七月七日、大阪府黒山村より奈良県桜井町神ノ森、田中克己宛封書）

田中氏の訳著「ハイネ詩抄」（昭和二三年六月、奈良三興出版部刊）を贈られたことに対する礼状である。

伊東は好きな夏の到来に期待するところがあるやうである。昨年の夏休はリルケの詩篇を毎日こつ〳〵訳しながら丹念に日記をしるしてゐた。

しかるに今年にはその丹念さがない。七月は三日、八月は五日間しか日記をつけてゐない。精神的な打撃だけではなしに、肉体的に相当な疲労をしてゐた証拠である。七月二十八日の日記に

「それからずつと、恐ろしい程の虚脱衰弱状態ですつとねてゐた。盲腸部むじくむじく痛んでゐたので気をもんだ。その間、毎日曇天、驟雨、雷雨がつづいて実にいやな天候であつた。そのせいだつたとも思ふ。」

とある。

その十日後、次の書簡を山根氏に送つてゐる。

「御詩稿拝見しました。お人柄のやうに鷹揚で気持のいいお作だと思ひました。しかし『ああ　自然は単純だ』といふ一句は不可解。

断章

浅野晃

刻々と鐘が鳴る
切々と虫が鳴く
いたづらに夜を更かすな
自分の事ばかり思ひわづらうて

人はみな生き
働いてゐる　食べてゐる
おもつてもみるがよい
これほど確かな事が他にあるかを

蟬にしても蛆にしても

もつと見せて下さい、私はこの十日ほど不順な天気で、死んだみたいに弱つてねころんでゐました。」

（八月七日、大阪府黒山村より京都市左京区北白川伊織町飲山荘、山根忠雄宛はがき）

この衰弱は新秋を迎へても回復してゐないやうである。その事実を同じく山根氏宛の次の書簡が証明する。

「頴原先生が不意におなくなりになつて、がつかりしました、大阪大学の国文科の主任教授に新任していらつしやるといふ噂がありましたので、大へん楽しみにして、実現を待つてゐたのです、御病身でよくお仕事をなさいましたが、世間的にはこれからがお楽な時でしたでせうに。一度来亡人には直接お悔みにあがりたく、お手紙を出す気持もなくてゐます。」

（九月一二日、大阪府黒山村より京都市伊織町、山根忠雄宛はがき）

頴原退蔵先生は昨年の六月以来、漫性腎臓炎で大将軍西町のお宅で病臥してをられた。ところが尿毒症を併発され、一年と二ヶ月もの療養のかひもなく、つひに八月三十日に逝去されたのである。その訃報は新聞にも報ぜられ、身近かな弟子――野間光辰氏あたりから伊東に連絡があつたと想像される。しかるに伊東は葬儀に参列してゐぬばかりでなく、先生の死後二週間になつてゐるのにまだ芳枝

未亡人におくやみの手紙もだしてゐないのである。師弟の道に厳しかつた伊東にしては考へられぬほどの怠慢である。

先生が伊東の存在を知られたのは卒業論文の試問の日であつた。出席の悪い、いはゞ怠惰な弟子に属した伊東の論文に、首席卒業という最高の栄誉を與へられたのである。伊東はこの未曽有の恩顧に感動して、最初のサラリーを貰ふと、それで先生の好きな酒を買ひ、それに歌を添へて先生をお訪ねしたのである。その日以来、丸十九年を越える指導と誘掖をかたじけなくしたのである。弟子として最高の恩顧をうけたわけである。危篤の報をうけるや、なにはさておき走せつけねばならぬ愛弟子の一人のはずである。その伊東が葬儀にも参列せず、おくやみの手紙も出してゐぬとこから推すと、それを不可能にするほどの身心の衰弱があつたものと見ねばなるまい。すでに浸潤は始まつてゐたのであらう。

「家庭と料理」に「薪の明り」が発表された十一月の初旬に、山根氏に次の書簡を送つてゐる。

「お手紙とお詩ありがたう。

いつもゆつたりとしたうるほひのある気持のいい詩見せて下さつてありがたう、のびのびとしたお人柄が思出されて気持いいです。

生きてるものはみな勤めてゐる
それをはかないといふのは
誰だ

かの人の眼に咲かせよ
ばらの花を　コスモスの花を
埋もれて過ぎる青春に
雨ふらせよ　天の星を

ひと筋の赤いくさりが
あなたと私とをつなぐ
いつどこでそれが断たれようと
出会ひはすでに不滅だ

す。私は六月以来何一つ書けず危険な時期にゐるやうです、学校忙しいですか、適当におやりなさい。

（一一月八日、大阪府黒山村より京都市伊織町、山根忠雄宛はがき）

伊東はこゝに六月以来なにひとつ書けない苦境を「危険な時期」といつてゐる。その具体的な記述は三日後の亀山太一氏宛書簡に詳しい。

「ほんたうに永くお会ひしませんね、お元気のやうでうれしいです。私は夏中なぜかすつかり胃腸がわるくなり虚脱したみたいになつて、ねたり起きたりして暮しましたが、夏が終ると共にすつかり元気を恢復し、このごろは又近来にない快調です、しかし五月頃から仕事は一つも出来ません。仕事は根柢が、ゆらいだままで、再び調整されないでゐるといつた状態です。仕事の上では、大へん危険な年齢にゐるのじやないかと自覚されます。このごろはよく映画見にゆきます。ひとりで。家内も子供も大へん元気。このごろは食物もよく、倖せです。学校はやはり忙しいですが、適当にやつてゐます。私は、火曜が休み（研究休暇）です。このごろは誰も遊びに来ませんから、休みには、ねて暮します。電話して下さつたら、どこか、町で会ひませう。

（一一月一一日、大阪府黒山村より、守口市三洋電機製作所、亀山太一宛はがき）

この書簡を見ると、夏における肉体的な虚脱状態は胃腸病のやうに伊東に現象されてゐる。或ひは食欲不振、消化不良といつた前駆的な症状だつたのかもしれない。それに精神的な不調を、先の山根氏宛書簡では「危険な時期」とあつたが、ここでは「危険な年齢」という言葉に言ひ替へてゐる。漠然とした危機感から厄といつた諦念に置き代へられつゝあるやうである。その諦念の構図は、「根柢

がゆらいだままで再び調整されないでゐるといつた状態」、つまりその補修には時を待たねばしようがない……という虚脱感が支配してゐる。新秋とともに肉体的には快調を取り戻したので、例のセコンド・ラン、サード・ランの映画なぞつとめて見ながら、がたがたになつた精神機構の建て直しをはかつてゐるもののやうである。

書簡の末尾で亀山氏を町にさそつてゐる。「詩学」十二月号に発表した「夜の停留所で」は、そんな夜の映画帰りに電車を待つ間のスナップであらう。

夜の停留所で

室内楽はピタリとやんだ
終曲のつよい熱情とやさしみの残響
いつの間にか
おれは聴き入つてゐたらしい
だいぶして
楽器を取り片づけるかすかな物音
何かの絃のふれる音
そして少女の影が三四大きくゆれて
ゆつくり一つ一つ窓をおろし
それらの姿は窓のうちに
しばらくは動いてゐるのが見える
と不意に燈が一度に消える
あとは身にしるみやうに静かな
ただくらい学園の一角
あゝ無邪気な浄福よ
目には消えていまは一層あかるくなつた
窓の影絵に
そつとおれは呼びかける
おやすみ

九年近く前、伊東が愛読したソログープの『光と影』を思ひ出す。伊東は腺病質な少年フロージャのやうに、事物ではなく事物の投影する非実存に魅せられ、しかもそれに「おやすみ」の挨拶までしてゐる。佇んでゐる伊東の身心の細りが眼に見えるやうである。

昭和十四年の一月下旬、伊東は次の書簡を富士氏に送つてゐる。

「島尾君の出版記念会で会へると楽しみにしてゐたら、都合わるくて出られませんでした。ほんとに永く会ひませんね、大阪にも時には出ておいでなさい。夏からずつと気分悪かつたのですが（肺浸潤）最近は好調で、詩のことも熱心に考えてゐます。しかし作品は殆どありません。ほんの一つ二

目をつぶつて

杉山平一

いつも　おれの前に
標識があつた

「この先　行きどまり」
「売り切れました」
「入場御遠慮下さい」
「手をふれないで下さい」

これから　おれは
目をつぶつて　行く

家庭

天野忠

土蔵のうしろに木があり
木のうしろに幽霊がいた。
「お父さんは只今ッというて帰つてくるもん」
土に敷いたムシロの上で
カズコちやんは云つた。

私は蔵のうしろに行き
三味線草を抜いた　それから
何もない戸を開けた。
「只今ッ」
「ハイ　お帰り」カズコちやんはふりむいた。
「もう直ぐごはんにしますからね」

ムシロの上にあぐらをかいて
三味線草の新聞をみながら
私と幽霊は　気楽にして
食事を待つていた。

つ。

あなたが小説を書いてをられることきいてゐましたが、まだ拝見してゐません。桑原さんの伝言たびたびありがたう、京都に出たいといつも思ひながら、どうもおつくふで（やはり、健康の都合でさうなのでせう）果さずにゐます。学校は雑務を一切断つて、楽勤めをさせて貰つてゐますので、ずいぶん身心がのんびりしてゐます。結婚なさるさうですね、話はたんとたまつてゐますね。委細面談。」

（昭和二四年一月二四日大阪府黒山村より高槻市阿武山、富士正晴宛はがき）

島尾敏雄氏の著『単独旅行者』――アプレゲール新人創作選9――〔昭和二三年真善美社刊〕の出版記念会が阪急電車六甲駅上の「六甲ガーデン」で昨二十三日開催された。その会で伊東は久しく会つてゐぬ富士氏に出会ふ予定を楽しみにしてゐたわけであらう。それが都合で出席できなかつので、この書簡になつたものと想はれる。

この書簡で伊東は昨夏からの不調は肺浸潤であつたことを初めて明記してゐる。花子未亡人の「病床記」（昭和二八年七月号「祖国」）によると、「静雄の胸部に軽い浸潤のある事が分つたのは昭和廿四年春の学校集団検診の結果であつた」と記述してゐる。明らかにここに二三ケ月の時間的なずれがある。伊東はこつそりと医師の診断をうけて肺浸潤であることを知つてゐながら家族の心配をおもんばかつて伏せてゐたのであらう。「学校は雑務を一切断つて、楽勤めをさせて貰つてゐます」とあるから、すでに自衛措置だけはとつてゐたわけである。

東北大学から京都大学に転勤してきた桑原武夫氏からは、しきりに京都に来遊するやうに誘ひがあるやうである。昨年の二月、桑原氏の幹施で三好氏に出会つて永年の詰屈した心情を晴らしてゐた。その礼のためにも尋常なれば京都に出向くはずであるが、顕原先生の葬儀に欠礼したと同様に怠つてゐる。がこんどはさすがに病気がその怠惰の原因だらうと意識をしてゐる。

この一月、新大阪新聞に次の作品を発表してゐる。

露骨な生活の間を

毎日夕方になると東の方の村から
三人の親子のかつぎ屋が
駅に向つてこの部落をとおる
母親と十二、三才の女の子と
まだ十になつたとも思われぬ男の子だ

めいめい精いつぱいに背負い
からだをたわませて行くかれら
ずん〳〵暮れるたんぼ道を
かれらはよく小声をあわせてうたつていく
そのやさしくあかるい子供うたは
いちばん小さい男の子をいたわり
またみんなをはげまして
小声の一心な合唱が
うず高い荷物の一かたまりからきこえる
それは露骨な生活の間を縫う
ほそい清らかな銀糸のように
ひと筋私の心を縫う

（いまどんなお正月がかれらにきているか）

伊東はこの担ぎ屋親子三人を見逃してはゐない。毎日、東の黒山村に買ひ出しにゆき、北余部の伊東の家の前を通り、田圃道を抜けて荻原天神の駅に出るのである。片道半里あまりのみちのりである。母と十二、三才の女子と十才未満の男子。女の子はまき子さんより一、二才若く、男の子は夏樹君より三才ばかり年長である。父親は健在なのだらうか？いやいや、統制を犯して危険な闇商売をあえてしなければならぬぐらいだから、父親はゐないに相違ない。戦場で死んだのかもしれない。いや病気で寝てゐるのかもしれぬ……。と、伊東はすでに犯されてゐる自分の胸を思ひ出して、ひとごとならず胸を衝かれる思ひをしたに相違ない。俺が倒れたらどうなるか？　彼女は教職にあるので充分に子等を養育してゆくことだらう。それにしても相談相手である父親のない負荷は、ときに〈からだをたわませて行く〉ほどに重いだらう。あの男の子よりさらに幼い長男を励ますために、みんなして〈やさしくあかるい子供うた〉を合唱しなければならぬであらう。もう遠くなつて〈うず高い荷物の一かたまりからきこえる〉小声の合唱……。その影と声が消えてしまうまで佇んでゐる伊東の胸に〈ほそい清らかな銀糸のようなひと筋〉が縫つたのは当然である。ひとによるとその銀糸は伊東の社会主義的な愛情の萠芽だといつた。しかし、それはすでに肺細胞を縫つてゐる肺結核菌のことであるかもしれない。

先の富士氏宛書簡の四日後、伊東は杉山平一氏に次の書簡を送つてゐる。

「先日は御本ありがたう。
なきお子様のいい記念になつたと存じますお心持、素直に通じ、有難く拝見いたしました。

一月二十八日

このごろ、からだを悪くしてゐまして筆不精になりお礼おくれてすみません。」

（一月二十八日、大阪府黒山村より芦屋市東芦屋町七五、杉山平一宛はがき）

これは杉山氏から童話集『背たかクラブ』（昭和二三年一二月国際出版KK刊）を伊東に贈つたことに対する礼状である。その著の後記に昨夏亡くなつた二人目の子供さんを偲ぶ言葉があつた。「なきお子様のいい記念……」云々の伊東の言葉はそのことをさしてゐるのである。「露骨な生活の間」の一番ちいさな男の子に寄せた惻隱の心ばへと同じである。

果樹園叢書
詩集 寒色
浅野晃 著 ¥350
第十五回
読売文学賞
受賞
果樹園社
売切になりました。悪しからず御諒承ください。

二月上旬、伊東は大学時代の文友宮本新治氏に次の書簡を送つてゐる。

「焼け跡に来て下さつたんですね。あれからずつと表記の農村のボロ家に佗住居してゐます。先日六甲の友人のところに夫婦で行きましたので、知つてをればお寄りしましたものを。私も又機会見つけて出かけますから、あなたも一度いらつしやい。何もいいことはないところですが。

女の子が十四（新制中学年）
男の子七つ

若しわたしたちが天国へ行かうといふのならば
心つつましく身を低くしなければならない
天の屋根は高いが、天の入り口は頭がつかへるほど低い。
ものを言ふときにはいつもうつ向き加減に
相手を見る。
へりくだる者には神の恵みが大きい。

〈リックの詩集「〈スペリディーズ」の巻末には「聖歌集」と名付けられた二百七十余りの宗教詩が収められてゐる。正篇の場合と同じやうに四行や二行の短詩が多くまじつてゐるのでページ数はそれほど多くはない。思想的に深い物はなく、芸術品として目を見張らせるやうな物もないが、おとなしい愛すべき作品はいくらかある。「幼子の祈り」は聖歌集九五番、「天国」はその八九番。〉

小生四十四いやになりますなあ
家内も元気です。
相変らず身体も充分でないし年とつたこと自覚すること多くあんまり面白くありません。面白くはありませんが、まあ出来るだけひつそりと静かに生きてはゆきたいと考へてゐます。
色々話すことありますが、手紙ではじやまくさい、一度いらつしやい。学校にでもよろしい。
火曜以外は毎日おひるすぎまではゐます。奥様にくれぐれもよろしく。

二月五日　伊東静雄
宮本新治様

（二月五日、大阪府黒山村より芦屋市西山町六八、宮本新治宛封書）

先に伊東が宮本氏に書簡を出したのは昭和十七年の秋だつた。その時は堺北三国ヶ丘の家を地図で教へてゐた。それから六年ぶりの文通である。あの日は宮本氏は兵庫県の魚崎に住んでゐた。いま芦屋に住み再製樟脳株式会社の役員になつてゐるのである。
なにごともざつくばらんに打ち明けあつた仲ではあるが、肺浸潤のことは「相変らず身体も充分でない」としかほのめかされてゐない。
二月下旬、郷里の諫早に在住する詩人上村

ヘリック詩抄（三十八）

森　亮

天国

幼子の祈り

ここに立つて小さな子供のわたしは
両手をひろげて高く高く上げる。
それは蛙みたいに冷たい手だけれど
ここからその手をあなたにむかつて高く上げる、
神さま、あなたの恵みがうちの食事のたべものに、
又わたしたちの皆の者の上にそそがれますやう祈つて。

★

肇氏に次の書簡を送つてゐる。

「私の小さい故郷の町に、上村さんのやうな、詩人がおいでになつて、こんな本格的な雑誌出していらつしやること何だか、私の思ひ出に似つかはしくないやうな気持がいたします。諫早の悪いところもすつかり見通しに見抜かれたことであらうと恥しいやうにも思はれます。諫早を出てから、しかしもう三十年近く、このごろの諫早には私など責任ないのだと自ら慰めてはゐますが。八坂町の江川といふ家が私の姉のとつぎ先です、御精進を祈ります。」

（二月二四日、大阪府黒山村より諫早市東小路町紀元書房、上村肇宛封書）

上村氏は佐世保の出身であるが諫早に移住してきて古籍商を営んでゐる。傍ら個人詩誌「河」を発行し、一本を伊東に贈つたことからこの礼状となつたのである。伊東の死後この「河」が中心となつて諫早文化協会を動かし詩碑を建立することになるのである。

同じ日、伊東は東京の林富士馬氏に次の書簡を送つてゐる。

「ほんたうに永く御無沙汰してゐます。一度お会ひしたいものですね、お酒一緒にのみたいですね。あなたもだいぶ年をとられた（始めてお会ひしたころからすると）ことと思はれます。私は、四十四歳、何だか老人になつたやうによぼよぼしてゐます。（一つはこのごろすつかり健康を害してゐるせいもあつて）。お家建つてよかつたですね、おかあ様にも、奥様にもお会ひしたし。なつかしい。庄野君にはまだ会つてゐません。土産話ききに近日中出かけたいと思つてゐるところです。」

（二月二四日大阪府黒山村より東京都豊島区西巣鴨二ノ二四六五、林富士馬宛はがき）

これは林氏が悪戦苦闘の末に焼跡に自宅を再建したことに対するねぎらひの書簡だらう。四十四歳の中年ですでによぼよぼの老人のやうに衰弱してゐる病状を伝へてゐるが、林氏には比喩としか感じられなかつたであらう。末尾に庄野潤三氏が上京した模様が伝へられてゐるが、処女作「愛撫」を『新文学』に発表したのを契機に上京したのであらう。土産話というのは庄野氏が見聞してきた文壇情報であらう。

三月下旬、伊東は教へ子増山章一郎氏の友人である福地邦樹氏の作品を、次のやうに批評してゐる。

「増山君

お手紙ありがたう。手紙であらたまつて、批評など書くのは大へんむづかしい事業であります。然も作者が相当重大な関心を以ておききになるのだから一層です。

どう云つたらいいでせう、ほら、例へば、物理学などでは十年前と今日では、すつかり学問の様子が変つてしまつたでせう。それと同じやうに藤村のころと今日では、詩といふものも、その観念が根本から違つて来てゐるのです（詩の場合、それを強ち進歩とのみは云へないのですが、又現代の日本の具体的な詩作品が、藤村のころのより価値あるものとも言ひ難いのですが）。とにかくすつかり変つて来てゐるのです。

ところが福地君は、そのへんの歴史を全然ご存じないやうで、（それは無理もないことで、今日の詩がまだ充分確立されてもゐないし、又世間にそれが広く知られる機会も少く、又傑作も少く、手引書の恰好なものもなく）、藤村のころと同じ方法で詩を書かうとしてをられるのです。

それで結論として、福地君の、これらの作を見て、才があるかないかと云ふことを判定するのは無理なことなのです。現代詩といふもの広く言つて現代文学についての知識を全然と云つていいほど缺いてをられるのです。現代詩といふものが、どんなことを問題にしどんな方向に進まうとしてゐるかといふことを、ご存じないやうに見うけるのです。で、そんなものを知られた上での試作品だつたら私にも、何とか御納得の行くやうな返事が出来さうです。

又、二、三篇の、偶然的な作品で将来をきめようなどとは、無謀で、お話になりません。才能といふものは、そんなに安直に発掘出来るものではないのです。大きな大きなぎせいが必要なのです。

私は、その方が、もつと気楽に直接話においでになることを希望します、もつとわかりやすく説明出来ると思ひます。「劇的」でも、「不自然」でもなく文学者の間では当然の作法です。

取急ぎ、思ふままを直截に申述べました。福地君が気おくれされねばいいがと少し心配ですが、このまま送ります。

三月三十日

（三月三十日、大阪府黒山村より堺市百舌鳥東之町一四一、増山章一郎宛封書）

この春休に福地氏は大阪大学工学部を受験

橋

天野　美津子

まいあさ　橋を通る
立つたままで　眠りながら
どの道を行つても
必ず一度は渡らねばならぬ橋

もやにけむる水の上
霜枯れの川原に　ながながと横たわり
橋は何故そこにあるのか
朝の空気は肺にしみて

岸と岸とをつなぐ橋
夜と昼とをつなぐ橋
歓楽の疲れをみせて
魚の腸のような冬の町

どこを通つても
必ず一度は渡らねばならない
水音ばかり高いやせ川の橋
わたしは通る　バスのゆりかごで
つなげぬものをつなぐ橋を

書跡

吉本青司

程野にいるヒビに
大杉の詩を贈つたら
〈イニシエのブシのようだ〉
という返事がきた
そして
山奥のしずかな村で
ふるい歌を読んだり
一絃琴を弾いたり
happiness な日々を送つている

ことしまだ雪がこないが
山上には雪のけはいが感じられる
と書いてあつた
異国の友のこのふしぎな贅沢に
羨望と違和感をおぼえながら
街路の騒音に
包囲されたブシの家の
新春に掲げた　今さんの
〈屋在白雲中
　人帰白雲外〉
の筆跡をぼくは改めて
見るのであつた

して合格してゐた。もともと文学青年であつた彼は、その進路に一沫の不安を抱いてゐて自作を伊東の批判に供することによつて将来性を確かめたいと思つたのであらう。（彼は後年、文学部に転じた）

伊東は藤村風なその作品を見て、「藤村のころと同じ方法で詩を書かう」としてゐる無意識な態度に、批評以前として明確な返答を避けてゐるのである。伊東自身、萩原朔太郎に「歪みたる島崎藤村」と評されたことがあつた。つまり、その「歪み」こそ、藤村の時代と伊東の生きた時代の変化であつたのである。

この朔太郎評のやうに、伊東は藤村を精神の奥所の祭壇にまつつてゐた。昭和九年の作であり、『わがひとに與ふる哀歌』の冒頭に掲げた「晴れた日」にでは、〈しばらくお前は千曲川の上流に行きついて〉と、伊東自ら辿つたこともない小諸なる古城のあたりまで分身をして辿らせてゐた。又、その処女詩集をゆり子さんに献呈した際の書簡に、「私達がもとよく話し合ひました島崎藤村氏にも本を送つてやりました。お礼の手紙が来ました」（昭和一〇年一一月二日附ゆり子宛書簡）とあるのは、その証拠である。

伊東は藤村風な詩を書くこの青年に、或る種の近親感を批判とは別に持つたのであらう。伊東はすでに肺浸潤であることを知りながら、彼が来訪し意見を求めることを許してゐる。それは「劇的」でも「不自然」でもない文学者間の当然の礼儀作法だとして、招きの意志さへほのめかしてゐる。

福地氏はこの書簡を友の増山氏から貰つて伊東を訪問し最後の弟子となるのである。

四月下旬、伊東は次の書簡を斉田昭吉氏に送つてゐる。

「葉書書いてて投函わすれてたのを発見し、これはすまぬことしたと思ひ、これを書きます。さきごろから芸術や太宰の本等度々ありがたう。お礼申します。元気ですか。暮しはどうですか。友人との仲はうまくいつてゐますか。私は身体どうも相変らずしんどいしんどいと云つて暮してゐます。しかし、大して目立つて悪くなつたといふのでもないのです。詩の方には割に熱心、つづけて、三四書きました。

『文芸往来』六月号、『文芸』七月号等、気がむいたらみて下さい。自分では割に気に入つてをり、ある計画で方法を立て、書いたものです。

近況知らせて下さい。このごろ私は二、三度桑原武夫さんに会つたこと、近く田中光子さんの詩集が創元社『百花文庫』で出ること等が事件。」

（四月二六日大阪府黒山村より東京都台東区上野公園内美校クラブ、斉田昭吉宛はがき）

伊東は東京に出て苦闘をしてゐる斉田氏には病気である由を知らせてゐない。「しんどいしんどい」という疲労のていどで知らしてゐるだけである。心配をかけてはいけないと配慮されたものであらう。それとも病気自体が嵐の前の静けさといつたあんばいで小康をえてゐるためかもしれない。『文芸往来』『文芸』等の註文に応じて詩を三四書いてゐるがそれは肉体的小康のみならず精神的な小康もえてゐる結果かもしれない。

末尾で桑原武夫氏に二三度会つたことゝ、田中光子さんの例の苦慮した詩稿が創元社から『百花文庫』の一冊として出る由を「事件」として伝へてゐる。おそらく創元社をくどきおとすために桑原氏の助力でも要請して、いささかすつたもんだがあつた事情を暗示してゐるやうである。

この書簡は作品が三、四できたことを伝へてゐるが、『文芸往来』六月号のために書いた作品は次の作品である。

子供の絵

—疎開地に住みついて—

赤いろにふちどられた
大きい青い十字花が
つぎつぎに一ぱい宙に咲く
きれいな花ね　沢山沢山

ちがふよ　おホシさんだよ　お母さん
まん中をすつと線がよこぎつて
遠く右の端に棒がたつ
あゝ野の電線

その事件を飛行情報で知つてゐました…（後略）…」

昭和三十九年一月二十八日
「果樹園」に詩を求められたぼくの
雑然とした机の上に
プラモデルの飛行機が一機
かなしい戦利品のように　ひつそりと置かれている
四歳の長男にせがまれて組立てた
アメリカ製のムスタング P51
その機名は
左大腿下端複雑骨折貫通銃創兼左下腿軟部貫通銃創・左大腿切断
の傷名とともに
ぼくの脳裏にしつかりと刻まれているが
大寒の今日　断端神経痛に悩まされているぼくにとつても
愛憎の日は　すでに　古典のように遠い

ひしやげたやうな哀れな家が
手前の左の隅つこに
そして細長い窓が出来　その下は草ぼうぼう
坊やのおうちね
うん　これがお父さんの窓
性急に余白が一面くろく塗りたくられる
晩だ　晩だ
ウシドロボウだ　ゴウトウだ
なるほど　なるほど
目玉をむいたでくのぼうが
前のめりに両手をぶらさげ
電柱のかげからひとりフラフラやつて来る
くらいくらい野の上を
星の花をくぐつて

「子供の絵」。文字どほり七才の夏樹君が描く風景画を見ながら描いた詩である。星。電線と電信柱。坊やのお家。お父さんの書斎の窓。晩。牛泥棒……。

この最後に現れる牛泥棒は真実に起つた事件であつた。伊東の書斎は家の裏側にあつたが、詩で描かれている細長い窓が北に向いて展望してゐた。鼻の先に農家の牛小屋があつた。そこに牛泥棒がきて牛を奪つて逃げたの

現認証書明

平光善久

昭和二十年七月三十一日十四時頃
中支那派遣第一独立鉄道橋梁大隊第一中隊
昭和拾九年徴集陸軍二等兵平光善久ハ
安徽省新馬橋南方六粁附近（津浦線天津起点八一四粁附近）ヲ機関車乗務専修員トシテ第一一五列車運転進行中敵機ノ銃撃ヲ受ケ左膝関節部及左下腿ニ貫通銃創ヲ受ケ左大腿骨下端露出シ出血相当アリタルヲ認ム
同夜蚌埠第一九〇兵站病院ニテ左大腿切断
昭和二十四年五月十八日

詩集『案山子の歌』を出したぼくのところへ詩人小高根二郎氏から毛筆書きのハガキがとどいた
「近頃珍らしく美しい詩集添く存じました、貴方の足を失つた記念すべき日、僕は蘇州で

である。伊東は目撃者であつた。彼が伝へる犯行の手口といきさつが夏樹君に強烈に印象されて、〈前のめりに両手をぶらぶらさげ〉てしのんでくる〈目玉をむいた〉牛泥棒となつたわけである。ザツハリツヒそのものの作品である。

「文芸」七月号のために書いた作品は、次の作品である。

雷とひよつ子

あけがた野に雷鳴がとどろいた
野にちらばる家々はにぶく振動し
北から南へ
かと思ふと又東から西へ
冬を追ひやる雷鳴が
繰返しあけだたの野にとどろいた
ただ童子だけが
その寝床に目ざめなんだ

朝それで童子が一等はやく起出した
鳥屋(とや)では丁度そのとき
十三匹のひよつ子が
卵から啄(くちばし)を突きだすところだつた
金いろのちつちやな春が
チチチチチと誕生してゐた
ただ童子のほかは
だあれもそれを見なんだ

この作品も、先の「子供の絵」同様、ザツハリツヒそのものの作品であるかどうかは判らない。おそらく後半の〈卵から啄を突き出す〉場面の目撃者である童子――夏樹君の話によつて、構成されたものであらう。〈十三匹のひよつ子〉の匹は伊東らしからぬ不用意さかと愚考したが、まだ羽の生えてゐないひよつ子には確かに匹の方がふさはしい。伊東の深慮によつて敢てした誤謬であらう。

先の書簡に、できた作品は三、四とあつたが、次の発表誌不明の作品も、その一つであると想はれる。

無題

だあれもまだ来てゐない
机も壁もしんとつめたくて
部屋の隅にはかげが沈んでゐる
じぶんの席にこしかけて
少女は机のうえの花瓶の花に
さはつてみる
時計が誰のでもない時をきざむ
何とはなしに手洗所にいく
そこのしろい明るさのなかに
じぶんのかほがかがみの奥にゐて
素直にこつちを見る
その顔をガラス窓につけると
大川が寒い家竝の向ふで
こいい靄をたてて
こぶこぶの鈴懸の列が
ねむたさう
ふいに「春が来るんだわ」
とわけもなく少女は思ふ
すると
くすんとそとの景色がわらつて
ビルのその四階の窓へ
めくばせした
そして一帯に朝の薄陽が射す

詩集
しづかな人しづかな部分
天野忠著
¥350
北九州市小倉信区鍛天町一ノ二二六六
第一芸文社

この作品はザツハリツヒな作品ではなささうである。まき子さんはまだ新制中学生であるからだ。彼女の友人でこの「無題」の中の少女のやうに、この春ビジネス・ガールになつた子はゐないはずだからである。それにしても伊東の少女心によせるシンパシティは尋常なものではない。おそらく職業記事でも扱つた紙面に掲載された作品であらう。

五月中旬、伊東は大学時代の文友であつた宮本新治氏の子息の多加志君に、次の書簡を送つてゐる。

「お手紙拝見、多加志君はほんとうに愉快な坊ちやんですね。なるほど「強引」ですね。きつと将来えらくなられると思ひます(これは冗談にあらず。)

よそに出かけて話をすることは実に実に苦手です。人前でうまく話が出来ないから詩を書き始めた小生であります。それでも二、三度、講演無理にやらされたことがありますが、いつも大失敗で、聞き手が、なあんだとつぶやいて苦笑する始末でつらい

挿話

美堂正義

晩春のロブ・ノール附近
タマリスクの柱の建つてゐるメサの島で
スウエン・ヘディン等は一基の墓を発掘した
棺の中には高貴の者らしい葬送品と
頭の先から爪先まで毛布に包まれた一個の死体があり
覆を取ると唇の周囲に消えない微笑の
女性のミイラがあらはれた
発見はただ偶然であつたが
彼女は生きてゐた土地の燦めく星空のもとで
一夜過したまゝまた地中深く寝りについた
クム河がロブ・ノールに絶へず注ぎ込み
河床は風力と土壌の移動で変へられ
一千五百年を周期として南北に振子運動をする
さまよへる湖ロブ・ノール
水を失つた楼蘭は人に見捨てられたと
ヘディンは調査し推断した
嘘虚となつた楼蘭は
二千年間人から忘れられ
シルク・ロードは南方を通つて過ぎ
いまなほ砂漠に埋没した道を示す
石塚の道標が風に耐え砂に抗(あらが)ひながら
昔の面影を示してゐる
遠く幾千年の昔から
いまなほ厚いヴェールに包まれてゐる
亜細亜大陸の内部の砂漠地帯
岩山と黄土に形成されてゐる大きなマス
そこに存在する些細な湖沼による
人間の生活の変遷
ラクダは絹や茶を西に運び
トルキスタンの文化と仏教を東にもたらす
また民族は安住の地を求めて移動し　相争ひ
東洋史の片隅に断片的に残された消息
中国の主権は短い年月の断続でしかなく
東トルキスタン人による土地青海
楼蘭の美女は現在の空気にふれ
彼女自身の意志によるものでないとしても
十幾世紀を隔てて突然地上に姿をあらはした
微笑の意味するものは伺ふ由もないが
茫漠と果てない黄土の砂罪に生まれ
砂漠とともに生活し、死んだ
単調で短い一生
現代の激しくて貧しい生活をしてゐる私には
それを思ふたびに不思議と心が安まる
遠いむかしの一挿話にしかすぎないのだが

つらい目に会ひました。自分の学校でも、国語は教へますが（月給で雇はれてゐるから仕方なく）、文学の話はしないことにしてゐます。文芸部にも加はらぬことにしてゐます。

まして灘までも出かけて恥かくとは思ひません。但し私は座談は上手ですから多加志君とだけなら何んでも私の知つてゐる限りのお話をしたいです。外の者（生徒）には義理も、興味もありません。こんなにお断りしたらきつと多加志君は困られるでせうか。それは「強引」の報いですから、何とか多加志君自身で始末をつけるより仕方ありませんね。そんな修業を度々してゐる内にえらくなつてゆくのですから。

先日須磨に、生徒と一緒に遠足に行つた時、お寄りしようかなとだいぶ思いましたが、大へん疲れてゐて、結局よしました。それに時間がかなりおそかつたので。

十四日　伊東静雄

多加志君

『文芸往来』六月号『文芸』七月号に拙詩のりますから店頭ででものぞいてみて下さい。

（五月一四日、大阪府黒山村より、芦屋市西山町六八、宮本多加志宛封書）

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」B

竹越三男編

⑨

弾丸はその銃口を放るゝ切刹（ママ）に於て最も遅カンなるスピートを有す*

*創元社版『全集』「草稿詩篇」の部「遊獄手記」の冒頭部分の原形。

天上縊死の懺悔者は

竹*の節は細くなりゆき

竹の根は細くなりゆき

根は地面の下に垂直し（スイ）

錐のごとくするどく　〈追記〉

絹糸のごとくになり

けむりのごとくに消え

ひとやの奥に　〈追記〉

懺悔を凍る冬の日に　〈追記〉

つみびとの髪は　みだれにみだれて

くらきひとやに巣をかけそめぬ

**その髪もみだれにみだれて

くらき牢屋につみびとは

懺悔の巣をぞかけそめぬ

*この詩は大四・3『地上巡礼』発表「髪」の原形の一種である。（このノートで後にさらに二種出てくる。）

**この部分は同じ紙面の離れた所に別に書いてある。

⑩

「荒れた広野の中を漂泊するところの霊魂」とか

「生命が時の陰影に向つて羽ばたきする」とか乃至は

「白日の渚に融合するところの砂と人生とがある」といふ類の陰諭的（ママ）表現が如何に直訳的であり、如何に概念的であり、至上象徴の立場より見て、如何に低級であり、如何に無技巧であり、如何に無表情であり、如何に非リズム的であるかを注意せよ

かくの如き言葉の連続を以て叙述せられたる詩（？）が我々の情線を感動せしむることがあれば奇蹟である、更に斯くの如きものに歓嘆する日本人がありとすれば人智以上の神秘である。然らずんば彼があきらかに真の詩を観賞する資格なき人物なることを証明する、

⑪

*所現〈上方に抹消「求渇」〉

あきらかなるもの現れぬ

つみとがのしるし天にあらはれ

懺悔のひとの肩にあらはれ

歯にあらはれ

骨にあらはれ

木々の梢にあらはれいで

〈抹消「あるみにうむの薄き紙片に　すべての言葉はしるされたり」〉

ま冬をこえて凍るがに

犯せる罪のしるしよもにあらはれぬ

—浄罪詩扁（ママ）

霊魂

堀之内歴

ついその辺　雲低いあたり

たしかに貴女が居る

私は呼びかけてみないけれど　分かる

貴女が私のそばに居たいことが

ことし冬空に風がなく　雲垂れこめる

歩いていても肩先のところまで来る

淡墨色の弱い雲は　ふと退屈だが

貴女の霊魂の佛だった

貴女が死んで行った日もこうであった

*大四・3『地上巡礼』発表「貌」（後に「冬」と改題して「月に吠える」収載）の原形。

姿*〈上方に抹消「罪人」〉

あるみにうむの薄き紙片に

すべての言葉はしるされたり

ゆきぐもるそらのかなたのつみびとひとり

ひねもす切齒なし

今日も無論同じ光景　私は馴れた

生前は遂に笑わなかった貴女だった

何かを耐らえて眉間の皺が美しかった

そうやって漂ようのは安らぎだろうか

あの忍苦が昇天して喪服雲となったのが

ちょっと見には陰気だが　ほんとうは

地上の物体の陰を吸いとっている

愛する人　己れに厳しく生きた人

下向いていた人　眉根の優しい皺の人

空中に貴女がいつも居てくれるなら

私の心の花は開きつづけているだろう

一九六四・一・二七

いまはや命こほらんとするぞかし

ま冬を光る松が枝に

懺悔の人の姿あり

—浄罪詩扁

*大四・3『地上巡礼』発表「懺悔」の原形。

竹*

ますぐなるもの地面に生え

するどき青きもの地面に生え

凍れる冬をつらぬきて

そのみどりば光る朝の空路に

*なんだたれ

*なんだたれ

いまはや懺悔を終れる肩の上より

けぶれる竹の根はひろごり

するどき青きもの地面に生え

—争罪詩扁

*「竹」（第一）の最終の原形。ノオトAにここにいたる四種の原形が出ていた。

**このしるしをつけた三カ所が詩集収載の形と違っている。詩集ではそれぞれ「なみだたれ」、「なみだをたれ」、「をはれる」となっている。

庭

まがきをすかし

木ぬれをすかし

果樹園　一〇〇号　昭和三十九年六月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八十円　送料廿円

果樹園

第100号

第百号記念・伊東静雄特輯

詩人、その生涯と運命　小高根二郎
太古の森　浅野晃
西鶴臨講会と伊東　野間光辰
学生時代の伊東　堀内薫
伊東静雄詩碑を尋ね　林富士馬
映画「美しき朋輩たち」小高根二郎
伊東静雄と酒　富士正晴
倦んだ病人　織田喜久子
異常乾燥注意報　吉本青司
伊東静雄の晩年の詩想　福地邦樹
「詩人、伊東静雄の『全集』が示すもの　浅野楢英
伊東静雄とリルケ　飛鷹節
果樹園にて　美堂正義
静雄追悼　山岸外史
書　箇三好達治
書　箇伊東静雄
百の椿堀之内歴
鳩が歩む　朱い脚で　吉本青司

詩人、その生涯と運命

作品と書簡から見た伊東静雄（八十八）

小高根二郎

三日後、伊東は郷里広島に帰住し、広島大学教授になつてゐる清水文雄氏に、次の書簡を送つてゐる。

「お手紙うれしく拝見いたしました。いつも変らぬ御厚情有難く存じます。私はこの病院で丁度一年半経過しました。数度悪い状態に陥り、その都度マイシンやパスを用ひて次第に病状安定に近づきつつあるやうです。最近では、三月中旬頃かなり悪かつたのですが、又パスを用ひて劇的に好転し

果樹園　九十七号　昭和三十九年三月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

築山あたり紅葉をそめ
さゝの葉にしもやけさせる
植込の遠見をすぎて
しろじろと魚を見るひと
はかりかねたる泣の罪だ
その高きところよりみそなはす神に懺悔し
あけくれ懺悔しはや縊死にも及ばんとし……
されども愛は高き天上よりみそなはすところにある

ダークのあやつり　〈これは無関係な何かのメモ〉

はかりかねたる汝の心だ、
汝はその高きところにまします、
神に懺悔し　祈り、
あけくれ　縊死に及ばんとし
されども愛は高き天上よりみそなはすところにある、
ああゆきふり、あまつさへゆきふり、木ぬれを透きて　鴫は頭上に光るまで、
師走、汝が聖書の光るまで
つみびとの涙ぐましき草の茎
みよふくみて出づるものはわらびの芽
雪わりぐさの芽、

*茎

—冬ノ感覚ヲ歌ヘルモノ—

冬のさむさに
ほそき毛をもてつゝまれし
草の茎を見よや
青らみ茎はさびしげなれども
いちめんに薄き毛をもてつゝまれし
草の茎を見よや
雪もよひする空のかなたに
〈抹消「しみじみと雪をやぶりて」〉
草の茎は崩えいづる

*太四・2「逼迫」発表「草の茎」の原形。これにいたる過渡形も書きつけてあるが、その最後の行は—
しみじみと雪を堀りあげ
ゆきわりぐさの茎は崩えづる

金庫破り

怖るべきふくめんのひと
ラジウムを使用するひと
犬のようにしのんできたひと
影のやうに消えてゆくひと
このひと金庫を破壊せり

〈抹消「探偵のピストルは壁をうちぬき」〉

編輯後記

一月五日。大毎ホールで「雲」公演の「聖女ジャンヌ・ダーク」を愚妻と共に観た。訳者。演出者の福田恒存氏はアメリカに在つたが、力一杯の熱演は気持がよかつた。

一月一五日。天野忠氏より詩集「しづかな人しづかな部分」を頂戴した。好著である。この日熱情的な書房主として大江健三郎氏に朝日新聞で推されてゐた麦書房の堀内達夫氏が来訪された。氏が盛スイした立原道造作集「詩人の出発」はまだ残部が多少ある由である。愛好の士は急ぎ需められるとよい

一月一八日。同人福地邦樹氏が結婚した。特異な相問歌を今後期待したい。

一月二七日。浅野晃氏の詩集「寒色」が読売文学賞を受賞する旨決定した。この受賞の意味するものは大きくかつ深い。先号掲載の伊東宛三島由紀夫氏の書簡に「非詩の跳梁、詩精神に代る非詩精神の僧主の君臨」云々という戦後評があつたが、安易なアンチ・テーゼや倒錯的な実験だけで商売往来が成立した便乗的な戦後の終焉を決定づけたものである。それにしても御病気を推して選衝会に出席されたと伝へられる佐藤春夫先生に謹んで敬礼申し上げる。又、発行所宛に祝ひ状を寄せられた諸家に感謝申し上げる。

一月二九日。天野忠氏より同氏宛伊東書簡が一通みつかつたと発行所に寄せられた。百号記念号で発表する。

本号は諸家から寄せられた詩篇ではからずも「寒色」受賞記念詩特輯号になつた。寄稿の諸家に感謝する。（O）

果樹園　第九十七号（毎月一回一日発行）
昭和三十九年三月一日発行
編輯兼発行者　池田市野町一六八　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町三の一八　元市印刷株式会社
発行所　池田市野町一六八　果樹園社
定価　四十円　送料　十円

、仰向けになつたままですが、こんな文字書けるやうになつてゐます。然し空洞がかなり大きいので治療は中々困難らしいです。時々精神的にも参ることが多いです。この病院は貧しい人々が多く、従つて死ぬ率も多く、それらの多くの死を見、きくのはいい影響を与へません。精神を不健康にします。ねたまま外界から遮断されてゐると追憶がむやみに鮮明で切なく、そんな時はひとに教へられたやうに「南無大慈大悲の観世音菩薩」ととなへて、虚舟を水に浮べたやうな気持になりたいと念じます。若い日に死に別れた人々のことが殊に思ひ出されます。その人達の生涯がまとまつた一つの具体的な像として浮びます。それと同じやうに、自分の生涯も甚だかけねなしに、はつきりと思ひうかびます。

蓮田さんのこともしよつ中思ひ出します。御遺著、切なすぎて、果してよくよむだけの気力が（勇気が）あるかどうか。

このごろは時々は床の上にしばらく坐ります。然しまだ足で立つたことはないので、窓のところへもゆけません。日々退くつのやうに想像されますが、中々退くつどころではなく、心中多忙です。

今日はこれだけにします。（長い間の熱で頭も馬鹿になつてゐます）

病伊東生

清水文雄様」

（四月二一日、大阪府長野町国立病院より広島県安佐郡深川村下深川、清水文雄宛封書）

伊東は空洞がかなり大きいので治癒は困難だらう……と、卒直に清水氏に告白してゐる。貧しいために新療法を試みることなく四辺に次々と死んでゆく人達……。その生々しい見聞が、「いい影響を與へず」「精神を不健康にする」と伊東がいう意味は、眼が、心が、自然……死の方向に沈むことをいつてるのであらう。その方向からあまり鮮明すぎて切ない追憶がつぎつぎに蘇り、その境涯から逃れて生の世界に浮びあがるために「南無大慈大悲の観世音菩薩」の名号をとなへるにいたつてゐる現状を告白してゐる。

伊東は殊に若い日に死に別れた人々のことが思ひ出されると言つてゐる。辻野久憲・中原中也と死に別れたのは満三十二才の若い日だつた。立原道造の死の枕頭に佇んだのは翌年だつたから満三十三の日のことになる。青木敬麿が消えていつたのも、まだ中年には間がある満三十八になんなんとする壮年の日のことだつた。

このうち伊東の胸に鮮明すぎるほど切なく蘇つたのは、豊島師範裏の野尻医院に見舞つた瀬死の辻野であつたらう。彼は燃えるカソリシズムで病魔との格闘をしてゐたのである。

「ほんとに僕にはもう僕の十字架以外に住むべき所はなくなつたやうです。例へばかうして一日中ちつと横臥してゐるとつい眼の先きに四寸角の縦の梁が真直ぐに僕の足許めがけて走り下りてゐる。それと同時に丁度その上から七三のあたりにもう一本梁が横に流れてゐる。それは丁度世の人々がキリストを磔けたあの十字架と同型であり同大であらう。僕はあらゆる苦悩を経、あらゆる侮辱をなめつくして既に半死半生となつたイエズスがこんなに重い自らの十字架をなほもかついだのかとちつと眼前の十字架を瞶めてゐる。するとそれが次第に血を噴き出しやがて徐々と僕の上にのしかゝつて来るのです。」（昭和一二年三月六日附伊東宛辻野久憲書簡）

この辻野の言葉が、一つ、一つ、生きてゐるやうに伊東に囁きかけたに相違ない。いや、一つ一つが楔となつて、肺臓の破れた個所から生命の内部にぐいぐい打ち込まれたに違ひない。彼は血みどろになつて懸命にイエズスを呼んでゐた。俺だつていつしらず観世音菩薩を呼んでゐる。

あゝ、あの蓮田は天皇萬歳を呼んだつけ……。あたかもその存続が彼の生命を越えたものであるかのやうに。

伊東は「蓮田さんのこともしよつ中思ひ出します」と書いてゐる。又「このごろは時々床の上にしばらく坐ります」とも書いてゐる。先の斎田氏宛書簡で詩の素質をひどく褒められてゐた谷口卓男氏が伊東を見舞つたときには、丁度伊東は床の上に胡坐を組み蓮田との交渉を回想してゐるところであつたといふ。彼は子供の処作のやうに両掌を眼に当てると、

「蓮田善明も死んでしまうて……。蓮田も死んでしまうて……」

と、さめざめと泣いたといふのである。

死んだ蓮田の錯誤的な行為に、同情せず、いさゝか苛酷に審判しすぎてゐた伊東は、自ら死に臨んで悔むところがあつたからであらうか？　それとも蓮田が自ら招いた死に、心ならずも招き寄せられる自が運命に取り乱してゞもゐたのであらうか？　蓮田の遺作である小説「有心」が祖国社から出版される由を聞いて、「果してよむだけの気力（勇気）があるかどうか」と危惧してゐるのは、蓮田に対する前述の後悔をさらに重ねたくないといふ思ひからであらう。

伊東はこれら幸うすく世を過ぎた友等の生涯を「一つの具体的な像」として思ひ浮べ、彼自らの生涯もまた「甚だかけねなしに」はつきり思ひ浮べてゐると言つてゐる。掛値なしに高く評価してゐるのか、それとも低く評価してゐるのか、そのいづれとも明瞭ではないが、生涯を賭けた四冊の詩集の成果に、幾度か試みながらつひに一篇の小説をも加へえなかつた事実を生涯の憾みとしたことは確実である。

五月下旬、伊東は山根忠雄氏に次の書簡を送つてゐる。

「先日遠いところを見舞つて下さつてほんたうに有難かつたです。その際のマーマレード大へんおいしく、たべてしまつてからも類似品さがし出して愛用してゐます。私はその後順調にて、時にはベッドを離れて、つたひ歩きして窓のところに行き、初夏の夕景色など眺め入ります。しかし病勢安定するといろいろな欲望が悩みと共に迫つて来て精神が動揺し、困ることがあります。御詩拝見しました。私は奥様と詩とでは奥様の方を大切にしたいですね、御一考を乞ふ。学校の雑誌もありがたうございました。」

（五月二六日、大阪府長野町国立病院より茨木市戸伏、山根忠雄宛はがき）

伊東は窓まで伝ひ歩きをして、そこから大好きな初夏の夕景色を眺められる状態になつてゐる。掲載を省略したが二日後の亀山太一氏宛書簡には「最近やうやく病勢安定、肥えて来ました。自覚的な苦痛はすべて去り、楽々とねころがつてゐる気分です。病気そのものは重いながらも、こんなに楽だと助かります。」とある。

この病勢の安定をみすまして、またぞろもろもろの欲望が小悪魔となつて精神をゆさぶつてゐる実情を伊東は告白してゐる。伊東の病勢の安定に加へて新婚の山根夫妻の仲のよいところを見せられたことも刺戟となつたであらう。「奥様と詩とでは奥様の方を大切にしたいですね、御一考を乞ふ」といふ言葉の底には、詩なんかやめなさいといふ辛辣な批評と共に、苦労ばかりでなんの足しにもならぬ詩人なんぞを志すより、妻を愛することが生活である、平凡な市民教師としての道を選んだ方が結局は勝利ですよ……という自省を含んだ暗示のやうである。

この書簡の四日後、次の書簡を花子夫人に送つてゐる。

「米　花子さん、土、日は大へんたのしかつた、病気のこともすつかり忘れた。しつとりと段々美しくなり、目がねもよく似合ひ、話も上手になり、こんないい、又永年なじんだ花子さんを残して、さうやすやす

とは死なれぬと決心しました。ふいて貰つたところサラサラして迚も気持がよい。又ふいて下さい。

＊ 蛔虫の駆除怠らぬやう。あなたも夏樹ちやんも。

＊ 夏樹ちやんのB・C・Gぜひたのみます。

＊ まきちやんも、も一度ツベルクリンの反応で陰陽調べておいて下さい。今度の土曜日にでも、保健所で。（後記 あつ！当日は休みか）そして、もし、陰性なら、次の月曜に、夏樹ちやんと一緒にB・C・Gして貰つたらどうでせう。電車通学の危険思へば身の毛がよだちます。（それとも事情を三国高校の養護教員の先生に云つて、相談させたらどうでせう。もつと便利な、時間的にけいざいな方法あるかもしれない）

＊ 亀山君には手紙出して下さつたか。

＊ 住中に、見舞金の受取り出して下さつたか。

＊『反響』本屋に取りよせさせて下さい。

＊ 何から何まですみません。たのみます。忙しいでせうが。

＊ いつまで生きられるかわからぬわが身を思へば あなたがいとしく、かはゆくてたまりません。

三十日　　しづを

かはいい花さん

忙しい忙しいの中にても心をおちつけて涼しい余裕のある生き方して下さい。美しく、たのしく生きて下さい。」

（五月三〇日、大阪府長野町国立病院より大阪府南河内郡黒山村黒山高等学校内、伊東花子宛封書）

先の山根氏宛書簡では山根夫人と詩とを天秤にかけ、夫人の方に愛の重りを加へてゐた。この書簡にもその伊東の心情が照応してゞもゐるかのやうに、花子夫人に寄せる愛情が溢れてゐる。冒頭に「永年なじんだ花子さんを残して、さうやすやすとは死なれぬ」と言ひ、末尾では「いつまで生きられるかわからぬわが身を思へば、あなたがいとしく、かはゆくてたまりません」と言つてゐる。この生存の決意と遠からぬ袂別の歎きとの落差から、この書簡には元気なうちに書き残した遺言のやうな雰囲気が漂つてゐる。特に二伸で、ゆつたりとした清涼な生活態度と美しく楽しく生きる意慾を願つて擱筆してゐるあたり、その気配が濃厚である。

それにしても夏樹君・まき子さんの健康管理に口うるさいほど心をつかつてゐる。四ヶ月に及んだ自宅療養期に子供達に感染してゐないかと危惧されたからであらう。

一週間後、伊東はさらに家族三人宛に次の書簡を書き送つてゐる。

「かしこい夏樹くんへ

せんじつは おなかが いたかつたそうですね。きつと むしが いるのだ とおもいます。おかあさんの がつこう のかんごふさんに べんを しらべて もらつて くすりを のみなさい。くすりは まきちやん に さかい から かつてきて もらひなさい。せつかく ふとつてきたのに むしのために やせたら ざんねんですね。

向上心に燃えるまきちやんへ

先日は見舞に来て下さつて うれしかつたです。英語や数学がむづかしくて少し弱つてゐるさうですね。しかし へこたれずにがんばりなさい。あなたの頭はいいのですから すぐ 追ひつきます。英語のことは田中先生のところに行つて相談したらどうでせう。きつと いい方法を教へて下さると思ひます。私が病気でなかつたら加勢するのにと残念です。

しかしからだも大切ですよ。お父さんのやうになつたら もう おしまひです。

学校がいやにならぬやう。毎日がたのし

いやう 祈ります。

元気なやさしい花子さんへ

先日はよかつたですね。とてもたのしく心がほがらかになりました。昨日は 初めて少し ひとりで あるきました。しかし 油断はしません。そして きつと よくなつて あなたを安心させます。

しづを」

（六月六日、大阪府長野町国立病院より大阪府黒山高等学校内、伊東花子宛封書）

伊東は一人で歩くことが許可になつてゐる。その状況は四日後に書き送つた庄野潤三氏宛書簡に詳しい。

「ご病気非常によろしいとのことほんたうによかつたですね。はげしくても早くよくなる病気は、看護の仕甲斐があつてよいですね。尚々御大切に祈上げます。

私は六月四日に一年八ヶ月振りで（!!）

太古の森

浅野晃

私は聞いた、
あらあらしいこれらの声よ、
幸福へのいざなひよ。
打ち寄せる、
打ち返す、
崩れて盛りあがる、
朝から夜中までの叫喚よ。

これら時代の浪は
図に乗つてゐる。
かさにかかつて押し寄せる、
単調な海岸線と侮つて。
スペイン風みたいに
血走つたどこかの海門から来た、
やくざ部隊。

刻々に奴らはいらだち、
飢えは迫る、この渚に
打ち上げられたおびただしい流木。
破船の切れ端。
勝手な能書をはりつけてごろごろしてゐる、
罐詰の罐。
みるみる罐は積み上がり、
いまや砂上の楼閣、
落日の真紅の焔にも燃えぬ。

このときかしこに太古の森は、
耳しひのやうだ。
時代のかたくなな敵手である
この黒い地の砦は
音無しの構へだ。

昼は太陽の歌に湧く。
夜は星明りに巨人をはらむ。
何ごとも漏らさずまた漏れぬ。

雲を引きよせては吐き出す。
どんな嵐もやりすごしたあとには
雷雨のあとの天の青さ、
かなしいまでの青さの冴え。

氷劫に再びあらたに
氷雪の山河を照らす
古い鏡よ。
献身のみなもとを養ふ
深い尾根よ。
持続と生成の、秘密な
みどりの国よ。

この夕、若くて逝いた子らが、
仕残した仕事が山ほどあつたにと歎いてゆく。

歩きました。割に平気でした。それからは、じつとしてねてをるのが今迄より苦痛になりました。今日はこの室の出入口まで行つて裏の野原や小松の山を眺めました。夕方は、運動場で看護婦さんのする庭球など眺めます。ピチピチと元気一杯の若い女の人の運動姿を見てゐると、取りかへしのつかぬわが身が、不覚に悲しくなつて来ます。昨日の朝日新聞のコント、美しい素直な文章で、しづかな音楽きいたやうな印象。

（六月一〇日大阪府長野町国立病院より大阪市住吉区帝塚山東二ノ五六、庄野潤三宛封書）

伊東は一年八ヶ月ぶりに歩行できた感動をエキスクラメーション・マークを二つまで附けて強調してゐる。病棟の入口から眺めやつた元陸軍幼年学校の広大な敷地内の野原と、その右裏に続く小松山を、再び取戻しえた自然として泪ぐむほど懐しんだであらう。それにも増して伊東の心をときめかさせたものは、夕方に運動場で展開される看護婦たちの庭球である。

ゴム毬のやうに弾む若い四肢。その屈伸と跳躍と翻転。無心に歓声をあげる彼女等を眺めながら、伊東は「取りかへしのつかぬわが身」を不覚に悲しんでゐる。この「不覚」という言葉は味はひ深い。単なる「思はず……」といつた不注意感より、語義本来の「業」としての匂ひが濃い。伊東は恢復しえない健康を単純に歎いてゐるのではなく、健康な肉体なら当然意向すべき欲求を、もはや顧ふべきもない病体を悲しむもののごとくである。

この日頃であらうか伊東を見舞つた中西靖忠氏は、花子夫人が茶を入れに立つたのを機に、「あゝあ、もう一度元気になつて、女の白い肉体を抱きしめたい」とつぶやいた伊東の歎きを聞いたことがあるとのことである。

この健康な欲求を取戻した伊東が「静かな音楽」を聞いたやうな印象をうけたといふ庄野氏のコントは次のやうな作品である。

渡世

庄野潤三

何という木か知らないが、葉裏が真白なのだ。だから、風が吹くと、白い小鳥が多勢羽ばたいているように見える。

一ときり騒いで、風が止むと、小鳥たちはもとの青い葉つぱに姿を変える。

ベッドに横になつたまゝ私はそれを見ている。物憂いほど静かな、午後の病院。

こんな風に、ひとりで、庭の木の葉のそよぎを見つめていると、昨日の試合中のあの一瞬間のことが何だか夢の中の出来事のように思えてならない。

……盗塁のサインが出た。走つた。滑り込んだ。右足を鉄棒で殴られたような痛み。しまつた！　と思う。観衆のどよめき。監督の青い顔。審判の顔。ラジオを聞いているかも知れない妻のこと。これは重大なことになつたぞという冷静な意識。襲いかゝる不安。経験した人でなければ分らないだろう。足の骨が折れるということほど、あつけなくて、ばか〳〵しくて、しかも限りなく悲哀の感を伴うものはない。僚友にたすけられてベンチに戻つて来る途中、選手も観客もひつそりと私を見守つていた。可哀そうなはこの子でござい。渡世の悲しみが胸をお、い、私は思はず涙をこぼすところであつた。

幸いに一と月休んでいたら元通りになるそうだ。医者は、心配はないという。

私の心は静かである。木の葉を見ているのは、面白い。（昭和二六年六月九日大阪朝日新聞）

一人歩きができるやうになつた病院患者の伊東は、まだ一人歩きができぬ病院患者のプロ野球の選手を、いささか同情的に眺めえたのである。一と月ばかり治療をすれば再起できるという明るい希望が、野球の選手にそよぐ木の葉を小鳥に見せてゐるやうに、伊東の

胸にも再起の希望を音楽のやうに奏でたのである。

先の書簡冒頭に誰か庄野家に「はげしくても早くよくなる病気」を患つてゐる人がある由見えてゐるが、庄野氏はその家人に取材してこのコントを書いたかとも思へるが、初めから伊東を慰安する意図を念頭にして執筆したと考へることも可能である。

六日後、伊東は一人歩きのできる喜びを弟子である福地邦樹氏にも伝へてゐる。

「六月四日に許されて少し歩きました。一年八ヶ月ぶり！　肉体の方少し安定すると精神がこんどは乱れて困ります。時々、大声あげてわめきたくなります。助けてくれ——と肺つぶれる程大声出したらさぞいい気持でせう。何ともさんたんたる気持におそはれます。雨の日は殊にいかん。早くカッカと照るにぎやかな真夏になつてほしいです。斎田君は近来音信絶ゆ。」

（六月一六日、大阪府長野町国立病院より大阪府盾津町、福地邦樹宛はがき）

一人歩きができるやうになつた伊東は、今度は大声をあげて喚き散らしたい欲求に悩まされてゐる。肉体恢復の順序なのであらう。歩くことは生存の実証だ。それと共に大声をだしうることも実証になる。伊東の心に傷いた肺細胞の耐久力を試めしたい気持が湧くことと自体が、女体を思ふことと同様に、恢復の兆をあかしてゐる。カッカと照る炎熱の真夏を待望してゐる気持にも、その兆が如実に現れている。

末尾に斎田氏が音信を断つた事実を伝へてゐる。『舞踏』三月号に「病院から」を渡してからである。散文『花』に訪門するつど服装を変へてゐる斎田氏の記述があつたが、その酒蓉者といつた伊東の批判が彼を永年の師匠から叛き去らせたのである。

七月中旬、伊東は女流詩人の織田喜久子さんに次の書簡を送つてゐる。

「お心のこもつたお手紙まことにうれしく存じました。忘れるどころではございません。先年いただいたおいしい「おかき」の味、ありありと肝に銘じてをります。改めて厚くお礼申上げます。私は臥床しましてから丁度二年になります。ずゐぶん激しい症状にて高熱うちつづき、今日迄三度程重態に陥入り、そのつどパス、マイシン等で持ち直しました。然し充分すつきりはせず衰弱つづき、仰臥のまま絶対安静をつづけて参りましたが、今年の三月、又工合わるくなり、あまり期待もなく三度目のパス療法を試みましたら、今度はどういふわけやら、オヤオヤと驚くばかりに奏效し、熱全く去り、自覚症状もなくなり　肥えて参りまして、六月四日、殆ど二年ぶりに床を離れて自分の足で立ち窓のところに参りました。二年ぶりに眺め入る外景は初夏の草が茫々と野原に茂り、その間を小さい犬が一散に、わけもなく走り廻つてをりました。それが生命のかたまりのやうに見えました。茫然と立つてゐると涙がにじみ出るやうでした。

よくなる見込みのなかつた私の急調な回復ぶりに医者も驚き、自分も呆れてゐます。この秋手術が出来るかもしれないと医者は申します。私は全くもう諦めて出来るだけ心安らかに死ぬことの工夫をして参りましたのに、昨今は、どうやら生きられるかもしれないといふ一るの希望が見えて、かへつて、とまどつてゐます。手術といふのが、御存知の通り危険な大手術ゆゑ、どうなるかはわかりませんが、このごろは専らそれを目標に養生してゐます。このごろは病苦も殆どなく、室内は自由にあるけますし、全く楽になりました。承りますれば母上様やお友達ご病気とのこと、お察し申上げます。母上様にパスがきけば大へん楽なのになあ、と残念です。しづかにしてゐることがこの病気では一番大切らしい

です。御安静を祈ります。このごろの私の快調も結局二年間の安静のいい結果らしいです。

二年間の仰臥、痛苦の生活の間に、まさかへしくりかへした想ひ、感傷、幻覚、追憶。わが身が哀れな程です。苦しい生涯の最後が、又こんなに苦しいものであることが不当なことのやうに思はれます。

御好意に甘えて愚痴になりました。どうぞ母上様ご大切に祈ります。（この病院にも老人の方がかなりをられます。）

いつのまにか手術をすまし、おつとめ先に「織田さん」といつて、お訪ねして笑ひ合つたらどんなにうれしいだらうと空想します。

七月十二日　伊東静雄

織田喜久子様

仰けになつて書く文字、失礼しました。

（七月一二日、大阪府長野町国立病院より大阪市北区梅田阪急電車宣伝課、織田喜久子宛封書）

伊東が末尾で「好意に甘えて愚痴になつた」と詫びてゐるほど、仰向けになつて書いたとしてはまことに懇篤を極めた書簡である。

田中光子さんいつか散文に走り、腹ふくるゝものの口述筆記者であつた斎田昭吉氏もまた去り、心辺とみに寂寥を加へた折に登場した織田喜久子さんだつただけに、伊東はよほどうれしかつたのである。

伊東は窓辺に佇んで茫々たる夏野を一散に駈け廻る犬を生命のかたまりかのやうに眺めてゐる。その意味もなく懸命な運動につい泪ぐんでさへゐる。生徒達の朝礼後の体操に泪ぐんだあの眼である。あれは秩序の壮厳な美しさに感動を押へられなかつたからだ。今はその場合と違ひ、己を抜けでた生命のかたまりとして哀惜する思ひが溢れたのであらう。その生命のかたまりを再び肉体につなぎとめるために伊東は手術を決意してゐる。病巣を切除してピンポン球を充填する治療法が当時はやりだしてゐたからである。伊東は療友である高岸青年とこの唯一の治療法である大手術のことを幾度も語り合つたことがあつた。積極的な高岸青年の手術説に対し彼より二倍の年長である伊東は弱気で、よく冗談に紛らした。

「その内呪文を唱へただけで空洞をペチャンコにするやうな宗教をあみ出すから待つてゐなさい。然し、いくら呪文だけでも百五十萬からゐる肺病人をなほさうと思へば何年かかる。然しあなたは特別に第一番においのりをして上げます」

と、伊東は言つて高岸青年とよく笑ひ合つた。その手術論者で模範療養者であつた高岸青年は手本でも示すやうに五月中旬に市立大学の病院で手術を敢行した。が、どうしたことか彼は期待に裏切られて手術後に死んでいつたのである。

この二ヶ月前の事件は伊東によほどのショックを與へたらしい。伊東の最後の散文となつた「療友高岸氏追悼文」で「なぜ、あんなにいい青年が惨酷な病気であんなに永く苦しまねばならなかつたのか。そして、無理に死に掠し去られねばならなかつたのか。私には分らない」と結語してゐる。この無名の青年の生涯と運命に寄せる伊東の抗議は、また自らの生涯と運命に対しても烈々と燃えてゐる。「二年間の仰臥、痛苦の生活の間に、まさかへしくりかへした想ひ、感傷、幻覚、追憶。わが身が哀れなほどです。苦しい生涯の最後が、又こんなに苦しいものであることが不当なことのやうに思はれます」。

伊東はこの運命に反抗するために、高岸青年が失敗した手術を敢行する気になつたのかもしれない。

島尾敏雄著
出発は遂に訪れず
四〇〇円
新潮社

西鶴輪講會と伊東

野間光辰

本誌創刊号以来連載中の、小高根さん執筆にかかる「書簡から見た伊東静雄」を読むことは、この九年間における私の毎月の楽しみであつた。

私は伊東の四年後輩であり、後に記すやうに一緒に西鶴や鬼貫を読んだ因縁もあつて、特に関心を持つて毎号愛読してゐたのかも知れないが、しかしさうした私的な因縁や感情を離れていつても、「書簡から見た伊東静雄」は、近来稀に見るすぐれた伝記研究であると思ふ。そしてこれが完結の暁には、わが近代文学の研究に寄与するところ多大なることを、私は信じて疑はないのである。

伊東は昭和四年三月に京都帝国大学文学部国文学科を卒業した。

卒業論文の題目は記録を調べてみないと判らないが、その評点は当時としては最高点に属する八二点で、卒業順位二九人中三番の成績であつた。

資料として伊東の成績カードを紹介する。

伊東が晩年まで深く尊敬師事してゐた頴原退蔵先生は、昭和三年四月京都府立医科大学予科教授から転じて、京都帝国大学文学部講師として国文学特殊講義に「俳諧史—芭蕉以後」を講ぜられてゐる。特殊講義は二回生の時に受講することを原則とし、万一二回生の時に受講出来なかつた場合には、三回生の時に受講して試験を受けることになつてゐる。伊東の場合、二回生の時の国文学特殊講義は藤井乙男先生と沢潟先生のお二人であるから、その評点七九・二は二つの試験の成績であらう。

だから伊東は、新講師頴原先生の「俳諧史」の講義は試験を受ける必要はなかつた筈だと思ふが、しかし講義だけは聴いてゐたに相違ない。伊東が卒業論文に俳諧を取上げたのは、藤井先生の「猿蓑」・「炭俵」の特殊講義に出席したことも最初の因縁であつたらうが、三回生になつていよいよ論文の題目を決めなければならないといふ時に、強く伊東に影響したのは頴原講師の「俳諧史」の講義ではなかつたかと思ふ。論文試問の評点八二は勿論時の主任教授の国語学の吉沢義則先生の判定であるが、それには立合の頴原講師の意見も十分加味せられてゐたに相違ないと思ふ。

伊東が二回生であつた昭和三年の八月に藤井先生は停年で退官せられた。藤井先生の跡は、かねてから予定せられてゐた通り、頴原先生が講師として近世文学を担当せられ、やがて昭和六年三月助教授に昇任せられた。西鶴輪講会は、実は停年退官せられた藤井先生を慕ふ門下生が、今まで通り先生のお話を聴

	普通	特殊	演習	論文	副科目	
文学概論	85				独乙語	77.7
国語学	72.3	70.2	65		教育学	78
国文学	82.6	79.2	70	82		
支那文学	79					
独乙文学	71					
言語学	80				平均	77.7

（註）国語学—普通講義・吉沢教授「和歌の用語」（大正十五年度）、特殊講義・吉沢教授「片仮名の研究」、沢潟助教授「萬葉集に就いて」（昭和二年度）、演習・吉沢教授「日本文法」（昭和三年度）。国語学—普通講義・藤井教授「近世国文学史」（大正十五年度）、特殊講義・藤井教授「猿蓑炭俵の研究」、沢潟助教授「古事記に就いて」（昭和二年度）、演習・藤井教授「源氏物語（浮舟）」（昭和三年度）。

問しかつ先生をお慰めしたいといふ趣旨で、昭和三年十月から毎月一回、田中大堰町の先生のお宅で開かれることになつたのである。そのメムバーは頴原先生を初めとして、先輩の横沢憲治（大正十五卒）・塩沢憲治（昭和三卒）、伊東と同期の奥里将建・藤木俊一（昭和四卒）、伊東の後輩大坪国益・千原輝一（昭和五卒）、外に樋口功氏。伊藤弘・井沢某・末宗卯（伊藤・井沢の二人は卒業生名簿にない。末宗は京都高等女学校教諭）といふ顔触れで、最初に取上げたのは「好色二代男」であつた。輪講会の記録が散佚したので残念であるが、恐らく伊東は、卒業してから頴原先生に勧められて参加したのではないかと思ふ。小髙根さんが引用せられた昭和四年四月二十三日付頴原先生宛ての書簡に、「先生たびたびの御葉書　有難うございました。日曜日には輪講に出席しようと思つて、京に出かけて参りまして」云々とあるからである。この時府立一中教諭になつてゐた藤木俊一に逢つて、頴原先生が扁桃腺を悪くして欠席らしいと聞いて、「先生が御出席下さるのでなければ、何だか手持ぶさたで、しつくりしない様に」思つて、輪講会には出なかつたと書いてゐる。私の手許にある記録に、四月廿一日（第三日曜）藤井先生のお宅で。

「五人女」巻五の全部

出席者　藤井先生

塩沢・横沢・伊藤弘・奥里・大坪・末宗・千原合せて八人、

とあるのが、その時のことである。

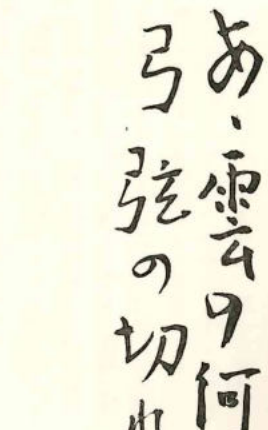
しかしその次の輪講会には、伊東も出席してゐる。そして多分それが最初の参加ではなかつたかと思ふ。

五月廿五日第四（日曜）藤井先生のお宅で。

「俗つれづれ」巻一の全部

出席者　藤井・樋口・頴原三先生

塩沢・伊東静・伊藤弘・奥里・井沢・千原・末宗・横沢・筏・三光・武智・平田・山口・木之下・馬場、合せて十八人。人数が多くなつたので、今度から楽友会館でやる。会員組織にして月十銭の会費をとる。アイウエオ順で読



む人を廻すといふことにきまる。

ところが、伊東はその後ずつと欠席して、二度目に出たのは十月廿六日（第四土曜）である。思ふにこれは、会場を楽友会館に移したため、輪講日を今までの第三乃至第四の日曜日から土曜日に変更したので、校務の都合で伊東は大阪からはるばる参会することが出来なくなつたのであらう。

私が京都帝国大学に入学したのは、昭和五年四月である。そして頴原先生に勧められて西鶴輪講会に出席したのは、その年の九月か十月のことであつたと記憶してゐる。まだ一回生であつたが、下宿が藤井先生のお宅の近所であり、藤井先生と頴原先生との御都合を窺つて会日の決定や案内状の印刷発送に便利だからといふので、早速私は世話役にさせられてしまつた。だからその時以後、在学中は

勿論卒業後も引続いて、藤井先生が逝去せられ、跡を追うやうにして頴原先生も亡くなられるまで、会の名前は西鶴輪講会から江戸文学研究会・近世文学研究会と変つたが、ずつと私が世話役になつてゐたので、大抵のことは記憶してゐるつもりであるが、度々の引越しで会の記録を失つてしまつたことは誠に申訳がない次第である。伊東の昭和五年十月二十三日付宮本新治宛ての書簡によると、伊東はこの月の西鶴輪講会に出る予定であつたことが知られ、事実出席したのかも知れないが、私の記憶には全く残つてゐない。その後も伊東は出席したであらうが、それも極めてたまで、出席してもただ黙つて煙草を吹かしてゐるだけであつたと記憶する。それは伊東のいつもの姿勢であつて、昭和十二年の夏、雑誌「文芸文化」のために、杉浦正一郎・栗山理一・池田勉・中島栄次郎等と鬼貫の「七くるま」を輪読した時にもさうであつた。ただ輪読が終つて阿倍野橋あたりのビヤホールにくりこんでジョッキを傾ける段になると、おもむろに饒舌になるのであつた。

西鶴輪講会における伊東の乏しい記憶の中で、印象極めて鮮かに残つてゐるのは、昭和六年十二月十三日に熊野神社前の料亭「森まず」で開かれた忘年会の日のことである。毎年歳末には、藤井先生をお慰めするために、また一年間の御指導を感謝する意味で忘年会を開くのであるが、その時には不断出席出来なかつた会員も努めて出席して、久しぶりに藤井先生のお話を聞くことを何よりの楽しみにしてゐた。この日は少し寒く、その上場所が市電の交叉点前で騒々しいこと甚しく、いつもの藤井先生と違つてやや御機嫌が悪かつたやうで、世話役の私が急に思いついて、有り合はせの半紙に何か一筆をとお願に廻つた時にも、ひどく面倒くささうにして居られた。そしてみんなのなぐり書が終つてから表題をお願したら、無造作に「騒音」と書きつけて放り出すやうにせられたと覚えてゐる。この時例によつて黙々として酒を飲んでゐた伊東は、私の求めに応じて次の一句を書いてくれた。

あゝ雲の何処かで
弓弦の切れる音がする　　伊東静

伊東の「蜻蛉」と題する詩（「夏花」所収）の第三聯に、

この問ひに誰か答へむ。弓弦断たれし空
よ見よ。
陽差のなかに立ち来つつ
振舞ひ著し蜻蛉のむれ。

とある。この詩はいつ頃の作か知らないが、「弓弦断たれし空」の発想はすでにこの「騒音」の寄せ書の句に見えてゐて、「蜻蛉」の一聯のよき注解たることを失はない。伊東は忘年会の騒音の中で、黙つて盃を挙げながら、自分の詩情をおもむろに発酵させてゐたのであらう。

附記　「騒音」の寄せ書の藤井先生・加藤順三氏・頴原退蔵先生の発句は、すでに小髙根さんに報じたことがあるが、樋口功氏の「寄り木や親をぬくめの友雀」の句は、藤井先生を慕つて集まつた人々の気持をよくあらはしてゐる。三光廻（昭和七卒）の「新婿と隣り合せや年の暮」の句は、三光と同期の中西武夫（もと宝塚歌劇学校の作者兼演出家）をひやかした作である。伊東は翌昭和七年四月三日に結婚した。

（昭和三九・四、二）

学生時代の伊東

堀内　薫

伊東を初めて知ったのは、大正十五年（昭和元年）四月、京都帝国大学の国文科の教室でであった。二人は一番前で机を並べていた。どうして親しくなったのかわからない。二人ともアカデミックとは異質だったのだろうか

。とにかく、服装のきたならしい点では似ていた。伊東は木綿のかすり、よれよれの袴、羽織にむな紐があったのかなかったのか……。それでも角帽はかぶっていた。私はルンペンのかぶる黒い中折帽の底の伸びてしまったのをすっぽりかぶっていた。また、はにかみやで、しかも不遜であるところも似ていた。それだから世間と交らない。私は風来坊で、世間の事を雲煙過眼視していたが、伊東は、穴から目だけ出して外をうかがう鼠のようであった。藤木俊一と三人がグループであった。私は他の学友を知らなかったが、伊東は折にふれて教えてくれた。「あれがアララギの五味保義だ。」君子然とした五味は伊東とは肌が合わなかったようである。同じ教室にいた石井庄司、佐伯梅友は一年上であり、遠藤基嘉は一年下であった。これら有能の士は先生を中心とした研究会に出席していたようであるが、二人ともそんなものには近よらなかった、私はそんなものの存在も知らなかった。

無事平穏の年月がつづいて特記することもないが、昭和三年、御大礼記念、児童映画脚本募集に伊東が応募し一等賞を得た。旅の途中、久しぶりに学校へ顔を出したら伊東は嬉しそうにその話をした。「では行ってきなさいと、言つて投函した」「一千円もらったが、悪銭身につかずで、すっかりなくなった。」などほほえみつづけて話してくれた。

机を並べて先生の来られるのを待っているとき、つれづれにまかせて自作の和歌を書いてくれた。ある時、自分の下宿の庭の枇杷を詠んだ歌を次々と思い出しては書いた。

うつそみの蜂はたまたますがりつつつひにわぶしき枇杷の花なり

伊東は蜂なのであろうか、枇杷の花なのだろうか。枇杷の根元に小便する歌もあったように思う。伊東の性格そのままに、ねばりけがあってのびのびしていて芯の堅い歌であった。学校だけの交りであったが一度だけその下宿へ行ったことがある。なんでも聖護院の近くであった。伊東の短身を入れるのにふさわしい三畳の間で、これはまあまあと驚くような所であった。それでも壁には

螢を谿に放つ神の工

という千家元麿の色紙がかざってあった。その他の一切は忘れてしまった。それから一度、新京極をぶらついたことがある。何という家号だったが三階建ての牛肉すき焼の大衆料理屋があったが、「からだが弱ると、ここへ来て力をつけるのだ。」と言った。

大学三年になると、私は大半旅で過したので伊東と会う機会が少かった。春から夏へは布団を背負って山陰地方を転々とした。秋から冬へは伊豆半島を回り、遂に大島へ渡り、民家にいすわってしまった。そして、二月か三月か大学最後の授業の日に顔を出した。苦労の中に育つた伊東は、私の気ずい気ままな生き方を賛美してくれた。卒業論文は伊豆の旅の途中で書いた。一冊の参考書もなく書きつづった。芸阿弥、能阿弥等の年代を間違えてあって、この杜撰さを、審査教官の頴原退蔵先生から一つ一つ指摘して叱られた。もう一人の新村出先生は、文献寄せ集めの他の卒論と違って独創的であるとほめてもらい穴へはいる思いがした。ところが伊東はさにあらず。貧窮の中から大金を出して子規全集を買い、その他多くの文献を渉猟し、「子規の俳論」を作製した。子規が今までの小主観俳句の月並性を排して客観写生に立ったのは俳句革新の第一段階としては正しくもあり、また効果的でもあった。しかし、真の改革は、写生より更に進んで、直観により、自然と自己とが合一した主観的象徴俳句を樹立するにありとした。これは今日では常識的な見解であるが、当時としては卓見で、学生にして、かかる芸術の深奥にメスを入れたことは破天荒のことであった。担当の頴原退蔵先生が激賞し卒論第一位としたのも当然のことである。

伊東静雄詩碑を尋ぬ

林富士馬

つくし路の春は早かりき
東京はいまだ肌寒かりしに
麦の穂先鋭く　菜の花は黄に
はや　さくらの花も咲きたり
その花の下に見出しぬ
「郷土諫早が生める詩人　伊東静雄詩碑」
と。
げにも
　さまざまのこと思い出す桜哉　ばせを
終戦後　遂に逢い得ざりし人に
語りたきことも多かりしかど
いまは髪白く老いたる旅人の一人として
きみのうたの前にただずむなり

伊東から処女詩集「わがひとに与ふる哀歌」を贈ってもらった。それは精密な精神構造を持つ、林檎のかおりのする詩集であった。私はそれをもらって、自分もいつか句集か歌集かが出来たら、贈って喜んでもらおうと思った。ところが、今だに一冊もなく、遂にもらい放しになってしまった。青春の時の友に勝る宝はこの世にない。その詩集の中に

わが死せん美しき日のために
連嶺の夢想よ！　汝が白雪を
消さずあれ

高潔の詩人は、私たちの心の中の雪嶺である。

（昭和39・4・7）

映画「美しき朋輩たち」

小高根二郎

伊東静雄に関する調査のなかで困難な問題がいくつかあつたが、そのなかで一番苦労をしたのは京大三回生時代の懸賞当選作「美しき朋輩たち」の発見であつた。懸賞の主催者である大阪三越を介して東京三越の倉庫まで探して貰つたがつひにみつからなかつた。その結果……発見できたのは「大阪の三越」（昭和三年十一月号）所載の「作者より」という伊東の当選感想だけで、その文中に主人公は煙突屋の三吉君であることが紹介されてゐた。しかしその三吉君がどんなストーリイで劇を演ずるのかかいもく見当がつかなかつた。

伊東は当選決定後に撮影打合会で蒲田に松竹キネマを訪問したが、そのさいに牛原虚彦監督、俳優鈴木伝明と記念写真をとつてゐる。牛原氏に訊ねたら調査のてがかりでもつかめるかもしれぬと照会したところ、「童話「美しき朋輩達」のこと、どう考えて見ましても小生の作品にはないように思われます。念のため小生の作品をしらべて見ましたが、その中にも思いあたるものがございません。」（昭和三五年六月一九日附小高根宛牛原氏書簡）という返事であつた。

大学時代の文友宮本新治氏の記憶によると映画「美しき朋輩たち」の監督は清水宏氏であつた由である。念のため清水氏に照会したところ「他の人の作品を私の名で出したことも二三ありますのでその中にでもあるのでせうか。又、子供の映画というとよく私のものと感ちがいされることもありますので、貴方のお友だちの思ひ違ではないかとも考えますが……」（昭和三五年七月一日附小高根宛清水氏書簡）ということであつた。

以上の調査は人文書院から『伊東静雄全集』を刊行することになつて、僕の最後の探索の努力であつた。

昨年の八月新潮社から拙論上梓のおすゝめをうけ同社の片岡久氏に未発見の「美しき朋輩たち」のことを相談したところ、『週間新潮』「掲示板」欄を利用して最後の探索をしてみては……という示唆をいたゞいた。半信半疑の思ひで照会をお願ひしたところ昭和三十八年十一月十一日号の掲示板欄で御園京平氏から『キネマ旬報』（昭和三年十二月一日号）に掲載されてゐる旨返事をいたゞいた。折よく上京の機があつて築地の松竹本社附属大谷図書館で同誌を閲覧、その大要を知ることができたのである。

……

美しき朋輩たち（全四巻）松竹蒲田映画

原作者・壁　静
脚色者・水島あやめ
監督者・清水宏
撮影者・越智健次

―主要役割―

三吉・小藤田正一
英一・久良形真
稔・半田日出丸
雄助・上島忠雄
ゆり江・藤田陽子
若き教師・日守新一
友成小父さん・石山龍嗣
星の使・髙尾光子
夢の門の踊り子・藤田房子

〔解説〕――清水宏氏の「山彦」に次ぐ作品で、大阪毎日新聞社の懸賞児童映画脚本に当選したものを水島あやめ女史が脚色して映画化したものである。

〔略筋〕――三吉はいつも暇さへあれば父の手伝ひをして煙突掃除に行つたが、ある日曜日、彼は級友稔の家へ仕事に行つたところ、恰も遊びに来てゐた英一とキャッチボールをしてゐた稔の球が外れて三吉の足は傷いた。その為め三吉はその儘稔の家で静養することゝなつた。そして一週間後殆全快した頃、彼は見舞に来て呉れた親友の雄助と、稔や英一やゆりえなどと仲よくお菓子を喰べてゐた。其処へ友成小父さんが面白い首振人形を持つて見舞に来た。友成小父さんといふのはある祭りの日、三吉と雄吉は神輿の人波にもまれてもがいてゐる内、ふと一人の盲目の少年が人波に押されて困つてゐるのを見つけ助ける術なく困つてゐたところを救つてくれた巡査なのであつた。それ以来三吉と雄吉はすつかり仲よしになつたが稔も英一もゆりえも小父さんが大好になつて了つた。やがて三吉の傷も治り算術の試験の日が来た。彼は学校を休んだので稔と一緒に勉強したのであつたが試験問題は皆彼の知らないものばかりだつた。それを気の毒に思つた英一が紙片に答案を書いて三吉に渡さうとしたが折悪しく先生の目に入つた。先生はだまつてその紙片を拾ひ、図書庫の後へ来給へと英一に云つた。図書庫の後にはコスモスが一杯咲いてゐた。英一は

先生に心から詫びた。先生は優しく「英一君今日のこの花畠の事を一生忘れないでゐ給へ」と云つて許してくれた。心配してゐた三吉達は英一の許されたのを大層喜んだ、そしてその夜英一は夢を見た。果してどんな夢だつたらうか。

……

水島女史は伊東の原文をどう脚色したかしるよしもないが、伊東静雄を壁静などというひどい筆名に改変したほどの変化はなかつたらうと想像する。しかし、映画ができたとき感想を同郷の同志社高商生市川一郎氏が訊ねると「自分の考へていたものとはすつかり違つてしまつた。他人のものを見るやうだ……と、世にも悲しい顔をしていた」（「河」昭和二八年六月号、市川一郎―伊東さん）というから相当原作と変つてゐたのかもしれない。それにしても大変な冒瀆が行はれたものである。監督の清水宏氏が自分の三番目の作品でありながら、原作・伊東静雄という照会では思ひ出せなかつたのは当然かもしれない。

こゝで注目すべきは主要役割で久良形真が演ずる英一である。この英一は伊東の長兄の名だからである。長兄は昭和三年九月二十七日に三十五の若さで死んでゐるから、「美しき朋輩たち」の当選が大毎に報じられた十月十日の二週間前に死亡したことになる。伊東は夏休に稿を進めながら余命いくばくもない長兄英一の運命を知つて、童話の中の役割にその名を起用して永遠の生を与へようと試みたのだらう。さういへば英一は物語の最後で、夢の門の踊り子・藤田房子の演ずる舞踏に誘はれて星の使・髙尾光子と天国に旅立つやうである。「美しき朋輩たち」の題さながら「美しき兄弟愛」といはねばならない。

尚藤田陽子の演ずる女友達・ゆり江という名は酒井百合子さんの名を記念するためにつけたであらうことは疑ふ余地がない。

伊東静雄と酒

富士正晴

伊東静雄の酒の飲みっぷりを、肩を落したヤクザのようなと批評した人がたしか有ったと思うが、これは日本酒の飲み方にそんな場合があったのかも知れない。大体がくたびれ屋みたいなところがあったから、肩をあげたり、肩を落したり、体をまげたり、よく形がかわる方だった。

ビールをビヤホールでのむのには一頃よくつき合ったが、酔えば（酔わなくてもだが）短歌を朗詠したり、詩を朗詠したりするのが好きといったところがあり、と同時に女の子に野卑な冗談をいうのも好きだったようだ。しかし、伊東静雄はことに相手によつてやり口をかえるところもあったから、女の話に一向につりこまれないわたしへのイヤガラセとして女給仕に変なことを言ったのかも知れないとも思っている。

酒をのんでいて、ハーッと深い溜息をつくのは癖だったが、その癖は林富士馬にそっくり伝わっているようだ。

飯の食いざま、酒の飲みざまについては、伊東静雄本人がはなはだうるさくて、人のについて色々評論するのだが、評価の仕方がその時その時でちがい、萩原朔太郎の飯粒をポロポロこぼす食い方に文句をつけるかと思うと、保田与重郎の立てひざして肩を落して食う不行儀な食い方を高く評価するといった有様だった。酒ののみ方としては汚い風体の陽気な男が腹まきに札束をずしりと入れて、女給仕を冗談でキャッキャッいわせながら、傍若無人にのむといったあたりの形がまことに

亀井勝一郎著
中世の生死と宗教観　四三〇円
文芸春秋新社

羨しかったらしいが、本人はとてもその仁ではなかった。又、東京下りの円馬がひっそりしたおでん屋で黙々として飲んでいるその形にもあこがれていたようであったが、これも本人はとてもそういう形にはなれそうになかった。

薄暗い西日のさす狭い室で、どこかに蚊の音がしているようなうつとしさの底に、じつとたえながら手酌で飲んでいるというような形が何か伊東静雄に一番似合うような気がするが、そういう場合に行き当った記憶がない。記憶がないといえば、彼がウィスキーや、ジンや、カクテルといった洋酒をのんでいるのを見たこともない気がする。

記憶に残っているのはビヤホールでビール、それだけだ。これはわたしの記憶に欠落があるためらしい。

彼が酒に酔っ払って乱暴したというようなことは耳目したことはない。心斉橋の歩道に坐りこんで、通行の婦人に、「ちょつと、ねえちゃん、ねえちゃん」と呼びかけてわたしを閉口させたことが一回ある。

また、めそめそした愚痴をきいたこともない。結局伊東静雄の酒はわたしの体験内では、気嫌の良い酒で、時に歌いたくなり、時にちょつとだけ大言壮語したくなるといった程度のものであった気がしている。サーヴィス精神はちゃんとあった。

しかし、他の人との場合どのようであったのかは知らない。

倦んだ病人

織田 喜久子

「……二年ぶりに眺め入る外景は初夏の草が茫々と野原に茂り、その間を小さい犬が一散に、わけもなく走り廻ってをりました。それが生命のかたまりのやうに見えました。茫然と立ってゐると涙がにじみ出るようでした。

よくなる見込みのなかった私の、急調な回復ぶりに医者も驚き、自分も呆れてゐます。この秋に手術が出来るかもしれないと医者は申します。私は全くもう諦めて出来るだけ心安らかに死ぬことの工夫をして参りましたのに、昨今は、どうやら生きられるかもしれないという一るの希望が見えて、かへって、とまどってゐます。……」

伊東さんが長野の病院から下さった二十六年七月十二日づけの手紙の一部である。そして、伊東さんといえばすぐ私の目の前に浮かぶのは、この古びた病棟の窓にもたれて、じっと外を見つめておられる伊東さんだ—澄んだ目に、ふかい微笑をたたえた上半身。現実に見たこの伊東さんは、私がお見舞して帰っていくとき、病室の窓から見送って下さった姿なのだが、後になると、それが冒頭の手紙に書かれた伊東さんになって、私の追憶のなかで見分けがつかない。

その日は、バスがきいて危機を脱したと、伊東さんは顔色もよく、元気で、鬚もそり、楽しそうにいろいろな話をされた。一つ一つは記憶がうすれたが（書留めておかなかった怠慢が悔まれる）、その印象は漠然と、しかも深い痛みとして私の胸に残っている。「歯がボロボロなんですよ」とか、「詩を書かなくてもよくなったので、ホッとしています」というようなことを、にこにこしながら言われるのだ。前から一度ききたいと思っていたこと、私たち一時代あとの者には伝説ともいうべき、あの萩原朔太郎との出合いのことも伺ってみた。ラブレターともいえるような熱情的な手紙を伊東さんに送った朔太郎は、透谷賞のことでも反対者と烈しくやり合う場面があったらしい。

この日のことは、伊東静雄全集の日記の部に「中食前〇〇さん来る。一緒に食事し二時間ばかり居る。有難し。……」とあって、そのとき持参した、私自身は忘れている細々

したものの名が書留められていて、私には感慨ふかい。間もなくまた病状が悪化され、一進一退が続いて二度目に伺ったのは翌年一月と思う。その日のはっきりした記憶はなく、ただ、もうだめだろうという心の重さと、それからの、今か今かと悪いしらせを待った不安ばかりが思い出される。そして、恐れていたものが、遂にやってきたのだ。奥さんに伺うと、伊東さんは最後まで「生きたい」と言っておられたという。

異常乾燥注意報

吉本 青司

早春の午後
山火事を見ていた
野火を見るとみように興奮するものだ
ところがここに
対岸の火災視できない事体が起った
生徒の放火だというのである
話はこうだ

学年末試験を終えた数人の生徒たちが
地獄谷の洞窟探検に出かけ
持参したランプやろうそくに点火して
探検隊よろしく洞内を歩きまわり
やがて山腹に引上げてきた
渇きを覚えた少年のひとりは
水をもとめて谷間にくだったが
すっかり泉は涸れていた
落胆する少年の目に
去年のカヤがあまりに美しかった
いたずらを思いついたのはその時だ
ポケットのマッチが少年の指先ではじけ
カヤむらは火の花と化した
もみ消そうとしたが遅く
奮戦する少年たちをしりめに
火はたちまち雑木林に燃え移った
附近の大人たちや消防団員もかけつけ
木を切り草を刈ろうとしたが追いつかず
火は風にのって
二十ヘクタールの山林を焼きはらった

勝ちほこった少年の火は
夜に入っても消えず
たかく早春の星と競った

翌日　ぼくは教育長あてに
山林火災始末書を書いた

「詩と直実」追悼号に私が書かせてもらった拙い作品の初めの部分を、おこがましいが抜すいさせて頂く。

もと兵舎だったという、野なかの
咳のからむ病棟で
四年間、あなたは暗い時間に耐え
死とたたかい続けた
もう一度生きて、そこから出ていくため
に
息をひきとる三十分前
あなたはとうとう諦めて
胸に手を組んだという
骨はそれから帰っていった
生まれた町へ

（後略）

この機会に、伊東さんが入院されるまでに、三—四度お目にかかった時の、心に残っていることを付記させて頂く。

㈠　私が勤めていた電鉄会社の月刊誌に詩を頂こうと住吉中学にお訪ねした時のこと。いまちょつと作品ができない、というようなことで私もあっさりあきらめて、そのあと、生田花朝さんのお宅を探していこうという私を、途中まで送って下さった。一しょに歩きながら伊東さんが「僕はこんな野人ですが、

僕の書く詩は貴族的らしいですね」と言われた。私は、えらい人が、こんな心の中の咳きのようなことを、それも私のような後輩（この時が多分、初対面だったと思う）に言われたのを全く奇異な感じできいた。

㈡ 「反響」の出版記念会。どこかのレストランで、いろんな人がきておられた。私は指名されて「わがひとに与うる哀歌」を暗誦した。誰だかが伊東さんに、詩人の本懐ですね、というようなことを言われ、伊東さんが黙ってにっこりうなずいておられたのを覚えている。その席で、庄野潤三さんが、僕が、伊東先生を、先生と呼ぶのは、他の連中がいいかげんに人のことを先生というのとは訳がちがう」という意味のことを強い調子で言われたのが腹が立って、それからもずっと腹を立ててきた。

㈢ そのころ道頓堀の松竹座で毎土曜日の夜だったか映画の合間に詩の朗読会をやっており、近畿詩人会のメンバーも、岩田直治さんなどの専門家にまじって面白半分マイクに向かったりした。安西冬衛さんなど最も熱心な方で、小野さんや、会の世話役をしておられた井上靖さんなどもちょいちょい見えていた。そこへ、どういう風の吹き回しか、伊東さんが、一度見えたことがある。何故だったか大分荒れておられ、私にも「あなたはこんな処へきて何が面白いのですか。そんな苦労のない卵みたいな顔して（卵みたいな、といわれたのは後にも先にもこの時だけだが）詩は書けませんよ」と言われ、少しこわかったように覚えている。こういう伊東さんに会ったのは一度きりで、あとは、いつも、おだやかで暖かだった。

㈣ 上本町九丁目にあった、前の市立文化会館だったか。詩の講座があって、伊東さんの時間に、終りごろ一寸覗かせて頂いたことがある。丁度、文語調の詩と口語詩との違いについて話しておられ、「口語の詩は調子は高くないが、太郎さん、花子さん、と一人々々の頭を撫でているような親しさがある」というようなことを、中学校の先生らしい、やさしい手馴れた調子で語っておられた姿が目に残っている。

それにつけても伊東さんの絶唱となった「倦んだ病人」のすごいとしか言いようのない境地はどうだろう。実際に直面した死を、澄んだ目と平易に、あたたかな心で、完ぺきに描き出しておられる。真の詩人でなければ出来ぬことだ。

一〇〇号を迎えられた小高根さんのお仕事に心からの敬意を表すると共に、その労作「詩人、その生涯と運命」が一本にまとめられるのを待たせて頂く。

伊東静雄の晩年の詩想

福地邦樹

伊東先生の晩年、即ち病床につかれてからの数年間にどういう詩を考えておられたか、という事は興味ある事であるが、発病後はわずかの詩作しか残しておられないので、その傾向を知るのはむずかしい。そこで私がお聞きした範囲での病床中の御言葉などから推察出来る一つの特質を指摘したい。

昭和二三年夏の発病より後に発表された作品は次のとおりである。

昭和23　夏より肺浸潤にかかる
昭和23・12　「詩学」十二月号に「夜の停留所で」同じ頃と推定される「無題」
昭和24・6　「毎日新聞」に「寛恕の季節」
昭和24・7　「文芸」七月号に「雷とひよっ子」
昭和24・7　「文芸往来」七月号に「子供の絵」
昭和24・10　国立病院大阪長野分院に入院
昭和28・2　「文芸春秋」二月号「長い療養生活」

昭和28・3　死の直後「大阪毎日新聞」に「倦んだ病人」

以上の七篇は二種類に分けられると思う。「雷とひよっ子」と「子供の絵」の二篇と、それ以外の五篇である。先の二篇には明らかに童話的ないしは童画的発想があると思う。あとの五篇は内省的な視線という点で、初期から通ずる所の発想と思われるが、写生的に、わかりやすくなっているのが特徴であろう。なお、その後者五篇に属するもののうちで「無題」と「長い療養生活」には同じ表現があるのに気付く。「くすんとそとの景色がわらって」（無題）と「クスンと笑った」（長い療養生活）におけるクスンという擬声語である。これは独り静かに心を満足させているような病者の姿勢が感じられるのではなかろうか。

先の二篇の方の童画的な発想は日本に少いものなので、この形式のものがもう数篇でも残っていれば面白かったのにと惜しまれる。童画風とはいえ、これは大人しか理解出来ない詩で、井伏鱒二の詩にも共通のものがある。一時小康を得ておられた頃、シャガールの絵について話され「煙突から熊の飛び出している絵があるでしょう。今度元気になったら、あんな風な楽しい詩が書いてみたいなあ。」とおっしゃった。熊というのは煙の姿を童画風に画いたものと思うが、先般の大がかりなシャガール展にも見当らなかったので、伊東先生はどこで御覧になられたのだろうか。何にしても、あのシャガールの絵の暗い中にも夢と楽しさのあるという点に共鳴する気持を、当時の先生が持っておられたのだと思う。

その他、ついでに付け加えておくと、これも昭和二六年の春だったか、頼まれて詩を作りかけているのだ、との事で、地球が暗い大空の中で静かに廻転すると、大地に春がめぐってきて、草木が芽吹き、花が咲きはじめる、というような内容を楽しそうに話された事があった。詩を書くのは非常に疲れるから、病気には、大変よくないのだ、とも仰言っておられた。これは伊東先生従来の発想であったが、その話をお聞きした時、病人しか考えつけない、新鮮で静謐な発想だと思ったのを覚えている。

詩人、伊東静雄の『全集』が示すもの

浅野楢英

詩人、伊東静雄は、はげしい情熱を内にひめたその強靱な詩精神をくらべものなく美しい日本語に鋭く刻みつけた詩と、緻密な知性、背後の情熱を示す詩論『子規の俳論』と、そのまともな人格を示す散文、日記、書簡とを、われわれに遺して世を去った。

近頃、一部で彼の詩をいろいろむづかしく哲学的に解釈することがなされているらしい。哲学であれ、小説であれ、詩であれ、偉大なもの、優秀なものほど、さまざまに解釈されうる。だから、たとえば、ハイデッガーがヘルダーリンを解釈するような仕方で、伊東静雄を解釈するのも、また一興、それはそれなりに意味のないことでもなかろう。しかし伊東自身が自らの詩をそんな風にみていたかどうか、はなはだあやしい。

伊東静雄の「全集」から一体、われわれはどれだけのことを言うことができるのだろうか。遺されたものはあまり多量のものではない。しかもそのなかで、学問的な文章はただの一篇、『子規の俳論』あるのみである。全集をみても、小高根氏の詳しい評伝をみても、彼が哲学書を読んだという形跡はあまりみあたらぬ。ただ宗教書として、大学生時代に「法然や親鸞の他力の教をありがたく、身にしみておぼえます」といって『歎異抄』をあげている書簡（註二）と、その十年のちに、聖書を読

んでいるという書簡[註二]とがみあたるだけである。しかし聖書のほうは、「信者になったのでは（決して決して）ありません。ただ漫然と、ところどころ何だか思い当りながら勝手によんでいるのです。[註三]」という但書つきである。彼の全集を読んで、哲学的な事柄に関して言えることは、彼の精神が、古今東西の哲学の中心問題とするのと同じような事柄に、まっすぐに対していたということだけである。それを凝視してはなれなかったのである。しかし彼が哲学したとは言えない。彼は哲学者ではなく詩人である。

詩人、伊東静雄の詩精神はどういう精神であったのだろうか。彼は、最初『子規の俳論』において、子規よりも芭蕉、蕪村よりも芭蕉をとるという態度を示し、自分は芸術的主観に基づく写生主義を選ぶということを明らかにした。のちに、そういう態度のヴァリエーションとして、ケストナーの「新即物主義」、つまり、「事物に即し、明澄な鏡での様に、この紛雑した世界に対し、それを透徹しよう」という主義を参考にしつゝ彼は万葉集の素朴さよりも、古今集の反省的意識的な表現に学び、自らの詩精神に日本人特有の「はにかみ勝な譬喩的精神」をとるのだと言い、そういう精神の表現として、「静かなクセニエ」をあげている。しかし、彼が第一にその前に脱帽するのは、リルケの「形象の本（ブーク・デル・ビルデル）」に示された「絶妙な譬喩的精神」である。要するに彼がここで言いたいのは、その「絶妙な譬喩的精神」といわれるものを自分のものにし、それを詩に表現したいということなのだろう。[註三]われわれはその後つぎつぎと出版された伊東の詩集に彼の絶妙な譬喩的精神を観ることができる。

伊東の詩精神をもう一度もとにかえって、探ってみよう。それは『子規の俳論』のなかでいわれる芸術的主観にあたる。芸術的主観は、その対象として観る「一つの物象の全体から「殆ど言明されない様な縹渺たる象徴的具体的な観念（イデア）」を感じとる」ものである。それは、たとえ「全く純粋に客観的な叙景詠物の詩」のなかであっても、「文字としてでなく、一種の色や匂とでも言うべき感触として感ぜられる」ものである。この縹渺たる「観念」「一種の色や匂」というのが、つまり、伊東の詩精神の観る詩的ヴィジョンの母体である。詩精神と詩的ヴィジョンとは、二つにして一つ、一つにして二つ。伊東はさらにそれ以上に、詩精神とは何か、詩的ヴィジョンとは何か、という問を発し、これを論理的に説明しようとはしなかった。誰にだってそんなことはできはしない。これが伊東静雄の詩の原理なのだから。まことに、芭蕉の「内に常に勉めて物に応ずれば其心の色句となる」の、その「心」、その「色」のように、われわれは、ただ「句」を示して、ここに「心」がある、こゝに「色」がある、というほかに、それに触れるすべを知らないのである。

伊東静雄は生涯、『詩の原理』だとか、『詩の本質』だとかいう書物を書きはしなかった。しかし彼は詩の原理、詩の本質を彼の詩において見事に示しているのである。詩の原理とは何か、に悟性的思惟を用いて答えるのではなく、自らの詩業をもって示す、詩という実物をもって示す、これが詩人としての伊東の覚悟、伊東の果断であった。

私は小高根氏によって「果樹園」誌上に紹介された幾人かの人々の批評のなかでは、頴原退蔵博士の批評に一番の共感を抱く。「芭蕉の所謂『句と身と一枚になる』境地」というのがそれだ。これは『詩集・夏花』に寄せられた賛辞だが、これが伊東静雄の達成せんとした境地ではなかろうか。これは「『松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ』という赤冊子（『三冊子』の第二部）が伝える芭蕉の遺語の精神を頴原風に解釈したものであろう

果樹園にて

美堂正義

瀬戸の海の海光が輝く
段々畑の密柑の木々に白い花がつく
その頃は訪づれる人もなく
人声も希れで
陽光のみが明るく照り映えてゐた

むせる甘酸つぱい匂ひと
つゝましやかな花に誘はれて
ときに私は小さな瀬戸を渡つてくる
海浜には蟹が爪をふりふりぶつつかりあ
ひ
空気もソーダ水のやうにさわやかである

忘れられて島に育つ密柑たちは
薫る初夏の風に
白い花たちは顔いつぱいの口で笑ひ出し
葉をよぢらせながら頭を下げ
ひとなつこさうに歓待する

」という清水孝之氏の説にしたがって、その個所をみると次のようである。誠を勤めよ、とあって、「誠を勉むるというは、風雅に古人の心を探り、近くは師の心よく知るべし。其心を知らざれば、たどるに誠のみちなし。其心をしるは、師の詠草の跡を追ひ、よく見知りて則ちわが心のすじ押直し、こゝに赴いて自得するやふに責むる事を、誠をつとむるとは言ふべし。」「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞のありしも、私意をはなれよという事也。……習へといふは、物に入ってその微の顕れて情感ずるや、句と成る所也。」「師の心をわりなく探れば、其色香わが心の匂ひとなりうつる也。詮義せざれば探るにまた私意有り。ぜんぎ穿鑿せむるものは暫(ら)くも私意にはなるるみち有り。唯おこたらず詮義穿鑿すべし。是を専用の事として、名を地ごしらへと言ふ。」師に従い、対象を凝視し、詩おのづから成るまでじっと耐え、言葉を大事にし、自らの詩精神を徹底的にみがきあげてゆく、こう言う態度は伊東の詩業をずっと支えていたものではないだろうか。師とは芭蕉、ヘルダーリン、リルケ。[註四]

明治以後の日本語はそれ以前とは形を変えてきたし、ヨーロッパ諸国語からの翻訳語もできてきた。日本人の心にも西からの自我意識が流れこんできたことだろう。伊東の使う言葉はそういうことの影響も受けているだろう。そして、伊東の「物」のなかには「自我」も含まれている。それに伊東は俳句をやらなかった。しかし私はしきりに伊東の詩をよむと、芭蕉が想えるのである。はじめからそうだった。つまり、伊東についてはその詩と桑原武夫教授の解説しか知らなかった時に。

朔太郎は『詩の原理』のなかで、彼のいう詩的ヴィジョンたる、あの「渺たる象徴的具体的な観念」をプラトンの対話篇に出てくるイデアと混同している。これは伊東が『子規の俳論』に引用しているので諸氏もよくご承知であろう。朔太郎のこの混同は途方もない。彼はソクラテス、プラトンの恐ろしい皮肉、恐ろしい逆説的精神に見事に釣られたのである。そんなことになれば、生きたまゝ皮をはがれるのだ。『パイドン』や『饗宴』をていねいに読めば、それがどんなものか、よくわかる筈である。朔太郎のイデアは、ソクラテス、プラトンのイデアでは断じてない。こういう途方もない誤解は、朔太郎が自らの詩精神とした「感情」をパスカルの「Coeur」（心情）と混同したことにも示される。

これも恐ろしいことだ。ソクラテス、プラトンのイデアと朔太郎の「観念（イデア）」とのあいだは無限だ。そのあいだには「ソクラテスの無智」が厳としてある。これがなければプラトンの対話篇は、粉みぢんに砕け散り、あとかたもなくなるほどのものだ。パスカルの「心情」と朔太郎の「感情」そのあいだも無限だ。そのあいだには、パスカルの「回心」がある。これがなければ、パスカル自身は消滅してしまうかも知れぬ。朔太郎の「感情」はパスカルのいわゆる物体の秩序にしか属さないのだ。私はこれらのことをもっと詳細に言う用意があるが、諸氏もそんなことはすでにご承知ずみかも知れないと思って発表は差し控えたい。朔太郎は恐ろしい誤解をしているのだ。

伊東は朔太郎からその文字だけを「子規の俳論」に引用した。彼が朔太郎の誤解を哲学的に、明確に意識していたとは思えないが、ともかく伊東は自らの詩的ヴィジョンがプラトンのイデアと同じだということはどこにも言っていない。またその後も、プラトン的イデアという言葉はどこにも書かれていない。だから、プラトンのイデアは無視してよい。少くとも、プラトンのイデアを彼の詩の解説に用いるべき必然性はない。また朔太郎の「感情」を詩の指導的原理に採用してもいない。朔太郎の詩精神「感情」と伊東の詩精神がどんなに違うかは、二人の詩を比べてみると一目瞭然だ。詩でわかりにくいならば、その散文を比べるとよいだろう。断っておくが、二人共、哲学などまともやってはいない。したがって、詩を書くときには詩精神で、散文を書くときには別の精神でという器用なことはできなかった。もっとも哲学をやっていてもそんなことはできそうもないが。で、朔太郎の想像力に富んだ「感情」は、さまざまにゆれ動く。彼にはそれがおそらくはインスピレーションのように感じられたのだろう。

朔太郎の詩集の序文や散文詩など読んでいるとまったく面白い。ところが伊東の散文はどうか。散文、日記、書簡などをみても、いわゆる面白さといえるほどのものはない。面白いとか面白くないというのは少々あいまいな言い方だが、つまり、至極まっとうな事が書かれているだけだといゝたいのである。ところが驚くのは、まっとうでないことが一つも書かれていない。彼が書き残したものには、特に異常な、変なところが、いささかも見当らないのである。これは彼の詩精神がまっすぐで、感情、想像力とかがそれを特にゆがめたりしなかっことを示してはいないか。

次に彼は、学問的な文章は一篇しか書かなかった。しかも、卒業論文という必要に迫られてのことかも知れない。もちろん、書く時には誠をこめて書いている。誠をこめて書くという態度の一つは、良い加減なことを書かぬということである。良い加減なことか、そうでないかを判断するものの一つには、物ごとを論理的に思考する思惟があるだろう。しかし、その後、理論的な文章は何一つ書かなかったことをみると、伊東はこれを特別みがいたようにも思えない。そうすると残りは一つ、よい眼をもって物にはなれず物をよく観ることである。己の自我をも含む物ごとの凝視だ。そして「詩だけでしか表現されない種類の思考の正確さ」[註五]がそこにある。これを伊東はリルケの新詩集に学んだという。そして、それから「詩を本気で書く気持」になったという。私はリルケのことをあまり知らない。リルケにあたってそういう「思考」がどんなものかを調べると良いが、それはしばらく措く。たゞ伊東の詩精神に関するかぎり、そういう「詩だけでしか表現されない種類の思考」の本体にまさしくあたるのは、パスカルのいう「繊細な精神」にほかならぬと思う。パスカルはその「繊細な精神」を「幾何学的

な精神」と対照させながら、絶妙にときあかしている。私がへたに引用するよりは、直接読んでもらうほうが良いと思う。「パンセ」断章・第一篇一（松浪信三郎訳、筑摩書房）

次に彼の詩的ヴィジョンの方はどういうものか。ソクラテス、プラトンのイデアでは多分あるまい。それに、彼の詩はミュトスを含まない。ではキリスト教的神はどうだろう。神は創造者、人間は神の選民、この世にキリストがあらわれたからには人類の最後の審判と救済の時は間近にやって来ている。世間の創造の時に、この世の歴史、時間は始まり最後の審判に於て歴史・時間は終りを告げる。そういうキリスト教思想など、彼にはみじんもない。では、パスカル流、あるいは、キルケゴール流のキリスト教的神を信仰する実存の思想はどうだろうか。これも、特別みとめられない。恐らく西欧思想で一番よく似ているのはソクラテス以前の初期ギリシャ哲人達が思惟したと云われる自然（ピュシス）＝神的（テイオーン）なもの＝萬物の原理（アルケ）は永遠の存在であり、不生不滅であり、無限である。そして、時間は円環的運動を繰り返す。人間は死すべきもの。これが一番よく似ているかもしれない。しかし、それをいうなら老荘思想を持ち出そうと、仏教を持ち出そうと同じである。むしろ、まだこの方がましかもしれぬ。

「僕ら詩人が平素、詩で表現しようとするもの——といふより表情しようとする——ものには題材というものはない。譬えて言へば、天地間の風や水の漾揺とでもいへる風のものである。南無阿弥陀仏とか、南無妙法蓮華経といへば、もうそれだけで充分なものである。また、ああ、とか、花、とか言へばそれですむものなのだ。　芸術といふものは誠さへこもっておれば、下手なほどよろしい」伊東はこれ以上は何も語らぬ。

ただ、その頭上にいわば超越的なものを、いろいろ人が哲学的に思惟して、つけ加えて考えることができるような地点、つまり、人間が人間として登りつめることのできるぎりぎり一杯の高さ、天と地のあわいに、伊東静雄がまっすぐに立っていたということは言えるのであるまいか。そして彼は決してそこから上へ飛翔したりはしなかったと。そういうことを伊東ができたのは、ちょうど、パスカルのいうような「繊細な精神」にあたるものを本体とする詩精神と、それに強靱さを与えた内的情熱と、あくまでも「物」を凝視せんとする意志に支えられていたからだろう。もっともこの凝視は晩年におだやかであった。但し、甘くはない。

註一・昭和二年一一月二三日附酒井安代宛書簡。
註二・昭和一二年一二月二日附酒井ゆり子宛書簡。
註三・「呂」昭和七年一一月、一二月号。
註四・「果樹園」昭和三六年二月号、第六一号所載。
註五・昭和一四年一〇月一九日附大山定一宛書簡。

伊東静雄とリルケ

飛鷹　節

大山定一『文学ノート』は、人の心を深くかなしませる書物である。これは一つの旅の記録だと云っていいだろう。僕らの父祖たちが「旅」という言葉にこめた、さまざまな心の動きが、というよりたゞひとすじのせつなさが、清冽な小川のように、読む者の心の中に流れこんでくるのである。それはゲーテという峰を、五月の澄んだ空に遠く仰ぎ見たときにはじまり、ニーチェという活火山に攀じたり、ノヴァーリスの深い幽谷に足を留めながら、中年過ぎてようやく、ゲーテの峯を闊達に渉猟しはじめるまでの、孤独な足跡である。著者は決して公道を歩もうとしない。その杖はいつも、ドイツという北国にひっそり咲いたいくつかの花の、依怙地な可憐さのもとに留められる。そしてこれらの花の根の下を流れる水脈に、近代ドイツ文学の系譜を、

あらためて確認するのである。一口に言えばそれは「人間が如何にして純粋と自然を恢復したかの歴史」であった。著者は日本人の書いた間口の広い文学史などというものは、丁寧に読んで傍に置き、ふたゝびあの水脈の秘かな語りかけに身をゆだねるのである。だがそうすることによって、例えば「一すぢなたましいの緊張から解きはなされ」たハイネの歌の華やぎが、あの一すじの水脈に背かざるを得なかったハイネの「苦渋な精神の悲痛」が、かえってあざやかに浮彫りされていた。純粋と自然の恢復のために流された犠牲の血を、ひたすら見つめる著者の眼は、それとは別種の犠牲の悲痛さを、かえって正確に捉え得たのである。

中に収められた一篇『訳詩の問題をめぐって』は、伊東静雄に宛てた公開の書簡であり、詩集『夏花』の読後感であるが、こゝでも著者の眼は、ひたすら「詩といふものの血の純粋さ」に注がれている。「詩集『夏花』のかげに生きてゐる不思議なリルケ」を驚きあやしむ著者は、伊東静雄のリルケ理解が容易ならぬものであることを、もしかするとこの理解消化に際して流された生身の血がリルケ自ら流した血に等しいかも知れぬことを、詩人に伝えようとしたのである。その時著者の念頭には、重要な作品を平気で脱落させ、おそらくファウストさえ読まなかったリルケの、依怙地な「ゲーテへの道」が、二重写しになっていたのかも知れない。リルケのこの依怙地さが、近代ドイツ詩精神の水脈の中ではむしろ自然であるとし、素直に裸の眼でゲーテを見つめようとするリルケの一心な努力を、「つめたく旅びとの額をひやす山かげの水のしずくともおもはれるばかり」だと書いた

じじつ伊東静雄はリルケの詩をそう数多くは読んでいない。昭和七年頃「形象の本」、つゞけて『新詩集』。詩集『夏花』の編集を終えた頃、三行三聯の詩形式を完成しようとする心づもりもあって、『新詩集』を読み直そうとする。それからずっととんで、昭和二十二年の夏、戦后の荒廃の中で、インゼル版の選集を拾い読みしたらしい。どういうつもりであったか、この頃彼は小学生のような几帳面さで、「午前中リルケの勉強。虫退治。」とか、「夜は肉入りのライス・カレー。リルケ。」などと日記帳に書きつけた。翻訳は『マルテの手記』（昭14）『風景画論』『ミユゾットの手紙』（昭18）を読んだことが、書簡から知れる。このような読み方は、やはり、随分勝手な「リルケの勉強」であったと言わねばなるまい。（学生の頃、参禅後二年で次第に他力の教に曙光を認めはじめ、『歎異抄』を繙いたり、「出家になった様な気持で」万葉集を書写したこともある伊東静雄が、リルケの『ソネット』や最晩年の詩を、もし読んでいたらと想像することは、随分と楽しいことではあるが、しょせん僕たちの我儘な空想を出ない。）だがこの乏しい摂取が、実に執拗な完璧な消化作用であったこと、「没我的な愛の或る極北」と呼び得るほどのものであったことを、大山定一氏は主張する。

以上私は氏の所論を、あまりに長々と紹介し過ぎたかも知れない。しかしこれから先、伊東静雄とリルケについて考えようとするものは、この書を無視しては、何事も語り得ないだろうと思うのである。リルケの「形象の本」について、「その絶妙な譬喩的精神に僕は帽を脱がされる。常々僕は詩が散文と分脈する第一歩はこの譬喩的精神であると思ってゐる。」と書いた伊東静雄。「私が詩を本気に書く気持になりましたのは、リルケの新詩集をよんでからであります。詩だけでしか表現されない種類の、思考の正確さが、わたしにもいくらか理解されたからであります。そして『マルテの手記』を今拝見しますと、その目の正確さのために払はれた勇猛な真の犠牲がわかる気がします。」と告白する伊東静

雄。『詩集夏花』の成立について、それは「一部を大阪市内の狭い露路の家で、大部分を、堺市北三国ヶ丘の斜面に立ってゐる家で書いた。ここに引越すとすぐ大陸の戦争が起った坂下の大道路を幾日も大軍団が通るのを眺めた。……私は毎日のやうに子供をつれて路傍に立ち、敬礼した。家にじっと坐ってゐても、胸がはあはあと息づき強く、我慢できず興奮したりした。そんななかで、わたしの書く詩は、依然として、花や鳥の詩になるのであった。」と打明けた伊東静雄。すでに卒論の中で、「芸術は表現の外何物でもない。芸術は生活人格から出発するものではあるけれども、生活そのもの、人格そのものではない。それが芸術であるためには必ず芸術的に表現されたものでなければならない。」という立言を敢てせざるを得なかった伊東静雄。

——こうした詩人の側面のすべてが、と云うより、これらすべてを捨象して、まさしく「芸術的に表現されたもの」としての彼の詩に現われる、抒情的自我としての伊東静雄が、『文学ノート』の中に直観的に把握されておりはしないだろうか。そしてこの抒情的自我のあり様が、リルケのそれと対比され、ひいては伊東静雄が親炙したドイツ近代文学の系譜との深いつながりにおいて捉えられておりはしないだろうか。

これを措いて、リルケのいわゆる事物詩とわれらの詩人のそれの異同を指摘することに、意味があるとは思えない。事物詩を書いたころ、リルケは妻子を北辺の地に残して、パリのロダンの許に赴いていた。丁度中世の人間が大伽藍の中で生きたように、確固たる彫刻にかこまれて安住し、ひたすら手仕事に専念するロダンを師と呼んだ彼は、「不安を材料に物を作る」と言い、時間から解き放たれ、空間にゆだねられた、ゆるぎない存在をもつ詩を書こうとする。半日も動物園の柵の前に佇んでアンドレ・ジイドを不気味がらせたりしたリルケは、そうした凝視の中から『豹』や『青い紫陽花』など、一連の詩を書いた。

伊東静雄の詩作の営みは、かなり違っていたもののようである。詩人が、詩稿を大きな紙に書いて壁に張り、口ずさみながら推敲したことは、桑原武夫氏の伝えるところであるが、なおその外にも、例えば『朝顔』の詩を初冬に書いたというような事実がある。遅筆であったと云うより、彼は「即物」なぞということを、安易に認めようとしなかったのである。ケストナーなどの新即物主義にいささかの関心を示し、その詩を二篇訳してみた彼は、なお且、「理性的に即物的に、鏡の様にと言ふことは、本体のわかりにくい言葉である。」と書きつけていた。

詩作の営みのこの特色は、彼の詩法の本質に関係するように思われる。リルケが、時間から解き放たれた眼前の事物に集中しようとする時、必然に、おびたゞしい比喩をその事物に結びつけざるを得なかったのに対して、伊東静雄はむしろ遠い過去と未来の時間をたぐりよせ、物の不在から物を捉えようとした。

……

六月の夜と晝のあはひに
萬象のこれは自ら光る明るさの時刻。
遂ひ逢はざりし人の面影
一茎の葵の花の前に立て。
堪へがたければわれ空に投げうつ水中花。
金魚の影もそこに閃きつ。
すべてのものは吾にむかひて
死ねといふ、
わが水無月のなどかくはうつくしき。

この詩法は、すでに卒論の中で、芭蕉や蕪村の「象徴的態度」を論じ、「象徴主義」とさえ呼び、子規の客観的写生主義を斥けたとき、詩人にすでに自覚されていたとも言えよう。（今後、伊東静雄の「象徴主義」が、西欧

の近代詩の系譜とにらみ合わせて、考究されねばなるまい。）この技法はもはやリルケの摸倣とか、影響と云うようなことからは、遠く距っていた。『燈臺の光を見つつ』の中で三度繰返される「おれの夜」の、暗さと空しさ、あるいは、

柳は狂ひし女のごとく逆まに
　わが毛髪を振りみだし、
摘まざるままに腐りたる葡萄の実は
　わが眼目覚むるまへに…

という詩句の「わが毛髪」がもたらす、おどろな戦慄、――こうしたものを、リルケならば曖昧きわまる主観として斥けていたかも知れぬ。

しかし繰返して言うが、かゝる比較に大した意味があろうとも思われない。言葉を異にし、違った時代と風土に生きた二人の詩人の詩業そのものが、安易な比較を禁じる。私はやはり、この二つの詩精神が本質的に政治と無縁のところで生きざるを得ぬ必然性を洞察した『文学ノート』は、恐ろしい、そしてあり難い、批評だと思うのである。それは、著者自ら流す血によって、人の心を真にかなしませる書物である。伊東静雄論は、いつもこゝから、新しく出発せねばなるまい。

書簡

三好達治

昭和三八年九月一六日

東京都世田谷区代田一の三一三より
池田市野町一六八小高根二郎宛封書

鉛筆にて失礼します。いつも御高文果樹園にて愛読してをります。就ては本月号[1]中、山本沖子君云々に就きお役にたちかねますが左に記します。

世界文学は京都全国書房といふのから出てゐた雑誌、伊東君の眼にふれた詩三篇は、たぶんまちがひなく、小生が同書房に紹介推せんしたものに違ひありません。伊東は初めて見たやうだから、それも最初の分であつたに違ひないと思ひます。

山本沖子は若狭小浜市の産にて当時小生草屋に居りました。後にこれも小生の計らひにて大阪創元社から矢部社長におたのみをして詩集「花の木の椅子」といふのを出して貰ひました。まだ伊東は存命中であつたかと思ひますから、それならその薄べらな詩集も目にふれたかと思ひますが、小生の推察にまちがひがあるかも知れません。同詩集は唯今手もとにありませんので、貴稿のためお役に立ちませんが、あれは戦後間もなくでありましたからその見当でおたづね下さい。版元創元社に残本でもあれば好都合ですが。もしかしたら芦屋市の杉山平一君あたり、人柄から推して、保存をしてゐないかしらと思ひます。貴文中の三篇は、集中いづれとも考へかねますが、その巻頭あたりのものかと思ひます。全国書房は唯今消息を存じませんが、これは富士正晴君など案外くはしいのではないかと思ひます。

沖子君は草屋のカンタンにいふと居候でありましたが、少し扱ひかねる人物にて、その後世話はしきれませんでした。後に上京をして詩壇に志望があつたやうですが、少し気まづいこともあつて、小生とは音信を絶ちました。近頃消息をききませんが、どうしてゐることかと思ひ出すことがあります。健在であらうとは思ひます。

腕に痛風があるので鉛筆がきの乱筆おゆるしを願ひます。貴文拝誦気になりますので以上記しました。

十六日夜半　　三好達治

小高根二郎様

几下

二伸

書き終つて枕についてゐると、どうも大変な思ひちがひをしてゐるやうな気持ちになりました。雑誌「世界文学」は全国書房のものではなく柴野某君のやつてゐた翻訳文学専門（？）の出版社から出てゐた、丁度同じ頃出てゐたその方の月刊雑誌であつたかと思ひます。この社も唯今は消息をききませんが、柴野君なら栗山先生の御後えいにて京都の旧家ですから、事業は中絶してゐても同君は在京のことと存じます。同じく富士君にでもお訊し下さい。桑原武夫におきき下さつてもよろしいかと思ひます。同家には同雑誌は残つてゐることかと思ひます。この方なら雑誌は尋ね易からうと思ひます。どうもそそつかしいことでした。

〔註〕

1　果樹園第九一号

百の椿

堀之内　歴

つばきの姉さんは
暗がり屋敷の籔から
崖下の小川におちてくる
冬　川水が涸れ　すき透ると
つばきのあねさんが
二つ三つと浮かび漂よう
風のない日　ボクたちは
流れに下りて　それを拾う
――つばきの姉さん　ほーしいな
――五じゅうも百も　ほーしいな

ある日　屋敷の門があき
おばさんが手招きしている
赤いべべの子が覗いている
その子について庭をぬけると
籔は明かるく　大きな椿の木があって
枝いっぱい　赤い花がついている
木の下は青ごけ毛氈
椿のあねさんらが　一面にころがって
睡っている　燃えている
――うわああ　百もあるな

百は　ボクたちには〈無限〉だった

一九六四・四・八

書簡

伊東静雄

昭和八年（推定）

大阪市西成区松原通二の一五より京都
市左京区岡崎入江町四七金子方、天野
忠宛封書

先夜[1]は大へん失礼いたしました。今朝、御[2]詩集とゞきました。お約束守つていただきまして有難う存じました。早速拝見いたしをります。

先夜あなた様に似てゐる人ありと申しましたのは、今朝やつと思ひ出しましたがコギトの小説家杉浦正一郎といふ人でありました。中途半端な物云ひを申してさぞ不愉快でいらしやつたらうと存じまして一言つけ加へます

その内又ご面晤の機会もあると存じますから、今日はお礼のみに致します。大阪においての折には、住吉中学校の電話戎（エビス）百十五番にてお呼び出し下さい。

二十四日　　伊東静雄

天野忠様

〔註〕

1　先夜は大へん失礼……とは、天野氏は伊東と大学

同期の中田宗男氏（詩人、現在美術新聞記者）と共に京極裏寺町飯の正宗ホールに於て伊東とスキヤキで会食をしたが、伊東はしたゝかめいていして「俺の女房は日本一美人だぞ」等とわめきちらした酔態を指す。

2　御詩集とは、昭和七年五月二五日刊行の天野氏の自家版詩集

静雄追悼

山岸外史

哀歌のための
　哀歌
むかし、
　いまから
十六年まえ
　　でした。
本郷三丁目の
（いま文京区に
　　なりました）
U・S・という
　喫茶店で
外史と
　静雄は
　じいっと眼を
　みつめあった

アイスクリームが
　ふたつ
　卓のうえに
　　ありました
　僕もよく
　　みつめた
　もう一度
　　みつめて
　そして
　　いいました
「哀歌（エレギイ）アリガト
　よくみた
　君の詩は
　　ヤサシイ
　ヤサシスギル
　だが　君の面（ツラ）は
　　狼そっくりじゃ
　　ないか
　　僕は君の詩より
　君の面（ツラ）を信ずる」
　　といいました
狼（じつは静雄）は
　じいっと
　　僕の眼を
　　のぞきこんできました
鋭い眼

ますます
　狼そっくり
「そうか　なあ」と
　静雄は
　しづかに
　　微笑して
　　いいました
けれども
　眼は　あおく
　　もえていた
（こいつは
　油断ができ
　　ないゾ
　眼をもっている）
僕（外史）は
　すこしも油断
　　しなかった
奥さん
　伊東夫人よ
むかし十六年まえに
　そんなことがありました
それから何回か
　ハガキで通信しました

そして何年も
　　たちました
きっと十何年も

今日きゝました
　釈迦の誕生日に
　　林富士馬の
　　家で

静雄は
　死んだ!!!
詩をのこして
　僕は生きている
しかも　まだ
　僕は生きて
　　いる
　　……
そして、どうやら
　ヤス子夫人
　（僕の奥サン）を
大切にするように
　　なりました
　　……
　　……
このへとへとに
　疲れている

白いカーネーションを
（ここまできたからには
　僕よりさきに
　　死んだ方が
　　幸福では
　　ないのか知ら）
「君さきに死ぬ気
　　ないかネ」
ヤス子は　がぜん
　反抗しました
「バカニシナイデ」
（白いカーネィションは
　白いカーネィション
　　なりに
　　生きていたいらしい）
（僕はこのひとを
　腕のなかに
　　抱いてやり
その臨終のときに
　ゴメンヨ

　生きていて
　　よかった？
と聞いて
　みたかったのに
　　……
そのとき彼の女は
　いうにきまっている
「ウレシイ」と
「ホントカイ」
「ウレシイ」
眼は嘘をついて
　　いなかった
「僕の暴虐を
　ユルシテクレルカイ」
「ウレシイ」
　眼は嘘をついて
　　いなかった
そして微笑を
　たゝえて

死んでいった
というような
時刻をもちたいと
思ってゐたのに
……
そうしたら
その後で
さすがに　僕も
泣くにきまっている

アキラにも
ハルルにも
トオルにも
すべての子達に
知らせぬように
この父は
梅ケ丘のうえで
涙をながそうと
いつも
計画をたて、
いたのに）
……
伊東夫人!!!
男と女は
いつも
こういうものでした

そして
女と男も

伊東夫人！
伊東夫人!!
伊東夫人!!!

静雄のために
五分間
瞑目
しました

ここは　林富士馬の
家です
今日はじめて
知りました

静雄の死を

註・この詩は昭和二八年四月二日山岸外史氏より伊東花子さんに送られた。

鳩が歩む 朱い脚で

吉本青司

〈寒色〉は高貴なたましいの詩集だ。ぼくは、このことを書こうとして、なぜか伴信友の〈鎮魂伝〉を想いだした。唐突なこのレゾナンスは、しばらくぼく自身をもとまどわせた。でも考えてみると、少しもふしぎではなかった。

〈鎮魂伝〉が、学問の考証によって鎮魂のこころを伝えたものというなら、〈寒色〉は詩の芸術によって現代の鎮魂を証したものと言えるからだ。カトリックのレクイエムは死者の霊を慰めるための音楽だが、鎮魂歌は死者を蘇生させるための詩であった。

炉にいぶる生木よ
とめどなくしみ出るわが泪よ
に始まる〈石炭〉は
生きたその日に燃えつづけ
死んでのいままた燃えあがる
と、生の執念をうたって〈天地の讃め歌〉になっている。ほくの好きな詩だ。

雪のしとねはやさしく誘ふが
行って臥すものは禍なるかな
花やいだ色もじつはむなしく

やはらかな羽毛もじつは危ふい
さればひとは家ぬちにこもって火を焚き
うつそみのいのちを守る

〈誘惑〉の一節であるが、やはりここでも火を歌っている。火こそ現実肯定の生の燃焼ではないのか。

〈鳩の脚〉という詩がある。

鳩が歩む　朱い脚で
病院の屋根のうへを
〈なげきわび、空にみだるる、吾魂を、むすびとどめよ……〉と、昔の人なら言ったであろう不安な病人のいる屋根の上を、鳩の脚でおとづれてくるもの。ぼくにはよくわかるような気がする。

浅野さんが果樹園に書いた〈わが詩の遍歴〉を読んでいて、花園兼定の〈タゴールの詩と文〉を愛誦されたことを知ったが、その本の中でタゴールは次のようなことを言っている。

〈昨夜、闇にしみこんだ沈黙の中で、私はひとり立って永遠の音調の歌い手の声を聴いた。――まどろんで無意識の時にも、生命の舞踊は私の眠っている体の静められた舞台で星と歩調を合わして行われるであろう。〉

ここにもレゾナンスが感じられないだろうか。ぼくは鎮魂歌の永遠の歌い手は、誰なのだろうと考える。

〈わたつみ〉も鎮魂を歌っている。

それなら返せ　あれらの日に汝が掠め去った
高貴な魂を返せ
汚れを知らぬ高い額と
澄んだ眼と聡い耳との
若かった魂を返せ

この詩の中で詩人は、自分の死を拒んだわたつみに対して強く呼びかけながら、生の意味をたしかめている。自分を生かして過ぎ去る時に身をゆだねながら、自分のつとめを見つめている。そこから

ひとつぴとつの障害を取除け遅々とした
建設をつづけてゆく　これが一つ
ひととびにそこに到って天地の讃め歌を
うたってきかせる　これが一つ

このような美しいつとめの自覚が生れたのだ。そしてへたがひに呼びあひ、答へあひ、きっと手をつなぐ時〉への悲痛な信頼も生れるのだ。これが人々の蘇生の歌であり念いでなくて何であろう。

この現代の鎮魂伝が貴重であることは、ぼくたちの仲間だけでなく、数多くの読者や批評家によって証明された。そのことは、この詩人の業績が、現代の人類が直面する文明の命ずる〈死〉への謀略に立ち向う本質的な回答であるということに他ならない。ぼくたちが希求する精神の宇宙は、〈しべふかく身を投げた蜂〉が吸う蜜なのだ。そんな非力なしかも快活な魂の永遠こそ、ぼくたちが最初にそして最後に身もこころもゆだねるコスモスではないのか。もっとも狂暴なものには、もっとも非力なものこそ、最強の真実であることを、ぼくは日常の障害を取除ける仕事の中でたしかめてきた。

現代のデーモンにあこがれて、肉体を離れようとするたましいを、ペルシャ風にいえば、自分のやしろに鎮めることが、人類に未来を実現させる唯一つの方途のように思えてしかたがない。

渾沌は燃えてゐるのだ
君も知らない底の方で

という詩人の確信は、ポリス的な営みよりはるかに深い、根源的な詩の創造の仕事への確信であろう。この渾沌こそ、天地創造の時から今もひきつづいている実在だと思う。

ぼくは詩人の感動がさらに様々の詩材のなかで活躍し、いっそう快活に人々のたましいの鎮魂に役立つことを願っている。

果樹園　一〇〇号　昭和三十九年六月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八十円　送料廿円

小高根二郎

詩人、その生涯と運命

―書簡と作品から見た伊東静雄―

《……堪へがたければわれ空に投げうつ水中花。金魚の影もそこに閃きつ。すべてのものは吾にむかひて　死ねといふ、わが水無月のなどかくはうつくしき。》近代詩を極北にまで追いつめながら、詩壇のみならずおよそ日本語を解するいかなるひとの胸にも響く絶唱の数々を遺して、敗戦後の混乱期に、なお生きようと努力しつつ病いに逝った敬虔な心の詩人、伊東静雄の生涯と文学を、詩・書簡・日記を交え、評伝に書きなした作品。昭和三十年に起稿した著者は、伊東の精神にしたがい昼間は世俗の勤めを果たしながら暁の星を戴いてこれを書きつづけ三十八年暮に完成した。伊東の青春から晩年に及ぶあの非常の時代に、繊細脆弱な伊東が歌うというだけの希望と営為によって、いかに懸命に生きながらえようと努力したか？　その精神の歴程と肉体の足跡を克明に書きしるし、「我等は若い日に亡びる美しさを讃美し歌いすぎた。その贖罪のためにも生きながらえる美しさを今日讃えねばならぬ」という著者の悲願の書である。

新秋刊

東京都新宿区矢来町七一
振替　東京八〇八

新潮社

編輯後記

百号に際してなにか記念の行事を……と考へないこともなかつたが、妙案がないまゝにいつか伊東静雄特輯号になつてしまつた。創刊号以来……発表しつづけてきた拙論も来々号をもつて完結するので、今まで伊東に関して何か書いていたゞくべき方で、こちらの不注意からうつかり忘れてゐた方々に執筆をご依頼申しあげた。

京大教授野間光辰氏、伊東の学友で俳人・歌人として令名のある堀内薫氏の文章を拝読して、もつと早く発表していたゞいたら拙論に加えるところが多かつたのに……とくやまれた。

そのほか、十年前の珍らしい追悼詩の発表を許可された山岸外史氏、貴重な思ひ出を寄せられた富士正晴氏、織田喜久子さん、新しい追悼詩を賜つた林富士馬氏に感謝申しあげる。

尚、伊東論を書いてゐる浅野楢英氏は京大哲学科博士課程在学、飛鷹節氏は愛媛大助教授の學究で共に拙誌の会員である。

四月五日、思ひがけなく詩匠三好達治氏が逝去された。一月一八日附萩原葉子さんからの来簡に、愚生の尊をして懐しがつてをられた由で、上京の機会があつたら一度訪問するやうに……要請されてゐたので、心に泌みるものがあつた。淀野隆三氏が産経に書かれた哀悼記によると、三月二二日のレモン忌にはすでに顔にむくみが現れてゐたというから、すでに症状はかなり重かつたのだらう。昨年いただいた芳書を掲載させていたゞき哀悼の微意を捧げる。（O）

果樹園　第一〇〇号（毎月一回一日発行）
昭和三十九年六月一日発行
編輯兼発行者　池田市野町一六八　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五の八　元市印刷株式会社
発行所　池田市野町一六八　果樹園社
定価　八十円　送料　廿円

果樹園　一〇一号　昭和三十九年七月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

果樹園

第101号

詩人、その生涯と運命　小高根二郎
ヘリック詩抄　森亮
書簡三通　伊東静雄
行方不明　浅田二三男
わが詩の遍歴　浅野晃
感情　堀之内歴
百号回顧　森亮
その転読　人金沢肇
吉本青司
浄罪詩篇ノオト　竹越三男編

詩人、その生涯と運命

作品と書簡から見た伊東静雄（八十九）

小高根二郎

織田喜久子さん宛書簡の一週間後、伊東は弟寿恵男君夫妻に次の書簡を送つてゐる。

「お手紙拝見。

皆さんどれほどお喜びか、察するに余りあり。道夫君・恵子ちやんは何年か分の愛撫を一挙にとり戻したいことでせう。

蜂蜜まことにありがたう。蜜柑の蜜のやうですね、いいにほひがします。

花子先日健康診断して貰つたら少し肺に浸潤があり、しばらく学校休んで静養したよが　いとのことで、目下出来るだけ静かに家で暮してゐます。それで諫早行きは出来ません。

又私の家の件、少し早すぎると思ひます、といふのは私はまだ手術出来るかどうか未定。こまかい検査にパスしなければ駄目です。又出来たにしてもその成功率は五十％、今のところ、諫早や長崎に住めるやうになるのは「憧れ」という程度です。

あなたの就職のこと考へてゐたら昨夜ねむれなかつた。中年にして職業をかへるつらさや不利はいかばかり。お互に若かつた日色々夢を持つて映画の方に行つたあなたのことを思ひ出し、又それをはげましてすすめた自分のことを思出し、感無量、ぐちの心も湧きました。

学校や図書館と云はれるが、そんなつまらぬところが果してあなたに堪へられるやら、それより、実業の社会などがいいやうに思ひます。どうでもいいという投げやりな気持をすてて選択し、後悔せぬやうすべきです。学校に行くにしても免許状がありきです。

国立病院長野分院の庭…
向うの病棟の一番奥の棟に伊東は入室してゐた。

ますか、無ければ大学に申請しなければいけません。半年や一年しなければ免許状来ませんよ。

あなたのことを思ふと、じつとしてをれないやうな焦燥を感ずるけれど、病人ではどうにもならぬ。残念です。

寿子様どうぞ、寿恵男君の大切な転機ですから、はげまし元気づけてやつて下さい。たのみます。

十九日　　静雄」

（昭和二六年七月一九日大阪府長野町国立病院より長崎市鳴滝町二八九、井上寿恵男、寿子宛封書）

弟の寿恵男君は、伊東が手術後に長崎か諫早に引揚げるものと判断して、手廻しよく家捜しを申し出たのである。そのために花子夫人の西下を要請したのであらう。花子夫人は肺浸潤であるからと伊東はその申し出を断つてゐる。伊東の病菌が花子さんにいつか伝染してゐたのであらう。

伊東は寿恵男君の転職に関してすくなからず心配してゐる。彼が京大哲学科を出て映画監督になるについては、映画好きな兄の励ましもあづかつて力があつたからである。が、彼は記録映画の地味な監督として終始したのである。そのうへ愛児の道夫君・恵子ちやんが成育してくるにつけて、家を空けがちな奔放な職業が反省されだしたのであらう。平凡だが規則正しい生活が約束される学校教師か図書館吏への転職を志望してゐるのである。

伊東は中年にして職を変へる不利不安を己がことのやうに心を砕いてゐる。伴侶である寿子さんに「たのみます」と合掌するやうな調子で弟を励まし元気づけてくれることを願つてゐる。寿恵男君はやがて伊東の佐高時代からの親友であつた伊藤正雄氏が長をしてゐる長崎市教育庁に就職するが、それも伊東の示唆によるものがあつたのかもしれない。

八月上旬伊東は「群像」八月号に「スラヴの子守唄」を発表した庄野潤三氏に次の祝ひ状を送つてゐる。

「お作すぐ拝見しました。優しく美しい心持が読後しづかにのこりました。

次のお作もたのしみです。作家としての一層の展開がきつと見られるだらうと思ひます。

とにかくお祝申し、敬意を表します。」

八月七日

（八月七日、大阪府長野町国立病院より大阪市帝塚山、庄野潤三宛はがき）

教へ子であり、愛弟子である庄野氏の生長を祈る、祷り心は篤い。……というのも、伊東が志しつゝもつひに生涯に果しえなかつた小説の世界の開拓を、身代りになつてやつてくれという希願が籠められてゐるからだらう。

四日後、伊東は庄野氏に次の書簡を送つてゐる。

「富士正夫君の件色々とすみません、感謝いたします。私の方からも手紙出しておいて手術の時の助手を乞うておきます。「この暑さのせいか、心臓に少し異変あり、手術に工合わるいかもしれない、しばらく時日をかけてしらべてみねばなりません」と医者が申しますので少し悲観しました。常時このごろは百位ゐうちます。そして一種特別な圧迫がありますので用心してゐます。そんなわけで、手術するにしてもまだまださきのことのやうです。しかし富士君には手紙出しておくつもりです。

放送局の方、うまくいくやう祈ります。

又御母堂様お大切に願ひます

奥さんしんどいことと存じます。

十一日　　伊東静雄

庄野さん　」

（八月一一日、大阪府長野町国立病院より大阪市帝塚山、庄野潤三宛封書）

庄野氏は住中時代の同級生であり、富士正晴氏の弟である正夫氏に、伊東の手術の際の助手を依頼したのである。伊東はこの思ひつきに賛意を表し、自分からも依頼する旨を伝へてゐる。伊東はこゝで初めて心臓圧迫の症

状を訴へてゐる。それと共に手術が延期されてゐることを悲観してゐる。

末尾に放送局云々とあるのは、庄野氏が朝日放送に就職志願をしてゐることである。又、お母さんは腎臓病、奥さんは妊娠中であるので見舞つてゐるわけである。

八日後、伊東は花子夫人に次の書簡を送つてゐる。

「＊　花子さん。お便りありがたう。もう今頃は大和から帰つてをるころでせう（十九日夕方）　面白かつた？　疲れた？

＊　諫早の姉さんの写真とてもふつくらして品よかつたですね。

＊　五ツの扉面白かつた。又書いて下さい。沢山。

＊　小生、元気。心配は要りません。

◎　これは厳重な命令

まきちやんのせきが長びくから一度この病院でレントゲンかけませう。お金など問題にあらず、一度かけておくのが親の義務。あなたが暇になつたら（二十五日より遅くはならんでせう？）すぐ早朝から、まきちやんつれて来て下さい、あんたがついてゐる方がよからう。（一人ではこの前の例でもわかるやう不安心）。ッ反応もするから、そのつもりで月末ギリギリにならぬやう、たのみます。

十九日　　静雄」

花ちやん

（九月一九日、大阪府長野町国立病院より大阪府黒山村、伊東花子宛封書）

一ケ月前の寿恵男君宛書簡には、花子夫人が健康診断の結果肺浸潤である事実が判明し静養を要する旨が書かれてゐたが、今度はまきさんの咳が永びくので、肺結核に感染したのではないかと、伊東は極度に神経を尖らせてゐる。レントゲン撮影とツベルクリン反応検査を附添ひのうへで受けるやう花子夫人に命じてゐる。

しかし、このところ花子夫人に送る伊東の手紙はやさしい。「かはいい花さん」であり「元気なやさしい花子さん」というやうな呼び掛けである。今度は「花ちやん」である。花子夫人が考案した「五つの扉」の謎解き遊びに無心に興じてゐる伊東の愛情は、十九年の結婚生活中もつとも直くやさしい時期であつたらうと想像される。

九月中旬、伊東は朝日放送に就職した庄野潤三氏に次の書簡を送つてゐる。

「新しいお勤めどういふ風ですか。あなたの気に入ること祈ります。初めだから忙しいでせう。

私は秋に入つてからとみに元気になりました。こんな風だつたら、又何か書くことをはじめようかなと考へるほどです。かやはづしてねるのが、何だかめづらしい気がするのが、このごろの生活の変化です。

おめでたはまだですか。」

（九月一六日、大阪府長野町国立病院より大阪府帝塚山、庄野潤三宛封書）

伊東は転職後の庄野氏を励ましてゐる。それとともに再び執筆する意欲が湧いてきたほどの好調さを伝へてゐる。

末尾で触れてゐる待たれるおめでたは二週間後に次の祝ひ状になつてゐる。

「お目出度う。やつぱり男同志のせいか男の子はうれしいものですね。しかし夏子ちやんも忘れずに可愛がりなさいよ。私にやつと夏の疲れがなほつたやうで食欲も出、喜んでゐます。（職場通信大へん面白くうれしく拝見しました）」

（九月三〇日、大阪府立国立病院より大阪市帝塚山、庄野潤三宛はがき）

庄野家に長男龍也ちやんが誕生したのである。第一子女。第二子男。伊東家と同じである。伊東は夏樹君が生れたときの喜びを回想し庄野氏を祝福してゐるわけである。

伊東は秋と共に快調を伝へてゐたが、その様子は十月五日から起筆されてゐる日記に詳しい。

十月五日　入院二十四年十月十三日（満二ケ年経たり。）熱六・四度。午後三時記。ベッドに坐してパス服用七ケ月後ズット熱なし。今日でパスとまる。詩作を始めようと思ひ、この帳面をとり出す。晴明の日。

ガラス窓のカマキリ、数日、緑濃くなり窓わくの茶褐色になるといふこと？　窓外に虫の音しきり、草の虫と交らざるカマキリ。コスモス。窓ガラスの上でカマキリと大きい蜂との闘争。カマキリが勝つた。

六日　晴明。食慾さかん。ハマチと柚。まつ青い蜜柑。レンコンと人参の生食。この生食大へん効あるらしい。松茸。

『武蔵野夫人』をよむ。

夕方まき、花．大阪での買物の帰りと云つてよる。……中略……花子泊る。うれし。

七日　晴明。午後花子ひるね。夜も早くねる。東京旅行からずつと大へん疲れてゐるらしい。かはいさう。泊る。よくねむつたらしい。うれし。

八日月曜　曇。朝九時半花子帰る。さびしさ身にしむ。午後二時半。たまらぬたまらぬ。花子。花子。花子。

九日　午前十時花子来る。米米のただれを洗ふため。うれし。あるものの交換。桐の小箱に入れる。すぐかへる。……後略……

十日　晴、暑し。胸くるし。ソボリンをのむ。花子のことを思ふ。

十一日　中食前織田喜久子さん来る。一緒に食事し二時間ばかり居る。有難し。アメ、ヤウカン、バナナ、コンビーフ、チョコレート、又阪急電車の色々な美しいパンフレットを貰ふ。暑し。

五日の記述にあるカマキリと大きな蜂との闘争は伊東の詩材のやうである。窓枠の茶褐色に擬態して数日敵を待つカマキリが伊東の詩芯だつたのかもしれない。

つれづれの伊東が花子夫人を恋ひ、或ひはいたはる心情は激しい。夫婦間だけの隠語や情愛の記述もある。

十一日に織田喜久子さんが見舞ひに来訪してゐるが、丁度その頃が伊東の調子の頂上で、下旬に向ふにつれ、咳が再発し、肩の痛みを訴へ、食慾の減退を伝へてゐる。

十一月一日　曇夫。今日は珍しく肩の痛み、息ぐるしさ少し。うれし。但し脈搏多し。96。昨夜よくねむれ、咳も出ず、今朝珍しく快活な気持になる。感謝。花子を想ふ。楽しくあれよ。永く永く生きて楽しくあれよ。花子よ。夜咳はげし。……後略……

二日　夜あけ雨あれど朝上りて静かに曇る。後庭を見れば連山に雲かかり、菊盛りすぎてやつれが見え．縄でまとめられて、花うなだれてゐる。不思議に気分よく、肩いたみ息ぐるしさなし。

日記はこの二日以後切れてゐる。もはや日記を書きうる快調に恵まれず病勢が悪化の一途を辿つたからであらう。「楽しくあれよ。永く永く生きて楽しくあれよ。花子よ」という祈りは、もはや袂別の辞をなしてゐる。

この日記から十日あまりして伊東は先月見舞つてくれた織田喜久子さんに次の礼状をしたためてゐる。

「ご心配おかけしてまことにまことにすみません、お詫びいたします。パスの連用七ケ月にもなり胃腸も悪くなり、外にもいろいろ自覚症状が現れて、どうも抵抗が出来たらしいといふので、パスをやめてみましたら、益々悪くなり、先週はたうとう小喀血四日ほどつづき、気分も大へん苦しくなつてすつかり参つてをりました。しかし昨日、今日どうやらそれもとまり少し気分も楽なので喜んでをります。

先日のお見舞、どれほどか、うれしく有

難くお心こもつた、いろいろのお品、面白く頼笑ましく病友にも自慢しつつ少しづつ分け合ひ、美しいパンフレット、寝たきりの重症の人達にも見せお情感銘いたしてをりました。どうして身体にわるからう筈がありせう。二度ほどお礼の手紙試みましたが、不覚にも感傷的に過ぎいかにも弱々しく気まりわるく破り棄ててゐる内に、病状悪化してしまひ機会を失つてゐたのであります、深くおわびします。

しかし今度は腹の工合不思議に悪くならず、それを力にして頑張つてゐます。すべての特効薬に抵抗を生じ．これからは自分の生命力を信ずるよりない、元気を出さう、又少々気分悪くとも気力振ひおこして詩も書いてみようといふ気になつてゐます。

どうぞお元気に楽しくおすごし下さい。

昨日長崎から姉が（五十五才）すつかり老婆になつて、見舞に来阪。肩やおなかをさすつて呉れ、少年の頃のやうな甘やかな気分になり、呼吸も大へん楽に思はれます。

十三日　　伊東静雄

織田喜久子様

横になつて書く手紙

乱筆見苦しくすみません。

（一一月一三日、大阪府長野町国立病院より芦屋市業平町三、織田喜久子宛封書）

伊東は冒頭一ケ月も礼状が遅れたことを詫びてゐる。パス連用七ケ月の結果、胃腸と聴覚障碍なぞがでて服用を中止すると、病勢が急に昂進して喀血をしたからである。

白築幸子さんの夫君である医師・大東勝之助氏から聞いたところによると、伊東は病院が定めた正規の投薬量以外の新薬を入手すると、素人推量で乱用したとのことである。その結果、抵抗ができたばかりでなく、前述の障碍を招来して、病状を救ひがたい状態に追ひ込んだというのである。言はゞ一種の自殺行為のやうなもんであるとのことであつた。

伊東はここにいたつて、自分の生命力以外もはや頼るべきなにものもない事実を覚つたやうである。「少々気分悪くとも気分振ひおこして詩も書いてみよう」と最後の気力を振ひ起さうと努めてゐる。この覚悟は悲壮である。おそらく絶作を用意しておきたかつたからであらう。

伊東はそれから半月して病気になつた阪大学生福地邦樹氏に次の書簡を送つてゐる。

「又腎臓がお悪いのですか。寝てるのですか。慢性にならぬやう根治なさい。養生して下さい。私はやつぱり汁だけにしてゐます。工合よろしいです。しかし、このごろは心臓がどうもあまりよくなくて苦しいです。一日中苦しい時もあります。先日のあなたの詩では「サキソフォン君」が一番よろしかつた。外のは少し散文的すぎるのをウイットが救つてゐるといつた恰好です。早くよくなつて下さい。寒い二十八日」

（一一月二八日、大阪府長野町国立病院より大阪府盾津町福地邦樹宛はがき）

福地氏はこの年の春阪大工学部から文学部に移籍し国文学科に属してゐた。隔月ぐらゐに病院に伊東を見舞ひ、詩の批評を仰いでゐた。ところがアルバイト等の過労から持病である慢性腎臓病が再発したのである。

伊東は福地氏を最後の弟子と想定したのであらうか、心臓圧迫の自覚症状に悩まされながらも、置いていつた作品には懇ろに眼を通してゐる。併せて伊東が心の隅で宿題にしてゐる絶作のためにも、絶えず詩心を磨いておく必要があつたからだらう。

伊東は十二月上旬、花子夫人に次の書簡を送つてゐる。

「十二日（火）午前十時三十分から二十分間、朝日放送（明るいベッドの時間）で、私の詩の放送がある。夏ちやんもまきちやんもあなたも学校、私だけがきけるわけ。」

（一二月一〇日、大阪府長野町国立院病より大阪府黒山高等学校内、伊東花子宛はがき）

庄野潤三氏の尽力によつて、病院患者の慰安プログラムの編成に伊東の作品朗読が特に

企画されたのであらう。遠からぬ死期に望んでゐる伊東にとつて、これ以上に安心立命を与へる企画はないからである。伊東はその安心を妻子と共に確信として分ち合ひたかつたのである。

歳末伊東は病臥中の福地氏に次の見舞状を送つてゐる。

「ご病気心配してゐます。少しはいい方に向いてゐるのでせうか。一ヶ月も臥床といふと大病ですね。はれてゐるのですか、熱あるのですか。誰かを見舞にやりたいのですが、家内中々手がぬけずに意に任せません。

干柿ほんたうにありがたうございました、大へんなお手数だつたでせう、御両親様によろしく申上げて下さい。少し水分が出てゐましたので目下窓の所にならべて陽に当ててゐます。昨日谷口君来て、あなたのご病気のこと申したら、近日中に見舞に行くと云つてゐました。一度具体的な病状おしへて下さい（心境ばかりでなく）私はその後、左半身に神経痛おこり、そのため呼吸くるしく、心臓多くうち、食慾減退し、かなりいやな日をすごしてゐます。困つたものです。しかし私はもう病気とは馴染だし、度胸も少しは出来てゐますからご心配はご無用です。

この休みに、子供ら二人は、二人だけで長崎に出かけました。家内が送りに行つたら、席もないほどの混雑した汽車だつたらしいですが、勇躍して行つたさうです。ねてゐて、彼らの旅の模様をあれこれと想像してると、思はず微笑します。

一日も早くよくなつて、又私を見舞に来て下さい。

二十九日　　伊東静雄

福地さん　　」

（一二月二九日、大阪府長野町国立病院より大阪府居津町、福地邦樹宛封書）

伊東は左半身の神経痛の症状を新たに加へてゐる。そのため呼吸の苦しみと心悸昂進を訴へてゐる。パスを十月に中止してから日々下向を辿つてゐる不調のなかで、一ヶ月ばかり臥床してゐる弟子の病状を憂へてゐる。同じ弟子である谷口卓男氏が見舞ひにきたのを幸ひ、福地氏の病状をより具体的に詳しく知るために見舞ひ方を要請してゐる。

又、冬休を利用してまき子さん夏樹君を故郷に旅立たせてゐる。いくどか見舞ひに上阪した姉ミキさんへの答礼の意味もあらうが、隠湿な病院や留守宅の淋しい正月ではなく、明るい南国で正月を迎へさせたかつた親心であらう。

三島由紀夫
私の遍歴時代
講談社
¥420

昭和二十七年（1952）

一月中旬伊東は織田喜久子さんに次の書簡を送つてゐる。

「『アサヒ・グラフ』送つていただいたお厚情、すぐ心にしみました。有難うございました。元気を出し、みだりに死を言ふまいと覚悟しつつあります。

二十日　　伊東静雄　」

（昭和二七年一月二〇日、大阪府長野国立病院より大阪梅田阪急電車宣伝課、織田喜久子宛はがき）

織田さんから贈られた「アサヒ・グラフ」には宿痾を克服して健康を取り戻した人々の特輯が掲載されてゐた。その人々のなげさにあやかつて、伊東は「みだりに死を言ふまい」と覚悟しつつある由述べてゐる。「覚悟しつつある」という進行形は、昨秋来の不調に死の影が翻めくことが多い事実を反証するかのごとくである。

二月中旬、今井茂雄氏に送つた書簡には、死の影との苦闘がなにげなく述べられてゐる。

「本日は大変御謙遜なお手紙頂き恐縮に存じました。この頃はいくらか落ついた御生活がお出来の由、本当におよろこび申します。私は年末よりいささか容態よろしからず、目下がんばりの最中です。

御幸福を祈ります。

二月十三日

（二月一三日、大阪府長野国立病院より大阪市岸松迪、今井茂雄宛はがき）

伊東は死の影との悪戦苦闘で、誰の眼にも識別できるほどの憔悴を日毎に加へていつた。

この頃、新聞に新登場の新薬ヒドラジッドの薬效が喧伝されだしてゐた。なんとしてもそれを入手せねば……と、伊東も、花子夫人も魂を奮はれた。をりしも弟の寿恵男君が見舞ひのため上阪してきた。ヒドラジッドさへ手に入れば助かる……。兄夫婦のその切なる願ひで、寿恵男君は知己や旧友を頼つて文字どほり東奔西走した。その涙ぐましい努力の結果、彼が掌に包まれるほど小さい小瓶の底に白く光るヒドラジッドを二グラム携行してきたときには、その掌を握つて、伊東も、花子夫人も、寿恵男君も嬉し泣きに泣いた。

ヒドラジッドは服用一週間目頃から偉效をあらはしだした。熱は去り、いくらか食慾を増し、愁眉を開いた。駈けつけてゐた親戚の人達も一人二人と帰つていつた。

八月下旬、伊東は庄野潤三氏に次の書簡を送つてゐる。

「庄野さんありがたう。あの放送とてもうまく出来てゐて、うれしかつたです。このごろ心鬱して困つてゐましたが、あれでずゐぶん明るくなりました。

あなたのお心づくしがすぐつたはつてうれしかつたです。

（泉田さんにもお礼云つといて下さい。今迄きいた詩の朗読では一番感心しました）

このごろは小康持続、安心して下さい。

お兄さんの渡欧のこと新聞で知つてゐました。元気でほんとにいいことです。あなたも忙しいでせう、身体大事にして。小説も期待してゐます。

家内が来たら代筆でもつと長く書きます。横になつて右手を下にして書かねばならぬので（さうせねばくるしくてならぬの

ヘリック詩抄（四十一）

森　亮

夜警

暗い静かな夜の道を
角燈を手に闇を照らし、
鐘をちりんちりん鳴らし、
わたしは歩き歩き、かう話し掛ける、
「おそろしや、死の手はわれらを
審判大法廷へと呼び付けまする。
いやでも陰気な被告席で
貸し借り一切さらけ出さずばなりますまい。
数多の罪をわれらこの世で重ね、
罪滅ぼしはやったところで数へるほど。
起き上がられい、負ひ目ある人たちよ、
さて身を伏せて借りを返す工夫が大事。
てまへの呼び声消えてからも思案されよ
思案されよ、おっつけ夜は夜中の一時。」

ヘリックは夜廻りの口振りを真似た作品「夜警」を詩集「ヘスペリディーズ」正篇に入れてゐるが（第七一号に既訳）、「聖歌集」にも同名の詩がある。それがここに紹介する作品一二一番で、正篇のものが一般市民の安眠を願つたのに対して、今度の「夜警」は彼等に心の負担の返済を勧めてゐるものであるから、正に「聖歌集」に入るべくして入つたものと言へよう。

です）きたない字になりました。

三十日夕方　伊東」

（八月三〇日、大阪府長野町国立病院より大阪市帝塚山、庄野潤三宛封書）

朝日放送から庄野氏の企画で「野の夜」「帰路」が泉田行夫氏の朗読で放送されたことに対する礼状である。夏のつよい光を見ると蘇つたやうに元気になるのが例年の伊東だつた。が、なぜか心鬱してゐたのである。伊東は夏の夜に取材された前二作の朗読を聞いて明るさを取り戻したと言つてゐる。さういへば昨年の十二月にも、自作の朗読を聞いて、パス中止以後に見舞はれた暗澹たる心境から一と時であれ逃れえてゐた。

伊東は庄野氏の好意が電波ででつとり早く伝はつたことになにより気をよくしてゐる。それにしても待たれたのは、入院当初から桑原武夫・富士正晴両氏の企画で創元社において進められつつあつた『伊東静雄詩集』の刊行であつたらう。

伊東はヒドラジッド起用以来の小康状態を伝へると、末尾で潤三氏の兄で帝塚山女短大の教授をしてゐる英二氏の渡欧を祝つてゐる。

備考　第九九号所載の「水晶観音」はYという有明海沿ひの部落から多良岳にわけ入つた山の奥――矢上町の滝の観音であると伊東に記憶されてゐたが、それは伊東の少年時の遠足の思ひ出と姉江川ミキさんの話とこんぐらかつた誤謬であると上村肇氏より教示を得た。水晶観音はたちばな湾添ひの北高来郡森山村唐比の補陀林寺の本尊であり、堂守の尼さんは最近亡くなつたが高森カッコという歌人であつた由である。

書簡三通

伊東静雄

昭和二〇年八月二二日

大阪府南河内郡黒山村北余部より奈良市西紀寺町中川邦夫宛封書

八月一日の会合では色々お世話になりました。お蔭であの日から気分やつと立直り、病的な状態から脱することが出来ました。昨今は酷暑で元気はありませんが、それでも病的ではありません。先日は又

御鄭寧なお手紙いただきほんとうにうれしかつたです。色々お配慮下さつて有難く思つてをります。配達づきとのことでしたので今日まで待ちましたが、持つて参りませんので今朝初芝にゆき通運に行つてみましたら八月五日に己についてゐたのを、ずぼらしてゐたらしいのです。実際怠慢なことです。品物とどいてからお礼状出さうと思つてゐたものですから、この手紙もこんなにおそくなつたわけです。初芝には、六つの男の子と二人で電車にのつてとりにゆき、帰つて、のどが乾いてゐるところで早速、親子二人で、競走のやうにして、大喜びで飲用しました。おいしいですね。特に男の子は大好きらしいです。くれくれと申します。おいしくて胃がよくなつたらこんなにうまいことはないと楽しみです。

ほんとうに御厚意深く感謝します。

まだ中々暑いですから、あなたも充分お躰に気をつけてお仕事にはげんで下さい。

御両親様にもくれぐれよろしく御伝言下さい。

八月二十二日　伊東静雄

中川邦夫様

註・乳酸製品

＊　＊　＊

昭和二二年一二月一六日

大阪市アベノ区北畠住吉中学校より奈良県丹波市町三島四七三家森長治郎宛はがき

先日はいろいろお気をつかはせ、又沢山お金いただいて恐縮千万でした。あれから後ずつと気分わるく（決して奈良行が原因ではありませんから御安心下さい）、まるで半病人の態で、家にかへつたらすぐねこむといつた塩梅でお礼こんなにおくれてしまひました、おわびいたします。拙詩集もう十日もしたら出るらしいので、その時はお手許まで差出しますから適当にごらん下さい。冬はいやですね、頭も身体もまるでうごきません。どうぞ

御大事におすごし下さい。

註一・住中で同僚であつた家森氏が奈良中学に転じて図書部主催の「詩について」という講演と座談会を開催した。出席者教官五人生徒十人位。謝礼の金額不詳

註二・第四詩集「反響」

昭和二三年五月一日

大阪市アベノ区阪南町中一丁目　大阪府立阿倍野高等学校（旧アベノ高女）より奈良市奈良県立奈良高等学校（旧奈良中）家森長治郎宛はがき

前略とり急ぎ。先日阪井君にお話のあつた物象の先生の件、アベノの方で希望してゐるやうです。すみませんが大至急でリレキ書一通小生宛に送つて下さるやう頼んでみて下さいませんか。こちらは物象は三人ゐますが、皆二十二、三才から、五、六までの若い人（内一人は女、足立君が最年長）ばかりで、来ていただいたら主任みたいな仕事をしていただくことになるのでせう。こちらの空気は――まだ日が浅くてはつきりとは云へませんが――住中などよりずつとなごやかで住みよいのぢやあるまいかと、私は考へてゐます。

御面倒ながら右よろしくおねがひします。

五月一日

註・住吉高校教頭阪井正雄氏。

行方不明

浅田　二三男

わらしべ鶏糞の
ドタドタの土間をふんで
光った靴が
出て行きます
次男や三男四男五男
また出て行きます
いろんな柄のスカートやスラックス
総領
あんたもか
コンクリートの雨が降ります
テレビからダンプがとび出します
大字は
行方不明どす
どこへいったんやら
さっぱりわかりまへん
お父つぁん
田にカビが生えてまっせ
お母さん
畑は草やぶどっせ
ワアワアいうて
村中大騒ぎしてた
そんなある日
役場の投票箱をあけましたら
とび出したのはなんと
行方不明の
百姓たちでした
出てくるわ
出てくるわ

わが詩の遍歴（つづき）

浅野　晃

小高根さんから、もう少しつづけるようにとのことである。年とともに覚えがわるくなる。今のうちに書きつけておくのも、まるまる無駄でもあるまい。

共産主義ともマルクス主義とも別れた私は、地下生活から出て公判をうけ、執行猶予になつた。たしか昭和九年の夏のことである。私よりもずつと早く保釈で出て、公判もすましてゐた福間敏男が、北川冬彦のやつてゐた「麺麭」に加わつてゐた。福間も三高で北川や私とおなじクラスであつた。

福間はなかなかの秀才で、四条畷中学を四

年終了で三高に入つてきた。おなじ中学で一年上だつた小島吉雄は、卒業して入つてきたから、福間といつしよになつたわけだ。福間には母親がなかつた。姉さんが一人ゐてアメリカに渡つてゐた。福間は死んだ母を恋ひしがり、異国の姉を恋ひしがつた。どこか淋しいところがあつたが、しかし快活な男であつた。私は三高の三年のころから、彼と深く交るようになつてゐた。

その福間につれられて、北川の家にいつてみた。北川とはずいぶん久しく会つてゐなかつたが、かうしてたちまち旧交をあたためることになつた。そして「麵麭」の仲間に入つた。二人が入れというので、うんといつたのである。

そのころの「麵麭」の顔ぶれを思ひ出すと、北川や福間のほかに、仲町貞子、永瀬清子、神原泰、井上良雄、石田善太郎、田中令三といつた人々。そのほかはちよつと思ひ出せない。編集は堀場正夫が担当してゐた。むろん私は誰とも初対面であつた。また詩や文学をやるやうになつてからの北川の仕事についても知らなかつたし、「麵麭」という同人雑誌の性質についても知らなかつた。私はただ、マルクスから解放されて、自由に感じたり考へたり歌つたりすることが出来るのが、嬉しくてたまらなかつた。私はこの雑誌に、書きたいことを書けるのを喜んだのである。

刀田八九郎というのが私の筆名であつた。なぜ本名で書かなかつたのか、今となつては理由が分らない。でたらめにつけたこの筆名を、北川も福間もいい名前だとほめたことだけ覚えてゐる。さういへば福間も筆名を使つてゐた。井原彦六といふのである。私は二年くらゐで刀田八九郎をやめて、本名で書くことにしたが、福間は死ぬまで井原彦六で押し通した。よほどこの名前が気に入つてゐたのであらう。

事実、井原彦六といふ方が、福間敏男といふよりも、福間の面目をよくあらはしてゐる。名は体をあらはすといふが、その名は井原彦六の方であるべきであつた。井原は鴎外に私淑してゐて、鴎外風の歴史小説を書くことが彼の野心であつた。「麵麭」にも二篇ほど発表した。しかし私は、彼の試みたヴォルテールの短篇の翻訳に感心し、且つ愛読した。じつに名訳だと思つた。「麵麭」に五六篇は載つたと記憶する。

福間は惜しいことに、眠り病にかかつて死んでしまつた。ちようど細君が赤ちやんをつれて大阪の実家へ遊びにいつてゐた間の出来事である。発見したのは戸田謙介で、戸田と

浅野晃

詩集 寒色

果樹園叢書

読売文学賞を受賞した名著が再刊されました。書架に加へて清涼の気をお呼び下さい。

三〇〇円

発売所 新学社

京都市下京区五条通河原町西入

福間は中央公論の「千夜一夜」をやつた大宅壮一主宰の翻訳団の同志であつた。私らは彼を中野の組合病院にかつぎ込んだが、二日ほどで死んだ。当時は嗜眠性脳炎といふものを、私らはみな知らなかつた。狐につままれたやうな感じであつた。福間は死に方までが井原彦六だつたと思つた。おそらく昭和十二年——日支事変が起つたばかりの頃のことだ。何しろ暑かつた。その当座、私らはみな、眠り病にかかりはすまいかといふ恐怖に、おそはれたものである。

私が「麵麭」に発表した最初のものは、三号つづけて連載した論文で、詳しい内容は覚えてゐないが、そのころ人気が出てゐた三木清を批判するのが主眼であつた。これは苦心の力作で、一行一行の文章まで、散歩しながら練りに練つた。その次からは、毎号つづけて詩を出した。「正午」、「良晨」、「詩と真実」などが始まりで、一つの号に数篇を発表したこともある。のちに北川が編集した「培養土」といふ詩集に五六篇のつてゐた筈だ。この詩集は、「麵麭」にのつた同人の詩の選集である。

私はまた小説も書いた。短篇だが大塩平八郎を主人公にして、五回ほど書いた。これを水野成夫が読んで、「君の気持はよく分つてゐるよ」といつた。いまでもこの言葉を覚えてゐるのは、それがそのとき私の潜在意識の一部を、稲妻のごとく照らし出したからである。しかし、いま考へると、水野の鋭敏な神経からの思ひすぎのやうにも思ふ。だが、それも、私のことを彼がいかに案じてくれてゐたかを示すもので、私はいまも思ひ出して有難いと思ふ。

この短篇を書いたことから、そのころ「文学界」を編輯してゐた林房雄、河上徹太郎、小林秀雄などから「文学界」に小説を書けとすすめられて、歴史小説を二つのせた。「秀衡の女」、「重衡」の二つで、どちらも刀田八九郎であつた。しかし、これは二篇とも愚作で、私はそれ以来、小説など私には書けないと考へるやうになつた。昭和十一年から十二年にかけての頃のことである。まだ井原彦六が生きてゐて、大いに激励してくれたが、つひに小説は断念した。詩と評論は、割合まめに「麵麭」に発表しつづけた。ある雪のひどく降つた朝、例の二、二六事件のニュースが伝はり、私も複雑な衝撃をうけた。そのことがあつてのち、いくつかの詩が出来、これも「麵麭」にのせたが、題は忘れた。「中央

感情

堀之内歴

風は背後から　しきりと吹き抜けていた
くっきり見える東の山脈の
やわらかな姿と向かいあっていた
空地は黄昏れるばかりであった

山並みは稜線が特別長く思われた
風のとおるたびに　足下の雑草が
私に背をむけ　白んでみせるのが
おかしかった。

甘ったるく拡がりはてた青空が
今宵　あのゆるい山の線と
素晴らしい夜を　共にする筈であった
しかし　私は戻らねばならなかった

振り向くと　町の空に沈もうとして
太陽が大きな黄金の輪の白い玉であった
私は心の中へ何かを嚥み下すのであった
なにも考えてはいなかったのに

一九六四・五・二八

公論」にものせた。これは「歴史の私」といふやうな題であつたと思ふ。ヒットラーのドイツのことなどが頭にあつて、歴史が主題の中心を占めてゐたものに違ひない。

それよりも忘れないのは「青墓」といふ長篇叙事詩のことだ。これも「麺麭」にのつた。前に宝生の舞台で野口兼次の「朝長」を見て感動し、その印象を詩に書いてみたいと思つてゐたのを、露伴の「頼朝」を一読して急に感興が湧きあがり、夜を徹して一気呵成に書きあげた。一千行を超えた。私がこの詩のことを忘れないのは、佐藤春夫先生にはじめて讃めてもらつたのが、この一篇だからだ。また三好達治君も讃めてくれた。どちらも雑誌の書評として出たのであつたと記憶する。のちに「青墓の処女」と改題して、作品社から単行本になつて出たのが、この詩である。いつであつたか、田中克己君が古本屋で見つけて私に贈つて下さつた。奥附をみると、昭和十三年六月の発行になつてゐる。（つづく）

百号回顧

――訳詩うらばなし――

森　亮

この九年間『果樹園』は私にとって第二の時計だった。第一の時計は九時だ、十時半だと言って私を勤め先の学校へ駆り立て、ぐるぐる回っては夏休みをもたらし、歳晩には賀状を書かせる。第二の時計は月の末日の数日前にその月に用意した訳詩を清書させ、封筒に収めて郵送させる。原稿締切日が月末で、その二日前の午後二時までに松江市内のポストに投げ込めば間に合ふらしい。思ひ出したが、初めの数年間は締切日は毎月十日であった。

誰だったか「森さんは訳詩だからいいですね」と言はれたことがある。自作の詩を発表する詩人には毎月一篇といふペースを維持することは容易ではない――然るにあなたは訳詩だから……といふ意味の羨望の言葉である。そのときは、「いやどうも」とか何とか返答にならない返答を口下手の私は簡単に言っただけで、後はにやにや微笑でごまかしてゐたことだらう。

なるほど訳詩には写し取る対象の原詩がある。しかし撮影を依頼する人物に直ぐカメラが向けられる写真技師とは訳が違ふ。どちらかと言へば、足と時間をかけて撮った物を写真展に出品するアマチュア写真家に近い。三十六回続けた「白居易詩抄」も、四十回を越えた「ヘリック詩抄」も、原詩集の沢山ある作品から私の好みに合ふものを選び出すことから始めなければならなかった。

内容も面白く、何とか訳せさうな物が見付かってから、生みの苦しみが始まる。白居易の訳詩では漢文の読み下しになることを極力避けた。そのためには口語で行くに限る。さう決めて、確か一回の例外を除いて他の三十五回は口語訳にした。口語でむつかしいのは詩の行に何等かのリズムを持たせる工夫である。最も大切なのは訳詩の一篇全体が調子づくことであるが、それには一行また一行と意味とリズムの両面から言葉を追ひ上げ積み重ねる構築作業を入念に進めてゆくより他に手がない。気に入らなければ積み直しを何度でもやらねばならない。

もとより翻訳者はガレー船の奴隷ではないのだから、時にはいたづらもしたくなる。荷風が訳したランボーの一行を失敬したり（第十七号）、『狭き門』のモットーにもなってゐる聖書ルカ伝の言ひ回しを借用して白楽天に「ちからを尽くして仏法を学」ばせてみたり（第二十八号）、原詩の忽聞叩門聲を「ヴェニスの商人」の月夜の場面を思ひ出しながら「こんな時だ、誰かが門の戸を叩いて呉れるといいにと私が願ふのは」と詩人の願望に改めて、後に続く冗漫な六句三十字を切り捨

てたり（第十九号）――色々なことをやってみた。尤も最後の例のやうな極端な処置は、第四十四号の「鶴」が元の五言絶句（訳詩の註に七言絶句とあるは誤り）とはすっかり違った発想にした場合と、前後を通じて二度しか試みなかったはずである。原詩の五言句や七言句に対応する一行内での意訳、自由訳は常時のことで、これは訳者の我儘や茶目っ気ではなく訳詩には付き物の必要悪であらう。

「ヘリック詩抄」を連載し始めたときにも口語訳で押し通さうといふ方針を立てた。こんなことを言ふのは私は両刀遣ひで文語で訳すことだってできるからである。ヘリックの詩は詞藻の豊かさ誘る程でもなく、情熱が人を動かすといふやうな点もない。端正な姿とさらっとした知的な筆づかひ、味といふには淡泊すぎるその味が特色であらう。そんな所が白居易の閒適詩と似てゐるので、あれがやれてこれがやれぬはずはないといふ気持ちもあった。ただ白詩と違ふ点は「柳」（第五十九号）や「乙女たちに」（第六十五号）のやうに行の長さの短かいソング形式の詩がかなり多いことである。訳詩でもさういふものは行の長くなるのを努めて避けた。

その人

金沢　肇

春の日の　黄昏
真昼の倦み疲れた　わたしの魂に
熟睡(うまひ)の　ノックのやうに
優しい　旋律を奏でる。
（失なはれやうとするものを
少しでも　残しておきたいのです）
とほい季節を惜しみながら
とほい日の
友の面影と　愛の語らひ……。
それは　美しい星の煌きと
心よい　余韻を残して
潮のやうに
わたしの　心を打つ。
その人は　あした
愛(かな)しい記憶を　ふりかへりふりかへり
白い花ひらく
果樹園に帰る。

ヘリックの場合にも意訳の方針は採ってゐるが、英語の教師といふ職業意識がマイナスに働いて「白居易詩抄」の幾つかの場合ほどに天衣無縫の自由訳はできなかった。それでも小細工は所どころにほどこしてある。直訳すれば「すべての旦那がたよ、貴方たちに良き日を」となる夜廻りの言葉を「西の町、東の町の旦那衆、あしたは晴と読めました」とやったのなど一例で、十七世紀のヘリックには迷惑ながら、フルシチョフとケネディに東西両陣営の緊張緩和を呼び掛けてゐる恰好にしたもの。ケネディ氏健在の昭和三十七年一月号（第七十一号）に載せた「夜警」の結びの一行である。

訳詩の標題は随時原作のそれから離れさせてもらった。極く最近のものでは「霊感無沙汰して」（第九十三号）や「一心敬礼」（第九十九号）がそれで、前者は鴎外の『沙羅の木』の「直言」の一句を利用、後者は斎藤茂吉の「あらたま」中の標題を借用。種を明かせば興醒めされる方もあらうが、わが翻訳工房の私事、『果樹園』が百号に達したのを記念してちょっとばかり書いてみた。第二の時計が又もや私をせき立ててゐる。

追記。「果樹園」第百号は記念号のため締切日が繰り上げられてゐた。そのことは本稿の執筆勧誘と一

緒に早く連絡を受けてゐたが、小高根氏からの手紙の一節「貴稿を待つてゐましたが間にあはず残念でした」を読むまで、すつかり忘れてゐた。大家になつたものである。私が戦争中に赴任した旧制松江高等学校では教官仲間でつまらぬ物忘れをすることを「グレート・ハウスになつた」といふ言葉が行はれてゐた。それを思ひ出して、和訳・還元して使つてみた。自分でもあきれるが私は根つからの翻訳家らしい。

（四月二八日）

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」

⑱

竹越　三男編

愛国詩論

序書

日本人の象徴生活を代表するものに松、竹、梅、亀及び富士の霊蜂がある

我々の国民性の紋章は純金を以て飾られて居る、我々の貴重なる紋章を尊敬しろ、世界無比の光輝体なるところのものに敬礼しろ、

うらゝかなるかな日本国
あほげば高き天上に舞ふところの鶴あり、みよあるみにうむ製の光る鶴なり、そのかがやくつばさは、雪に以てさんらん、況んや金ムクの亀はその重量もつとも重たくして自然に蒼天のふかみに沈む、亀をして千万年の「時劫」と「霊習」と「空間」との象徴体となすところのもの世界に以ては日本国を元祖となす、

松を見よ、その針の如きみどり葉はしんしんとして空をさし、光をさし光をとぎ、あらゆる合掌祈祷体なる心理を象徴す、梅は白金香木の梅、雪ふる空にくんいくたり、ああさて竹のするどさを何にかたとへん、青竹、天上し、青竹をすべるの魚鳥、竹は竹の光、みがかれたる植物の霊、地面に生え、地面に生え、氷れる冬をつらぬきて、するどき竹は天を指し、するどき竹は天を指し、

竹の根はまつしぐらに地下に垂直す、その根はけぶる迷走神経、くらき底にもけぶれるものを、ああわれら哀しみきはまり、細きさびしき竹の根の繊毛にうちふるえ、うちふるえ、涙をながし、

あほげば不二の高峯はさんらんたり、その頂にも花鳥をつけしめ、更に粉雪をしてふらしめ、松竹、天にあり、純金の亀は麓にあり、この頃白秋法悦し、もはら不二山合掌体なる光景もやんごとなき、
ああうららかなる哉日本国
蒼天あらはれ
蒼天ひろごり
海は遠くはてしなく、浪々空にさへわたり、
浪々松原をこさじとは、

日本を超え日本なし、西洋美しといへども、日本に及ばず、況んや日本の詩に及ばず、ヴルレー又、マルメラの徒さかんなりと雖もかつて物質の核心を知らず、宇寅ののの全重量を知らず、亀を知らず、つひに概念と説明をいでざれば、況んや新人萩原朔太郎氏をつゆだに知らず、
詩はただ世界に一つあり、
歴史以来こゝにたゞ一つあり、

おがみ奉れ、日出太陽の国、天孫足をたれ給ふ鶴亀の国、
松竹天をつらぬく祈祷の国
ああ万国に蝕光せしめ、
ああ菊をして、桜をしてあまねく世界の玉冠たらしめんことを、
みよ光は東方にあらはれ
万有リズムの発見者
ラヂウム新派科学の発明者

電流死刑の張本人
天上蓋死の第一人者たるものを、
高く　さらに荒々しさを加えてきた

転読

吉本青司

ぼくは仏教徒ではないが　外国からきた友人
　たちと
五台山竹林寺の御開帳を拝観した
葉ざくら雨のふる日だつた

あらあらしく如意を鳴らしてゴマをたく僧
経冊を扇のように開閉しながら
大般若六百巻を高誦する荒法師たち
薄暗い伽藍のなかに詩劇的な興奮が起つた

やがて厨子が開かれ　獅子にのる文珠菩薩が
　君臨した
左手に一輪の花をささげ　右手に剣を持ち
清浄な微笑さえ浮かべたこの童心像は
宇宙の知恵をつかさどる秘仏である

開帳につれて　たくさんの奉仕の僧侶は熱狂
　し
キン　ケイ　タイコの音にまじつて大般若転
　読の声が
ぼくのかたわらには
日本好きの母に　絣のきものを着せられて
ツルギと名づけられた青い眼の童子と
赤い振袖を着せられて
ハナコと名づけられた金髪の童女がいた

片言しかしやべれないツルギは　まなざしを
　厨子の方にむけ
強くひとことヘシシ〉といつた
ハナコは黙つて　不滅の法燈に照らされる菩
　薩の像を見まもつた

ぼくは
〈在りしとも思えぬほどのはるけき国〉の幽
　玄を
讃美する外国の信者といつしよに
夢幻的な詩劇の主宰者　騎獅童身仏のことば
　を聴いた
〈花はひとに剣はこころに……〉

くにぐに、たみたみのめぐみいまはや我等のうへにあれ、世界一列、こぞりてみよ、この黄色き顔の詩人をみよ、
世界万国のわれらのまへに頌歌せよ
うららかなる哉日本国、
尊大なる哉日本人、

〈この詩的散文は、詩の「亀」「竹」などの詩語がそのまま出てくる所があるが、これを書いたのが「竹」の制作より前であつたか後であつたかは、いささか関心をひかれる問題であるけれど、それが殆んど同じ頃であつたには違いないし、詩「竹」（第二）の原形に、ことさらしく「一月元旦」と付記したことと、この作品を書いたこととの間には、意識の上において関連があると思われる。そしてこの作品はこれらの詩の註釈の意義をも含んでいる。この時期の朔太郎詩の亀とか竹とか松（詩「松葉に光る」「天上蓋死」）とかいうイメージの、その発端の次元には、伝統的な「松竹梅」や「鶴亀」や「不二山」などが現わすような意識があつたこと、或いは言つてみれば、「亀」「竹」「松」などの字が多くの姓名にも用いられているような、そういう日本の精神的風土をふまえたものであつたことがわかる。その意識は、この作品の中では、「うららかなる哉日本国」という「お正月」のようにおめでたい言葉を三度も書いているような、そういう形で、北秋白秋につながるものであることをも示している。しかしそういう意識の次元からまつすぐに「竹」などの詩が産出されたわけのものではなかつた。それ

果樹園　一〇二号　昭和三十九年八月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

果樹園

第102号

詩人、その生涯と運命　小高根二郎
伊東先生の思い出　中川邦夫
「羨望」の思い出　三好隆
コ゛ギトの思ひ出　田中克己
ドクダミ　堀之内歴
わが詩の遍歴　浅野晃
教生　吉本青司
浄罪詩篇ノオト　竹越三男編
ヘリック詩抄　森亮
墓地にて　浅田二三男
編輯後記

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄　九十

小高根二郎

昭和二十八年（1953）

正月、伊東は頭髪をくしけづり、衣服もさっぱりと着換へ、水仙を生けていかにも改まつた気分で新年を迎へた。お節料理も家から届けられ伊東は満悦の表情で箸をつけた。

「今年こそは少しでも好くなれば気分転換のために転院をしよう。もつとよくなれば九州にも帰つてみよう。」

と言つて、家族の胸に初日のやうな希望の光を投入した。

松の内明けに花子夫人の代筆で清水文雄氏に次のやうな書簡が送られてゐる。

「いつもやさしく御尋ね下さつて誠に有難くうれしく存じてゐます、去年の暮からいくらか好くなりつつある様でたのしんでをります、二月号の「文芸春秋」に短詩を書きました。こんな日がつづくとよろしいですが——

何卒御自愛下さいませ。　伊東静雄代」

（一月八日、大阪府長野町国立病院より広島県深川村、清水文雄宛はがき）

この書簡は去年の暮以来の好調を伝へてゐる。あまつさへ「文芸春秋」二月号のために「長い療養生活」を執筆したのである。よほど気力も恢復したかに想像される。

長い療養生活

せんにひどく容態の悪かつたころ。

深夜にふと目がさめた。私はカーテンの左のはずれから

白く輝く月につよく見つめられてゐたのだつた。

まためさめる。矢張りゐた。今度は右の端に。

だいぶ明け方近い黄色味を帯びてやさしくクスンと笑つた。

クスンと私も笑ふと不意に涙がほとばしり出た。

「伊東静雄詩集」

伊東はもはや月と無言の問答をしてゐる。

〈せんにひどく容態の悪かつたころ〉とは、ヒドラジッドを起用する直前の昨年の二三月頃のことであらう。伊東は二度目に顔を合せた月とクスン……と笑ひ合ひ、笑ひ終つて涙を流してゐる。

死後、大毎に発表された「倦んだ病人」も同じく夜間に目が覚めたときの場面をうたつた詩であつた。分厚い闇を死の領域だと錯覚するが、やがてそれは停電中だつたからだということが判つて、ひとりしのび笑ひをする作品だつた。一昨年の春に書いた作品であつた。マイシンとパスの併用を始めた頃で、病中での最も好調期に向はんとするときであつた

この「倦んだ病人」頃には、死の錯覚に対

果樹園　一〇一号　昭和三十九年七月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

詩人、その生涯と運命

—作品と書簡から見た伊東静雄—

小高根二郎

〈……堪へがたければわれ空に投げうつ水中花。金魚の影もそこに閃きつ。　すべてのものは吾にむかひて　死ねといふ、　わが水無月のなどかくはうつくしき〉　近代詩を極北にまで追いつめながら、詩壇のみならずおよそ日本語を解するいかなるひとの胸にも響く絶唱の数々を遺して、敗戦後の混乱期に、なほ生きようと努力しつつ、病いに蝕つた敬虔な心の詩人、伊東静雄の生涯と文学を、詩・書簡・日記を交え、評伝に書きなした作品。昭和三十年に起稿した著者は、伊東の精神にしたがい書間は世俗の勤めを果たしながら暁の星を載いてこれを書きつづけ　三十八年暮に完成した。伊東の青春から晩年に及ぶあの非常の時代に、繊細脆弱な伊東が、歌うというだけの希望と営為によつて、いかに懸命に生きようと努力したか？　その精神の歴程と肉体の足跡を克明に書きしるし、「僕等は若い日に亡びる美しさを讃美し歌いすぎた。その読罪のためにも生きながらえる美しさを今日讃えねばならぬ」という著者の悲願の書である。

新秋刊　新潮社

は日本の伝統に根ざしながら全く新らしい詩的次元を開いた。「浄罪詩篇」の時期の彼のいわゆる「疾患」の詩的意識は、国粋的なところもあつたけれど、それよりも白秋的「うららか」意識の分離と切捨とに、より積極的な意義を含んでいた。しかしこの「愛国詩論」は、そういう朔太郎的なものと、白秋的なものとの、妙な混交を示している。そういうことから、この作品が「竹」の完成よりも前に書かれ、むしろその制作過程において切り捨てられたものにより多くつながつているように、私には思われるのである。〉

〈次の部分は「愛国詩論」に続いて書かれているが、独立した「日本人の紋章」と題する作品かもしれない。〉

日本人の紋章こそ金糸をもて縫箔せられたる
紋章なれ、もとより大和民族幾代の象徴生活
ばかりもの珍らしくやんごとなきはあらぢかし、
さればよにたぐひなきこの国民の生活　紋章
をこそ鶴、亀、松、竹、梅及至不二の高峯と
こそ申すなれ、
かたじけなさのきまみ（ママ）ならずや、
あにこの光明休なるものを

—日本人の紋章—

〈以下はノートの末尾から逆の順序に写す〉

編輯後記

四月一七日。富士正晴氏より彌生書房版「伊東静雄詩集」が秋に刊行されるとのたよりをいたゞいた。さういへば「文学」四月号に東洋大講師の桶谷秀昭氏の「伊東静雄論」が発表された。死後十年……伊東の声価はいよいよ加はつてきたやうである。

四月二八日。久々に来阪した森亮氏と歓談した。百号記念号の原稿〆切の繰上げの連絡を僕が洩らしたらしく、今号に掲載した記念原稿を持参された。申訳ない失態だつた

四月二九。田中克己氏より転居通知があつた。

東京都杉並区阿佐ケ谷一丁目八七〇

五月二日。会員都英衛氏のあつせんで伊東の教へ子、吉村弘、中川邦夫、神垣忠、他一名の諸氏とお目にかゝつた。貴重な懐旧談をお聞きした上、中川氏宛伊東書簡、伊東が吉村氏のために書いた座右銘を拝見した。

五月六日。勤務先の用務で上京した。夕刻余暇を得て事務打合せに新潮社に片岡久氏を訪ねた。辞去して勤務先の者と会同をもつてゐた頃、巨樹——佐藤春夫先生は倒れたのである。真夏をおもはす暑苦しい夕だつた。

五月七日。集英社に出版部次長金沢一氏を訪ねた。伊東の戦争詩七篇を「戦争文学全集」に収録することに関し相談をうけてゐたからである。氏には二二年前、拙著「濱木綿の歌」を小学館から出版した際お世話になつてゐた。戦後「詩風土」で同じ同人だつた。そのくせお会ひしたことなく今度が初対面だつた。掲載の詩を餞けて下さつた。（O）

果樹園　第一〇一号（毎月一回一日発行）
昭和三十九年七月一日発行
編輯兼発行者　池田市野町一六八　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五の八　元市印刷株式会社
発行所　池田市野町一六八　果樹園社
定価　四十円　送料　十円

しても、ウッフッフッフ……と笑ひを押し殺すだけの生命の余裕を持つてゐた。しかし今度の「長い療養生活」では、もはやその余裕はなく、クスン……と鼻の先で笑ふと泣いて了つてゐるのである。伊東の生命力に較段の相違ができてゐると見ねばなるまい。

清水氏宛に代筆の書簡が送られた四日後の十二日に、伊東は突如として大喀血をした。喀血はその日だけであつたが血痰は二三日続いた。栄養剤、止血剤が注射され一時は酸素吸入までほどこされた。決定的な衰弱に加へるに、胃にひきつるやうな疼痛が襲ひ、咽喉部には圧迫的な緊迫を惹起した。この緊迫が起ると、絞られるやうな呼吸困難の恐怖に陥り、伊東は鎮痛剤を求めた。鎮痛剤を呑むと緊迫から逃れることができたが、今度は胃も腸も機能を停止した。そこで消化・吸収の促進剤を服用したり注射すると、先ほどの疼痛と緊迫がぶりかへした。この悪循環は一ヶ月あまり続いた。

二月二十一日の大雪の日、医師大東勝之助氏と幸子さんが重態と聞いて駈けつけた。大東氏は伊東の悪循環的な症状を知ると、既述した自殺行為にひとしい薬餌の乱用について重大な警告をした。薬で肝臓が荒れ果ててゐるので肝臓を洗ふことが急務であると説いた衰弱を補ふために輸血、急を要するときにはプラスマ(水血漿)を注射すること。胃病は肝臓障碍の現れだらう……と、当面の新しい止痛剤の名も教へてくれた。

この頃担当医の交替があつた。健康を害した前任者に代つて俳句を作るF医師が担任することゝなつたのである。診る者診られる者、同好者としての相互の親近感は、医療以上の效能をあらはすこともあらうかと、伊東自らはもとより、花子夫人も期待をかけた。が、時はすでに遅かつた。栄養注射もプラスマも一時的な效果を発揮するだけで、衰弱は日増しに加はり、緊迫は一層頻発する憂慮すべき段階に入つた。そのたびに打たれるオートンは一管では效かなくなり、いつか二管となり、やがて食前食後の六回、つひには三十分おきという状態になつた。それに心臓も弱まり、早まる呼吸を整へるために、新たに強心剤も加はつた。腕、肩、股、打てるだけの個所は針の洗礼を受けた。

「どこに肉が残つてゐるかなあ…」と、ひとごとのやうに呟きながら、華奢な指先で腕のあちこちをさぐつた。「こゝは処女地だからきくでせう。」と伊東は冗談を言ひながら比較的に注射度数の少い肩を脱いで、看護婦にさし示した。

以上は危篤に陥るまでの症状を花子夫人の「病床記」にもとづいて多少改筆したものだが、臨終の模様はその「病床記」によつて正確に伝へたい。

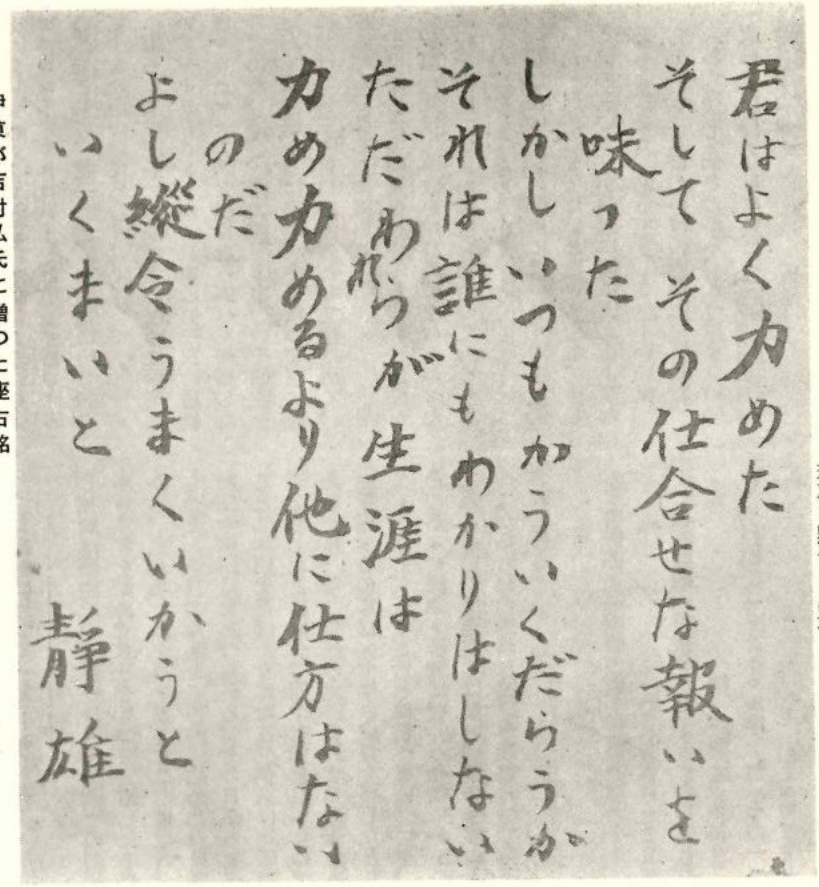
「亡くなる前日も、私達が枕辺にぐるつと取巻くと『そんなにしてゐると死なねばならぬぢやないか、まあ皆さん、自由にしませうよ』といつて私達を苦笑させたものである。云へる中に云つとかうかなあといつて亡き父母兄弟のお戒名を唱へ、姉弟私に各々挨拶をした。それも大変明るい調子なので涙を忘れるほどであつた。こんなにしつかりしてゐて、こんなに元気なのに、やがて死といふものが来るのかと、つひ涙ぐむと却つて叱られた。『泣いてはいけない、感傷的になつてはいけない。最後まで頑張りますよ、死なないよ』と。それにはげまされて又元気を出して看護を続けるのだつた。

亡くなる三十分前自分から手を合せて胸元へもつて来た。多分あの時が自分の生命に対する責任? を我から解いたのではなからうか。それからは実に静かに安らかに死の国へうつゝて行つた。

三月十二日午後七時四十二分、四十六歳

であつた。(昭和二十八年、「祖国」伊東静雄追悼号、「伊東花子病床記」)

つぎつぎに若死をした三人の兄達にくらべ若死を懸命に忌避した甲斐があつて、遙かに年寿の数を加へ得たわけである。



伊東が吉村弘氏に贈つた座右銘

吉村氏は非常な努力をして伊東の母校である佐賀高校の受験に合格した。伊東は喜びのあまりこの座右銘を贈つた。

屍は病院附属の火葬場で荼毗にふされ、遺骨は花子未亡人に抱かれ、遺子夏樹君、まきさんに守られて、一週間後に待望の帰郷をしたのである。読者はこゝでセガンチーニの「帰郷」のタブローを思ひ出さないであらうか? 山麓の教会をめざして曠野をよぎつてゆく柩車……。夫の柩に、妻は身をもたせかけつゝ、よゝ……と泣いてゐた。時と所は違へ馬車と汽車の相違こそあれ、帰郷の悲痛な姿と心境は同じである。

わが死せむ美しき日のために
連峯の夢想よ! 汝が白雪を
消さずあれ
息ぐるしい稀薄のこれの曠野に
ひと知れぬ泉をすぎ、
非時の木の実熟るる
隠れたる場しよを過ぎ
われの播種く花のしるし
近づく日わが屍骸を曳かむ馬を
この道標はいざなひ還さむ
……

まさにヘルダーリンの「帰郷」(Rückkehr in die Heimat)の〈さらば! 故郷の

空よわが命を取れ、また祝福せよ！〉と絶唱した貴いオクターヴと荘厳な韻律さながら、カタコン！　カタコン！　と擦過するレールの軋音と共に、花子未亡人の胸裡に鳴り続けてやまなかつたであらう。

霊名・文林院静光詩仙居士となつた伊東はいまやキリシタン・バテレンの第三次の殉教者ルカとマチアスと枕をならぶべく帰郷したのである。藤村、朔太郎……、いや西欧と対応する意味からは鴎外、中也につぐ現代詩における第三人目の殉教者として睡るべく、はるばる帰郷したのである。

三好達治氏の明達をもつてしても、なほかつ伊東の死後に不敏を詫びねばならなかつた次の事実は、伊東の殉教を物語つてあまりあるものでないであらうか？

「私は当時伊東の詩風には少しく同感を欠いた。反感とまではいわないまでも、少しく彼の歌いぶりが演説口調に聞えるような心もとなさと、ある空々しさ――いい気らしい一足とびのかげの脱落とを感じた。（私の不敏と低さとから、と今はそういい改めなければならない）」（「大阪毎日新聞」昭和二八年三月二三日、三好達治「伊東静雄君を悼む」）

〔完〕

完結に当つて一言……

拙論は昭和三十一年一月「果樹園」の創刊から連載を始め、本号をもつて完結したのだから、丸八年と八ケ月を要したことになる。もつとも資料の蒐集を本格的に始めたのは昭和三十年四月であつたから、その日から数へると九年四ケ月ばかりになる。伊東は比較的若死をしたとはいへ、四十七歳を生きたのであるから、その生涯の足跡を追求し運命の糸を探索するのにほゞ十年の歳月を要したとしても、決して長すぎたとは言へまい。いや、その追求と探索―研究はむしろ今後にかゝつてゐるといつて過言ではない。幸ひ今年に入つてからも次の秀れた論究が月をおつて発表されてゐる。

菅野昭正「曠野の歌―伊東静雄」（「現代詩手帖」一・二月号）
桶谷秀昭「伊東静雄論――その自我と抒情の変貌」（「文学」四月号）
平井俊夫「トラークル序説」（その一）（「架橋」五月号）

菅野昭正氏は明治学院大学仏語科講師である。論ずるところは伊東・ヘルダーリン論の一種で、筆致は正確で思惟も深い。

桶谷秀昭氏は東洋大学英文科の講師で、日本ロマン派の側面からの伊東追求に、今後の興味が待てる。

平井俊夫氏は、京都大学教養学部の独逸語科の助教授で、若くして死んだオーストリアの詩人ゲオルク・トラークルと伊東を比較してゐる。伊東・ヘルダーリン、伊東・リルケ論者はすでに幾人かゐる。伊東・トラークル論は初めてなので、その意味でも意義は大きい。

この三氏は恐らく伊東の生前に相見たことのない人々である。それだけに僕らと違つた清新な眼で伊東を見、彼の本質に迫るであらうことは確実である。新らしいこれら伊東の論者たちがすべて知性に於て最高の人々であるということは、今後における伊東の生命を保証するやうなものである。これらの人の教へ子や弟子達が、また伊東を語り継ぐことになるからである。拙論はその最低辺にうずくまる踏み石の一つになりうれば満足である。

それにしても十年に近い間、資料の蒐集やら、調査、作品や書簡の解説に多くの先輩・知友の方々から幾多の啓示や示唆や叱正をいたゞいた。拙筆を途中で放擲させぬための深い愛情からであらう……幾人かの権威から賜つた鞭撻の言葉は生涯忘れることのできない感激であつた。芳名をこゝに掲げて深甚な謝意を捧げる。

池田勉。板倉鞆音。伊藤信吉。伊藤花子。井上靖。橋川文三。林房雄。林富士馬。大山定一。小野十三郎。河盛好蔵。川副国基。蒲池歓一。上村肇。田中克己。高橋重臣。中河与一。野間光辰。桑原武夫。栗山理一。久保忠夫。矢野禾積。安田章生。富士正晴。福地邦樹。福田清人、小久保実。頴原芳枝。江藤淳。安西冬衛。斉藤清衛。酒井ゆり子。三枝康高。三島由紀夫。三好達治。宮本新治。御園京平。清水文雄。庄野英二。庄野潤三。島尾敏雄。清水孝之。寿岳文章。久松潜一。森亮。杉本秀太郎。（敬称略、いろは順）

伊東先生の思い出

中川邦夫

空襲も次第に激しくなつた昭和二十二年一月末の或る日、急に我等学徒動員生に北攝へ防空壕用の松丸太伐りを命ぜられた。もちろん組主任の伊東静雄先生引率のもとに……。

当時は何もかも不足していたが、仕事が仕事だけに、食糧――特に米と味噌だけは十分持ち、トラックに寝具もつんで十数人で出かけた。先づ宿所の陽松庵という禅寺へおちつき、その日より約二里ばかり奥の止々呂美村へ木を伐りに行つた。

なにぶんあまり丈夫でなかった先生には、栄養失調もあってあまり御元気であったようでなく、我々とても若さだけで働いている感じであった。陽松庵は全国に聞えた名刹とかで、戦前には多くの雲水もいた由だったが、当時、老師と飯炊きの少女の二人きりであった。老師たるやまことに円満な人柄に見受けられ、その物語られる一句一句が随筆さながらで、伊東先生もたびたび感心してをられた。

丁度、先生の御両親様のどちらかの年忌に当っているとかで、先生の生家も禅宗だったのだろうか、その老師に回向していたゞかれた。そのおさがりだといって蜜柑等を夜伽の席に持参されたことを思い出す。

その蜜柑で思い出したが、我々が動員されていた神武八九〇〇工場昭和起動機K・Kから慰物品として生ビール一樽が持ち込まれたことがあった。教師一人に生徒十数人としてジョッキ数十杯分に当る。それに菫酒不許入山門の禅寺のことである。つきだしもなしで呑めるだけはこっそり呑み、残った分で手足を洗い、なほ残った分は翌朝燗をしてみた。なにぶん一月末の極寒のこと。しかも大阪の北海道……北攝の山中ではたゞのビールでさえ腹に泌みたので、せめて熱燗にでもしてみたら？　と無い知恵をしぼったまではよかったが、泡が景気よく立った後はたゞの水になり、結局裏の池に捨てたのは、今おもっても惜い笑い話であった。

三日目頃からは雪になった。その年最高の大雪とあって、予定をのばさねばならなくなった。雪のため野菜の補給は断たれ米と味噌だけの数日はさながら戦地であった。伊東先生は愛煙家であったから煙草の切れたことは野菜が切れた以上の苦痛であったようであるニコチン中毒というのであろう、手がふるえ、食欲不振となった。はた目にたえないほどだったので、我々はお寺中の火鉢をぶちまけ、一糎にたりぬタバコを先生のために探したのだった。後年国立病院長野分院でお目にかゝった先生が、煙草を止めたよと言われたとき、小生は陽松庵でのモク探しを思い出した。

夜は底冷えがした。こたつとてない当時、小さな火鉢の炭火は先生に何をさゝやいたかぽつりく、九州の生家の思い出話を聞かせてくださった。食糧も底をつき、雪も少しく小降りになったので、意を決して寺を下りて

昭和19年4月　伊東が担任だつた住中二十期・虎児気組

帰阪することになった。禁断症状の先生には生徒二人が代る〳〵肩を貸し、ふらつく足を支えねばならなかった。一里余りをそうして池田まで歩き、そこから阪急電車に乗り曽根駅で途中下車した

駅前の川上富三君（父君は当時代議士）の家にたちより煙草を無心するためである。当時は青年男女一日三本の配給だったが、さすが川上の家には沢山あったようで、先生は二三本……吸うというよりかぶりつくように喫煙された

その後しばらく横になられ、やっと夕方帰阪した始末だった。

しかし工場動員になってからの教師と生徒は、父子のような生活が多く、教壇の先生よりもはるかに親近感が溢れていた。それでも悪戯ざかりの生徒は、何か気にいらぬことがあると、昼食（これは工場給食）時に先生の食器に自らの頭のフケをふりかけた。白米でなかった当時としては少々混ぜてもわからなかった。かんの鋭い我等の親父にも、この悪戯だけは見破れなかッたらしかった。

教師としての先生は実にこわかった。授業時間には鞭様の竹刀の竹の一本を持ってこられ質問中に生徒がうつむきなどすると、顔を正視できるよう……鞭の先で下顎を支えたりした。特に文法はきびしかった。寝言に今も活用の暗誦なぞやる友人がいるそうである。アルハベットのA・B・Cは言えるのに、あ・い・う・え・おを言いよどんだりすると、よく日本国民でないと罵られたり、修身の時間なぞもそれらしい説教はなく、じきに修身教科書の文法的解釈が多かった。

たま〳〵教室で学校へ出すお金なぞを集める場合、先生はよく前列の生徒の帽子を使われた。その様子が街頭の乞食そっくりで、伊東先生のニックネームに「乞食」とついていた原因は、そこらにあるんではないかと想像

した。

詩人である先生が音楽部の部長であったことも、住中デカンショ節に三文文士云々と歌われていたことも今はなつかしい思い出である。

一番最後にお目にかゝったのは昭和二十八年三月一日で、症状はすでに喉頭にきていて顔色も少し赤みを帯び、余命いくばくもない感じを抱かせた。奈良から河内長野までよく見舞いにきてくれたと喜ばれ、かえって励ましのお言葉を頂戴したが、思えば死の十一日前のことだったのである。

「羨望」の思い出

三好　隆

「せみの声がうるさいようでは日本の詩人にはなれないよ」という伊東先生の言葉は、詩「羨望」が作られた時から二十年以上経た今の私の記憶にはない。それどころか、商業主義の流れの中でサラリーマン生活の棹をさしている今の私には、少年時代に詩人志望であったかどうかさえ定かではない。

高校受験の浪人生活を淡路島の海岸で過ごしたあと、夏の間に仕上げた木彫の作品一体と、海辺で集めた色とり〳〵の小石をたずさえて堺市の先生宅の玄関に立った私を、浴衣に兵児帯まきつけた先生は例のひたいにかゝる長髪をかき上げながら招じ上げて下さった。青春の乞食の時代であった私は文学のこと、詩のこと、恋愛のこと、女性のこと、そして人生観について餓鬼のように問いかけ、もっぱら聞き役に廻った先生は立てひざにあごをのせ、吸いかけのゴールデンバットの火を次の一本にうつし吸いつぎ、うず高く積った灰皿を前にあの独特の口調でボツリボツリ、考え考え年少の友人に説き話された。乾いた苔が滴を吸い取る様に先生の話しは、私の餓えた心の隅々を充たしその後何年もの間、高校生活、学徒動員、職場、戦後の索漠たる大学生活の間どんなに私の心を勧まし、支え、慰めてくれたか。私は詩人を志し度いと口をとがらせて言ったのかも知れない。「詩人にはなれないよ」と先生はせみのことにかこつけて詩人を志すなと言われたのではなかったか。

日が落ちて夕立が来、私と先生、花子夫人とまき子ちゃん、まき子ちゃんは歩いていたのか抱かれていたのか記憶にないが夫々の傘に入って銭湯へ行った。男湯の電気風呂という仕かけつきの浴槽に浸りながら、「オーイ花子ォ、出るよー」と張り上げた先生のドラ声に、境のへい越しに「ハーイ」と返って来た花子夫人の声に私は無聞と感動した。とても羨しく、あの時の言い様のない羨しさは忘れ得ない。

詩「羨望」の中に述べられた先生の羨望はひたむきな訴えの中に感じ取られた何かだったのだろうし、私のあの時の羨望は人間関係の中での心と心のよりそいに対する単純で素朴なものに過ぎなかったのだが、夫々決して異質の羨望ではなかったと思いながら伊東先生の詩を読むと、詩心のない私にも恐らく詩心豊かな他の誰よりも深い感動が訪れて来るのである。

コギトの思ひ出

田中克己

病気で書きかけたままの前稿よみ返して気がついたが、同人の義務中には、編集、印刷（校正をも含む）の大仕事をぬかしてゐた。さて編集はほとんど保田が手早くやってくれたが、印刷の方は肥下が責任をもった。創刊号から二五号までは野方町上沼袋一五日本印刷学校といふので印刷してゐるが、ここは肥下が見つけたのだと思ふ。何とかいふ宗教的な団体の経営で安価なうへ、係になってくれ

た人に赤川草夫氏といふのがゐて、ひどく誠実な人で親切にしてくれた。この人はのちに詩人だとわかり、コギトにも一、二度書いてもらつてゐる。ここへ肥下が通つて再校、三校までやつた。もつとも初校は在京同人が集つてそれぞれ手分けしてやつたが、肥下は校正に実に熱心で、誤植を実に気にし、これがないのを自慢にしてゐたと思ふ。

前にも述べたやうに肥下は富豪のむすこだつたが、実は父祖の財産を受けついだのではなく、堺の肥料問屋のあとつぎになつたので先代の死後相続だつたかと思ふ。肥下といふ珍らしい苗字はこれで帯びることとなつたが、肥下の代には商売をやめ、土地邸など莫大にもつてゐたのである。その中の宅地が肥下の出征中になくなり、農地は不在地主として小作に取られ、肥下家の財産は彼一代といふことになつたのを、肥下はひどく気にしたこれはコギト創刊当時にはもとより予想もされなかつたが、そんな性質の彼なので、もとより文学は好きだつたが、コギトにこんなに熱心だつた一面には、不労所得の財産をすこしでも有益に使ひたいといふのがあつたのだと思ふ。慈善事業に寄附したらだつて、われわれは若いころには、さういふ風には考へなかつたのである。

創作にも不熱心ではなかつた。日本印刷学校から四谷の杉田屋へ印刷所を変へるまでがコギトの第一期であるが、この二五冊の中、肥下は一七冊に創作（その少数は詩）を発表してゐる。毎号かかさなかつた点では保田だが、創作ではこれも故人となつた薄井、杉浦の二人とあはせて最熱心であつた。杉浦の創作については、この間よそに書いた。肥下の小説の方が同人たちにも好評だつたが、も一つ押しが足りなかつた。ケレンの味のないまじめな性格がわざはひしたのだと思ふ。

評論欄は保田、中島のほか三号から松下武雄が書きはじめ、三人ともほとんど休みなく書いた。しかも認められること早く昭和八年の「思想」の特輯芸術論に寄稿を求められた谷川徹三さんに認められたのだと思ふ。谷川さんは三人の中でも、中島を一番好んだと見えて、その直後、再び寄稿を求められた。私は「コギト」のため、中島のため大喜びしたことを覚えてゐる。「思想」はそのころ、それくらゐ権威があつたのである。

やはりこの年の夏か、それとも前年の夏かに、発行所へ無名のハガキが来て、コギトの詩よろしい、しつかりやれとの意味だつた。消印は大阪の住吉で、夏休みに休暇した私が中島に会ふと、大阪高校（旧制）の前の本屋

第二回配本　7月12日

白楽天

田中克己

（井上靖）

今日残つている漢詩のすべてのものは、その歴史的背景の知識なしには、その本当のよさも面白さも理解することはできない。一篇の漢詩は一篇の短篇小説のようなものである。一人一人の人間の生きた心が、中国の長い歴史の、その時代時代に、これこそ誰も疑うことのできぬものとして坐っている。「漢詩大系」の長所は、それが生れた歴史的背景に懇切詳細な解明を与えている点である。

漢詩大系全廿四巻

一二〇〇円

東京神田　集英社

に配本にゆくと、毎号一冊売れており、本屋にきくと「買手は住吉中学の先生で伊東といふ人、私どもにもしつかりやるやうにと伝言たのまれた」と聞いたとのことである。このころコギトに詩を書いてゐたのは杉浦、中島と私とだつたので、二人で相談して本屋にところを教へてもらひ、天下茶屋の伊東先生宅を訪れた。幸ひ在宅して来意を通じると会つてくれ、ハガキや伝言と同じ意味のことをくりかへし、自分たちで出してゐる雑誌「呂」といふのをもつて来て見せた。なんだ呂の詩人だつたのかと私もうなづいた。コギト発行所へ送つて来てゐて、私は愛読していたのである。呂の同人はやめなかつた中に、寄稿してもらつたのが、十五号（昭和八年八月発行）で、そのすぐあと同人になつたのだと思ふ

こんな風にややおくれて同人になつたのが高校で一級上だつた野上吉郎（石山直一）、三浦常夫（実名小高根太郎、二郎氏の実兄）の二人である。反対にだんだん怠ける者も出来て昭和九年の六月号、すなはち同人の大部分が大学を卒業した月は、執筆者わづかに七人、その前号も九人で、コギトもなんとか考へねばならないところへ来てゐた。東京に残つた保田、肥下によつて打開の策が建てられコギトは二六号以後、全くちがつた体裁となる。

（以下次号）

ドクダミ

堀之内　歴

毒だみの白い花が咲いていた
はや六月　ながい宵しろは
病人の心もとなさだった
小さいが気品と厳しさに充ちた花だった

昔ふるさとで　何処の裏でも
生え　咲いていたものだった
赤い蛇苺の実と白く汚れた毒だみの花は
なにか不吉な予感にみちていた
国破れて二十年　狂う都会で

私は真昼の星を捜しつづけていた
そんなものが見当らない疲労の中で……
それが今日見付かったのだ　路傍の庭に
星たちは　暁け方そっと空をずれると
悪戯に　地上の隅っこへ隠れていたのだ
そんな隠れん坊はすぐ見付かる筈だった
不吉な毒だみの花に宿っていようとは…

あゝ六月　毒だみに白い花が咲き
尋ね疲れた昼の星で　それがあろうとは
消え去った我が年月の一切が　いま
つぶらに白く此方を向いているのだった

—一九六四・五・二九—

わが詩の遍歴 (4)

浅野　晃

この稿をついでゐる間に、わが師、佐藤春夫先生が、忽焉として急逝せられた。あまりに急な出来事であつたので、いまでもまだ信じられないやうな気がどこかに残つてゐる。先生の『殉情詩集』のなかの「ためいき」の第三節に、

ふといづこよりともなく
君が声す
百合の花の匂ひのごとく
君が声す

とあつて、わたくしの愛誦するところだが、ふといづこよりともなく、先生の声がするのである。しかし事実は、「マロニエ花咲きぬ

」で先生が歌はれたそのマロニエの巨木に白い花が一杯に咲いたときに、先生は逝かれたのであつて、先生が安らかに眠つたままの棺の中に、人々はそのマロニエの花をつぎつぎにさし入れた。先生の大いなる眠りは、マロニエの花に埋もれた。

先生の知遇を得たことは、もとよりわたくしの生涯の一大事であつた。その機縁を与へてくれたのは新日本文化の会で、これが生まれたのは昭和十二年の夏である。佐佐木信綱横山大観、柳田国男、長谷川如是閑、武者小路実篤などの長老から、ひろく文化の各界の士を集めたものであつたが、この会がはたして何か仕事をしたかといふと、わたくしには答へが出来ない。けれど、この会の月刊機関誌として出た『新日本』だけは、大いに活動した。この雑誌の編集を主宰せられたのが、佐藤先生であつた。わたくしも編集委員の一人であつた。先生としたしく相会する機は、このやうにしてわたくしに来た。

わたくしの詩の遍歴に於いて、わたくしは格別に先生の詩に傾倒したといふことはなかつた。わたくしは先生の『殉情詩集』を愛誦したとおなじく、萩原さんの『月に吠える』を愛誦した。いま大正詩史年表によつて、わたくしが中学から高校時代にかけて読んだ詩集の名前を想ひ出すと、荷風の『珊瑚集』、露風の『白き手の獵人』、寛の『りらの花』、鴎外の『沙羅の木』、暮鳥の『聖三稜玻璃』耿之介の『転身の頌』、春月の『霊魂の秋』大学の『昨日の花』、元磨の『自分は見た』健、精峰、初雄合著の『海港』、峰人の『黙祷』、砕花の『草の葉』、八十の『砂金』と『白孔雀』、順子の『聖水盤』、杢太郎の『食後の唄』、不二の『悩める森林』、幸次郎の『展望』、春声の『韻律と独語』、敏の『牧羊神』、光太郎の『明るい時』、武郎の『ホイットマン詩集』など、みなそれである。

そして、『殉情詩集』も、『月に吠える』もこれらのさまざまの詩人のさまざまの詩集のなかの一つとして、わたくしの記憶にとどまつてゐるのである。

けれど上記の著のうちから、つよい感銘をうけたものを選び出すことは、不可能でないやうだ。例へば寛の『りらの花』は、彼のバリみやげともいうべきもので、当時のフランス詩壇のめぼしい作品を片端から訳し放したものであり、その多くは象徴派の作品であるが、なほ新声を伝へたものも少なからず、わたくしたちは随分熱心に読んだものであつた『沙羅の木』ではデーメルがあざやかな印象を残してゐる。「昨日の花」では何といつてもサマンだつた。わたくしは一時サマンに夢中になつた。また『牧羊神』では、ラフォルグであつた。中谷の『梶井基次郎』に、彼らが好んでラフォルグの『日曜』を口づさむところの描写がある。もつともわたくしに結局いちばん深い感化を及ぼしたのは武郎訳のホイットマンであるが、これはしかしごく長い時間をかけてのことであつた。

以上は訳詩についてであるが、創作詩では元磨の『自分は見た』、健たちの『海港』、春声の『韻律と独語』などが、とりわけはつきりと想い出される。また『黙祷』は、著者の矢野さんから、ぢかに頂いたこととて、鮮明な記憶がある。まだわたくしが三高の生徒であつたころ、同組の小方又星と二人で、矢野さんのお宅を訪れたとき、署名して下さつたのである。わたしらはそのころ、目ぼしい詩集は、出るにしたがつて手にしてゐたものらしい。先生の『殉情詩集』も、このやうにして一時はわたくしらを熱中させたのである。

けれどもわたくしを夙くから先生に結びつけてゐたものは、他でもない『痛める薔薇』であつた。すなわち『田園の憂鬱』であつたいまでもわたくしは、この一篇を、好んで読む。先生の代表作は、やはりこれだと思ふ。わたくしの記憶は必ずしも確かとはいはないが、天佑社から出た先生の第一短篇集『痛める薔薇』は、いつもわたくしの机上にあつたこの本が出たのは、年暦によると大正七年の十二月である。わたくしは中学五年生であつた。また、わたくしは、『痛める薔薇』と『西班牙犬の家』を、いつも同時に想起し、まるで一つの作品のやうに二つを一つにする。

そこで、わたしに言へることは、この二つの作品に出会つたとき、わたくしは佐藤先生に出会つたといふことだ。そして、新日本文化の会に於いて、したしく先生と相知り、先生の知遇を得るに至る。先生を見たのは、すなはち人を見たのであつた。わたくしが『新日本』の編集会議の思ひ出を、いつまでも鮮明に保つてゐる理由はそれだ。

このときの編集委員は、佐藤、萩原の両先生のほかに、倉田百三氏も加つてゐた。あと

教生

吉本青司

女子大生が十にん
教生実習にやってきた
つゆどきの学校は　花がさいたように
明るくなった

ある日　教生の
演習授業をみせてもらつた
〈あゆのかげ〉という詩の鑑賞指導だった
中学一年の生徒は　詩のなかの
〈泳ぎ澄んでいる〉ということばについて
熱心に話しあった

詩を捕えるには　やすを使う方法と
網を使う方法とがある
やすでねらうと捕えてもことばは死んでしまう
網を投げると生きたまま捕獲できる

ぼくは　教室を川にみたて
生徒をあゆにみたてた
そして〈学び澄んでいる〉すがたに
いのちを感じた
だから　ぼくは教生が
川面にむかう漁師のように
美しい眼を網にして
空中に大きく投げてくれることをねがった
網の目から　ひとつのことばをも
逃さないように

浅野晃
詩集 寒色
果樹園叢書
読売文学賞を受賞した名著が再刊されました。
書架に加へて清涼の気をお呼び下さい
定価 三〇〇円
送料 五〇円
発売所 新学社
京都市下京区五條通河原町西入

は中谷孝雄、林房雄、芳賀檀、保田与重郎など、日本浪曼派の面々で、中河与一氏も出てゐた。三好達治君はめつたに出て来なかつたやうに記憶する。ほかに藤田徳太郎とわたくしである。

わたしは浪曼派に参加してゐたのでもなくどのやうないきさつで、編集委員の仲間に加へられたのか、まつたく覚えてゐない。そのころ林、小林、河上の諸君が『文学界』を再建しつつあり、わたくしも小説や評論を書かされてゐた頃で、だから林君あたりがわたくしを引張つていたものか。とにかくこの顔ぶれの中で、わたくしの旧知といつては、東大新人会当時の同志であつた林と、三高で同期の中谷と、二人であつた。あとの人々とは、この会ではじめて相知つたのである。

この編集会議は、毎週一回くらゐひらかれたやうに覚えてゐる。それが二年もつづいたわたくしにとつては、次の集りが楽しみでならなかつた。会がすんでもそのまま散らないで、銀座へ出て夜を更かした。萩原さんや倉田さんは、ずいぶん酒を飲んで気焔をあげたものだつた。林君や芳賀君も元気なものであつた。いま考へるとわたくしらはまだ若く保田君などは、三十になるかならぬかの年齢であつた筈だ。わたくしは、先生を知るとともに萩原さんをも知り保田君、芳賀君をも知ることができたので、そのころ書いた岡倉天心論や、楠公論などをも、この時の痛切な記念として、忘れ得ないでゐるのである。

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」B

竹越 三男編

〈大正四・3「地上巡礼」発表（後・詩集『蝶を夢む』収載）の詩「巣」の原形二種とその断片。詩集収載の詩形にはこの三原形がそれぞれに用いられている〉

竹の節はほそくなりゆき
竹の根は細くなりゆき
地面の下にのびゆびしが
錐のごとくになりゆき
絹糸のごとくにかすれゆき
煙のごとくにもきえさりゆき
つみびとの髪はみだれみだれて
みよさむき牢獄のすみに
懺悔の巣をぞかけそめぬ

〈同じ頁の別の所に、次の部分が書いてある〉

その髪もみだれにみだれし
牢屋のすみに

橋川文三

歴史と体験

近代日本精神史覚書

戦争と日本人―その生と死の探求！

「戦争体験」論を軸に、幕末から戦後に至る日本の政治・思想・宗教を総体として解明する近代日本精神史

戦争体験論　昭和十年代の思想　日本ロマン派の諸問題　テロリズム信仰の精神史　明治のナショナリズムと文学　乃木伝説の思想　歴史意識の問題等二七編

¥七八〇

春秋社

くらき牢屋につみびとは
懺悔の巣をぞかけそめぬ、

いまし　みよ　〈詩語選択を示す追記〉

竹の節はほそくなりゆき
竹の根は細くなりゆき

ヘリック詩抄（四十二）

森　亮

乱れる
―衣裳美学―

小気味よい着付けの乱れは衣裳その物に
奔放自在のおもむきを盛り上げる。
肩に掛けめぐらした薄物の襟布、
それの垂れ下がった端は微妙に揺れあそび、
レース編みの笹縁は迷ひ出て
あちこちで真赤な胸衣の上にかぶさる。
袖口の折り返しはふはっと開き、近くには
蝶結びの飾りひもが二つ三つたるみうなだれる。
ひらひらするスカートの魅惑的な襞の起伏は
平地に波を走らせて人目をひかずにはおかない。
好みでも何でもない靴ひもをさり気なく結は
へた所に
なま、むき出しの上品さを私は見て取る。
かういふ乱れ加減の身ごしらへが、隅々まで
人工の物差しをきちんと当てたのよりずっと
嬉しい。

★

美とは

美といふは、ほかでもない、
中庸と極端との間から
ひらめき出づる光芒である。

〈リツクは古典主義の傾向の強い詩人ではあるが、必ずしも常に端正をよしとし、均整を美しいと見てゐた訳ではない。中庸といふ直線と極端といふ直線が直角に交はる原点から斜め上に向ふ第三の線の上に彼の考へる美はあつたやうだ。再び詩集の正篇に立ち返るが、「乱れる」（八三）や原作では二行詩の「美とは」（一〇二）などの作品からそのことは推測できるはずである。〉

繊毛は（毛先は）*（その先は）*地下にのびゆき
錐の如くにのびゆき
絹糸の如くにもかすれゆき
けぶりの如きにもきえさりゆき
つみびとの髪はみだれみだれて

**ああいましひとやのすみに
懺悔の巣をぞかけそめし。

―浄罪詩篇―

*括弧（三ケ所）は詩語選択を示すため編者がつけたもの。
**「ああ」は「みよ」を抹消訂正。

⑳ *

―**侏儒の諸君―

私は旅に出て行く
ながい疾患のいたみも消えさり
浅間の雪も消え
みなお客さまたちは都にかへり
酒はせんすゐにふきあげ
私は一人ぼつちとなり
なにかしらねど哀しくなり
しくしくと物思へば
ほんの見舞のおしるしにとて
都かへりの友だちは林檎をもたらせり
ああけれども私は旅にゆく
ながい病気の巣からはなれて
あつたかい南の方の海へゆく
つばめのやうに快活に
とんでゆくとんでゆく
けふ利根川のほとりに来てみれば
したいに春のめぐみを感じ
雪わりぐさのふくめるやうに

つちはうららにもえあがり
西も東も雪とけながれ
めんめんとして山峡にながれ
光り光れるいたゝきにさへ
また桑の畑さへ
さびしい病人の涙をさそうよ
なにがなし＊＊＊＊＊
かくしも故郷の冬がさびしくてたえざれば、
いまはいつさいのものと別れをつげ
私はれいの背広をき
いつもの靴をはき＊＊＊＊＊＊＊＊＊
まだ見も知らぬ南の海の方へあそばうよ
その心もちも快活に
みなさんに別れをつげて
二月中旬のかしまだち
小鳥ぴよぴよと空に鳴きそめるころ＊＊＊＊＊

＊「俵儒」6号（大四・2）掲載の「南の海へ行きます」の原形。すこし調子が変ってきた感じがある。「浄罪詩篇」の時期はこのあたりで終ったと言ってよいかもしれない。「俵儒」はこの号で終刊。この号は白秋が前橋来訪中に描いた絵を表紙に出している。

＊＊前橋の詩歌誌「俵儒」とその同人については、「ノオト」A㊽の編註参照。

＊＊＊大正四年一月九日、白秋が前橋に朔太郎を訪ねて一週間程滞在。その後を尾山篤二郎も追いかけて来訪。

＊＊＊＊「俵儒」の編集者梅沢英之助であろう。梅沢は白秋の後を追うようにして上京、一月中に前橋に帰へった。（「若き日の欲情」書簡40）

＊＊＊＊＊＊抹消もれか、またはどこかへ挿入するつもりか？

＊＊＊＊＊＊「若き日の欲情」の書簡、伊藤信吉編「年譜」、久保忠夫の資料的調査などによれば、朔太郎は二月中旬に上京、三月一日に前橋に帰つたが、その間、二月二十一日には小田原から犀星に手紙を書き、それから大島へ渡つている。約半月間のこの旅行には注意を要する。とにかく浄罪詩篇時代はこの旅行で終ったと言ってよいような詩風の変化がその後に現われている。

＊＊＊＊＊＊「俵儒」掲載の「南の海へ行きます」には、末尾に「二月一日」と付記してある。

㉑

夜　景＊

高い家根の上で猫が寝て居る、
猫の尻尾から月が顔を出し、
月が青白い眼鏡をかけて見て居る、
だが泥棒はそれを知らないから、
近所の家根裏へひつ（ママ）こりとび出し、＜追記＞
なにかまつくろの衣裳をきこんで、
煙突の窓からしのびこもうとするところ、

＊「卓上噴水」創刊号（大四・3）に発表（全集「拾遺詩篇」所収）したものの原形（殆んど同じである）。

㉒

貝＊

つめたきもの生れ
その手は水にながれ
歯は砂にながれ
しほさしめくえをしらにながるゝもの
＜抹消「あさり、はまぐりの貝」＞
あさせをふみて　しばしきく＜追記＞
遠音に＜追記＞貝のいのるを＜抹殺「きくばかり」＞

＊「卓上噴水」大四・5に発表したものの原形。後、「月に吠える」収載。「浄罪詩篇」の極限的な緊張は既に碍

萩原朔太郎書誌

Ⅰ編・生前出版著書
Ⅱ編・生前寄贈図書
Ⅲ編・没後出版図書
Ⅳ編・没後作品収載図書
Ⅴ編・参考文献
別編・郷土所在参考資料

頒価・三〇〇円　送料・五〇円

前橋市南曲輪町三九
前橋市立図書館
萩原朔太郎研究会事務局

を離し、三月頃から一種弛緩的な幻想詩風に移つたらしく見える。既に「くさつた蛤」の時期である。

㉓

春　夜＊

生物のうへに水ながれ
しづかにぬるみ
貝は浅き瀬にしづむ
しづかに砂のながれて
月
＜「抹消春の」＞
月
そらにしらみ

＊「アルス」大四・4に発表し、後に「月に吠える」に収載したものの原形（一部の断片）。

墓地にて

浅田　二三男

にぎやかな幽けさのなかで
穴掘り人足が穴をほる
スコップに小石がふれただけで
墓石たちは大げさに
体育館のようなわらい声をあげる
何はともあれ
久しぶりにたつぷり泣けると
みんなよろこんでいたが
念仏のコーラスでも
引導の泣き落し文句でも
ダメだった
そうして
棺桶が穴の底で
カラカラと軽快な
土をかぶる音をたてたときでも
ついに涙腺はゆるまなかった
ああ　とうとう
せっかくのよい機会を失ってしまった
腹をたて
黙りこくって
持って行った幡も供花も線香も
すっかりおき忘れたまま
みんな一せいに
墓地からひきあげてしまった

㉔

＊

竹はすつきり
ひとの首より根が生え
根はけぶる　根がうすらみ
うすくけぶ（ママ）　ほのかにけふる

＊「竹」二篇と共に「詩歌」大四・2に発表（全集「拾遺詩篇」所収）された「竹」の断片的な原形。

＜ノートの裏表紙に＞

ツアラトーストラ
春のめざめ
サアニン

＜この三つの書名は、多分これから読んでみたいと思ってメモしたのであろう。ニーチェの「ツァラッストラ」については、「俵儒」大三・11に室生犀星が寄せた感想「杯を手にして」の中に、それからの一節を引用してあるが、犀星や朔太郎の間で、この頃からニーチェが話題にのぼることもあつたと見てよい。

＜ノオトB了り＞

挿入詩稿

編者まえがき　原稿用紙に書いてノートに挿入してある詩の下書五篇を順序不同でここに載せる。原稿用紙は全部「人魚詩社用紙」である。

①

元始（はじめ）、人が魚になる、

小高根二郎

詩人、その生涯と運命

—書簡と作品から見た伊東静雄—

〈……堪へがたければわれ空に投げうつ水中花。金魚の影もそこに閃きつ。　すべてのものは吾にむかひて　死ねといふ、　わが水無月のなどかくはうつくしき〉　近代詩を極北にまで追いつめながら、詩壇のみならずおよそ日本語を解するいかなるひとの胸にも響く絶唱の数々を遺して、敗戰後の混乱期に、なほ生きようと努力しつつ、病いに逝った敬虔な心の詩人、伊東静雄の生涯と文学を、詩・書簡・日記を交え、評伝に書きなした作品。昭和三十年に起稿した著者は、伊東の精神にしたがい書間は世俗の勤めを果たしながら暁の星を載いてこれを書きつづけ三十八年暮に完成した。伊東の青春から晩年に及ぶあの非常の時代に、繊細脆弱な伊東が、歌うというだけの希望と営爲によって、いかに懸命に生きようと努力したか？　その精神の歴程と肉体の足跡を克明に書きしるし、「僕等は若い日に亡びる美しさを讃美し歌いすぎた。その贖罪のためにも生きながらえる美しさを今日讃えねばならぬ」という著者の悲願の書である。

新秋刊　新潮社

淫しい裸体をおよがすための魚になる。
魚が鳥になる、
その紅い実のあちこちをついばむための鳥になる、
鳥が蛇になる、
しとしとした襟くびに巻きつるむための蛇になる。
蛇が獅子になる、
耐えがたい肉の重みを噛みしめるところの獅子になる。
獅子狼になる、
女の、血みどろの裸体おんなの。その乳房が。その心臓が喰べたしといふ。
淫心兜器の狼となる。
そうして人間の子供が成長し、進化する。＊

＊この一行は追記。

篠瀬一雄編

校註　鴨長明全集　¥1280

風間書房

編輯後記

六月四日。午後六時から本町二丁目南西入東海クラブで旧住吉中学第二十期虎見気組の同窓会が催され、伊東花子未亡人・遺子夏樹君と共に僕もお招きをうけた。出席者は中川邦夫、吉村弘、松井昌三、白畑秀幸、宮垣信海、木村慶、中村正吉、高柳竜芳、大川勝彦の諸氏で恩師・伊東静雄に寄せる慕情や懐旧談は深夜にいたるまで盡きなかった。

六月一〇日。清水文雄氏より蓮田善明の絶作「有心」の定稿が校閲がすんで届けられた。「有心」は「祖国」昭和二五年五・六月号に連載されたが、今度あらためて蓮田自筆の原稿と照合して、誤謬は正し、疑義はこれを明らかにして定稿を得た。前後二回にわたり綿密な校訂の労をとられた清水氏に深謝申し上げる。来号より拙論に代って連載するので御愛読を願ひ上げる。戦時中の文学として最高の作品であるという僕の確信に恐らく諸賢は同意されるであろう。

六月一七日。橋川文三氏より「歴史と体験」を賜った。蓮田の「有心」連載後僕は再び蓮田の死に至る径を追求するつもりでゐるので、絶好の教本を得たわけである。改めて深謝申し上げる。

六月二六日。朝日新聞の「文芸時評」欄で林房雄氏より百号記念に際し忝い寝録の御言葉を頂戴した。同人浅野晃氏に「寒色」以後詩風のかったつさにも褒辞をいたゞいた其他川副国基、久保忠夫諸家からも祝ひの言葉をいたゞいてゐた。ここに篤くお礼を申し上げます。

果樹園 第一〇二号（毎月一回一日発行）
昭和三十九年八月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所　果樹園社
定価　四十円　送料　十円

果樹園　一〇二号　昭和三十九年八月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

果樹園　一〇三号　昭和三十九年九月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

果樹園　第103号

同世代の詩人たち　寿岳文章
三島由紀夫の伊東訪問　神堀忍
蓮田善明と「有心」　清水文雄
ヘリック詩抄　森亮
虹　浅野晃
コギトの思ひ出　田中克己
トラークル詩抄　平井俊夫
球　技　吉本青司
訪　問　堀之内歴
荒　お　こ　し　浅田二三男
浄罪詩篇ノオト　竹越三男編

同世代の詩人たち

寿岳文章

祖先からうけついだ民族の伝統と、徹底的にかたくなでない限り無関心ではおれない海外からの影響と、この二つのものの切点に日本の詩人は（そしてある程度海外の詩人も）位置する。伊東静雄を、同じ世代の、たとえばイギリスの詩人と並置したとき、読者は共通のものをより多く感じるか、異和をより多く感じるか。ほんの心おぼえを書きつけてみたい。

伊東の生れた一九〇六年を中心として、その前後十年間に生れているイギリスの詩人を考えると、ウィスタン・オーデン、ジョン・ベトヤマン、フランシス・ポトラル、クリストファ・コードウェル、ウィリャム・エンプスン、ロバート・ギティングズ、ジェフリ・グリグソン、ジョン・レイマン、セシル・デイ・ルーイス、ルイス・マクニース、ウィリャム・プルーマ、キャスリーン・レイン、マイクル・ロバーツ、スティーヴン・スペンダー、ヴァーノン・ウォトキンズなどの名が思いうかぶ。この中には、伊東のように比較的若くして死んだ人もいる。が、昨年死んだマクニースのように、オーデン、ルーイス、エンプスン、スペンダー、レイマンなどと並んで、文学活動の中心となった点が、これらの名録に目立つ。伊東が生きて、詩作を続けたとしても、そうした現在は想像されない。詩人が純粋であればあるだけ、文学の中心からはじき出され、生活にも困るというのは、今日でも日本ではあたりまえとされる。イギリスとこんなにも違う風土の原因はどこにあるか。イギリスでは、散文よりも詩を文学の中心と考える潜在意識が、今も依然として根強く残っている。日本では、短歌や俳句が詩の代表であるかのような封鎖的意識にわざわいされ、散文とは次元の違う世界に何となく住まねばならぬことになってしまったのだ。伊東のように純粋な詩人の運命は常に悲劇である。

いまイギリスでは、一九三〇年から四〇年代に生れた詩人たちが中心になって、盛んに詩作している。ポトラルのように、ほとんど詩作しない先輩に対しては勿論、オーデンをさえ打倒しようとする意気ごみが強い。そして、これらの若い世代の詩人に共通して言えるのは、実存主義的な色彩が濃厚なことである。思想や観念が著しく優位を占めている。よほど腰をすえてかからないと、主題がつかめない。そんなとき、伊東の「わが人に与ふる哀歌」などを読めば、正直なところ、救われたような気がする。素朴で純粋な日本語の表現、その奥にある詩人自身の抒情的発想への共感が、民族的に私にも強いからであろうか。日本人が日本語で書く詩の長所と欠点は、そこに同時に存していよう。

しかし伊東の詩は、それだけを特徴とするのではない。「私は強ひられるー」「寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ」「夜の葦」などを読むと、不思議に同世代のイギリス女流詩人キャスリン・レインの詩の世界と共通なものが感じられるのである。彼女に見るような高度の宗教性・神秘性を、伊東も持っていると言うのではない。だが伊東の魂の遍歴の底には、たしかにそうした普遍的なものが埋没していたと思う。伊東にとって最も重要な詩の形成期が、たまたま第二世界大戦前の、人工的な精神的風土の中へおしこめられたことを、私は伊東の最大の不幸と考える。全身全霊で「つはものの祈」を歌いあげた伊東であるだけに、なおさらいたましい。

三島由紀夫の伊東宅訪問

神堀　忍

その日、私は、下校後ひと息入れ、父の会社関係者が信州から直送して来たリンゴ（食糧管理法や物資輸送統制のことなどがあったので、それは出版物として届けられた。）をありあわせの果物籠に詰めて、先生宅をたずねた。夕刻、さあ、たぶん七時すぎのころだったろうか、耳原の反正陵のそば道はまだ明かるかった。日暮れを告げる鳥たちの声が耳にたった。

先生は夕食を了え、団欒の時であったらしいが、しきりにあがって行くようにすすめられた。先生があまり機嫌よくすすめられるので、私はついその気になって、二階へ通ずる階段わきの壁間から、朔太郎の胸から上を写した四ツ切り大の肖像が見下ろしている玄関わきの部屋にあがりこんでしまった。この時、先生がなにを話してくださったか、

富士氏の結婚と伊東

— 昭和19年2月29日 —

上列…高安国世（三高講師）、上野照夫（京大講師）、大山定一（京大講師）伊東、堀之内暨の兄哲也

下列…富士正夫（阪大医学部）、富士氏の母、父、正晴、先夫人、妹安子、妹光子（野間宏夫人）

また私がなにを先生にお話ししたかは、すっかり忘れてしまった。とにかく中学四年になって間もない、都会的早熟とはおよそ無関係なこの少年と、その担任教師とは、どういうことか同じように畳の上に寝そべっていた。その姿勢だけは、いまもあざやかに思い出される。そして、先生は、鴎外の「即興詩人」をよんでくださった。実に熱心に、実に美しく、実にたのしく——。

ほんとうに残念なことなのだが、それがどの箇所であったかさえ忘れてしまったのだ。それを思い出そうとすればするほど、その記憶はあやしく拡散してしまう。そこで、私はそれを思い出そうとすることを回避して来たのだ。各処での防火用貯水池掘りの勤労奉仕のあい間を利用してのつかの間の登校時でもあり、その日は特にお疲れになっていなかったのでもあろうか。それにしても、ところどころで大きな息をつきながらもよみ續けられる先生に、すっかり甘え、ひきこまれてしまった私は、ある息苦しさと快よさの中で我を忘れていたことはたしかだ。

ところで、そうした快適な緊迫がどれほど続いたころであったろうか、玄関に案内を乞う人の声がした。私は思わず起き直った。先生はやおら身を起こし、玄関のたたきを隔て障子をあけて立って行かれた。

先生に従って玄関のたたきに立ったのは、海軍士官のような服装に身を包んだ青年であった。もちろん、そこには、おたがいに初対面ではないやりとりがあったので、私は、部屋の窓よりに身を寄せ、かしこまっていた。先生は、その青年に、気兼ねなく休んで行くようにもすすめられたが、彼は控え目な態度で丁重に挨拶を述べ、そのまま帰って行った。その間、ほんのしばらくであった。（先生の日記によれば、五日ほどまえにも、またその日の午後も、彼は先生とゆっくり話し合っていたことが知れる。）身を片寄せ少さくなっていた私には、あかりのじゅうぶん届かぬ土間にたたずんでいたその青年を、その時はっきり観察する余裕はなかった。ただ、彼がことば少なにはきはきと応答していたことだけが印象にのこっている。

先生は、そこまで見送りに立たれた。間もなく、「やあ」といいながら座につき、しばらくタバコをくゆらしておられた。そして、さきほどの「即興詩人」をとりあげながら、ふと

——いまの人は平岡君といって学習院の学生でね。

と問わず語りに語られた（この年、平岡はすでに東大法学部に進んでいたはずであったが——。）例の静かな口調であったが、ものうい様子・調子がまざっていて、私には、先生がひとしきり本をよまれたせいでお疲れになったのだろう、と思えた。その先生のおっしゃりかたが、さきほどの彼の服装とともに、ひどく印象的だった。

——小説を書いている、なかなか有望な人なんだが、文章がきおっていてね。まだ若いし——。

と、あとの方は口の中で消えたかたちになってしまった。その後、しばらく黙っておられたが、それっきり、彼の話をうち切ってしまわれた。そして、ふたたび「即興詩人」をよみだされた。さいぜんとまったく同じ姿勢と同じ調子で。そして、そのまま、ずいぶんながらく、先生はそれをよんでくださったのであった。

先生の日記によると、私はその前日の日曜日にも奥田君（現在、山口大学経済学部助教授）とお宅を訪い、先生にお目にかかれずに帰つたらしい。なぜ、と開きなおって記憶をたどらねばならぬほどの、たいした用がなかつたことはたしかだ。しかし、先生は、いつも、時間と健康が許すかぎり、この幼稚な悪

童とも遊んでくださったわけだ。もちろん、文学とはなんの関係もない単なる教え子の一人にすぎない私であったが。

いまでも私は不思議に思う。どうして、先生は、あんなに熱心に「即興詩人」をよんでくださったのだろうか。田中光子宛（昭和十九年三月二十二日付）の先生の書簡にもいわれているように、「表現に於いては沈着暢達」「文脈は平明」「中学生がよんでも文意は辿れるもの」ということを意識しておられたのであろうか。しかし、そのよみ方には、なかば私の存在を忘れてしまわれたような陶酔がそこに存在したこともたしかであった。

私が、平岡すなわち三島由紀夫を先生宅でかいま見たのは、右のような次第であった。私が、もしいわゆる文学少年であったら、もっと熱心に先生のお考えを詮索もし、先生をおとなった人にも興味を懐いたであろうが、いかんせん、私は単なる先生の崇拝者にすぎなかった。それに、いたって記憶の悪い私は、まことにおはずかしいかぎりだが、自分に都合のよい状景しか覚えていない。先生の三島由紀夫に対するお考えなどが、まとまって浮かんでくるはずはない。

蓮田善明と「有心」

清水文雄

明日――七月二十八日は、蓮田の誕生日に当たる。明治三十七年生まれであるから、いま生きてゐるとしたら、ちゃうど満六十歳になる日である。世間流にいへば、近親・知友相寄り還暦の祝宴を張つて、伊東静雄が「笑む眸のまことに美しいひと」（「神韻の文学」序）と評した彼の笑顔も見られるところであるが、今更さういつてみても詮ないことである。

蓮田の遺稿の一つである小説「有心」が、今度本誌に掲載されることになつたのを機に、この作品をめぐる若干の覚書めいたものを記してみることにしたい。実をいふと、この小説が活字となつて公表されるのは、これで二度目である。雑誌「祖国」の昭和二十五年五・六月号に連載されたのが初度である。その後、「祖国」同人の重ねての好意で、単行本となるはずであつたが、この方はつひに出版を見るまでに至らなかつた。

小高根氏の力作「作品と書簡から見た伊東静雄」は、百回に垂んとする回数を重ねてきたが、近く完結を見る模様である。今秋はまたそれが単行本として刊行される予定といふ。永年の労をねぎらふとともに、六百頁に余る浩瀚な詩人論が書肆の店頭に現はれる日を待つてゐる。伊東静雄の心友蓮田善明の名は、この詩人論にしばしば現はれてきたし、それを中途で休載して、「蓮田善明とその死」が十三回にわたつて掲載されたことも、読者は記憶されるであらう。今度、伊東静雄論のあとを受けて、同じく小高根氏による蓮田善明論の読稿の連載が予定され、それに先立ち、「有心」の再度の活字化のために誌面が割かれることになつたのである。この、世の常ならぬ小説「有心」が　かうして新しい読者を得る機会を恵まれたことを、友人として嬉しく思ふ。それといふのも、これが初めて公表された昭和二十五年頃に比較して、今日の日本の情況の方がはるかに強く、この小説の味読の必要を感じさせるからである。

「有心」をどう読みとるかは、もとより各自の自由である。従つて、その内容について先入観となるやうなことを書くのは、できるだけひかへなければならない。今はその周辺の事項について気づくままを記すにとどめる。

蓮田の第一次応召は、昭和十三年十月であつた。初めの数ヶ月間は郷里の阿蘇山麓の兵

舎で過ごし、やがて中支の戦線へ渡つていつた。大陸では数次の戦闘に小隊長として参加したが、二年有余の任務を終へた彼は、愛する部下たちを戦場にのこして、故国への帰還の途につき、ひとり楊子江を下るのである。

途中上海の書店で岩波文庫の「方丈記」を求め、それを、「船中で、船舘にしつらへられた、暗い板敷の上に屈まつて読み返し〳〵しながら、咽喉からこみ上つてくる涙を怺へ得なかつた」（「有心」第二章）といふ体験は、小説「有心」の素材となつた蓮田自身の行動にも、またこの作品の執筆動機にも、直接的なつながりを持つてゐる。さて、昭和十五年も暮にせまつた或る日、九州の一角に帰国の第一歩を印した途端、精神の平衡を失つて波止場に昏倒したといふ蓮田は、暫く郷里の熊本県植木町の妻子のもとに、心身の所労を養つてゐた。ところが、久々に家族とともにある日を持つた彼が、その家族に「何だかお父さんは怖い」といはれ、また一ヶ月足らずのうちに、みづからもその家族から遁れてただ「一人」になり切らうとし、単身火の山阿蘇の噴き出す温泉めざして出発するのである。小説「有心」は、この阿蘇への遁走の門出の叙述をもつて筆を起こされてゐる。

この小説の素材のメモは無論湯の宿でとられたものが多いであらうが、執筆はおほむね下山後になされたらしく、その後長い間未完のままで筐底に蔵められてゐたものに、十八年十月の第二次応召で南方へ渡る間際に、終章に相当する「むすび」が書き添へられたのである。

この小説は、右下枠外に「はすだ」の活字を刷り込んだ、二百五十字詰の自家用原稿用紙に書かれてゐる。二冊から成り、第一冊は百枚、第二冊は八十九枚、計百八十九枚であ

ヘリック詩抄（四十三）

森亮

戯れに

給仕人よ、ゑみを含んだ薔薇の花々をもたらせ。
ほら、このやうに花の冠をいただいて坐り、
年経た葡萄の美酒を酌むほどに、酔ふほどに
やがて天井もゆるりゆるりと回りださう。

★

処生術

どんなに時間がいそいそと歩み去るか
それが分からない者は馬鹿といふほかはない
黒づくめの死の縄張りがどこから始まるか
なんとか見極めのつくわれわれは
浮き浮きと暮らしてさ
我らが守護神にも御満足願ふとしよう。

★

生ある者

物といふ物には終りがある。
僕たちもできる間に浮かれ騒がう。
運命の妖婆が日がないちにち
紡いだ糸は戻されぬ、もどされぬ。

ヘリックには酒を歌ひ、現世の歓楽を歌ふアナクレオン風の詩がだいぶあるが、古代におけるアナクレオン亜流の作から一歩も出ない新鮮味に乏しい物も混じつてゐるから、佳品は案外すくない。幾らか面白いものを既に両三度紹介したが、更に三つ訳出した。「戯れに」は作品五八三番、「処生術」は二三二番、「生ある者」は六四〇番である。初めの四行詩に出てくる葡萄酒は原作では古代ローマの銘酒「カエクブム」になつてゐる。

るが、第一冊の方は、表裏とも使用されてをり、百枚目の裏を一〇一として逆に一枚目の裏の二〇〇に至つてゐる。従つて、第一冊は実数二百枚、第一・二冊合はせて二百八十九枚といふことになる。第一冊は一章から十二章まで、第二冊は十三章から十七章までを含む。第一冊の最初の頁には、本文と同じ青ペンで、

形式（小説）
—各一分間の中に千倍の人生があつた。（リルケ「ロダン」）

と書かれてゐるが、それは後に赤鉛筆の斜線二本で消し、同じく赤鉛筆で中央上部に大きく「有心」と書き、左側の空白には新たに「主人公を『彼』としたのはすべて消す、時に『自分』にかへる」と記してゐる。さらに青鉛筆をもつて、さきに斜線で消された部分をもう一度螺線状に消し、「有心」と書かれた上をなぞつて、改めて「うしん」とルビを振つてゐる。同じく青鉛筆で、「有心」のすぐ下に括弧して、二、三字書き込んだのを丹念に消した形跡があり、その下に（今ものがたり）と記入し、その左に改めて「第一冊」と書きつけてゐる。第二冊は最初の頁から本文がはじまり、右枠外に、「有心第二冊」と青鉛筆で記されてゐるだけである。

赤鉛筆以後は、「幸ひさる任務を与へられて貨車に投じ一人それこそ停車する駅では三十分以上づつもいろ〳〵してゆく貨車の穴倉めく車掌室で、一日これをよみ返し、このむすびをしたゝめることができたのは、なかなかにたのしいことであつた。もう自ら書く文字も見えぬ。」と結ばれた終章のこの部分に見える、「一日これをよみ返し」た時のものではないかと思ふ。ペンで記入されたリルケの「ロダン」は、この小説の発端の部分に出てくるもので、熊本で阿蘇行きの汽車に乗る前に買ひ求めた新書版（清水云、石中象治訳、弘文堂「世界文庫」）のことである。赤鉛筆の「主人公を云々」に見える「彼」は、最初この小説の主人公を「野中一次郎」としたときの、この人物を呼ぶ代名詞である。蓮田は本文を読み返しつつ、赤鉛筆を用ひて叙述の所々に添削を加へたほか、「彼」を消しただけですますか、さらにそれを「自分」に改めるかしてゐる。しかし、「時に『自分』にかへる」といふことがなかなか微妙で、蓮田自身でも、消すべき所を何個所か見落としてゐるばかりでなく、「自分」に改めた所にしても、必ずしも全部が全部首肯できるものばかりとはいへない。追ひつめられた時間内のことで、やむを得なかつたことと思はれる。この草稿によつて清書本を作つた小高根氏にしても、また本文の校訂を依頼された私にしても、右のやうな個所の処置にはすこぶる当惑するものがあつた。しかし原作者の意志はどこまでも尊重することを第一とし、その部分だけでは「彼」を消したままにするか「自分」にかへるかの判断に迷ふ時には、前後の文脈のうへから妥当と思はれる方に従ふやうつとめた。

「野中一次郎」「彼」を消し、或ひは「彼」を「自分」と改めたことは、蓮田の祖国を離れる間際の、この作品に対する心懐に関係があるものと思はれる。この心懐については、終章でつぎのやうに簡明にふれられてゐる。

作者はここまで書いて、もう数年筆を止めてゐた。これから先きは書けなかつた。筆の拙さもある。しかし作者の目と直身（ちきしん）には最もあざやかにのこつてゐることが、むしろ今は書かせようとせぬ。あるひはなほ十年経ち、数十年の上も経て、昔ものがたりとして書ける日が来ようか。それは自らたづねて答へぬところである。しかしその時には、もつとうるはしいなぞらへごとか何かで、あらぬ神さびた筆でしるすといふ、本当の「ものがたり」のものとなるのではないか。

「ここまで書いて」とある「ここまで」とは、「いまは」にも似た阿蘇の火口への登攀の道

虹

浅野晃

虹がたつ
うつくしい虹が
昧野の中天にたつ

○

樹木の一本もない、草ばかりの
野の空に架けた虹の橋
夕刻の風が
渡り鳥みたいにするすると
渡つてゆく
渡りおへると
橋は取外された

○

虹の消えたあとの曠野
ひとすぢ白い國道だけが通り
河口に架けた長い橋へとつづく
いま馬力が帰つてゆく
その道

向日葵

大いなるひまわりの花ひとつたそがれて
天の銀河は傾き流れる

ほのぐらい薊の花に蝶眠り
どこかで名知らぬ声が呼んでゐる

おほらかに銀河の末は傾き
満ちてくる青い汐に洗はれる

百千の露のいのちをさながらにかかる
銀河よ　時の流れよ

一瞬の花のいのちの深いいきづき
きらめく銀河の波

露といふ露のきらめき、その中に
馬追は鳴き、機織は鳴き

天の銀河、花の露
汐は満ち、時はすぎる

浅野晃
詩集 寒色
果樹園叢書
読売文学賞を受賞した名著が再刊されました。
書架に加へて清涼の気をお呼び下さい
定価 三〇〇円
送料 五〇円
京都市下京区五條通河原町西入
発売所 新学社

で、草原の彼方に、「うす気味悪いほどゆつくりと何気なげに雲のやうな煙のかたまりが後から〳〵湧き上つては風に崩れて東手の山を蔽うて流れてゐる」のを見つめて立つ所で筆が終はつてゐることをさす。筆を断つたその先に、「目と直身」に焼きついた、ただならぬもののあることが、ここで告白されてゐるのである。それだけ、その体験を対象化して、「あらぬ神さびた筆でしるすといふ、本当のものがたり」とすることができなかつたのであらう。このやうな古風なものがたりに対して、これまで書きつづけてきたものを、蓮田は「今ものがたり」と名づけたが、「彼」を「自分」と改めたのも、同じ心からと思はれる。題名の「有心」は、いふまでもなく「無心」に対する語で、中世歌論の用語であるが、後者が滑稽で卑俗を旨としたのに対して、心深さと優雅を尊ぶ。俗悪への戦ひのきびしい姿勢、そして「みやびが敵を討つ」といつた蓮田の言葉もここで思ひ合はされる。

なほ、同じ心から生まれた著書に、評伝『鴨長明』（昭和十八年九月、八雲書林刊）がある。この評伝の「はしがき」の終わりの部分を抄記して、結びにかへることにしたい。これはこの本の書かれた動機の説明であるが、「有心」を読まれる方の参考にもなるかと愚考するからである。

「……私が此の時代にこのやうに鴨長明のやうな隠棲閑居の詩人を招じることは、必ずや現実廻避の時代錯誤の譏をうけたり、或は反対に、此のやうな時代にこそ此のやうな詩人のことも却つて無用の用があるなどと、それこそ理解ありげな共鳴を以て迎へられたりするかもしれない。しかしそのやうな尤もげな何れの批評からも、更に、問題は新たなものがある。若しこの時に、鴨長明がもつたあのただならぬなげきに対して、嘗て多少なりとも国人（くにびと）としての感動の記憶をもつ人ならば、彼がとつた要なき隠棲閑孤を暫くゆるして、請ふこの小巻を開きたまへと、云爾。」

（三九・七・二七）

コギトの思ひ出

田中克己

コギトは第二六号（昭和九年七月号）に至つて第二期に入つた。その理田は前にも書いたが、同人ほとんどが就職して分散すると同時に、文学への熱情もなくしてしまつたかの看を呈したことである。同人費を送り原稿を送ることがどんなに面倒なことかはわかるが、書きたいこともなくなつたかの様に見えた。

ここで終るのが普通の同人雑誌だが、大転換としてつづけさせたのは肥下と保田の二人だつた。肥下はこの号以後はほとんど書かずに雑務と会計とを大部分、引き受けた。保田は東京にゐて卒業後も文学をやることを明らかにしたので、同志を方方に見つけた。コギトはここで表紙と見開きに模様を入れ、同人以外の寄稿を求めた。第二六号には京都の中井正一・大山定一の両氏、東京では亀井勝一郎・本庄陸男の二氏が書いてゐる。京都の二氏は中島もしくは松下、東京の二氏は保田がたのんで書いてもらつたのだと思ふ。保田はこの変換を編輯後記で「同人雑誌としてのゆき方の一そうの前進であらしめたい」為にしたのだといひ、「今日の良心を最高に表現したい」ともいつてゐる。これにはうそはなかつたと思ふ。

中井正一氏はわたくしは面会の機会をもたなかつたが、当時は京大の助手だつたか、その「リアリズムの問題に寄せて」といふのが、巻頭にのつてゐるだけでも、今までのコギトとは全く違つた趣きが見られた（同氏は戦後国会図書館副館長に就任、まもなく亡くなられた）。旧同人では中島が張り切つてゐて、二篇エッセーを書き、あとの方は藤原定

氏とのレアリズム論争だつた。くはしく紹介する必要もなからうが、レアリズムの全盛の時代に、そのにはひ手に対する論争を買つて出るのは、このすぐあとに「日本浪曼派」が結成され、中島がその発起者の一人となつたことを予定してゐる。

もつとも論争の常として同じことばを用ひて、ちがふことをいふ例にもれず、中島はレアリズムを不可といふのでなく、その証拠にこのコギト第二六号につけられた「六月号雑誌要目」といふのを見ると、「現実」に当の藤原定氏とならんで保田、中島がともに執筆してゐる。この雑誌こそレアリズムの牙城だつたからふしぎなものである。

コギト第三〇号は「独逸浪曼派特輯」と題をつけ、シュレーゲルのゲーテ論を薄井が訳し、またティークの論文を肥下が訳してゐるほか、神保光太郎、松下武雄の訳をのせ、保田、玉林憲義、興地実英、大山定一、芳賀檀、亀井勝一郎などのローマン主義に関する論文が満載されてゐる。総ページ数一七〇、「大変なものを出したな」と、大阪にゐて校正や経営からのがれてゐたわたしなど驚き、ありがたがるばかりだつたが、この号に「日本浪曼派広告」といふのが掲載された。もとより作者は保田で

「平俗低徊の文学が流行してゐる。日常微温の饒舌は不易の信条を昏迷せんとした。僕らは茲に日本浪曼派を創めるもの、一つに流行への挑戦である。

僕らは専ら作家の清虚俊邁の心情を尊び、芸術人の不羈高踏の精神を愛する。此の日その美を展き、その果を始めることに、僕ら現代の文学人の賦命を感じて禁まぬ」

からはじまつて、稀代の名文であるが署名は神保、亀井、中島、中谷孝雄、緒方隆士と保田の六人となつてゐる。この「次代の文学人」がみな二十代であつて、世俗レアリズムへの蔑視をいふところ、わたしなど大いに同感したが、わたしにはつひに同人に参加の勧めは来なかつた。「役人と教師とはやめとこ」といふ保田の主張が通つたのだといふことは、当時、同じく大阪にゐた伊東がわたしに教へてくれた。

前にも書いたと思ふが、伊東は学校の教師でありながら、三号から日本浪曼派に加入してゐる。反対に中島は発起人に名をつらね、その創刊号に「浪曼化の機能」といふ論文を書いて、トップにのせたまま、四号に詩を発表しただけで、いつのまにか浪曼派からのいてしまつた様である。その理田はわたしも聞いたおぼえがないが、勤勉でまじめな彼として、何かおくれを感じたのかと思ふ。何にしてもコギトと日本浪曼派は保田一人のつながりで大丈夫だといふ気持がわたしなどにもあつて、熱心に書きまくる気持を中島も失ひはじめたやうに思ふ。わたしはよく勤め先の帰りに中島を訪ねて将棋を指した。指しながら二人ともつまらない顔をしてゐたやうに思ふ

トラークルについて

平井俊夫

このたび小高根二郎氏の御好意あるお勧めによって、「果樹園」誌上にゲオルク・トラークルの詩の翻訳を連載することになった。オットー・ミュラー版の「詩集」（第十一版）を底本とし、そのなかに含まれている百十余篇の詩を、原本の順序に従って逐次掲載してゆく予定だが、この詩人については、わが国では一般にはまだ殆んど知られていないようだから、ここに簡単に紹介を記しておこうと思う。

ゲオルク・トラークルは一八八七年にオーストリアの古都ザルツブルグに生まれ、一九一四年に、第一次世界大戦に従軍中、二十七歳で生涯を終った。その間に遺していったこの詩人の詩集一巻は現代詩に不滅の遺産であ

美しい街

トラークル

滅び

夕暮の鐘がしずかに鳴りわたるとき
わたしは鳥たちの爽やかな飛翔を追う。
長い列となつて敬虔な巡礼のように
そのすがたは秋の冴えた空の奥に消える。

薄闇のせまる公園をさまよいつつ
鳥たちの明るい命を夢にえがき
わたしは殆んど時の移るのも知らない。
そうして雲をこえてその行方に沈んでゆく。

ふと　滅びの気配がわたしの胸にふるう。
葉の散りつくした枝でつぐみが啼く。
錆びた鉄格子に赤いぶどうの蔓がゆれて
蒼白い子供らの死の輪舞のように
暗い噴泉の朽ちてゆく縁のあたり
風におののいて青く紫苑がくずれ折れる。

ミラベル公園の調べ

噴泉はうたい雲が浮かんでいる。
冴えた青のなかに白い柔和な雲。
静かに面ふせて人びとがゆく
夕暮のこの古い公園をとおり。

年を経た石の建物もうすれ
はるかに鳥の列が旅立つてゆく。
死んだ眼で牧神がみつめている
暗がりに吸われゆく影らを。

葉が赤く老樹の枝をおちて
開け放った窓に舞いこんでくる。
部屋には炎が燃えたち
暗い不気味な幻をえがく。

白い異郷者が家に歩み入る。
こわれた廊下を犬が駈けぬけ
下女がランプを消す。
夜　耳にソナタの調べがしみる。

女の祝福

友らにまもられて重い足をはこびながら
おまえは幾度も胸苦しげにほおえむ
こんなにおののく日々がやって来たと。

白い罌粟がまがきで花を枯らしている。
おまえのおなかが美しく育つように
丘にもぶどうが金いろに実っている。
遠く池の鏡がひかって
野らでは刈り鎌の音がする。

草むらに露がこぼれて散る。
赤く　赤く木の葉が降りしきる。
褐に灼けたたくましい男が
荒っぽい優しさで妻のところへ戻ってくる。

美しい街

古い広場が陽のなかでしずまっている。
ふかぶかと青と金にひたされ
柔和な尼僧が夢のように通ってゆく
重たげにしずまった撫の樹蔭を。

褐色に明るむ教会のなかから
死の国の清らかなしるし
王侯の美々しい紋章がのぞいている。
教会のおくで微かに墓石の宝石が光る。

噴泉から馬の姿が浮かびあがり

花散った花梗はけものの爪のようだ。
夢みつつ少年らは心もつれ
ひっそりと夕暮の噴泉であそんでいる。

少女らは気弱く戸口にたたずみ
さまざまな街の営みに見入って
そうして湿った唇がふるえている。
戸口でかの女らは待ちわびている。

たゆたう鐘の音はひるがえり
軍靴の歩調や衛兵の呼び声がこだまする。
異郷の人らが石段のうえで耳を傾け
オルガンの音は高く青のなかに。

楽器が明るくうたっている。
庭の植え込みの葉蔭をこぼれて
美しい淑女らの声がさざめく。
しずかに若い母親がうたう。

花模様の窓にそっと忍んでくる
燻香とタールとにわとこの匂い。
銀色にたゆげな目蓋がちらつき
窓の花のおくで見つめている。

人けない部屋で

窓　色とりどりな花壇。
オルガンの調べがながれ入り
壁掛に影たちがおどっている。
ふしぎな気ぜわしい輪舞。

木立はあかあかと揺れて
しきりに蚊の群がうなる。
遠く野づらにうごく刈り鎌。
古い湧き水がうたう。

そっと撫でてゆくのは誰の吐息だろう。
燕は謎の図形を飛び交い
遙かに流れつづく
あの金いろの森の地帯。

花壇が炎になって揺らめき
いそがしい輪舞はいっそう縺れて
黄ばんだ壁掛におどり狂う。
だれかが戸口を覗きこむ。

甘くにおう燻香と梨の果実。

ガラスの器も長持も夕闇にしずむ。
ゆるやかに熱い額をめぐらし
いま　白い星たちを仰ぐ。

嵐の夕べ

おお　赤い夕暮の時。
開いた窓にちらつき
青のなかへもつれ出た葡萄葉に
気味悪い幻が巣くっている。

溝の悪臭のなかで埃が舞う。
風が窓ガラスにぶつかって鳴る。
暴れる馬の群のような
けわしい雲を稲妻が追いたててゆく。

音たてて砕ける池の鏡。
鋭く窓際でかもめが啼く。
火の騎士はいっさんに丘をくだって
樅の木に飛びちって燃えあがる。

病院で患者が金切声で叫ぶ。
ほの青く夜の翼がはばたきを始め
突如泡だちつつきらめき
雨が家々の屋根にほとばしる。

り、近時その真価はますます高く評価されつつある。トラークルは、今世紀初頭のオーストリアが生んだまことに稀有な詩人といっていいのである。

ドイツの現代詩といえば、われわれはともすればリルケを思い浮かべやすいが、しかしわたしは、イギリスの卓越した詩人、批評家のスティーヴン・スペンダーがその「リルケとエリオット論」を、「……かの『ドゥイノーの悲歌』は、恐らく、すでに歴史のなかへ移行してしまったひとつの運動の最後の大きな偉業であった」といふ言葉で結んでいるように、リルケはむしろ近代詩を完成したその最後の巨星だったと思っている。リルケの詩はいわば世界の詩的完成、「創造」であって、その限りにおいて近代の伝統につながるものがあり、「考えるわれは存在する」というデカルトの近代的命題の範囲を充分に越えているとは思われない。リルケには「われ」の内部を信じることができたのである。

しかしトラークルにとって、詩とは近代詩のように「創造」ではなく、詩人自身の言葉を借りていえば、「不完全な贖罪」なのであった。詩をこういうふうに捉える以上、その背後には「汝」の存在が考えられているのであり、「われ」は「汝」と関係することによって初めて存在理由を持つことになる。そうして一方、「われ」は覆うべくもなく孤在化しているという現実状況の痛苦が、この詩人の魂に大きな二律背反を強いる結果となり、従ってこの背反そのものに発想の基本を据えたトラークルの詩は、言葉のもっとも深刻な意味での現代の「憂鬱の詩」なのである。そうしてこの憂鬱は「秋」と「夕暮」という没落の時間のなかで繰り返し短調の調べをかなでている。

球技

吉本青司

テニスのコーチをかって出た
さわやかなテニスコートにひかれたからだ
白い帽子にひかりをのっけて
少女たちにまじった

素足に
土のさわりのこころよさ

まず　からだをリズムにゆだねるよろこびを
知らさなくては

そして　柔軟に　柔軟に
からだを保つことのたのしさを

手くびをやわらかく
もっとやわらかく

全力打球！　ちからいっぱい
こわごわなんてだめ

目標さえあれば
球はひとりで飛びだしていく

少女たちのからだがコートに躍動しはじめた
球はぐんぐんのびてゆく

そこで　とうとう言ってしまった
〈タマのこころになりたいな〉

球技はいい　ほんとに
テニス　バレー　野球　みんないい

「詩集」劈頭の詩「滅び」と巻尾を飾る「グローデク」という詩とのあいだには、その詩的世界の深化においてかなりの落差がみられるように思うが、しかし秋と夕暮という時間的主題は、一貫して変ることがない。ただわたしは、われわれ日本人が伝統的に育んできた抒情的な郷愁の情緒としての秋や夕暮と、この詩人の没落を象徴するこの時間的背景と

訪問

—上野照夫氏に—

堀之内　歴

小部屋はひんやりしていた
窓から庭の篠竹植込みで　光線が
射し込みにくかった　無風の七月の午
動かぬ竹が　無気嫌だった
あるじは　愉しげに　語りつづけた
古い蔦の這う武家屋敷の　美しいこと
忍者がいまも忍んでそうなそのいぶり
中国黄土の下から出る俑の少女の笑み
北辺の海水の色が淡く紫色であること
次から次　私はポンヤリ　歌のように
聞き乍ら　語り手に見とれていた

ふと　背後の床の間に　白々と
庭で剪ったと思われる　一輪の芙蓉が
無雑作に投げ入れられている　が
広い花瓣が　只一輪　凛として

暗い小部屋をひき緊めているのだった
額に窓からの　微光を覚え乍ら　私は
ふと今　海底に坐っているような
錯覚をおぼえた　水面から射す光線
白いひら〳〵な花瓣は　海底植物で……

二人は喋っていたのに海底にいたのだ
ひんやりと　静寂に支配せられて……
その時私は　力をこめて喋っていた
永く思いつめた思想ででもあるように
　北欧の涯の海に行って　死にたいなあ
　その先はもう北極海で　今頃の白夜に
　ずん〳〵歩いて　紫色の水に融け去る
　死ぬんじゃあない　水に変わるんです
主人は笑って応け合わなかった
笑いは芙蓉の一輪に　重なってみえた
動揺しないこの人は　花の精だったか
　北欧はスピッツベルゲンがいいです
私の声にはもう力がなかった

—一九六四・七・十二—

を混同しないように気をつけていただきたいと思う。

トラークルの伝記的な事実については、二三の事柄を除いては、とりたてて述べるほどのこともない。富裕な商人の次男として六人兄妹の四番目に生まれたこの詩人は、その詩的才能を周囲から無視されていた。きょうだいたちは嘲笑さえしていたようである。そのなかにあって、末の妹マルガレーテは兄を深く現解し、そうしてこの二人の親密さは単なる兄妹の程度をはるかに越えた暗いものであったと言われている。

トラークルはまた麻薬の常用者であり、薬学を職業に選んだかれはそれらの薬剤を容易に入手することが出来たらしい。大戦には薬剤士官補として従軍し、グローデクの激戦後九十名もの重傷兵を一人で看護せねばならない苦境におかれて、この人間の酸鼻に絶望した詩人は遂に狂乱状態に陥ってピストル自殺を企てることになる。のち間もなく精神鑑定と称してクラーカウの衛戍病院の精神病棟に監禁され、そこでかれが多年なじんでいた麻薬剤を多量に服用し、「白い眠り」におちいって死んだ。故意か過失によるものか、その点は定かでない。短いその生涯も、最期もまことに暗澹としたものであった。

り、近時その真価はますます高く評価されつつある。トラークルは、今世紀初頭のオーストリアが生んだまことに稀有な詩人といっていいのである。

ドイツの現代詩といえば、われわれはともすればリルケを思い浮かべやすいが、しかしわたしは、イギリスの卓越した詩人、批評家のスティーヴン・スペンダーがその「リルケとエリオット論」を、「……かの『ドゥイノーの悲歌』は、恐らく、すでに歴史のなかへ移行してしまったひとつの運動の最後の大きな偉業であった」といふ言葉で結んでいるように、リルケはむしろ近代詩を完成したその最後の巨星だったと思っている。リルケの詩はいわば世界の詩的完成、「創造」であって、その限りにおいて近代の伝統につながるものがあり、「考えるわれは存在する」というデカルトの近代的命題の範囲を充分に越えているとは思われない。リルケには「われ」の内部を信じることができたのである。

しかしトラークルにとって、詩とは近代詩のように「創造」ではなく、詩人自身の言葉を借りていえば、「不完全な贖罪」なのであった。詩をこういうふうに捉える以上、その背後には「汝」の存在が考えられているのであり、「われ」は「汝」と関係することによって初めて存在理由を持つことになる。そうして一方、「われ」は覆うべくもなく孤在化しているという現実状況の痛苦が、この詩人の魂に大きな二律背反を強いる結果となり、従ってこの背反そのものに発想の基本を据えたトラークルの詩は、言葉のもっとも深刻な意味での現代の「憂鬱の詩」なのである。そうしてこの憂鬱は「秋」と「夕暮」という没落の時間のなかで繰り返し短調の調べをかなでている。

球技

吉本青司

テニスのコーチをかって出た
さわやかなテニスコートにひかれたからだ
白い帽子にひかりをのっけて
少女たちにまじった
素足に
土のさわりのこころよさ
まず　からだをリズムにゆだねるよろこびを
知らさなくては
そして　柔軟に　柔軟に
からだを保つことのたのしさを
手くびをやわらかく
もっとやわらかく
全力打球！　ちからいっぱい
こわごわなんてだめ
目標さえあれば
球はひとりで飛びだしていく
少女たちのからだがコートに躍動しはじめた
球はぐんぐんのびてゆく
そこで　とうとう言ってしまった
〈タマのこころになりたいな〉
球技はいい　ほんとに
テニス　バレー　野球　みんないい

「詩集」劈頭の詩「滅び」と巻尾を飾る「グローデク」という詩とのあいだには、その詩的世界の深化においてかなりの落差がみられるように思うが、しかし秋と夕暮という時間的主題は、一貫して変ることがない。ただわたしは、われわれ日本人が伝統的に育んできた抒情的な郷愁の情緒としての秋や夕暮と、この詩人の没落を象徴するこの時間的背景と

訪問

—上野照夫氏に—

堀之内　歴

小部屋はひんやりしていた
窓から庭の篠竹植込みで　光線が
射し込みにくかった　無風の七月の午
動かぬ竹が　無気嫌だった
あるじは　愉しげに　語りつづけた
古い蔦の這う武家屋敷の　美しいこと
忍者がいまも忍んでそうなそのいぶり
中国黄土の下から出る俑の少女の笑み
北辺の海水の色が淡く紫色であること
次から次　私はポンヤリ　歌のように
聞き乍ら　語り手に見とれていた
ふと　背後の床の間に　白々と
庭で剪ったと思われる　一輪の芙蓉が
無雑作に投げ入れられている　が
広い花辨が　只一輪　凛として
暗い小部屋をひき緊めているのだった
額に窓からの　微光を覚え乍ら　私は
ふと今　海底に坐っているような
錯覚をおぼえた　水面から射す光線
白いひら〳〵な花辨は　海底植物で……
二人は喋っていたのに海底にいたのだ
ひんやりと　静寂に支配せられて……
その時私は　力をこめて喋っていた
永く思いつめた思想でもあるように
北欧の涯の海に行って　死にたいなあ
その先はもう北極海で　今頃の白夜に
ずん〳〵歩いて　紫色の水に融け去る
死ぬんじゃあない　水に変わるんです
主人は笑って応け合わなかった
笑いは芙蓉の一輪に　重なってみえた
動揺しないこの人は　花の精だったか
北欧はスピッツベルゲンがいいです
私の声にはもう力がなかった

—一九六四・七・十二—

を混同しないように気をつけていただきたいと思う。

トラークルの伝記的な事実については、二三の事柄を除いては、とりたてて述べるほどのこともない。富裕な商人の次男として六人兄妹の四番目に生まれたこの詩人は、その詩的才能を周囲から無視されていた。きょうだいたちは嘲笑さえしていたようである。そのなかにあって、末の妹マルガレーテは兄を深く理解し、そうしてこの二人の親密さは単なる兄妹の程度をはるかに越えた暗いものであったと言われている。

トラークルはまた麻薬の常用者であり、薬学を職業に選んだかれはそれらの薬剤を容易に入手することが出来たらしい。大戦には薬剤士官補として従軍し、グローデクの激戦後九十名もの重傷兵を一人で看護せねばならない苦境におかれて、この人間の酸鼻に絶望した詩人は遂に狂乱状態に陥ってピストル自殺を企てることになる。のち間もなく精神鑑定と称してクラーカウの衛戍病院の精神病棟に監禁され、そこでかれが多年なじんでいた麻薬剤を多量に服用し、「白い眠り」におちいって死んだ。故意か過失によるものか、その点は定かでない。短いその生涯も、最期もまことに暗澹としたものであった。

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」

竹越　三男編

②

白金屍体

—天上縊死続扁—

遠夜の松に首を吊る
懺悔に果つる人ひとり
ひとり銀のアルバムをひつさげしが
頸に青き紐をまきつけ
あはれはや
天上の松に首を縊ると
懺悔に果つる人ひとり
その丈高き肢体はしだれ
そのラヂウムの瞳はめしひ
身肉たちどころに寅に吊りあげられ
あげられ　あげられ
光さんさんたる松の梢に
この哀しめる、罪人の手はさげられぬ、
遠夜の空にうすあかねさし。

—浄罪詩篇—

〈この詩は創元社版『全集』の「草稿詩篇」の部（夕日の松に……）のバリエーション〉

③

くろんぼ踊り

くろんぼ踊りのすさまじさ
淫楽踊りのすさまじさ
くつつく
ひつつく
ひつかく、つめる、
くすぐる、だきつく
お乳に接吻
足に接吻
指に接吻
くるめくトニイのはだかの肉体
くろんぼ女の淫楽強烈
もつとも猛烈
トニイの体が血だらけとなり
トニイの息が絶えるまで
くろんぼの女の淫欲やすまず、
舌さきすつぽり歯の陰間にうがち入り
そうして息が絶えるまで
ますますやすまず
くろんぼ同志の肉体摩擦のはげしさ遊戯に、
くるめく　くるめく
天は白金　熱体地方のひるひなか、
くろんぼ踊りのすさまじさ、

〈朔太郎としては珍らしいタイプの詩であるが、「若き日の欲情」書簡21で、「すてきに調子がいゝので踊り出す。たまらないユーモアがある。」と朔太郎が書いている白秋詩「消防喇整列」（大三・11「地上巡礼」）やその頃の白秋詩が、朔太郎のこの詩を書いた動機と若干関係がありそうに思われる。「淫楽」というような詩も、強いて言えば白秋の詩語である。〉

④

もえあがる、もえあがる

あるみにうむのもえあがる、
雪ふるなべにもえあがる
松葉に光る
縊死の屍体のもえあがる
〈抹消「いつさいの」〉いみじき炎もえあがる、

〈「遍路」大四・2発表詩「炎上」（後「松葉に光る」と改題し「蝶を夢む」に収載）の原形〉

⑤

このなんで納まり返つた人たちだ
このなんて青い顔の人たちだ
このなんて意地の悪い眼付の人たちだ、
ながいながい単調の行列から
（みんな）舌をたらして行く
あるひとの如きは実に尻尾の光をひきづつて
居る、
たいていいたましいらうまちずむのけいれん
から
紙製の薄い肉体をびくびくさせて
手の光る
光る
光る
光る
白臘模型の御先祖たち
君たち一代のいやらしい秘密から
遠い「過去」の墓穴から
その通る長たらしいぶらつとほうむから
出てくる、出てくる、出てくる
夜の幽霊の食欲と
夜の残忍なる
またいんきくさい餌物の逃げる足音から
逃げまわる飢物らのいんきくさい足音から

橋川文三

歴史と体験

近代日本精神史覚書

戦争と日本人—その生と死の探求！

「戦争体験」論を軸に、幕末から戦後に至る日本の政治・思想・宗教を総体として解明する近代日本精神史

戦争体験論　昭和十年代の思想　日本ロマン派の諸問題　テロリズム信仰の精神史　明治のナショナリズムと文学　乃木伝説の思想　歴史意識の問題等二七編

¥七八〇

春秋社

荒おこし

浅田　二三男

ここ四五日まえから
わしの手の平に旗がある
田んぼの荒おこしで
たちまちできた
じつにまんまるな水ぶくれ
直径三センチもある
そいつがつぶれたあとへ
赤チンをなすりこんだんだ
長方形でかこめば
われらが国の旗になる

牛は座り
犬は尻をおろし
ネコなどは寝ころんで
憩むのに
旗のある手を備中鍬にかけ
泥のついたアゴをのせ
わしはいっぷくする
わずか二分か三分
立ったままの休息だ

いわゆる青葉若葉が目にしみて
蛙もなけば
春セミもきこえようという
カラリと晴れた祝祭日
あちらの谷でも荒おこし
こちらの谷でも荒おこし
在所の谷間の棚田につかり
泥んこの旗を握り
ナイロンの手ぬぐいで頬かむりし
鍬の柄でささえている日本の
これはこれカビの生えた頭蓋骨だ

小高根二郎

詩人、その生涯と運命

—書簡と作品から見た伊東静雄—

〈……堪へがたければわれ空に投げうつ水中花。金魚の影もそこに閃きつ。　すべてのものは吾にむかひて　死ねといふ、　わが水無月のなどかくはうつくしき〉　近代詩を極北にまで追いつめながら、詩壇のみならずおよそ日本語を解するいかなるひとの胸にも響く絶唱の数々を遺して、敗戦後の混乱期に、なほ生きようと努力しつつ、病いに逝った敬虔な心の詩人、伊東静雄の生涯と文学を、詩・書簡・日記を交え、評伝に書きなした作品。昭和三十年に起稿した著者は、伊東の精神にしたがい書簡は世俗の勧めを果たしながら曉の星を戴いてこれを書きつづけ　三十八年暮に完成した。伊東の青春から晩年に及ぶあの非常の時代に、繊細脆弱な伊東が、歌うというだけの希望と営爲によって、いかに懸命に生きようと努力したか？　その精神の歴程と肉体の足跡を克明に書きしるし、「僕等は若い日に亡びる美しさを讃美し歌いすぎた。その贖罪のためにも生きながらえる美しさを今日識えねばならぬ」という著者の悲願の書である。

新秋刊　新潮社

腐蝕した銀の階段から
なにかもおれは知つて居る、
いつさいの秘密を知つて居る、
お気の毒だが〈抹消「おれは生きて居た」〉
〈抹消「やい、ひつこめ、ひつこめ、ひつこめ
白い御先祖たち」〉
御気の毒だが……
御先祖、もうその馬鹿々々しい行列をやめて
くれ
犬畜生のごとくにもみえるから
御先祖、見つともない尻尾だけはかくしてお
くれ
〈抹消「白い霧の遠方」〉
ああしんに涙がながれる
なんたる陰気な
（しんじつ哀しげに見える御先祖たち
歯が光る、いたむ、白い
疾患らうまちずむの御先祖たち、
〈「全集」の「断片」の部に収載されているものの原形。「全集」の「拾遺詩篇」中の「先祖」はこの詩の一部を改作独立させたものらしい。「蝶を夢む」収載「天路巡歴」（「異端」大四・1発表）の第二節は本篇と関係があると見てよい。〉

了

編輯後記

七月一〇日。八重洲口の国際観光ホテルで新潮社の片岡久氏に出会ひ拙論の校正の打合せをした。校正第一回分三八四頁を受け取った。

七月二四日。同人・福地邦樹氏の母堂が肝臓癌で逝去された。哀悼。

七月二六日。山室静氏から鞭撻の言葉をいたゞいた。拙誌の息の永さについてゞある。尚、この日新潮社より校正第二回分三八五頁〜四八〇頁がとゞいた。これで「夏花期」までの分である。

七月二七日。思ひがけなく田中克己氏が来訪された。昨夏「白楽天」を脱稿以来健康をそこねてゐたが、やつと元気を取戻されたとのことであった。「コギト」「四季」の思ひ出を綴れる人はもはや氏一人となつたので、その意味からも自重自愛を祈る。

七月末から八月はじめ。品質管理の受講のため軽井沢の三笠ハウスで過した。宿帳、1908, Aug 8 のところに M. S. Noghi と乃木静子のサインがあつた。有島武郎終焉の地もつい眼と鼻の先であった。それにしても時と所を問はぬアブの襲来には驚ろいた。

八月二日〜四日。高原営平で過した。こゝはオリンピック候補やその他のスポーツ青年少女で一杯だつたが、軽井沢のアブよりははるかにましであった。ダボスからの景観の雄大さはいつ来てみてもいいが、須坂までの途中にある洞窟の仙仁温泉のワラビはやはりビールの肴に絶好であった。（O）

果樹園　第一〇三号（毎月一回一日発行）
昭和三十九年九月一日発行
池田市野町一六八
発行兼編輯者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所　果樹園社
定価　四十円　送料　十円

果樹園　一〇三号　昭和三十九年九月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

果樹園　一〇四号　昭和三十九年十月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

果樹園

第104号

有心（今ものがたり）　蓮田善明
犬タデ喰森鮎子　堀之内歴
比心　蓮田善明
むかし浅田二三男
頌　河野仁昭
トラークル詩抄　平井俊夫
ヘリック詩抄　森亮
坂道吉本青司
コギトの思ひ出　田中克己
太平洋の秋　浅野晃
書　伊東静雄

有心（うしん）（今ものがたり）

蓮田善明

一

道は間違ひはない筈であつた。もちろん初めてではあつたが、大体の見当はついてゐたし、斯う行きさへすればきつと駅の前に出るにちがひない、現にその鉄道がガードになつてゐる下をくぐり、そのガードの直ぐのところから左に入つた広く造られた直線路は明かに鉄道に沿つてゐた筈だし、何の疑ひも要しないのであつた、が、その駅がすぐ現はれないと、もう何だかその駅に行き当らないやうな不安に襲はれて、歩きながら落ちつかない。しかしありがたいことに、ガードから五六百米も来た時、二三の運送店や、飯屋の並んだりしてゐる界隈を見つけ出し、狭い広場を前にして引込んだところに小さな木造の駅を見出した。事実が一等安心できる、真直な、たかゞこれほどの距離を、しかも間違ひやうなどないと自分で知つてゐながら、何をこんなに不安になつたり、まごついたり自分はするのか、と何か自分の息（いき）してゐるこの世間が、たよりなく自分の例の気持を思ひ返した。結局駅といふ事実はどこへも逃げたりなどしないのに、それが自分の前には、ひよつとすると姿を匿してみたりしさうな気がするのであつた。そんな自分を笑つていいのか、まじめに取り扱つていいのか、と又まごつきかけたが駅の中に入ると急いで切符を買つておかないといけない気がして、荷も卸さずに出札口の方を見ると、恰度一人の洋服男がその網口を覗きこんで、「宮地」と切符を求めてゐたので、すぐその後に行つて「長陽」と五十銭札を板の上に置いた。

切符を求めるとすぐ出札掛はばたりとガラ

蓮田の生家・金蓮寺の居室
右の障子窓の所が書斎だった

ス戸を下ろして去つてしまつた。汽車まではまだ一時間の余もあつたし、客らしい姿も四五人しかなかつた。切符をズボンのポケットに入れて、これで安心だといつた風に、壁にとりつけられた長い腰掛に、荷物を投げ出してその横に腰を下ろした。しかし一安心はしたものの、これでどつしりと落ちつきはらつて汽車の来る迄待つてゐさへすればいいといふ普通の安心がならない。切符を握り、時計の指す時刻から自分が外れる心配などありやうもなく、型の如く汽車が来ることを承知してゐながら、その下から、すぐ事実と自分とが離れて、隙間風がその間に吹き込むのを感じた。ひよつとすると、とんでもないところに坐つてゐるのではないか、この中に斯うしてゐるままに此の駅がどこかへんな所に飛び移つてゐてしまつたり、或は折角来た汽車が、見ると人が一杯乗つてゐるのに、自分が乗らうとするとどこにも窓も戸もなくて、まごついてゐるうちに、「ぼう」と汽車は自分を尻目にかけて出てしまつたりしさうなことを考へたりするのであつた。直ぐそれが莫迦げた妄念だと自分で承知するのだが、現実と自分との二枚の像が一寸ずれてゐてぴつたりと密着しない感じは今更初まつたことでもないので、これはどれほど反省したり笑はうとしたりしても駄目だつた。しかし、神経的症状として諦めるのでもなかつた。この世間と自分との何としても密着しないずれ、又しても此処でずれ出した自分と駅との関係について、凝乎と目を据ゑるかのやうに、目の焦点を或る空間においた。それは大へん孤独の感を与へるものであつた。今斯うして固定した腰掛に体を寄せてゐる時はまだいいが、今日もここまで来る道で、道行く人々と並んで自分も歩きながら、実は自分が何か二三歩先きを歩いてゐたり二三歩後を歩いてゐるかのやうなずれを感じて、はつと立止まつたり、急いで追ひつかうとしたりする衝動のやうなものに自分が衝き動かされてゐるのを覚えて、足の絡むやうな思ひがしたりしたのであつた。そんな時何か目を瞑つて堪へようとするかのやうに、そのくせ一層むきに足を荒く歩いたりした。しかしさうなると孤独感に足の抜けない深さに引きずり込まれてしまふのであつた。

今日此の駅に腰を下ろすことになつたのも、大きく言へばこの事と別の事ではなかつた。昨夜急に阿蘇の温泉に行くと妻に話して、それでも今朝朝食をすますと忘れたやうな気になつてゐたのを、何か慌てるやうにして一寸した着換と三四冊の本とを面倒臭さうに風呂敷に包むと、妻が郵便局から出してきた何かしかの紙幣を入れた財布を受取り、服装だけは、陸軍中尉の襟章を外しただけの国民服に、そしてソフトを被り黒のマントを手にして家を出たのであつた。折襟やオーバーは東京の任地の方に応召以来預けたままになつてゐたので、こんな扮装になつたのだが、をかしいといつてゐた妻も、これでいい、有るものでいい、この時勢だ、と言ひ出すと、そばで、小学校に行く男の子が、父ちやんそんなんで行くの、といふのに、いいですよ、山ですから、と妻がひとりで弁解し、併し一応行かねばならない熊本までのバスの停留所まで荷物を提げてついてきながら二人になると、こんな恰好で行けば宿も安いとこにしか案内しませんよ、ネ、と笑ふのだつたが、黙つて笑つてゐると、妻はもう余り夫の行動に触れようとしなかつた。戦地から帰つてからお父さん何だか怖くつて、と妻はこれまで二三度何かの拍子に言つたりしたことがある。それをふと思ひ出して、「ゆつくり行つてくるよ。体を作り直さないと、東京へ行つても、同じだからね。」と妻に話しかけてやつたりした。それは昨夜も言つたことであつた。しかし同じことを言つてゐる莫迦らしさを感じつつ、外に何と言ひやうもない感じがした。何を、何と、妻に語つたらいいか。自

分の真意を……、併し自分の真意といつてみたつて、それは自分に話せるほどはつきりしてゐるのか、そしてこれははつきりしない限り徒らに妻の心を引きかき廻すだけであり、一層自分を苦しくするだけでしかない。否、真意といふやつはちやんと摑んでゐても、今これを語る言葉があるか？　これは表現の可能不可能といふことでなくて、言葉そのもの

犬タデ

堀之内　歴

小児喘息だったぼくは　ママゴトの
お客にしかなれなかった
御膳は赤マンマ　木の葉の茶碗

今年猛暑　喘息が出て　動けなかった
繁栄の世の陰へ裏切られて行った人や
先に死んだ者らが懐かしく　私は泣いた

お盆たった　涙は止まらなくなっていた
泣く男は嫌い　妻も蹴るのだった
若くて去った母が呼ぶ　死のうと思った

小台風が秋風を持って来た　私は歩けた
ビルの建つ埋め立て地の夏草の中から
紅くヒラ〳〵手招きするものがある

大犬タデだ　憧かしの赤マンマだ
ごらんなさい　汚ないゴミの中ですよ
美しいでしょ　いらっしやいよここへ

転び乍らゴミの中　丈高の夏草を分けて
私は走り寄った　招く掌の美しく紅い指
私をみんな上げます　折ってって下さい

ゴミの中でも　こんなに咲けるのよ
生きてゆくことよ　どんな場所ででも
夢中だった　私は何本も　何本もとった

机辺で指は垂れて　数日は咲いていた
一粒ずつの小壺となってこぼれはじめた
小粒は梅の形だった　紫変しても愛した

又取りに来てねか　私はもう泣かない
石コロだらけの埋め立て地の花園だった
とに角　生きていることが美しいとは

一九六四・八・二七

への不信任であつた。言へば、自分は隠遁するのだと言へば足りた、しかしさういふ説明ではどうにもならなくなつてゐる自分を知つてゐたので、斯うやつて出で行くといふことでしか妻にも語れなかつた。語るとすれば、もつともらしく湯湯治に行つて来るよ、としかこの時代の言葉では言へなかつた。何か目的ありとして語らねば一切言葉がこの時代では通じなくなつてゐる。妻に対してさへ、否自分自身に対してさへも。しかししら〳〵しく何か斯うした目的とか弁解を立てて言ふ時のみ言葉が通ずることを知つてゐるので、強ひて自分の真意などに触れたりする面倒さを濫用するのを避けて、普通の話をしてゐる方が平静をかき乱されることは却つて少かつたのである。

「ゆつくり、ほんとにゆつくり行つていらつしやい。何か要るものがあつたりしたら電報…さう、表のお父さん所へ電話かけて下すつたらいいわ。」妻はあまりに素直に斯う答へて来たので、一寸まごついたが、気も軽くなつて、

「もし行つてみて、余り寒くないやうだつたら、しらせるから幹ちやんを寄越してもいい。学校へはお前が直接行つてお断りして。」長男の幹は腺病質なところがあつて、時々夜

中に怖えたりした。どんなになだめてやつたりしても、全く昼間と違つた目の据りやうで、目は覚めながらとりとめもないことを口走つたり、こわい〳〵と何か影を見るやうに苦しんだり、それを子供心に反省もして歯をくひしばつてもがき堪へようとするのだが遂に怖しさと堪へ難さとで涙を流して声を忍んで咽んだりすることがあつて、幹にはそんな状態を親から注意したりはせず、なるべく暢気に遊ばせて、せいぜい早く就寝するやうにすすめてゐたが、夫婦の間では困うじてゐたのである。ところが偶々今日行かうとする温泉がさうした病気にも効目がありさうにあつたし、山の静かなところで少し休ませてやるのもいいか、と事のついでに昨夜も話し合つたりしたのであつた。

「お前は、とても赤ちやんが、山の寒さでは駄目だらう。ま、それも行つて見て、それから、」

「私は駄目、赤ちやん風邪でも引かしたらいけないわ。」妻の正直な遠慮にも心に咎められるやうな気がしたが、とにかくそんなこと言つてゐるうちにバスが来て乗り込むと、瞬間、一人になつたといふ安らかさと、ものを言はずに居れる気軽い愉しさを覚えて、立ちながらバスの外を後ろへ走るものをすかし見つつ、何かきよろ〳〵して目で迎へ目で送りしてゐた。しかし、熊本の市内で車から下りて歩み出した時、急に身も世もない自分の孤独の寂しさに胸が苦しくなり、阿蘇行の汽車の停車場の方への電車に乗る前に、途中通の本屋を一二めぐつて、本を買ひ加へたのであつた。何かに目を曝してゐなければ堪へ得ない気持で、目をむいて本棚を眺め廻して、結局「平家物語」と、リルケの「ロダン」といふ訳本と、ふと目にとまつたので金剛厳の「能と能面」を紙にくるんでもらふと、そこで汽車の時間をきき合せて店を出たのであつた。

二

「平家物語」を買つたのは、今朝風呂敷包に一度入れてから又思ひ捨てるやうに出して残してきた「方丈記」と関る思ひがあつて、家でも大形の本で読みさしてゐたのだけれども、原本がよくないのと大きくて荷になるために之も置いて来たのを読み継ぐために文庫本のを求めたのであつた。

この十二月戦地から帰還の途中で、有り合せの「方丈記」を上海で買つて船中でそればかり読んできた。もうこれよりほかない、と思ふのであつた。戦地では、此の時代（到りついた、いはゞ現代日本の時代）の、もの儘い生活を、そこにこそ求めて抛つて生き得ると覚悟して、実際戦地とても色々の絡みつきはあつても兎に角、説明なしに生きることが出来た。一言もなしに死んでよかつたし、さういふ死方で死ぬことのみが今日ではほんたうの文化であると信じてゐた。この死方を自分一人の胸の中では「天皇陛下萬歳」といふ言葉だけがふさわしい——と考へるとなく思つてゐた。これはしかし壮烈でも何でもなく、どちらかといふと愉しい気持で、唯斯うした所にだけ、形も言葉もなく生きてゐる生命といつたやうなものを思ひついたりした拍子にはあはれな気がしたりした。勿論戦闘も仲々やさしいものでなく、少しでも部下をもち、又責任ある上官を上にもつてゐる身では莫迦げた無分別などは出来ないのであつたが、この一人の小さな覚悟は奪はれることはなかつた。

ところが突然帰還を命ぜられると、これは容易ならぬぞと思はれてくるのであつた。その頃の日本の新体制の指導原理はいふ迄もなく素直に受取れたが、それは、受け取つて直ぐ応と答へてそれで新体制の実践に入り得たとされるものではなかつた。「夫々の立場に於て」の臣道実践といふ簡単な事が、今更何事でもないやうなことでありながら何かびつくりさせられるやうな感銘を前から与へられてゐた。それはこの時局に国民の技術を求めてゐる言葉だが、これは今迄もつてきてゐる技術を一層努力して奉仕するといふだけでは済まないものがあつた。一体斯う求められてみると、今迄もつてきてゐた技術とは、それは別の何かのための、はつきり言へば、口すぎのためといふことをも通り越して、「金」にすべてがあつた。「金」といふことに余り理屈めかした説明は無用であつた。唯物論でも個人主義でもない、唯「金」だけが生活の前景にも後景にも中景にもあつて、人は「金」

比喩

森　鮎子

果物屋の店先に並んでいる
夏みかんを見るのが好きだ
彼等の父は太陽で
母は南風
夏には子等を世に出すために
父は精一杯働き
母はまめに動き廻って世話を焼く
太陽を　無限の信頼を受ける男に
南風を　やさしく温かな女に
夏みかんを
無骨で無愛想だが父親似の子等に
それぞれ喩えてみて
私は楽しい

麦藁帽子

うちに来る郵便屋さんの一人は
つばの広い麦藁帽子をかぶって来る
だから強い陽ざしの中でも
平気で自転車を止める
時たまその音を聞きつけて出ていくと
樹蔭の人のように涼しい顔をして
便りを手渡してくれた
恋人が与えたのであろうか
彼が麦藁帽子をきていることが
ひどく有難いことのように思えた

むかし

浅田　二三男

むかし
ここらあたりは田んぼであった
日笠の下にかくれる千枚田が
湧き水をたたえ
ちょろちょろとした
稲穂を倒影していた
青くやせた水呑百姓たちの
ひげずらから流れた汗は
ひとたまりもなく水にうすめられ
広大な海にのまれてしまった
彼らは墓と家を捨て
街頭にさまよった
彼らの家系は断絶し
うたごえは土中に埋没してしまった
むかし
日本の
ここらあたりは田んぼであった
そして百姓というものが
いた

の中で呼吸して、技術といふやうなものも、「金」に媚びる技巧の一つにすぎなくなつてしまつてゐた。併し、何かそんな詮索がましく「金」に挑戦する道学者的な心持を以て思ふのではなかつた。唯、何が理由となり原因となつてゐようとも、事実としてあらゆる技術が穢れてゐることを詩人的に感じた。強ひて言へば、かういふ生活とか技術（これは同意語として考へてゐたが）とかが穢らしく厭らしくなつてきてゐる、言ひかへれば人間を人間らしく向上させる文化の精神の堕ち崩れた時代の空気に堪へ難い苦しさ厭はしさを覚えさせ、不機嫌にさせてゐる唯それだけのことが自分を詩人たらしめてゐると考へてゐた。そして戦場の覚悟もこの詩人としての覚悟であつた。しかし、もし詩を文学的に書くといふことも、もはや今日は他の技術と些とも変りはなく、言葉を出せばその表現が、いかに避けようとしても今日では根本から言葉が腐臭をもつてゐて、その腐臭から到底脱し得ないと思はれるのであつた。少くとも自分の斯うした覚悟や精神については黙つて（頑固に、意固地に）ゐることが最も完全な今日の詩であると考へたりした。又戦場ではそれを誰に向つて語る必要もなかつた。

この考へは、帰還ということになつて、内地の、前から続いてきてゐる生活に自分を向けた時、俄かに大きなものとして思ひの中に拡つてきた。銃後の生活、その技術がどうなつて来てゐるかを疑つた。それは転職を余儀なくさせられて技術を失つたものもあるではないかとか、新聞が闇取引検挙で賑合つてゐるとかいふことではなかつた。寧ろ時には国家をさへ巧みに担いでゐる、検出しにくい茫としたものであつた。形式も非常に整つてゐるが、それが何でもないものであつたりする途方もない頽癈の深さであつた。前線から後方へ下がるに従つて、大儀さを感じて来た。漢口、南京、上海と来た時、何かとんでもないことをしてしまつてゐるやうな気さへして来た。上海で乗船する前日のこと、リッツという映画館で「罪と罰」を見た。久しぶりの映画に間誤つきながら見てゐるうちに映画の筋や仕草などを見る落ちつきも出来て来たが、ラスコーリニコフが殺人して苦悶してゐるのを見てゐるうち、何気なしに不意にくすりと笑つてしまつた。それは始終敵と目を光らし合つてゐた戦場（上海自身でさへ）に永く身を置いた感覚も無くもなかつたが、「罪と罰」のやうなもの（その原作も）を以て仔細らしく厚味を作つてゐる、現代の文化生活といふやうなものへ、復讐したやうな気持を、次の瞬間その笑ひは起させた。すると悪寒のやうなものを覚えて映画館を出てしまつたが、非常な粘り強さで包み始めた或るものに対して、振り解かうとし、手向はうとすればするほど、その手自身が自分のものでなく見えて来る始末で、喚き泣きたいやうな気がしてきた。しかももし泣き喚くとすれば、その泣き声までが、ざくざくと砂を嚙んででもゐるかのやうに感ぜられる気がしてくるのであつた。

しかしそれでも唯声を立てて喚き歎きたいといふそれだけの心に取り縋がる必死さで、骨ががたつくほどであつた。そして、ふと僅かにこれだけが自分に残されてゐるのだと気づいた時、はつと立ち止まる自分を感じ、今度はそこから胸の中を静かに濡らしつつ溢れてくるものが感じられた。その時であつた、ふいと、「行く河の流れは、絶えずして、しかも、元の水にあらず、淀みに浮ぶ、泡沫は、且つ、消え、且つ、結びて、暫くも止まることなし…」といふ「方丈記」の冒頭が口にそれこそ小さな水泡のやうに浮んできたのであつた。何故その時「方丈記」などが思ひ出されてきたのか、と思つたが、後で考へると、それは漢口で本屋に立寄つて一二冊買つた時、同じ書棚にその本が確に目に触れてゐて、或

る感慨がその時微かに自分にかかり合ひ始めてゐたことが思ひ出された。しかし初めはそんなことを思ひ出してゐたりする暇もなかつた。寧ろ、こんな仏教的観念的な感慨などが今思ひ出されて来たりしたことが改めて不審しく思はれて、さういふ観念など全く自分にないことを確めると、一寸はぐらかされたやうな気がしたが、さういふ観念的な意味でなしに、この言葉の底に脈うつ歎きが観念をとびこえて近づいてくる気がし、次には、この「方丈記」が他に実は内容とて何もなく唯歎きに歎いてゐるといふだけの本だつたといふことに、新しい稀らしさで目を瞠らされるのであつた。そしてさう思ふと、この冒頭の厭世的な文章も少しもじめ〳〵したものでなく、しんに清らかな詩人の溜息が聞かれるやうに思はれてきた。

この救ひはまだ救ひの手がかりにすぎなかつたが、この詩人の胸に頭をこすりつけて行きたいやうなものを感じて、通りがかりの本屋を探し当てて、岩波文庫の「方丈記」を求めると、矢も楯もたまらず、道で包みをひきあけて冒頭やら、何処やら此処やらめくり〳〵拾ひ読みしてゐた。

「方丈記」は、先づ初めに唯歎きだけで書かれたといふ稀有の詩を、次に言葉でなくて寧ろ行動でした詩であり、次に厳しく詩人の住処を、詩人の位置を意志し、占められてそれによつてのみ詩が書かれ（文字でなしに）てゐることを教へた。そして隠遁といふのが詩人の詩の烈しい形式でしかなかつた秘密が、否、権勢と利慾とだけが（その代表者は

瑣事

河野仁昭

電車はすいていた
喉頸に汗をためて乗客はねむり
ブラウスの胸をはだけた女の隙で
子供が一人さめていた
その隣へすわった
子供は女の肩ごしに
かわいく汚れた手をだした
ほっぺたも汚れていて
よくうごく眼だけが澄んでいる
手をかすと
人差し指をにぎった
力づよくというのではない
軽くというのでもない
わたしは笑い
子供は指を
上下にふり左右にふり
もてあそびつづけた
終着駅へついた
もそもそと乗客はたち
女もたって
網棚の買物籠をおろした
だが
子供は指をはなさない
わたしは女といっしょにたち
その背にくつついて電車をおりた
ふと女がふり返った
わたしは眼でこたえた
と　それはなぜか
女は
表情をさっと翳らせ
胸もとへ子供をひきもどした
子供は奇声をはなった
それっきりであつた
女は小走りに改札口へむかい
人ごみへきえた
八月の陽が頭上にあった
わたしは
笑おうとした

美しい街

トラークル
平井 俊夫訳

聖歌

みしるし　聖い絵文字を
花壇の花がひるがえり描く。
神の青い息づきはいま
庭園のなかにそよぎ吹く
晴やかに吹く。
高く野葡萄の繁みに十字架が立つ。
村人の喜びやすらう声が多く聞こえ
園丁は石垣に草を刈る。

しめやかにオルガンの調べが湧き
響きと金の光をとかしあう
愛はパンと葡萄酒の祝福をあたえる。

少女らも連れだって歩み入り
かの女らの背に雄鶏が啼く。
錆びた鉄格子はゆるく開かれ
薔薇の花のおどる輪のなかに
白くかそけくマリアが休みたもう。
物乞いはここ祠の石に伏して
死んで祈りに沈む。
足どりも涼しく牧人は丘をくだり
おお　天使が杜にうたい
近い杜にうたい
子供らを眠りにさそい入れる。

小協奏曲

赤い葉群に

赤い葉群にギターの音があふれ
少女らの黄いろい髪がなびいている
ひまわりの並んだまがきのほとりに。
雲を縫って金いろの車がゆく。

褐色の樹蔭が休むなかで
黙って呆けたように年寄が抱きあっている。
孤児らがかわいい声で晩課をとなえ
黄いろい靄のなかで蠅がうなる。
まだ小川のそばで女らが洗濯をしている。
吊るした亜麻布が大きく風に揺れて
前からわたしが好きだった娘が
今日も夕闇のなかを歩いてくる。
ぬるんだ空から雀がいっせいに降りる
腐敗がつまった緑の穴のなかへ。
パンときつい薬味の匂いに欺かれて
ひもじい者も癒えるような気持になる。

夕暮の憂鬱

森　死んだように拡がっている——
影がまわりに生垣のようだ。
震えながらけものは隠れ処を出
ひっそりと小川がすべってゆく。

そうして羊歯や古い石のあとを追い
もつれた葉の蔭から銀色にひかっている。
やがて黒い峡谷をとおりゆくのが聞こえ—
おお　星も瞬いていることだろう。

暗い平地が茫々とひかっている。
ちらばった村々や沼や池。
何か火のようなものが見える。
冷たい光が街道をかすめすぎる。
空に動きが仄めき
野鳥の群が旅立ってゆく
美しいあのよその国ぐににむかい。
葦が大きく揺れだって沈む。

明るい春

1

黄いろい休田をながれる小川のほとりに
まだ去年の枯れた葦のむれがひろがり
灰色のなかを柔らかな響きが漂ってゆく。
生温かい肥料のにおいが吹きよせてくる。
柳の花はしずかに垂れて風に揺られ
兵士が夢みごこちで哀しい歌をうたう。
長い草地は疲れたざわめきを立てて靡き
子供がひとり朧ろな輪郭でたたずんでいる。

あのむこうの白樺の樹々　黒い茨の茂み
その姿も靄に溶けて遠ざかってゆく。
古い年の名残は腐敗におちて明るい緑が芽ぶき
ひきがえるらが若い葱のあいだに這いでてくる。

2

本当におまえが好きだ　逞ましい洗濯女よ
流れにはまだ空の金が重たげにうつり
つと煌めいて小さな魚がかき消えてゆく。
赤楊のあいだを白い顔が走りすぎる。

庭々に鐘のおとが長くひくく沈んで
小鳥が一羽くるったように囀り啼く。
柔らかな穀物が静かにうっとりと膨らみ
蜜蜂らもいっしんに蜜を集めている。
愛よ　仕事に疲れた者のところに訪れよ。
その貧しい家にうるんだ光がさす。
森は夕闇のなかを厳しく黒ずんでひろがり
時おり蕾のわれる明るい音が聞こえてくる。

3

生成するものは総てなんと病んでみえることか。
熱っぽい息が村をとりまいて廻っている。
だが樹々の枝のなかから優しい霊の合図がして
不安なこころも大きく開かれてくる。
咲き出ようとする充溢の潮はゆるやかに引きさり
生まれぬものはまだ自身の安息にひきこもっている。
愛ある者らはその星にむかって花を開き
かれらの吐息がひとしお甘美に夜のなかを漂う。
生を負うものは苦しく　良くかつ真実にみちる。
そうしておまえの心にそっと古い墓石の言葉がふれる
まことに我とこしえに汝らのもとにあらんと。
おお　銀やなぎの枝にふるえる神の息吹よ。

平清盛であつた）すべてであつて、文化が顔褻し喪失した時代に於ける詩人の、恐ろしいばかりの純粋な生の技術そのものを、示してくれてゐた。これは何ら現代の意味での厭世（これも現代の顔褻の一種にはかならなかつた）などでなくて、厭世といふことが、無類の強さで生を護らうとした唯一人の美しい行動であつた。詩人は歎き、恨み、悲しみ、憤り、軽蔑し、嘲笑し、哀れみ、歌ひ、弾じ、批評し、誇り、疑ひ、信じ、拗ね、不逞くされてゐるが、すべて清らかな言葉にみちてゐた。

船中で、船舶にしつらへられた暗い板敷の上に屈まつて読み返し〳〵しながら咽喉からこみ上つてくる涙を怺へ得なかつた。帰還した後、たまたま鴨長明全集が出てゐるのを知つて買つて読んでみると、国文学者達が取立てて言ふ長明の和歌や歌論は殆どくだらぬもので、却つて仏教的説話集として措かれてゐる「発心集」といふのが全く詩人の孤独と清純な生への決心と行を言つてゐるものであることを知り、それを読んでゐると、出離といふ行動が恐ろしい衝動を以て唆かされてくるのを感じて自分ではらはらするのであつた。

帰還して見た銃後生活といふものは、何ら直ぐ正体のつかめるものではなかつた。唯、近衛首相か、自ら参会を求めて意見を聴取した選賛会準備会での委員たちのあらゆる論説を払拭するかの如くに短い言葉に単純化して「夫々の立場に於て臣節を尽す」と言つたのは、詩人的技術として唯一つきらきらと澄みわたつてゐるやうな気がした。これは主張や意見や原理などでなくたゞ悲願であると思はれ、首相のこの詩人的な悲願がややもすると又種々の不純なものに絡まれてしまひさうな危さを覚えさせられたりするのであつた。同時に自分が大いに銃後の務めをせねばならないといふ文句通りの実行よりも、段々この世から小さい狭い住家へ追ひやられるやうな、又自ら追ひやられることを意志すること、行ずることによつて、何か今目前の間に合ふ以上に、例へば「方丈記」の著者達などが通つた道によつてのみ、あの暴圧的に文化を破壊した将軍達の手から、日本の不思議に美しい伝統を守り、その貧しい小さな家に営んだものが、遂にやがて、近世日本文化の大きな波を打ち出だしたこと、そして例へば、茶道の如きに於ても、将軍もこの文化に参ずるためには、武器を措いてあの小さな身一つだけくぐれるにちり口をくゞつて文化の聖堂に入つたり、「花」を床の間に拝したりしなければならなかつたことを思つたりして、今日に於ても何か斯ういふやうな国の文化への奉仕の道も自分達にあるのではないか、例へば自分達が戦地に行つてゐる間に、書きまくり〳〵してそれが却つて売れてゐる文壇の景気など、筆をとつて書いたりする自分達に係りのありやうもないけれども、何か、少くとも書かない詩人として（そんなこと誰も認めてもくれないが）誰にも知られずに生き或は死んで行く、或はわざとの実生活出離といふやうな行動が、せめて諷刺（イロニー）にでもなり得ないか、などと、全くはかなくとりとめない呟きとして胸中を寂しく往来した。

東京の任地の好意にもより、右腕の負傷のあとの十分でない神経と長い陣地生活の間に大体強くない体に患つてしまつた腰部のかなりひどい神経痛とを一度温泉あたりで治療してみたいと願つてゐたので、休養の諒解を得て、上京を後らせてゐたのであつたが、何か心の中で愚図つくものがあつて、一日延しに延して一月近くも家に引込んでゐた。それは家の外に対する対決よりも家の内に、すぐ身近に、いや、自分の分身たちとしての家族、更に言ひ換へるならば結局又自分に帰つてくるのであつたが、さてさう身近な肉身たちに対すると、どう対決のしやうもなく、それかとて家庭に甘えきりも出来ず、又自分の斯う離れ過ぎた心をどう取り戻していいか、或は

鴨長明が三十歳にしてまだ出離ではなかつたが別に小庵を営んでそこに住むといふことまでせずにゐられなかつたその厳しさが自分にも課せらるべきか、若しさうとすれば——、この銃後の生活のきびしい意味を益々生やさしいものでないと思ふのであつた。しかしこれは単に自分の意志や実行力不足の問題であらうか。

かういふ中で、何かまだ探らうとするかのやうに、「平家物語」を読みかけたりしてゐた。時代が決する、と思ふのであつた。しかし自分一人が一人でこんな苦しみでゐるためにか、も一つの言葉を以てさりげなく、寧ろ昔と違つたやさしさで家族を愛撫し、時々は戦地で馴れた身軽さで妻の仕事の一部を手伝つてやつたり、子供の遊び相手になつてやつたりしているのに、妻は敏感に「何だか怖い」と口に出して言ふことがあり、子供が、自分が帰つて以来何度も夜中に怖えたりするのまで、はたと胸に当る気持がした。これは自分を一層もの愁い気分にした。「戦地から帰るとぼんやりするさうですね」と、近所の知人が訪ねて来て、先づ言つたりした。

昨夜何かのきつかけから、思ひきつて温泉に行つて来ようと言ひ出すと、此頃それを勧めるのも控へてゐたらしい妻は、せき立てるやうに賛成し、どこの温泉がいいといふことまで何処できいてゐたのか、承知してゐて言ひ出したのであつた。さういふ妻を見ると又こんな晴れない気分を持つたままで妻に送られて出るというのが済まないやうな気がした。それに上の子供が、もう快くなりかけてゐるとは言へ、風邪で寝てもゐた。しかしも一度ひとりになつてみたい、とちらにしたつて、

ヘリック詩抄（四十四）

森　亮

巨岩

正しき人は
たけり狂ふ
波の怒りを
泡に変ふる
厳なるかな

★

乙女の歌へる

すくすく伸びよ迷迭香（まんねんろう）
あが嫁（とつ）ぐ日を祝ふ花
嫁ぐ日待たずあが往（い）なば
あが墓つきをかざる花

★

はにかみ

乙女たちの「いゝえ」は当てにならない。
彼女たちはみんなはにかみ屋だから
口で断つたことを心では願つてゐる。

ヘリックの二行詩は大多数のものが警句格言の様相を帯びてゐる。詩形は二行が同じ数の詩脚をもち、行末で押韻されたカプレットで、さういふ型にはまることによつてやうやく文学としての面目を保つてゐる。それで訳詩でも文語で定形を採るとか、口語で訳す場合には行の長さが余り不釣合にならぬやうにする——均衡を保つためには原詩の二行を三行に訳すといふやうな工夫も時にはしなければならない。今回ここに紹介する「巨岩」（三九〇）、「乙女の歌へる」（六六八）、「はにかみ」（七三六）はいづれも原詩では二行だつたのを都合でそれぞれ行数を違へて訳した。

自分をもつと狭く、自分だけにしてみることが、今は、ほかにどうしやうもない自分の道だつた。又大寒に入つたためか神経痛も時々強く来て、そんな時は腰から背へ鉛板を貼りつけて持つて廻つてゐるやうな鈍痛を覚えるので思はず呻いたりするのであつた。それが何かはたらけない佗びしい気持をかき起したりした。

今朝家を出る時、どうせ退屈な山の湯宿で、本読むよりほかないので包みこんだ本の中から、ふつと又長明の全集はとりのけて後に残した。もう本は要らない、一人の自分に問うて見るのだと思つたのであつた。しかし他の本では、持つて行つても実際は読まないかもしれないとも思つた。そこで熊本に立寄ると本屋を物色するうち、小さな本ではあつたがリルケの「ロダン」が目についたのであつた。

三

「ロダン」と見た瞬間、それだけで、ふと今自分が心さぐりしてゐるものに近づいたやうな気はひを感じた。それは文化なき世に対して鴨長明がこの世のものはもはや形や跡もあり得ないとして、その荒廃そのまゝを諷するかのように隠棲閑居するといふことでその日の文化であり得るとした底に匿されてゐるものであつた。それは実に又「かたち」への切々たる憧憬にほかならなかつた。頽廃し果てた形式の穢はしさ、不純さに対してこの上ない潔癖を以て厳しく拒絶の姿勢を示しながら、それは清らかな純粋な形式を想ひ描かうとする詩人のとつたその時代の最も高い技術であつた。否、既にこの閑居自身が彼が高く誇つてゐる詩の形式であつたとも言へる。しかしこの一詩人のもつた形式は全く孤独で断絶してゐるやうでありながら、いつの間にかこのやうな詩人達の間に非常な確実さと責任とを以て受けつがれたり集約されたりして仄暗い中世の渓谷の岩間を貫いて行つて驚くべき「形式」を仕出でてゐるのであつた。

斯ういふ仄暗い路を長明の中に段々感じつつあつたし、何かさういふ係り合ひを自分と家族の間にも感じとりつつあつたのであつたが、「ロダン」、しかも詩人リルケの書いたロダンと見た時、目の前に躍り出たものを感じたのであつた。しかし何か一足とびにそこへ行つてしまふことに躊躇されたが、その作り上りの形としての彫刻はもとよりながら、これを作つて行くところに屹度詩人の秘密がこめられてゐるにちがひない、いやそれはともかく、山でじつとこの口絵の写真を見てゐるだけでもいい、と思はれて、思ひきつて取り出した、その近くに又金剛巌の「能と能面」といふ小さな本があつた。これも「ロダン」と一緒に自分の手に躍り込むのを覚えた。自分は一体今日の時代に日本文化といふとすぐ過去の時代の遺物を引き出して来て並べることに今日の衰弱を見てゐたので、古典を愛しながら、今日は古典さへも封じて、今の時代自身の佗びしさを知るところに長明のとつたやうな文化憧憬の胎生が起ると思つて、茶道も能も和歌も俳句も強ひて軽蔑しなければならないと考へてゐたりした。現に能の上演が今日実際に日本の文化たり得ないばかりか、寧ろ日本文化が今日あるかのやうな錯覚や安易な怠慢を社会に与へてゐるといつてよかつた。しかし、長明などの延長線にやはり斯ういふ形式を生んだものとして何か示唆するものがありはしないか、いやこれも古面の

昭和戦争文学全集 4
太平洋開戦
―十二月八日―
集英社
東京都千代田区神田一ッ橋二ノ三
振替 東京一五六五三
¥390

写真を見ることによつて、形式を思ふ縁になればいい、と思つた。しかし買つてすぐ、偶然にもこの二冊自身互に係り合つてゐるといふことを感じた。

さて駅の固い冷たい腰掛に腰を下ろして、暫く不安な落ち著かなさうな焦燥をひとり持て余してゐたが、風呂敷包みに手をつつこんで本包みをとり出し、びりりと破くと、「ロダン」の口絵写真に目を見張りつつ、戦地でも一枚こんな彫刻の写真でも欲しかつたことなど思ひ出したりして、今も殺風景な山の中にゐる戦友や若い部下達を想ひ浮べられ、又しても何といふ難しさだと自分を省みられるのであつた。こんな愚図つきは矢張り嘗てのインテリ的不決断の名残にすぎないのであらうか。どうかすると、実際あの中毒したやうなもの倦い循環論が自分をとらへさうになることもあつた。しかし以前のやうに観念に終つてしまはないで、「方丈記」の中からも、その末尾に「不請の阿弥陀仏三遍申してやみぬ」といふ不逞々々しさで観念的循環論にぴたりと留めを刺してゐる「生」への憧憬を知り得てゐるので、いつもどこか、涼しい泉が岩の間に迸り出てゐる音をききつけてゐるやうな愉しさは失はれなかつた。一通り写真を見終つてから本文を開けてみた。小さい活字でぎつしり詰まつて読みにくいものであつた。パラパラとめくつて又目次を見て、第一部となつてゐるものの最後の言葉を読んで見ようとした。これは時々やる癖であつた。決して早く結論を知りたいといふのではなく、すぐれた本はその最後に、恐らく著者にとつておきの、美味い、愉しい言葉が匿してあつたりするからである。それを待ち切れない気持からであつた。その第一部の最後には斯う書かれてあつた。

……なぜなら、世界が彼の道具に従つて来たからである。

自分は全くこの言葉に吸ひこまれさうになるやうに、本に顔を寄せて、それを読んだ、それから慌てたやうに第一頁を開いた。冒頭には次の言葉が置かれてゐた。

ロダンは自己の名声を得る前に孤独であつた。

（つづく）

坂道

吉本青司

ある日
城跡の坂道をのぼった
雑草はもう　つぼみをひらき
はなびらが　淡く
天球をのっけていた
生と死の
たちがたいジグザグをとく
蝶みたいに
狂女が
くずれそうな石がけの上で
きもののそでを振っていた
つぶやくように
うたう〈智恵子抄〉

〈危険区域
　通行禁止〉
と表札が立っているのに
かまわず　ひとは
がけの下を通る
遠まわりして　ぼくは
枯れた薔薇棚のそばを歩く
あるくことで
考えている

コギトの思ひ出

田中克己

コギトが第二六号から内容の一変したことは、前にものべたが、この同人雑誌から同人プラス同志といふが甚だ曖昧だったことは認めねばなるまい。日本浪曼派の主導者の一人である亀井勝一郎氏が書いたことは、やはり前に述べたが、同氏は当時「現実」の同人であった。手もとに一冊もないので、どんな雑誌か覚えもないが、雑誌の名から推量すればレアリズムを主張するものであったのであらう。コギト第二十七号に附載されてゐる同誌八月号の執筆者を見ると、藤原定、田辺耕一郎など日本浪曼派と関係のない人たちの名が見られる。ことにふしぎなのは保田もここに「正しいやうな意見への態度」といふ題で執筆してゐる。題名からではわからないが、所謂レアリズム反対の議論でも書いてゐるのではなからうか。

同じく附載された雑誌広告のも一つは「麵麭」で、これは北川冬彦氏の主裁する雑誌、神保光太郎氏はしたがって、ここから日本浪曼派へとぬけてゆくのである。

浪曼派のことはしばらく置く、コギトには第二十八号以後、蔵原伸二郎氏が、「東洋の満月」といふ題で、多くの詩を連載してゆく。蔵原、伊東、宮沢賢治は保田の好きな三詩人の一人で、誰しもコギトの同人のやうにいふが、これは訂正しなければなるまい。既に有名で、私たちは一時のプロレタリア文学の理論家蔵原惟人氏のいとことかいふことまで承知してゐた。ただし詩は舞台を幻想の曠野や沙漠にとり、そこに住む動物の気持になって作られた無類のもので、のちに一冊の本にまとめられた。

わたしは第二十五号以来、ノヴアーリスの「ハインリヒ・フォン・オフテルディンゲン」を訳してゐたが、これは大阪に帰って中学の講師をし、中島栄次郎と将棋をさしながら、すすめられてやったのだと思ふ。テキストも持たなかったのを、中島か松下か、どちらかが貸してくれた。誤訳だらけだが、本邦初訳で高校でも出来の悪かったドイツ語の力でやったのだから当然である。のせる勇気といふより、それさへ感じなかった若い自分を私自ら今となっては他人事のやうに思ふ。本当に老いたものである。序でながら太宰治らが「青い花」といふ同人雑誌（一号だしただけでつぶれた?）を出したのは、いつのことか。もし昭和十一年ごろだったとしたら、私の翻訳が第一書房から、その題で本となって出たことと関係がある筈である。

年が明けて昭和十年となった。コギトは第四巻となり、私は大阪に住みつくことになった。コギトのことは、中島とよく話した。遠くにゐると批判的になるもので、私もいったかもしれないが、この年三月号の編輯後記に保田はかう書いてゐる。

浅野晃

詩集寒色

読売文学賞を受賞した名著
清涼の書架に加へ給へ

定価 三〇〇円
送料 五〇円

発売所 京都市下京区五条通河原町西入
新学社

「大阪にゐる中島の意見によると、「コギト」をもっと高踏的にせねばまさに意義ないといふ。僕ら高踏的なることを主旨とし、三年に亘り微力をつくしたもの、恥ぢてこの忠告を尊ぶ云々。」

ロマンチックであれとはいはないが、風俗小説や出世主義はこのころの青年の最も恥かしく考へた卑しい考へだったのである。詩ばかり書いてゐる私とのつきあひのせいか、中島はこの号に珍らしく詩を書いた。「河の上」といふ題で、四篇から成ってゐるがその第三をためしに引くと

太平洋の秋

浅野晃

秋だ
光はつめたく
しかもやさしくて賢い
岸には
カンナの花の黄と赤と
そして水は
太平洋の水だ
カンナの花に青い潮
ここ日本国の
太平洋の岸で
われらの思ひは遠く
赤道の秋に馳せてゐる
おととひも
きのふもけふも

○

秋だ
赤道の海のうねりは
黒くて無言だ
ジャングルの花をかくして
天は青くうつくしい
声が呼んでゐる
祖国の声が
おととひも
きのふもけふも

○

静謐で清浄な空間を充たす
無尽の光
このひたすらな挺身者
時は、いま
重いあしどりで歩いてゐる
偽りの歴史を溶かすべく

それがわたしの自惚なのやら
それがわたしの祈りなのやら
たゞ意味もなく苦笑を浮べ
すくすく生えた蘆の葉よ
わたしは懐中人知れず両手をにぎり
その暖かさにほっとするのだが
それがわたしをどぎまぎさせ
やがてわたしは思ふのだ
こんな秘密の悪徳があると
ただ芸もなく苦笑を浮べ
……
目をつむれば
あゝ沢山な鹿の群が
次から次へと
脚をあげて
あの中へ躍り込む……

わたしはただ芸もなく苦笑を浮べ

田辺元博士に傾倒し、哲学に専心しながら、詩心をゆたかに享け、怒りも悲しみも苦笑ですごしてゐた故友をいまわたしは惜しくなつかしく思ふ。彼は前にもいったかもしれぬが、補充兵として三十すぎに召集され、フイリッピンで戦死するのである。あとには著書もなく子孫ものこさず、書物は私が整理していま名古屋大学と帝塚山学院短大との書庫に入ってゐる。

（つづく）

小高根二郎

詩人、その生涯と運命

—書簡と作品から見た伊東静雄—

〈……墓へがたければわれ空に投げうつ水中花。金魚の影もそこに閃きつ。　すべてのものは吾にむかひて　死ねといふ、　わが水無月のなどかくはうつくしき〉　近代詩を極北にまで追いつめながら、詩壇のみならずおよそ日本語を解するいかなるひとの胸にも響く絶唱の数々を遺して、敗戦後の混乱期に、なほ生きようと努力しつつ、病いに逝った敬虔な心の詩人、伊東静雄の生涯と文学を、詩・書簡・日記を交え、評伝に書きなした作品。昭和三十年に起稿した著者は、伊東の精神にしたがい書間は世俗の勤めを果たしながら暁の星を戴いてこれを書きつづけ　三十八年暮に完成した。伊東の青春から晩年に及ぶあの非常の時代に、繊細脆弱な伊東が、歌うというだけの希望と営為によって、いかに懸命に生きようと努力したか？　その精神の歴程と肉体の足跡を克明に書きしるし、「僕等は若い日に亡びる美しさを讃美し歌いすぎた。その贖罪のためにも生きながらえる美しさを今日讃えねばならぬ」という著者の悲願の書である。

中秋刊　**新潮社**

書簡

伊東静雄

昭和二十六年五月二二日

大阪府南河内郡長野市国立病院北病棟より
東京中央区築地三ノ六日本映画連合会事務局長江道太郎宛はがき

先頃はお心のこもったお見舞状いただき、度々のことながらうれしく、有難くございました。三月中旬かなり悪くなりましたので、あまり期待もてぬながら三度目のパス服用を始めてみましたら、これはどうしたことやら、一週間位で、素晴らしい、劇的効果を発揮し、一年半つづいた熱も頓に、完全に去り、アレアレと思う程肥えたり、病前よりずっと体重増し、気力も出来うれしく思ってゐます。然し体が安定すると精神の方は動揺はげしく、困ります。病熱は安定しても、社会生活への再起はのぞめぬ症状らしいので、それが原因で、閉口するのです。思はず、甘えぐちになりました。御憐み下さい。

編輯後記

八月一三日。東京毎日新聞「寒流」欄で、一〇二号で完結をみた拙論に関して、「詩人伝ついに完成」の見出しで最大級の、ゆうあくな祝辞を頂戴した。リルケが伝えるロダンのバルザック像制作の態度がひきあひにだされたりして、自ら顧みて恥入った次第であるが、とにかく十年に近い歳月を伊東に捧げたさまざまの労苦が一つ気に拭はれたやうな感謝の思ひを感じた。新潮社の片岡氏のしらせではA氏の筆の由である。万謝申し上げます。

翌八月一四日。東京新聞「大波小波」欄で「伊東静雄伝の完結」といった見出しで同じく祝辞をいただいた。先の「寒流」評と趣きをいさゝか異にし、拙誌の経営から初まり、伝記が特質とする生存者に対する配慮などにも同情をいたゞき、「この詩誌は今日の詩のありようを考える場合、もっと注目し、尊重していい」との鞭撻をいたゞき、これから私が再び着手する蓮田伝に関しても「伊東伝の小宇宙」として触れて下さってゐた。匿名「水中花」氏は、いつぞやも同欄で言葉を下さった覚えがあるが、感謝申し上げます。かなり身近かな人である模様であるが、筆触から八月二八日。産経「同人雑誌評」欄で富士正晴氏より「大変な仕事」という慰労の言葉をいたゞいてゐた。

其他、同人諸氏の他に、野間光辰、浅野晃英、田中妙子、石川勝之、森鮎子、杉本秀太郎、久保忠夫、荻原葉子氏からもお祝ひをいたゞいてゐた。誌上よりあつく御礼を申し述べます。

（O）

果樹園　第一〇四号（毎月一回一日発行）
昭和三十九年十月一日発行
池田市野町一六八
発行兼編輯者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所　果樹園社
定価　四十円　送料　十円

果樹園　一〇四号　昭和三十九年十月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円

果樹園　第105号

有心　蓮田善明
ヘリック詩抄　森亮
台風はフルサトの匂いを　吉本青司
忘れ得ぬ人　浅野晃
トラークル詩抄　平井俊夫
夏　日　美堂正義
菊　薫　る　堀之内歴
コギトの思ひ出　田中克己
千手観音　浅田二三男
編輯後記

有心（うしん）（今ものがたり）

蓮田善明

四

汽車は空席はなく、やつと腰掛の凭れに背を寄せることが出来た。しかしそれで十分満足であつた。汽車が駅に入つてくるのを見た時、一匹のながい胴体をした虫けらがむくむくと汚らしく身をうちふるはして来たやうな気がした。そこらの空気を暴力的に脅かしながらとても凄い大きな音響をはためかして走るこの機械には憎悪さへ感じた。この汽車はその速力と重量自身が起す音響（速力や重量といふことは美しいと思つてゐた）を、それにふさはしく発揚してゐるのでなく、その速力や重量よりも過大にか或はそれらには全く縁のない無用の大音響を起して人々の聴覚と全神経をかき乱し、それによつて、自分を偉大なものと信じ込ませようとでもするかのやうに、全身を顫はせて喚いてゐた。自分は怖毛をふるつて、なるべくそつと乗りこんだ。駅員が乗り込む前に、「並んで下さい、一列に並んで下さい」と言つてゐたが、こんなものに得意さうにわいわいと乗り込んだり、又如何にも満足して少しは誇らしげな顔さへして席を占領しようとしたり、割り込まうとしたりしている人々の充満している車室にも何の興味もなかつた。手荷物を網棚に上げると、リルケの「ロダン」をポケットから出して読みはじめた。そこには、うつて変つて救ひがあつた。紳経は静まり、大へんに愉しい小ささといつたやうなものの中に自分が落ちつき、それから今までの硬ばつてゐた心の中に感情がいきを立てないやうにそつと湧き出で、しかし何ものも外から障げ得ないはげしさで脈うち出して行くのを感じながら、読み耽つて行つた。そしてこの詩人と、彼の奏でるロダンといふ楽器との、世にも深い又隙のない調和とが、読めば読むほど、やさしく併し甘やかしのない、無用の弁舌の些しもないきびしさで「己」を問ひつめてくるのであつた。ロダンが凡ゆるものを——その願ひをききとつて——生命を見出してやり、——それらのものが「自らを変形し」て、——しかも「生命を些しも失つてゐず、反対に、一層強く、はげしく生き」る、——純粋な、玲瓏たる生命へと、——この偉人の非常につつましい忍耐と努力とで導かれ、——又「泣いてゐる足といふものがあること、また人間の身体ぢゆう到るところで泣くといふことがあること、またあらゆる気孔から出る涙があるといふことを知つた」彼の手、——彼の「『よく作る』といふこと、最も純粋な精神をもつて働くといふこと」によつて、形像が、——その像を人体から直接石膏にとつたのだといつ

て世人が彼を弾劾したやうな、しかもそれが実に石や金属や石膏やの像として、――作り出されてゐた、――斯うした手が自分を掴んで見る見る「変形」させて、目の前に、一つの救はれた己が生れて行くやうな幻覚へひき入れられて行つた。非常に長い時間が、恰も永遠とでも言ふべきやうな長い時間が経つたやうな気がした。と思つたのは直ぐ斜め右の席で、けたたましい竹鉄砲――竹で作つた玩具の軽機関銃と何か甲高い円味のある二人の男の子達の叫び声が起つて、はつと我に返らせた時であつた。しかし瞬間吃とその子供達を見つめ、その入り乱れる音と声とに耳を傾けた。

その二人の兄弟らしい幼い子供達は窓に取りついて窓外めがけて乱射してゐるのであつた。硝子戸が一寸邪魔らしいが満足してゐた。「こら、静かにせんか」と親らしい人が制止してゐるので、硝子戸をまで開けるなどといふことは彼等も我慢しなければならなかつた。汽車は走つてゐた。窓外は冬枯れた草や木やが渾沌として過ぎてゐた。子供達は射撃をやめず、カタカタといふ音は車室に響き渡り、傍若無人な戦闘の騒ぎは近くの人々を辟易させた。この光景に打たれた。そしてあたりを見廻した。この感動を他の人々の顔にも見ようとして。併し、子供達の直ぐ近くの人の辟易以外に、どの顔もどの顔もこの事件に対して些しの、全く些しの感応も示してゐなかつた。それは又異常な光景であつた。眠つてなどゐる人はゐるやうでなかつたが、否皆目の前の何かを見、窓外に目をやり、又口を開いて話し合つてゐるのであるが、その目は何も見てゐなかつた。口もぱくぱくしたり、皺が寄つて笑つたりしてゐるが、汽車の軌る騒音と子供達の戦闘の騒ぎにかき消されてゐるためであらうが、まるで言葉も笑ひも、空気がその振動を伝へ得ないかのやうに何も聞えないのであつた。目をふさぎたいやうな気がした。

この光景に接した後又「ロダン」に読み耽つてゐた。子供達の軽機関銃はまだ時々起つてゐた。自分には次第に、これから登らうとする山、冷えきつて、しかしその底の熱いものに堪へ得ないでその大きな体を時々ぶるぶると身ぶるひし、こんこんと温い湯を岩の間から迸らせてゐるといふ山への意志といつたやうなものが、鼓動しつつあつた。

それから間もなくであつた、すぐ前に背を向けて立つてゐる十二三の女の子が、手で顔を蔽うて鼻をすすり上げるやうな恰好を何度も続けているのに気づいた。泣きじやくつてゐるやうにも見えた。しかし声を立てるわけでもなく、その同じ動作は可なり長く繰り返されてそれ以上はげしくもならなかつたので、それが却つて時々女の子へ目を移させた。それは同じ駅から乗り込んだ朝鮮人の若い夫婦の子（子にしては恐らく早く出来た）であつた。男は洋服、妻君と女の子は和服であつたが、彼等の交す言葉は朝鮮人であることを示してゐた。併し折々その中に上手な日本語も交つてゐた。彼等が注意を惹いたのはプラット　ホームでであつた。多くの人が先を争はうとする構への中に彼等三人は少しもそれに立ち交るけはひもなく、列の後ろについてゐるといふより列外に立つてゐた。しかしそれは何らの卑屈さも焦燥を抑制してゐるわざとらしさもなく、乗る時が来て乗るといふ心を本来からもつてゐて、他に動ぜられもせず、平静に汽車を待つといふだけの態度で、いろいろ何か話しあつたりしてゐたが、それは如何にも他から見て愉しいといつたやうな光景であつた。この三人は車中でも自分の傍に固まつてゐた。と突然、さつきからしやくり上げるやうにしてゐた女の子の背後にいつの間

にか廻つて後ろから抱いて顔を覗き込みながら妻君らしいその女が「泣きやみなさい、泣きやみなさい」と国語で言ひきかせてゐる声に、おやと目を向けた時、女の子がいつのまにか咽喉をつき上げてくる咽び声を怺らへきれずにおーおう、と声を立てて泣き出してゐた。理由は分らなかつた。しやくり上げてしきりに泣いているほかに何の身振も示さず、悲しいのか、苦しいのか、その判別のつかない、唯泣いてゐるといつたやうな声であつた。後ろからなだめてゐる女も唯「泣きやめなさい」をやさしく繰返してゐるだけで、それ以上子供のために心配してゐたり、原因を察して同情してゐるといふ風でもなかつた。この理由の分らない嗚咽は自分を間誤つかせた。しかも女の子は、もう汽車の騒音よりも高い声で泣き続けて、子供らしく、憚りなく、しきりに泣いて泣きやまないのであつた。女もそれを強ひてきつく止めるといふのでもなく、泣くのを叱るよりも子供の泣き入つてゐるのを抱きとつてゐてやるといつた恰好であつた。自分はわざと目を彼女等に注ぐのを遠慮して本に向けてゐた。するとその泣いて泣いてやまない、憚りのない泣声、どうかすると泣くことが一等自分の気に入つてゐるのだとでもいふ風にしやくり上げ〳〵して、声ばかりはおーオおーオと泣いてゐるその声が、何かそこ（二人の女）だけを静かに包んでゐるやうな或るものが感ぜられて来、またその

ヘリック詩抄（四十五）

森　亮

大往生

これは是れ誠の話、
正しく生きし人の
死にざま悪しきはなし。

＊

勝敗の鍵

兵法の聖ぞ説ける、
「戦は目から負ける。」

＊

美容術

自然の拒む顔佳さを
紅おしろいで生み出さう。

＊

霊鳥

鳥といふ鳥がみな声を失ふ世が来ても、
お金銭うぐひすは麗しく歌ひつづける

＊

二君を戴く

心をくだし給うた神、
糧を与へたまふは君、
これら尊い御二方に
しばられたわが身。

前回に引き続きヘリックの二行詩を紹介する。原文は五篇とも二行詩であるが、訳文では行数が殖えた場合もある。又、一部に脚韻を試みた。さういふ操作で少しは韻文らしさが保たれたら幸ひである。これらの諸篇で歌はれてゐる内容はそのままことわざとして通用するやうなものばかりで、大半は古典文学その他に出典を求めることができる。警抜な「勝敗の鍵」も兵家ならぬ歴史家タキトゥスの「ゲルマーニア」の四十三段から来てゐる。原詩の番号は「大往生」一〇六〇、「勝敗の鍵」二九一、「美容術」六四二、「霊鳥」七二七で、最後の「二君を戴く」は聖歌集の六二番。

泣声が何か絶対な響きを以て、うつくしいものに聞えてくるのであつた。自分は本から目を外らし、その声を十分に聴き取らうとするかのやうに、耳を、心を、全身を、空ろにしようと身構へる自分を気づいた。

しかし、感動させた、も一つのことが起つた。それはそこに中学校があつて、退けて帰るのらしい一年生位の汽車通学生の一連れが或る駅から乗り込んで来たのであつた。この六七人の連れは入口の方に近い所に立つたり、自分の近くの所に来て立つたり、中にはうまく席を見つけて腰かけたりした者もあつた。彼等のまだ幼さの抜けない目、いつも目の前に何かがあるためにそれを見るといふよりも自分の目が向いた所にあるものだけが彼の目を捉へてゐるといつた目つき、その目について廻つてゐるような鼻、口、上向いた頭、何かはら〳〵させる心もとない手足の道具、しかしそれは限りなく大人を惹きつけるものであつた。此の生き〳〵した可愛い少年達を見てゐると何か此の少年達から言葉を誘き出したい強い衝動を感じて仕方がなかつた。ところがその時「今帰りですか、汽車で通つてなはるか」といふ年とつた女の声が後ろの席から一人の少年に浴せかけられた。少年ははつといふ風にその声の方を見て、何か簡単に併し聞きとれない言葉で答へた。表情に表はれない気まり悪げな恥らひがあつた。すると女の人はまたこのたよりない少年相手に余りに普通すぎる何でもないことを、あれこれと言ひかけるのであつた。少年はそれに対して「ハイ」とか「イイエ」とかとだけ例の聞きとりにくい声で答へ、目は当惑しきつて、自分自身の目ばかりを追はうとしてゐた。

自分は思はず微笑した。

こつつと突き当るものがあつた。外界との触合ひがたいずれが突然おしのけられて、ひとりの、ちひさなのぞみに、そつと、しかし確かに、こつつと触れてくるものがあつた。

五

汽車は立野で乗換へて支線に移つた。もう阿蘇の、直径数里と言はれる旧火口の縁が作つてゐる雄大な外輪山の一角が渓谷となつて大きく口を開け、そこから白川の河流を西の肥後平野に向けて押し出させてゐる、さういふ断り立つた標高の上にあつた。しかし更に高く大きく空間を乗っ取つた黄樺色の山塊が遙々と中天めがけて前方に伸びて立ち塞がつてゐた。それは木一本無いやうな無雑作さであつた。そして一見無用に見えるやうな隆起がその綾線に高く突き上つたりして空を馬鹿にしてゐるやうに太々しく重なつてゐたりした。噴煙はその方向に見える筈であつたが、却つて近くなつたためにそれらの山にかくれてゐるらしかつた。総じてこの衣服を纏はない裸の山々は、唯もう、ずつと昔から所うしてあつたのだとか、又その大きさで空を占めてゐるために却つて空というものの広大さを思はせたり、見る人の目に、極く単純な、それでゐて恐ろしい厳粛さを一瞥のうちに示してゐた。汽車の外は容赦なく吹きつける寒い狂風が凍みるやうで、人々は皆走るやうにして支線に乗り移つたり、橋を渡つたりした。客車はたつた二車輌しかひいてゐない小ぢんまりしたその支線の汽車は、それから別に無理に急ぐ必要も無いといつたやうに、しかしまめ〳〵しく大きな山に向つて体をすりつけるやうにして、渓谷に沿うて走つて行つた。すぐ次の駅が下りる駅であつた。

まだ午後三時の、日も照つてゐる明るさでありながら、何となく冬ざれてさむざむした平べたい小駅をすり抜けるやうにして出ると、雪や雨で水分を深く含んだ黒い火山灰土の泥濘があつて、一寸した広場の端に互に離れて二軒ばかりの店があり、見るとそのどちらにも、温泉行のバス案内の看板が出されてゐた。広場の向ふの右角から山間の方へ彎りつゝ上つてゐる広い道路を認め、そこのところにある方の店の前に古びたバスが、寂しく置かれてゐるのを見てその店の方へ行つた。他に四五人の客も駅から出たが、自動車を覓めてゐるのは自分一人のやうであつた。ガラス戸を押し開けて菓子棚や飲食店らしいものの侘びしく並んでゐるその店に入つて、バスの時間をきくと、この頃道路が悪くて自動車は行けない、皆歩いて貰つてゐますと、おかみさんが言ふのだつた。二三押し問答してみたが、結局、温泉までの距離や歩いて要する時間とか、歩いてなら行けるか、どちらへ行つたらいいかとかきいて、一刻も早く出かけるよりほかなかつた。若い主人らしい者も出て来たが、さうしたことの全てがどうも明瞭でなかつた。二里半ばかりあつて、時間は二時間もかかるだらうといつたやうな、当てにならぬ、腹が立つといふよりも暢気な答だつ

台風はフルサトの匂いをもってきた

吉本青司

風速七十メートルを記録した風が
わが家を震撼させる
ぼくは耳栓をして　台風の
木々をへし折る音や
空を噛む音を聴くまいとした　だが
やはりぼくは耳栓をはずし
小型ラジオにスイッチをいれ
古風な燭台のしたに
旅行用の地図をひろげた
こどもたちもそこに集まってきた
ゆらぐローソクの火のなかに
はなやいで島宇宙が出現した
台風はますます激しく　むらがる
狼のように吠えたてる
午前三時　ラジオは台風をとらえた
地図のうえでその位置を確かめようとしたが
すでに時間遅れの状況で
モコとしてその行くえは測りがたかった
でも　そうすることで不安は去り
死ぬならいっしょだ　と
こころの余裕がもどってきた
〈風向きが変った〉
〈中心はこの辺だろうか〉と地図を指さし
過ぎさる時をしずかに待った
こうして　台風は
フルサトの匂いをもってきた
大きなドームのようにふくらんだ
空と海との接点のどこかにある
と　いつからかぼくが信じていた
そのフルサトの匂いが
不安とも　恐怖ともなり
そしていま
ふしぎな燭台のしたの安らぎ〈あるいは虚無〉
ともなったのだった
時計の針が台風の速度を代理して
たっしゃに駈ける
ぼくらのいる島宇宙を
鋭利な刃物で斜めに切って突っ走る台風に
ぼくはフルサトの匂いをかいだ
死ともない　生ともない
はげしい匂いを

た。自動車が通ふのだから道を迷ふことだけはあるまいと腹をきめて店を出た。なるほど店の前のバスは車が深く泥にまみれて道の悪さも想像がつくやうに思はれた。

すぐ坂になつた道路の端の方を選つて、疎らに並んだ小家がちの部落を抜けると、道は丸つこい山の瘤の根を次から次へとぐるぐるめぐつて上つてゐた。自動車の轍がめり込み跳ねとばした道の中央の大部分は勿論足の踏み入れやうもなかつたが、両側は割合ひに踏み崩されずにゐた。それは人通りの少い淋しさをも靴裏に感じさせるものでもあつた。そして踏み崩されてゐない歩きいい所と思つてうつかり踏みつけると、火山灰土の柔かい泥がぶすと深く落ちこんだり、萱や木片や鋸屑などを撒いてあつたりする上を踏むと、黒い泥水がじゆつと上つてきたりした。今汽車から下りて近くの部落へでも帰るらしい晴着いでたちの中年の百姓夫婦とか、人気の無い寂しいこの道を一人で歩いてゐる娘さんがあつたきりで、他に殆ど人といふものを見なかつた。心急かれる思ひでその人たちを追ひ越して行つたが、その人たちは如何にもゆつくりと、この道の泥濘にさからはうとするかのやうに泥濘を踏み散らしたり、何か道を歩くといふよりも踏み越して先きへ行かうとするといつたやうなそんな様子は毛ほどもなく、静かに歩いてゐるのが、目にしみるやうであつた。自分が急いでゐるのが、日が暮れたりしないうちに温泉に辿りつかうとすることのためばかりでなく、わけもなしに追はれるやうに歩いてゐる歩き方に馴れてゐる自分を感じ、それは自身何となし怖毛をふるふやうな感じをもつたあの汽車を思ひ起させ、深い息を吸ふやうな気持で、今歩いてゐる道を見つめた。

この冬ざれた、深く泥濘んだひろい道は、その面にむごたらしく轍の跡を刻んで、通つてゐた。しかし自動車が燥しく走つて行つた後は、その跡だけを深く刻んで、ひつそりと、己に返つてゐた。それは恐ろしいばかりに落ち着いてゐた。所々に水溜が出来てうす濁つた水が湛へられてゐた。それも何か痛々しいばかりであつたが、道路はその傷を忘れたやうに更に先きへ伸びてゐた。自分はぼんやりそんなことを考へたりして歩いてゐた。道はどうかかうか余り泥濘の深くない所を選りつつ歩くことができた。しかしさうやつて歩いてゐるうちに靴の裏に又新しい感覚を段々意識し始めた。この泥濘が意外にさらりとしてゐることを感じた。初めこの間までゐた支那で、一寸でも水気を含んだ道が執拗なばかりに粘りついて足を取り、油断するとつるりと靴を滑らせてそれこそ顚倒させる到るところの泥道を習慣的に感じ起してゐたので、知らず〳〵その構へで足を下ろしたり上げたりしてゐたのであつた。しかしこの努力の過剰は却つて足自身に反撥して足を疲れさせてゐることを次第に気付かされてきた。それは多かれ少かれ阿蘇の火山灰土を含んだ肥後一帯の土質に普通のことで、故郷にあつた日に経験してゐたものであつた。それを思ひ出して、この土だつたのだと、ひとり微笑まされた。これはこの道を一層深く親しみを以て眺めさせ、微妙な足の安心は、歩みを落ちつかせた。さうして深く轍の音を刻み、泥濘んでゐるこの道路に一種の生気と美しさを覚えるやうになつてきた。その泥濘は悩ませはしたが、ちよつとも意地悪くはなかつた。そしてその面に時々うつとりするやうな無雑作さを湛へてゐた。どうかした拍子に小さな水溜が生きてゐるものの何かのやうに光つたり、泥濘の上に落ち散り重つてゐる木の枝や枯葉が、非常な自然さで埋まり込みつつあつたりした。又伐木が見張人も何もなく積まれてゐて、しかしそれらの木材自らで体を寄せ合つて断り無く人の手を触れることなどがないやうに喋し合つてゐたり、或はたゞの一人で冷たい泥濘の上に暢気に体を伸ばしきつて寝ころんでゐたりした。

ほんの数軒づつの部落があつて、その家々は銘々大して必要も無ささうな垣や塀などをめぐらしてゐたが、互に寄りかたまつてゐるので、その向き合つた家の間を道が通つてゐる時は、こんな間を割くやうにして自動車が通つてゐるのかとその心無いわざが思はれたりした。家は道と同じ水平面にあることは少く、道路より高くあつたり道路の下にあつたりした。自家の用を足すだけの為めらしい茶の木がよく庭に植ゑてあり、それは葉の粗いものではあつたが如何にも斯うした山間の生活のぎり〳〵の必要を偲ばせるものであつた。又どの部落も見事な石垣を利用してゐた。さういふ石垣の上の生垣の中に眩いばかりに白い羽の鶏が綿の花を散らしたやうに餌をあさつてゐることもあつた。雄鶏の長く豊かな尻羽根が風に吹き靡きながら「こここここ」と雌を呼んでゐたりした。又杉の木立に埋まるやうに取り囲まれた農家の裏に、やつと聴きとれる小鳥の呟くやうな寂びた声がひとり聞えてゐた。それはその家に飼つてゐるのか、或はその杉の枝のどこかで休らひきつて、退屈もせず囀つてゐるのか分らなかつた。

道は谿谷のやうな所に臨んで藪の下に淙々たる岩走る水の音をきく所を通つたり、どの木と言はず濡れきつてその幹を水が黒く光つてしたたり流れてゐる杉の林の間をくぐつたり、思はぬところに明るい部落をふと見出したりして緩やかに上りに上つてゐた。柿色に熟れた唐黍が軒下に艶々光つて幔幕のやうにさげ並べられてゐるのは、あでやかな位の美しさであつた。さういふ美しい家の中に人気の感じられないほどの静かに住みなしてゐる人々の暮しも心を唆るものがあつた。或る所では庭先の小屋の前に寝てゐた小柄な白い犬がふと見馴れぬ者が通るのに気づいて、うわ

忘れ得ぬ人

浅野晃

野菊の花の眸と
石の佛と
ものなべて熟れて垂れ
人は青い影の中を行きながら
自分の重さをひしと覚える

秋——故国の秋
無月の夜を
赤松の丘をめぐつて虫が
鳴いてゐる
君のところでは
いつも赤い火焔樹の花
タンジョンのあかときの
雨の音
暮れてゆくスンダの歌の
ひとふし

君は見る、やはらかににじみ入る
稲田の青を
君は見る、湧き出ては溢れこぼれる
ガメランの楽の泉を
スリンビの舞姫の流眄を

ああ
夕映の色とりどりの光の帯を
夜が来て納めるとき——。

小協奏曲

トラークル
平井 俊夫訳

散歩

1

音楽が木立のなかで物憂く鳴っている午後。
麦畑で案山子がもっともらしく廻っている。
にわとこの花が静かに道ばたに吹き散らされ
陽炎にちらついて家が崩れてゆく。
金のなかに立麝香草の香りがただよう。
明るい数の刻まれた石碑があり
草地で子供らがまりを投げて遊んでいる。
やがておまえの目のまえで立木が旋回をはじめる。
おまえは夢をみる　妹がブロンドの髪をくしけずっていたり
遠くの友がおまえに手紙をしたためていたり
――
黄ばんだ積み藁が斜めに灰色のなかを流れてゆき
そうしておまえの体も幾度か軽くしなやかに浮かびあがる。

2

時がうつる。おお　やさしい太陽神
おお　ひきがえるの棲む沼に甘美に冴えてうつる姿。
楽園の幻が砂のなかにうつくしく沈んでゆく。
ほおじろが茂みの懐で揺られている。
おまえの兄が魔法のかかった国で死んだ。
そうしてその両眼がおまえを鋼のように見つめている。
あそこの金のなかで立麝香草が匂う。
少年が村に放火をする。
恋人らは蝶になってふたたび胸を燃やし
石碑と数にたわむれて明るく飛びさってゆく。
腐った餌をねらって鴉の群が舞いあがり
おまえの額は柔らかな緑のなかを転げまわる。
茨の茂みで獣がひっそりと死ぬ。
おまえのうしろから明るい子供の日が忍び足で追いかけてくる。
夕暮のなかをひたひたと揺れうごきながら
滅びの吐息をはこんでくる灰色の風。

3

古い子守唄がおまえをひどく不安にする。
道のわきで女がやさしく幼な児に乳をふくませ
夢みつつ通りゆくおまえにかの女の泉の湧くのが聞こえる。
林檎の枝からおちるきよらかな音。
パンと葡萄酒はつらい労苦をみのらせて甘く
果実にさしのべるおまえの手が銀色にひかる。
死んだラケルが畑地をとおってゆく。
緑がなごやかな身振りで招いている。
哀れな下女たちの胎も祝福をうけて花咲き
かの女らは夢みつつあの古い泉のそばに佇んでいる。
孤独な人びとは喜びにひたって静かな小径を
神の創られた無垢な生き物たちと共に歩いてゆく。

生の魂

葉群は滅びにつつまれてしめやかに煙り
大きい死の沈黙が森のなかにみちる。
やがて村が幻のようにくずれおちて
黒い枝のなかで妹の声がささやく。
孤独の者はやがて消えてゆくだろう
おそらく牧人となっておぐらい小径を。
ふと樹の間の下道から一匹の獣があらわれ
神の気配に大きく瞼がみひらく
青い川はうつくしく流れくだり
夕暮の空に雲の峰がうかぶ。
魂もこの天使のしずもりにいだかれ
ものらはすべてうつろい滅んでゆく。

小協奏曲

赤　夢のようにおまえの心をゆさぶる。
両手を透いて太陽がかがやく。
おまえは胸が大きな歓びにわいて
静かに動きにむかおうとするのを感じる。
真昼　黄いろい野づらが流れつづく。
ほとんどこおろぎの鳴くのも聞こえず
草を刈るかたい鎌のひびきばかり。
金いろの森が無心にしずまっている。
緑の沼に腐敗がたぎりたって
魚も動かず　瘴気のこもるなかに
神の息がやさしく絃の調べを醒ます。
水は動いて癩者に快癒のしるしをおくる。
青い影のなかにダイダロスの霊がさまよい
はしばみの枝にかかる乳白の靄。
教師が提琴をひく音が止まない。
人けない中庭で鼠らがなく。
不快な壁紙のそばの壺には
涼しいすみれ色がたたえられて
暗い音声は不和のうちに死んだ。
フルートの終の和音にひたるナルシス。

夜のロマンツェ

孤独な男が星空のしたを
静かな真夜中を歩いてゆく。
少年が夢にうなされて目醒め
月光のなかで灰色の顔がくずれる。
白痴の女が髪を乱して泣く
動かぬ鉄格子の窓辺で。
むつまじく池に舟をうかべ
恋人らが楽しげに通ってゆく。
人殺しが酒に蒼白い薄笑いをおとす。
病人を死の恐怖がおそう。
尼僧が傷ついた苦業の肌をあらわに
主の十字架の受苦のまえで祈っている。
母親は眠りつつ低くうたい
子供は真実のあふれる眼で
じっとおとなしく夜を見ている。
淫売宿でどっと哄笑が湧く。
地下の墓穴に蠟燭がともって
死人が壁に白い指でえがく。
声のない醜くゆがんだ笑いを。
眠りこけて呟きやまない人。

つと一口吠えて、それからのつこのつこと小走りで此方へ来たが、もう三十米も過ぎ去つた後ろから思ひ出したやうに又一声吠え、振返つて見るとそれで又一声吠えたが、それきり一寸ついて来たきりで何とも吠えず忘れたやうにしてゐて、自分が道を曲つて恰度その部落の上に出るやうになつた頃、部落の中で続けて二声三声吠えるのが聞えた。それは全く人に吠えることを忘れてしまつてゐた犬が、全く久しぶりに吠えて見たためにやつと吠えることを思ひ出し、もう吠えなくてもいい頃になつてその感覚がはつきり覚めてきて今度はやめようとしても止まらないで口だけが鳴いてゐるといふやうな風に聞えた。

もうゆつくりと歩いた。目を惹くものは少く、しかもすべてが目を惹き耳を傾けさせるものでみちてゐた。すべてが何でもなく平凡で、きまりきつてゐて、しかも自分をおどろかし、自分に新しかつた。その中、突然道のすぐ右側の草の中で鳴り響く烈しく奔騰する水の音をきいた。近寄つてみると、そこは地下の水が水沫を上げて物凄い勢で流れて居り、そこだけ畑の土が陥ちてしまつてゐるのであつた。水は暗い空洞からわずかにその三米ばかりを姿を見せて又すぐ空洞へ隠れ去つてゐた。しかし少しのぼるとその水は又姿を現はした。それは僅かに一米餘りの幅しかなかつたが恐ろしい量で、荒々しく、我儘に、奔放に土手を切り割いて通つたり、畑を突き崩し、岩を噛んで高く跳ね上り、或は平たい大きな黄色い岩磐に障へられながら、その上にさつと弾むやうに盛り上るやうにして広がつたかと思ふと、白い、壮麗な厚いうねりを描いて、そこに設けられでもした大噴水盤からゆつたりと溢れ落ちるかのやうに誇らかに、たしかに極まりない見事さで落ちてゐたりした。或る窪みの中では何としてもその中に人声がするやうに聞えた。それはそこを通りすぎる背後から尚も聞えてくるので、薄気味わるい位であつた。

道は遂に高い高原の上に出た。高原が前方へなだらかに上つてゐるその果てに大きな山の体軀がうづくまり、聳えたち、波状に起伏して遠く遙かに連なり合つてゐた。黄色い山肌と青い空が太古ののどけさで映え合つてゐた。頂上に薄く雪を刷いた峰も数へられた。振り返るともう日の翳つた裏側を見せて外輪山の長い長い列が寒々と深い広い谿谷を取り囲んで立つてゐた。それは餘りに見事な自然の細工であるために、この大きな景観を一つの箱庭のやうに思はせるあどけなさへふと起させるほどである。暫く行くと道が右手の尖つた峯とその左手奥に丸く聳えた峯との間あたりへ向いて行くらしいことが大体見当がついた。ほかにもう温泉でもありさうなやうな所は見えなかつた。果して道はそこに分け入つて行つた。しかし坂は急になり、思ひがけぬ森林になつて、例の濡れそぼつた針葉樹が道を蔽ひ、道のために岩が割られ、又道を支へるために、所々にその角立つた大きな割石で石垣が築かれてゐた。道は相変らずべとべとに水分を含んでゐたが、岩が多くなつて泥濘は浅かつた。もう宿に近い頃だと思ふと餘計道がひどく遠いやうな感じがしはじめた頃、深くくぼんだ渓の奥に、あの丸い大きな峯の蔭になつて、それらしい屋根が幾つか見え、その峯の断崖をするどくうち敲きながら白くたぎり落ちてゐる幾筋かの長い滝の水が望まれた。その断崖のそそり立つた上には、これは又のんびりと暖かさうな草山がちよこなんとベレー帽子のやうに見えて、暮れかゝつた日を受けてゐた。歩いたために体はあた

たかく汗ばむほどでありながら、冷えきつた大気から泌みてくる冷たさに皮膚はぴりぴりするやうで、早く旅装を解いて、温泉に心ゆくばかり全身をひたしたい衝動でその方へ歩いて行つた。

夏日

美堂正義

夏日
輝く太陽を受けとめて
ひまわりはいまが盛り
黄色の花芯は
歯車となつてキリリと廻転する
暑さに疲れた肉体
もの憂い心に
ときに縁のないことが浮んでくる

ゴッホの画いたひまわりの
切り捨てられても太陽に向つて首をもたげ
強烈な光に対しようとしてゐる
それが表現しようとしたものはなんであらう
黄色を基調として
青いパックに幅広い縦の赤線
荒々しいその線は
激しい感情が制止されなくて
ほとぼしり出たのかも知れない

なぜゴッホはひまわりを画いたとき
黄色の色彩が主調となるのか
不安定の色をあれまで使用したのか
青とからみ合ひながら天に昇る糸杉
囲ひの小麦と外の畑とのコントラスト
荒いタッチの麦畑の上を飛ぶ黒い鴉
青年時代の初期から
頭のなかを黄色の花芯の歯車がきしみながら
細胞一つ一つを破壊していく

頬のやせこけ髯の多い顔で
ひまわりを見てゐるくぼんだ目の奥の光りが
しつかりと捉えたものはなんであつたらう
強烈な燦めく太陽に向ふ花と
生活力のない男との
不思議な結びつき
生きることの厳しさを示してゐる
思考を失ひさうになる夏の日の
花に対つた私の奇妙な幻想

六

瀑の音、渓流の音の喧しさと、二枚重ねた蒲団を通してくる刺すやうな寒気の気はひと、馴れない宿の室のために、一夜うつらうつらして、どうかすると目が覚めてしまつた。こんな夜には何か枕元に本を寄せて読んだりするのだつたが、五燭光くらゐにしか明らない暗い電燈では、持つて来た小さな活字の本は一つとして読めるものはなかつたし、夜半から暁方頃の空気の中では夜具に包まれた以外のすべての空間と物は凍みつく冷たさであつた。この暗さは夜が明けても続いた。昨夕は暮色の中に着いたので分らなかつたが、今朝になつてみると、後ろの高い峯に太陽が仲々に上らないためか、八時がすぎてもそれ以上になつても灰色の室間が室内に淀んでゐた。電燈はその中に赤い鈍い光を点したまゝであつたが、この電燈のあかりも、障子を通してくる外光もどちらつかずの暗さで、ひどく退屈を感じさせた。それかとて散歩でもするといつた所もない狭い崖の上の宿なので、しやうことなしに火鉢に寄りついて、鉄瓶を眺めてゐるよりほかなかつた。そして遅い朝食が

終つた後、まだ薄暗いのを我慢して、読みさしのリルケを開いた。しかしそれでも障子からくる光よりは、電燈を紐一杯吊り下げて額のところまで持つて来て、それで見る方が僅か明るい位であつた。

昨夕、来てみると思つた以上に幾棟かの二階立てがあつて、本館らしい続きの併し安つぽい二階建の一等南の端の六畳に案内されたが、宿についてすぐと、寝る前にと二度入浴したきりで、隣室の客と顔を合せることもなかつたので、まだ様子がよく分らなかつた。が寧ろ斯うした人気遠い所に、余り人と顔を合さずにゐる方が気に合つてゐたので、宿の様子を見て廻つたりすることもしなかつた。唯、さうしたこちらから隔絶してゐる狭い視覚の中に向ふからちらちらと映つてくるものは、ひどく素樸な何かであつた。靴を女中が玄関の大きな下駄箱に蔵ふ時、その中の棚に竹皮製の草履が下駄や靴と並んでゐるのをちらと見た。浴場に行くと、混凝土やタイルのあくどい装置のものであつたが、その広い湯槽の中に首を浮かしてゐる人々の顔は曇りのない静かな健康な緊張と色艶を見せてゐた。多分山の地方の百姓さん達の湯保養らしかつた。そして殆ど口を利くものもなく、静かに湯に浸つて長々と体を伸してゐた。中にはこんな元気のよささうな若い者までがと思はれる若い青年や壮年者も交つてゐた。老人の一人二人は隣の女湯の方へ行つたり来たりしてゐる者があつた。これは何だか厭な印象を受けたが、女湯の方が湯槽が狭いので湯の温度が高いらしかつた。湯は天井近い高い壁を貫いて来てゐる一本宛の竹の筒から、どうどうと両方の湯槽に流れ落ちてゐるのであつた。

今朝起きて縁側から下の庭を見下ろすと、どこか左の炊事場らしい建物の蔭から濛々と硫黄の匂ひのする白い湯気が風に吹き散らされ、そこから溢れてくる湯の水が流れ溜つて黒い火山灰土の地べたとをぬかるませてゐたが、又そこらを、非常に骨太く発育したレグホンの雄鶏が如何にも気取つた足どりで濶歩して廻つてゐた。庭の向ふ側に一棟ある長い二階建は上も下も、こちら側に縁側はついてゐるが、硝子の少し嵌つた障子きりの部屋がずつと並んでゐた。そして一見人気のないひつそりした感じだつたが、縁の下に何足かの杉下駄や草鞋のやうなものが並んでゐたりした。そして確かに時々そこの障子が開いて男や女や老人や若い者が手拭をさげて出たり、薬罐をさげて炊事場の方から帰つて行つたりした。そこには自炊の人達が、僅かな道具や蒲団を借りて幾人かづつが連れになつて来てゐるのであつた。又古びた黒いマントを着て股引に草鞋がけで杖を手にした元気のいい鬚の伸びた老人が前後してこんなに早くからここに着いたらしく庭を横ぎつて行く者もあつた。

この宿に着いて目に映つたのはそんなものばかりであつた。今朝片附けに来た若い女中に、遠慮のない大声でからかつてゐる隣室の男客もどこか自炊の人達と些しも変らないやうなところが感じられた。

全身を、押し迫つてくる寒気から庇ふやうに、火鉢に肘を凭せて炭火の上に屈みこむやうにしてリルケを読み辿りながら、頭の隅の方でそんなぼつ〳〵した印象を追つてゐた。さういへば、この安つぽいしかも僅かの道具に何彼に都会の宿の真倣をとり込まうとだけしてゐる、しかも又それでゐて唯客を詰め込んで置くといふだけの殺風景さをもつてゐる部屋の中で、唯一つ黒光りするこの下ぶくれ

の小鉄瓶だけは一向周囲に取り合はない、しかし周囲から際立たないで、独特の美しさを誇つてゐた。そういふ、数少い狭い周囲を感じながら、さういう貧しい中に湧いてくる美しさと寂寥とを、益々深くしてくるリルケの本を、時々火鉢の横に投げ出したり、又取り上げたりしながら読んで行つた。淀んだ暗さは何時まで経つても自分を包んで去らなかつた。——

が、突然、それはあつと声を立てさせる突然さで、その暗い室に、前触れのない白い明るさが不意に音もなく室内に充ちこんで来た。

菊薫る

堀之内　歴

猛夏百日　心臓宿患が急変した
小用が排出しなくなり
全身護模鞠のようになった
自ら死の接近を感じて枕を濡らした

友人の医師は気のせいだと嗤った
近くの別の医師は心電図をとった
彼は真青になった　どうしょうと言った
数日で恢復を見た時　あの夜は臨終だっ
　たと言われた

此方は暢気に　死ぬとは思わなかった
文字も少しは書けるようになった
果樹園のゲラ刷りが届いた　枕辺で読む
あゝ「有心」が載っていたのだ

二十数年昔の小説　有心は病心を洗った
戦場では純粋に　死だけがあったという
銃後に帰還して数日　何かが間違って
いる　という　私は思い出している昔日

金権万能の銃後の当時、それを怒る怒り
純一をのみ信じた者たちの　戦線の死
今にして解し得るその漠たる怒りの本質
何かが　たしかに間違っていたのだ

台風一過　菊薫る秋となった
我等の果樹園にもこれより咲く「有心」
報われることのなかった至誠蓮田善明よ
我が頬を涙が伝う　百花と咲く喜びの涙

—一九六四・九・三〇—

この侵入は何の抵抗の暇も与へなかつた。思はず壁から室の奥へ呆然と視線を走らせてその白光の滲透を追ひかけようとした、と間髪を入れぬ素早さで又さつと障子が一段と明るんだ。見る見るうちにその透つた大理石のやうな明るさは先ず障子を眩いほど染め、それから室内の淀んだ暗を濾過して、隅々まで明るい朝の光に変へてしまつた。日が崖の上に上り出たのであろう。雪を催しさうな雲に閉ぢられてゐるからではあつたが、確かにそれは太陽が差し出たしらせであつた。暫くこの奇妙な光りのしわざに見とれ、周囲を見直す気持で、ほのぼのと胸が明るむ思ひがした。しかし、その感じも長くは続かなかつた。やはりそれほどに明るくなつたと思はれたのも馴れてくると、それは未だ実際は陰いたどたどしい光にすぎなかつた。

間もなく、一層退屈がやつてきて持てあぐんだ。しかもリルケの言葉は否応なしに、ロダンの石を積み上げて行つた。それは却つて重い過剰の負擔を感じさせた。気づくと自分でをかしい位、立つたり坐つたり、廊下に出てみたり、本を読んだりしてゐた。入浴でもしようかと思つたりしたが、朝飯前に一度入

つてゐたので、余り時間が隔らなすぎるやうな気がした。すべてに何かが多すぎるやうであつた。そしてその多すぎることがすべてを非常に貧しく味気ない気詰りなものにしてゐるやうな気がした。

その小さな殺風景な部屋を見廻した。粗製の障子が四枚縁と部屋とを仕切つてゐたその六畳の中には、どれもが間に合はせの安つぽさでないものはなかつた。焼物の火鉢も、横の床の間も、そこに斜めに傾いて軸は床板についてたるんで下がつてゐる山水の掛物も、床の上の、ペンキ描きの富士山と水と松原との横額も、変に凝つたらしい茶道具(その中には匂のうすい何ともつかぬ茶が入つてゐる)も、表面だけ青い安手の畳も、敢てそれらを取り上げて言ふ必要もないことではあつたが、実にもの憂く貧しい表情を呈してゐた。しかしそれはものとして乏しいのではなかつた。そのものに纏りついてゐる、或はその中に入つてゐる或る非常に過剰なものの賞らしてゐる倦怠であつた。いやこの唯数日ときめてゐる仮の宿の部屋がよそ〳〵しくつき離されて自分を取り巻いてゐるのでなく、何か根柢のある影響を持ち初めてゐるのを、実際は自分が感得してゐる以上に感じてゐた。

時々室内は不意に花が萎まるやうに明るさをとり返したりしたが、この光線の変転はその度毎に、吸ひつけるやうに、自分を動かした。その都度何か探るやうに周囲を見廻し、同時にその自分の目が自分の中に差し向けられてもゐることを意識しだしてゐた。何かがそこを翳つて過ぎた。明るくなつた時我にもあらずその明るさの持続を願つたりした。それはリルケの文章を読む時、頁の間から流れてくるものに似てゐた。ロダンの彫刻の写真を凝視めた。その写真(にすぎなかつたが)に心が食ひ込まうとした。併し食ひ込んだと思ふと視線は彫像の上を上辷りばかりした。

持て余すやうにして立ち上つて縁側の釘に下げた手拭をとつて浴場へ下りて行つた。手拭は固く氷り、外には雪がちらついて、この山窪で行き場を失つたやうな風が雪と一緒にはげしく庭を走つて通つてゐた。白い湯気がその中で渦巻いたり押し潰されたりして立つてゐた。

(つづく)

コギトの思ひ出

田中克己

コギトはわたしが関西で就職してゐる間にずいぶん変つたと記したが、中心はやはり保田で、彼なくしてはページも足らず、内容も無きに近かつたらう。昭和十年四月号は通巻第三五号で、中島が巻頭に「抒情の客観性」といふ論文を書き、「今日文学界は非常に混乱してゐる」といつて、リベラリズム、行動主義、能動精神、リアリズム、知識階級論、転向文学など、当時の文学者が唱へた文学的主張を列挙して批判してゐるが、あたかも同じテーマをとりあげてゐるのが民話と註した松尾芝成の「新版西域記」である。このペンネームは当時も今もたしかめたおぼえはないが、保田の作だとわたしは信じて疑はない。大変な名文で、しかも惨刻なまでに混乱した文学界を諷刺してゐる。彼はこの号にはその朝鮮紀行「仏国寺と石窟庵」を書き、また巻末には「雑事記帳」としてエッセーを書きながら、なほ足りぬページを充すため、速席に書きあげたのであらう、奇才の真価を証するとともに、中島の論文より、なほたしかに混

千手観音

浅田 二三男

みぞ川に水があふれ
水の子どもたちは
しゃべりながら走りだし
さそうようなその声は
一日中きこえどおしで
夜になってもやまず
明けがた
泥田につかっている夢をみた

水のせつろしい声は
ゆめのなかでも急きたて
近づいた重い米つくりのため
たしかにゆめのなかでわたしは
千手観音さんになったはずだ

乱した文学界を批判してゐる。この諷刺小説の主人公は風狂癇生と自らを号し、一管の筆、一壺の墨のみを携へて、片足に靴、片足に草鞋をつけて大唐へゆき天竺へゆく。

西域でまづ遇ふ諸悪鬼は摩瑠拘珠経、那智経を唱へて前後をとりまくが、みな追つ払はれる。マルキシズム、ナチズムを文学の手段とし目的としたのは、誰々だったか、昭和文学史をひもどいて見たまへ。わたしにはその暇もない。

次に遇ふのは経薄魔児といふ一魔、風狂生の言をきき、喜んで星菫派を創めたといふから、卑俗ロマン派をいふのであらう。日本浪曼派がそれであるか、それともその中の誰々がそれに当るか、これもわたしにはわからない。

赤水河畔小竹林といふところでは利耶慄魔にとりまかれる。「群魔もとより師の説法を喜ばず」とあるが、リアリズムとロマンティシズムとの対立さもあるべしである。その中の一魔はこれらの群魔とはなれ能可山文妖洞に頸飾を納め、自ら赤水聖者といふが、他人は呼んで顚落魔といつたといふ。ナウカ社といふマルクス主義専門の出版社、左翼から出たものをもとの仲間が脱落者と呼び、顚落者と呼んだことは、わたしも覚えてゐる。

赤水魔に属せずその退陣を嗤つた納導を営業する一魔といふのは、能動主義を唱へた某氏をいふのであらう、「師も亦わが能逃派の一人也」といひ、別に能商派といひ、大檀那にとり入り盛んになつたといふ。当時の文壇を写してあますところがない。

顚落魔たちが次に拠つたのは仏国寺巴里庵実吐道士と記すが、ジードがはやりヴァレリーがはやつたことは覚えがあるが、これを文学的に営業にかつぎ上げたのは誰か、中島はヴァレリーが好きで、その死後、蔵書とノートの整理に当ると、ノートはほとんどヴァレリーのぬき書きであつた。関係ないことだがついでに記す。

雷音如来薬師諸菩薩を喝仰し、「青日流」をはじめる一派、那成巣洞にすくふ一老魔といふのが次には出、みるみる風狂師のそばへやつて来る。保田が当時つきあつた人々の中には心覚えもあらう。

わたしは前にも書いたが中学の歴史の教師として日本史、東洋史、西洋史を教へ、また一組を主任として受けもたされてゐた。たのしみは中島、松下、服部など在阪の諸同人とのつきあひであつたが、文学の話はほとんど

小高根二郎

詩人、その生涯と運命

—書簡と作品から見た伊東静雄—

わが国の伝記文学に新しい分野をひらいた傑作であろう……ゲーテにおけるエッカーマン、サミュエル・ジョンソンにおけるボズウェル。これらの伝記作家に範を仰ぎ、師の生活信条や詩精神をわがものにすることによって、詩人像を再現すべくあらゆる努力を傾けたのだ

〔東京毎日新聞〕

この伝記には伊東と交遊のあった詩人や批評家がつぎつぎと登場して、さながら劇中劇のようなおもしろさで、昭和十年代文学の一面をえがく……

〔東京新聞〕

十一月末刊

新潮社

しなかつた。伊東静雄もよく集りに出たが「コギトの同人は集まれば、冗談ばかりいつて文学の話をしない」と本気で恨まれたことを覚えてゐる。少年含羞のほか、関西人の気風になじまなかつたのであらう。

服部は当時どこにも動めずにゐたと思ふが翌五月にはデイルタイの「体験と文学」といふのを第一書房から出した。語学の達人であることは知つてゐたが、この文学論もたくみにまた正確に訳して、コギト同人中はじめて著書をもつこととなつた。出版社は第一書房といつて、戦争中になくなつたが、文学書を主とし、豪華といふより、センスのある装幀をするので有名であつた。社主長谷川巳之吉氏はいまどうしてゐるか。「セルパン」といふ十銭の雑誌を出し、わたしはここへ詩をたのまれて書き、三円もらつたのが原稿のとりはじめだつた。その時の編集者は辻野久憲氏でのちには春山行夫氏になつた。はじめての原稿料のうれしさはいまだに忘れられないので特にしるしておく。辻野氏は第一書房をやめたあと、翻訳をし、再婚をし、コギトにも書いた。この先輩が「私はやめるがあとへ来ないか」といつてくれたのを、そのまま聞き流したのもわたしであつた。

（つづく）

果樹園 第一〇五号（毎月一回一日発行）
昭和三十九年十一月一日発行
編輯兼発行者 池田市野町一六八 小高根二郎
印刷所 大阪市東住吉区桑津町五の八 元市印刷株式会社
発行所 池田市野町一六八 果樹園社
定価 四十円 送料 十円

編輯後記

第一〇四、一〇五号と二号續けて僕は後記のほか何も発表しなかつた。蓮田善明の「現代畸人伝」が二十年ぶりに陽の目をみる今日、ジョホールの椰子林に眠つたまゝの蓮田善明は、あまりにむくいられるところがないからである。

そういえば「永井荷風」論の冒頭……蓮田の荷風好尚を論じて僕を驚かしたことのある江藤淳氏が、八月アメリカから帰朝されたが、「朝日ジャーナル」誌上に目下連載されている滞在記には、まこと目をみはらされた。これは単なる滞在記ではなく見事な文明批評をなくしており、しかもその文章が立派だからである。プリンストン大学での講義で、伊東静雄に関して論及されたことがあつたと片岡久氏から伝え聞いているので、伊東になり代つて篤く御礼を申し上げます。

蓮田のことに話を戻すが、蓮田に関する未発見資料であつた戦地随想「馬」が集英社の金沢一氏のご協力で発見できた。昭和十四年中国戦線から「国文学、解釈と鑑賞」に寄せた散文である。お蔭で、「有心」完結後に続く拙論「蓮田善明とその死」の内容を充実することができる。尚金沢氏の紹介で短時間ながら橋川文三氏とお会ひできた。「伊東静雄全集」刊行のみぎり、「日本読書新聞」に評言をいたゞいていたことを最近知り、お礼申し上げる必要があつたからである。

新潮社から刊行される拙論の校正九七三頁をやつと終つた。

果樹園 一〇五号 昭和三十九年十一月一日発行（毎月一回一日発行） 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

果樹園 一〇六号 昭和三十九年十二月一日発行（毎月一回一日発行） 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

果樹園

第106号

有心 蓮田善明
乾木 吉本青司
運命 美堂正義
どーんとごっつぉ 浅田二三男
トラークル詩抄 平井俊夫
コギトの思ひ出 田中克己
終電車 河野仁昭
日本の詩 美堂正義
ヘリック詩抄 森亮
鐘が鳴る 浅野晃
正説、水晶観音 小高根二郎

有心（うしん）（今ものがたり）

蓮田善明

七

浴場は、階下から本館の玄関に出て又広い廊下を通つて、それを突き抜けずに一つの右に分れた廊下に折れると、それが屋根のある混凝土の廊下になつて庭を向ふへ越えたところにあつた。後で知つたが、このほかに庭の南の隅に石膏泉が一つ、又本館の石垣の下の段に、地下道を抜けて行くと硫黄泉が一つと、三つの浴場があるのであつた。浴場の外には宿で売つてゐる杉下駄のやうなのが男女とり交ぜて四五足並んでゐた。これは別棟の人達のものであつた。

脱衣棚に行き乍ら浴槽を見ると、年の行つた男と四十恰好の男と二人離れ合つて湯に浸つてゐた。裸になつて下り立つて行くと老人は一寸振り向いて自分の顔を見た。その目差の和やかさ懐しさは、思はずその老人に一寸会釈させずにおかなかつた。老人は湯槽の縁に手拭を枕にして頭を凭せたままで会釈を返した。湯加減は冬向きには恰好の温度であつた。澄んだ豊かな湯で、その中に両肢が硝子色に揺れた。

若い方は漸て上つて行つた。引き違へに扉が又開いて一人か二人入つてきたがそれは女湯の方へ行つた。女の声が時々した。老人は起つて落ち湯のところへ行つて腰を打たせた。肉附は衰へてゐるが、しつかり固まつた体だつた。バシャバシャと飛沫が散つて、離れてゐる自分の顔にもかかつた。それが済むと土間の奥の方へ上つて、背を見せて縁に腰を下ろした。自分は向ふの端へ向つて、ぐうつと体をのばして泳いでみた。あふりをくつた湯が溢れて越して行つた。今度は老人のゐる方へ泳いだ。湯が又しきり波うつてこぼれた。体がほてつて来たので上つて縁に腰を下ろすと、天井の湯気抜きから吹き入る寒い風が肩にかぶさつて来た。老人が入るのに並んで入ると、老人が手拭でざぶりと顔を洗つたその顔をこちらへ向けて、咽喉の奥できびきびと鳴りひびくやうな声で何か二口三口話しかけた。「え?」と耳をかしげるやうにすると、来て間がないだらうと言ふのだつた。仕方なしに、しかしその唐突な問ひに何か親しみを感じながら、うなづいて、「昨夜来たばかりです」と言ふと、さうだらう、まだ手拭が白いと言ふのであつた。「なるほど」と老人の他愛ない話に素直に応じながら、「黄色くなりますか」と訊き返した。これで四日目だ、これからまだ色がつくといふ老人の手拭は湯でうすく黄ばんでゐたが、その古い手拭には別な色も浸みてゐた。しかしそんなことから、老人は、自分の在所を訊いたり、宿つきかときいたりした。老人から自炊の設備や

ら、どこにどんな湯があるかときいてみた。神経痛に利くのは庭の南の隅の、白い湯で、皮膚病には下の段のがいい、併し南の方のは、風が真向から吹きこんで湯がぬるいし、下のは下りて行くのがいやだといふやうなことを話した。今入つてゐるのは脳や胃腸などに利くといふのであつた。

さういふとりとめない話をしてゐるうちに又一人二人入つて来、今度は五十ばかりの女が二人入つて来た。最初に顔を見合せた者へ「冷えますなあ」とか「あ」と頭を下げるとかして入つてきた。一寸気まりわるく思つたが、静かに片隅に浸つてゐた。しかし何か奇異に感じたのはその人達の一人も湯治せねばならぬ程の病気などを持つてゐさうにないことであつた。老人にも当然訪れてゐる、老の形は現はれてゐたが、それは老衰といふにはふさはしくない張りをもつた皮膚であつた。どちらかといふと同じ老体でも女の方に或る消耗は目立つてゐたが、それでも仲々発達した体に唯避けがたい老年が自然に浮き出てゐるといふ風であつた。男達の鬚がちの顔には、そのはげしい労働が少し早く刻んだらしい老けがあつたけれども、見てゐると一本の額の皺にも、実正な働きの閲歴が年数をかけて美しく刻まれてゐるのが見えた。それは生き生きしてゐた。唯手拭を扱つてゐる手の指が太くずんぐりして、その全く技巧のない形は中には畸形なほどのものがあつた。しかし卑しくはなかつた。何かきいてみたい感じがしたが、黙つて上つた。

石廊下に出ると、ほどよく温まつた体に、瀑の方から吹き巻いてくる雪交りの風が何か新しく気持よかつた。そこに立ち停つて暫く風に当つてゐた。すると其処に下駄の音がして、振り返るとまだ二十(はたち)にならないやうな娘が湯に来るのであつた。その顔は自分の見馴れてゐるやうな輪廓とひどく異つてゐたので、すぐ印象を捉へることは出来なかつたが、幼い頃、或は少年の頃郷里で見たことのあるそんな顔であつた。ひつつめ髪にした木綿衣にくるんだ体は丸々し、目ははちきれるほど肥えた頬の肉におしよせられて細くなりながら、その中で黒く澄んで光り、頬や耳は、もう湯に温まりでもした後のやうに血の色が皮膚の裏に赤く透いて艶々してゐた。しかし、それは美しいといふより何か他のものであつた。美しい（彼女は目鼻立ちもととのつた美人の質を具へてゐた）にちがひないが、その前に、別な力で圧倒してくるやうな何かであつた。それは、さつきの浴場の人々の体もさうであつたが、何か或る意外なものであつた。分つてはゐるが今までの自分の世界に遠ざかつたもので、目が見ながら、その形に視線が直接に焦点を与へないものであつた。けれども、さういふものが前に現はれたといふ事実の印象が忘れられなかつた。

部屋に帰ると温まつた感じで、暫く部屋の暗さを忘れて、火鉢に炭をついだり、茶をのんだりしてゐると、さしついだ木炭が微かにパチパチと咳いたり、鉄瓶がたぎる静かな音が意識にやさしくひびいてきた。わづかではあるが、ふつと鼻の奥までしのび込む茶の香りも心をひいた。それらを心の中で数へながら、外界から障子を鳴らして押し寄せようとするものに抵抗しようとし、とり巻く不快さに対して身構へようとしてゐた。又さうして、坐りながら、しきりに何かを思ひ出さうとしてゐた。それはさつきの浴場で認めたもののやうでもあり、読みさしの「ロダン」の中のもののやうでもあり、もつと自身の内部のやうでもあつた。

確かに自分を思ひ出さうとしてゐた。入浴する前の、暗く寒い中で縮こまつてゐると、自分を思ひ出さうとする努力がすぐ何かに向かつていらいらと反噬して行つて、自分を自分に落ちつけてゐることができなかつた。「ロダン」にも、否、「ロダン」は唯一つの

自分へのつながりであつた。自分は活溌に「ロダン」に、或る場所では反撥さへしつつ、反応して行つた。しかし「ロダン」の、純粋な生の充ち溢れる像が、生き〳〵して生を呼吸してゐるといふよりも、それが余りに生々(なま)しいものがあるのに、時々追ひつけなくなつてしまつた。そして自分はそこからも自分にかへつた。しかしそこから帰つた目の遣り場がなかつた。うす寒い障子に目をやり、又炭火の音や、鉄瓶のもの寂びた黒光りする肌に目をやつて、わづかにそんな所に自分を思ひ出さうとしてゐる自分を見出して、全く遣り場のない心になるのであつた。

しかし又さうした仕方で今やすべてが影響し、すべてが思ひ出させてゐた。前にはロダンの見出し作り出して行つた恐ろしい面としての像があり、そのロダンを知らうとするためにパリまで訪ねて四年間もロダンに師事して、「観察の対象の実体が突然に浮び上つて来るまで幾度も繰返し観るといふことを学んだ」詩人リルケがあつた、いやそれと同様に目の前に障子が、その間に合せの安出来の四枚の障子が、何か自分を思ひ出させはじめてゐることを突然に意識した。

それは、障子に、いきなり日光が、太陽からの直接の光線が刺すやうに流れてきて、熱いやうな強さでさつと照らした時であつた。それは一抱へ位の大きさでしかなかつたがその銀のやうに耀やく光が障子にさすと、部屋の空気は一瞬にして戦慄して、破裂するやうに明るくなり、胸が揉み込まれるやうな痛さで反応した時であつた。障子は外側からその強い光を受けとめて、紙といふよりもその光そのもののやうに澄んで、素直に燿きながら、その直接光線を室の中にはそのままに透さずに、異つた明るさの色をいちめんに室の中に放つて、恰度或る印象が人の心の中に熱い何かのやうに一杯に充ちるやうに、一つの世界と仕出すのであつた。それはガラスの為すこととはひどく違つたものであつた。内からは外の光りも、又障子に吹きつけてガタ〳〵鳴らしてゐる風も、カサカサと、風に交つてくる凍つた雪片も、見ることも触れることも出来ず、而も表に感受したものをすぐその裏

乾木

吉本青司

金いろのマリをつけた
柿の木のある庭

しっかりと大地に根をはって
高く伸びることだけを知った樹木の
満ちたりた祝祭

匂ってくるような
その金いろの木の実のつぶつぶ
青空に光耀する
無名の星座

悲しみも　よろこびも
すべて忘れて
シーツの上に坐しつづけるハハ

憎まれもせず
よろこばれもせず
ただ　大地の意志に従っている

愛とはなんだろう
そして孤独とは

片ことの独語と
枯木のように老いた手足に
支えられた星座の眩しさ

に、生々しくない何ものかとして伝へてゐた。中に居て、障子が受けた光や風や雪は悉く取り集められてその消息を内に伝へられ、外の生々しさと離れてゐながら、却つてその全部を雰囲気として単純化して身に感じさせるものであつた。それは気づいてみると不思議な珍しいものであつた。殆どそれ自身厚味のない紙一重のうす手の道具でそれはあつた。無いといつてもいい位のものであつた。もし外からそれを見る時は、唯外界を単調に反射してゐるだけのもので、外から障子の中を覗き見ることは出来なかつた。しかしその裏には非常に鋭敏で静かなものを息づかせつつ抱いてゐた。それは多少外界よりも内側を暗くした。しかしそのために内側のものは硬化することを避けて柔かい深い陰翳を生じ、みだりがましい外界の侵入を防ぎとめ、又内側のものの濫りな逸脱をも制止した。否、それは外から之を見る時も奥深さと平和な内なるものの眼差を外界の者に与へ、それが細い木で小さな目を組んで支へられてゐる僅か紙一重のうす手のものなどといふ印象でなくて、その内部のはかり難い深味そのものの面として印象づけられる。しかしそれは決して建築の全部面に於いて広すぎる程に空間を独占したりするものではない。ほんの一部分、その建築のために光を採り入れる一部面に直線的に平面をとつてゐるにすぎない。それは取り外したり、あけられて自分を更にその空間からそつと謙虚に引き退いてゐる時もある。無理な抵抗などはしない、むしろ破れ易くさへある。それは縁の端の雨戸の位置まで出張らうとはしない、軒の下に少し陰になつた所に、しかし内なる部屋を卑屈に押し狭めたりしない位置に立つてゐる。

それは漫然たる空想から、何か苦しいばかり自分の思念の比喩を試みてゐることに気づいた。そして此の比喩が、遂に、障子の「無」に観念的に陥ちかけて、哲学者めいた、乾いた思念が目に触れてきた時、ふつと我に返ると共に、その安易な「無」の観念から自分をもぎ取らうとして苦しんだ。

しかし、これがもぎ取れなければ、この「室」を出まいと決心した。

八

「あら、あら」と縁側のところで言ひながら、昼食を運んで来た女中が、「御免下さい」と障子を開けると、縁側には白く雪が吹き溜つて、庭の上は小雪が視野をふせぐばかりに降つて、それを唸る風がなぐりつけるやうに吹きまくつてゐた。障子の外のスリッパも雪の中にあつた。そして部屋の中にもサラサラと舞ひこんできた。女中は膳を据ゑると、急いで外に出て戸袋から重いトタン張の雨戸を繰り出した。部屋の中は、やつと物の文が分かる暗さになつた。

「おい、真暗にしてどうするか、飯が食へんぞ、こら」

隣室の客が大きな声で言ふと、次の室からも何やらこれに応へ、何かどつと笑ひ声が起つた。女中の甲高い声がそれに応じると、隣室の客が「何だ、何だ」と揶揄しかかつた声を張り上げた。女中が光とりに雨戸を少しづつ間隙を開けて閉め終ると、下から箒をもつてきて縁の雪を掃き落した。

「こら、飯を食ふ時、何だ」隣の客が、口に飯を含んだ声でいふと、その若い女中も負けてゐず、

「でも、この雪を、貴方。ま、埃は立たないやうに掃きますから」と遠慮なく掃き続けた。

「雪は後でええ、俺の所へ来て給仕をせえ。お前は、俺の所にちつとも来んぞ、隣の加藤さんにお前は惚れて加藤さんの所ばかり行つとる。でけん〳〵。ほら、俺の部屋前は荒う掃いて、隣の前は、あいつが、

静かに掃き居る。加藤さん、かね子は貴方になあ」

「まあ、何言ひなさるね、いやだけんな、東さんは」

どこかまだ子供々々した女中が、つんつん跳ね返しながら、箒を動かしてゐる様子が目に浮んできた。次の室のその二人客も声を上げて笑つた。

「ほら、すぐ私にはああですよ、加藤さん」

女中が逃げるやうにして階段を下りる背後か

運命

美堂正義

青海や荒寥地方には
いつとなく流れが生じ
集つて大河となつて湖に注ぐ
そこで行きどまり
強い太陽と乾燥した空気によつて
蒸発して天に返へる

また流れてゐるものは
いつしか砂漠の流沙に吸込まれて
地上から消滅してしまふ
そこには吸込む物質によるものか
太陽と乾燥した空気によるものか
または他の原因であるかは
私は知らない

盆地を包んでゐる四囲の高山の
雪が融け幾十粁も伏流となつて
深く地中を潜りながら
突然この世に姿をあらはして
いつしか消されるやうに姿を隠してしまふ
幾千年もの間繰返へされ
流れは変へ
ただ証として曹達と塩の堆積が残される

天然自然の現象でありながら
泉となつてわき
流沙に呑み込まれる
一つの運命に似た姿は
玉のやうな響となつて
中国大陸の奥深くから
滾滾と私の心に伝はつてくる
けふの星月夜を
清冽な音を立てて流れてゐるだらうか

らその無遠慮な揶揄が追つかけた。

隣室の客はまだ顔を見なかつたが、声の様子から四十前後の元気のいい賑やかな男であつた。しかし食事や、女中が掃除に来る時、床をとる時などに、何彼と底のない冗談で女中を笑はせたり、悲鳴をあげさせたりするほか、他の時は寝てでもゐるか、何の物音も立てなかつた。次の部屋の二人連の客とは知り合ひでもあるらしかつた。しかし別に話し込みに行くといふ風でもなかつた。

風は雨戸を頻りに揺り動かして、ごとん、ごとんと言はせ、その隙間から相変らず雪を吹き込んできてゐるのが、障子の小さな空から見られた。食べものは片端から冷えてしまつた。食事が済むと、本も読めない暗さと無聊さに、そはそはと火鉢の上に手をあげたり握つたり、手を翻したりしてあぶつてみたり、鉄瓶のたぎり加減を眺めたりして、この暗さでは、何も彼も、自分の内部までこの暗さがさし込んで、文目なくなつて行くやうな気がした。それに、もうどう防ぎやうもなくなつた冷たさがこの暗さにつけ入つてきて、何かに跪きつきたいやうな気がして、障子の外に目を向けると、障子の桟が助骨のやうに、うす気味わるく薄明の中に透いて見え、それが水を浴びたやうな悪感で痙攣してゐるもの

のやうに映つてきた。

何分か、さういふ暗の中に凝然としてゐた。

ふと「彼は……」と呟いた（胸の中で）。

それから又、落ちつかなく例のやうに手を火鉢の上に神経質に動かしたりしてゐたが、何かちらと浮ぶ思念がすぐ灰色の世界に身を揉して行つてしまふのを追ひ求めるともなく見放してしまつてゐるともなくみつめてゐた。しかし、ふと、「彼は……」といつたことを何かが頻りに追ひかけ廻してゐた。そして何かが捉へられさうであつた。一度その「彼は」と言ふ言葉を自分の代りに置き換へてみた。よく小説家がやるやうに。しかしすぐそれを苦笑して投げ棄てて、見失ふまいとして「彼」の後を追はうとした。するとどこへ隠れたのか、否何を一体追はうとしてゐるのかも分らなくなつてしまつてゐた。

いらいらした疳立つたかげが自身の額を掠めた。そしてまるで目だけが開いてゐるやうな顔で、火鉢の灰の中から何か探し出さうとでもするかのやうに火箸で火鉢の中を掻き起したり撫でたりしてゐた。

ふと、怒つたやうに自分を見た。激怒といつたやうなもので、自分自身を感じた。自分が今何をしてゐるのかと、目を覚ましたやうに問うた。それは、自分で自分のことなと問ひやうもない追究を自分に加へてゐた。恰もそれを以て捉へさうに自分の目を自分で作つてゐただけであつた、自分は或る観念を追つてゐるほか一歩もその掎へた自分の目から出てゐない、お前はこんな山の中の寒い暗い小さな部屋の中の、火鉢一つの傍の一米平方にも足りない小さな空間に、お前の目で押し込んでゐるこの姿を見たか、このあくどく迷つたお前を見たか、ふむ、のんびりと温泉にでも浸るどころか、こんな所へ自分を持つ廻つて神経を疲れきらしてゐるざまは？　偉さうに自分の苦しみは妻子などに分りさうにないなどと事々しくこんな所に逃避してきてゐるが、妻も子も自分をはつきり見てゐるのだ、彼等は自分がこんなに呆けた苦しみをしてゐるのまで見抜いてゐるのに、自分は彼等のその痛ましい目をさへ感じ得ないだらしなさだ、べつ！　唾でもひつかけろ——

一体こんなところに何を自分は持つてきて読まうとしてゐる？　本か、この取済ました本といふものか？　この本でお前は自分を読まうなどと企てた。もつと手近かに、身親にお前が自分を読まうとすれば読める本が、生きた人間の目があつたのだ。「何だかお父さんが怖い」と言つたり、眠怖える神経が——。お前を温泉へ送り出したやさしい心遣が。——

——さう考へて来た時、ふと妻が自分の出征中に毎日欠かさず日記をつけてゐたと話したことがあるのを思ひ出した。それは何を書いてあるだらう。子供三人を抱えて一人は学校に通はせ、一人は生れたばかりの手のかかる子供をもちながら、前には嘗てさういふことのなかつた日記を而も欠かさずつけてゐた

木馬館

萩原葉子　¥340

戦争末期から戦後へかけて……その苦しみの実相は百人百様であり、その耐え方にもまた各人それぞれの個性がある。萩原さんはさういった〃百鬼夜行の〃人間像を、素直で偏見のない眼にとらえ、手織木綿のやうな質朴な掌致で描きこんでいる。

（安岡章太郎）

東京都千代田区飯田町一—一六
振替口座東京五〇六三九

南北社

といふ、それこそ、自分を見てゐる最もはつきりした目に他ならない。「あなたがお帰りになつたらもう書けなくなつてしまつてだらしなくなつてしまつたわ」と妻が何かの時日記の話と共にした話であつた。妻は自分が帰つてみると、よくこんなことで子供達や家のことを扱ひ得たものだと唖然とするくらゐだらしなく家の中を散らし放題にし、日が暮れると赤坊を寝かしつけながら性根もなく眠り込んでしまつたりして、台所の片附けも中途で放つてあつたり、上の子供達の寝床など、子供達が母の枕元でせついても、鼻の返事だけで、自分が立つて蒲団を取出したりすると、「あ、眠てしまつて、ほんとに、お父さんに済みません、ついこんな……」と言つてゐるうちに又眠り込んだりするのであつた。朝になつて、「とう〳〵帯も解かずに寝てしまつて、窮屈で〳〵、起きて着換へよう〳〵と思つてゐるうちに又眠てしまつて——」などと言つたりした。赤坊の濡れたものなとが二日も部屋の隅に堆高く積まれて仲々始末されな

どーんとごっつぉ

浅田　二三男

先祖はんの祭をせなあかん
親類をよんで
どーんとごっつぉをせなあかん

カマをとぎながら
半兵衛はいう

どないきつう銭もうけしたかて
もうけた銭は
みんな逃げてしまいよる
何はともあれ
親類だけはよんで
どーんとごっつぉを
せなあかん

おやゆびの腹で
カマの刃のたち具合をしらべながら
半兵衛はいう

そうせんと
家の内がうまいことといかん
なんぼ銭あったかてうまいことといかん

半兵衛はイザサを刈る
イザサはかたく
いくらカマをといでも
すぐ切れ止む

命日命日に
それさえしてたら
病気もせんし
銭ものこるし
家の内が
まるうおさまる

かいなが動くと
ブッブッといって
草のみどりが剝がれ
地べたの褐色がむきだしになるが
そうなったところで
また半兵衛はカマをとぐ
カマをとげば
ごっつぉのはなし

盆が近づいたので半兵衛は
相手のみさかいなく
あてつけがましい

小協奏曲

トラークル
平井俊夫訳

黄昏のミューズ

花に飾られた窓辺に今日ももどってくる教会の塔の影と
金の色。熱い額は安らかな沈黙のなかで冷えゆき
おぐらい栗の葉蔭に噴泉の水がこぼれおちる。
一日が終った——おまえはつらい疲れのなかでおもう。
広場には夏の果実や花を売る店も姿を消し
市門のいかめしい構えもしっとりと黒ずんでいる。
どこかの庭でゆるやかに楽器をかなでる音が聞こえて
晩餐のおわった親しい人びとが寄りあっている。
白い魔術師のかたる物語に一心に聞き入る人。
あたりで昼間に刈り入れた穀物がかさこそと動き
粗末な家々のなかで強いいのちが沈黙に耐えている。
牛舎のランタンが牝牛らのまどかな眠りを照らす。
風に酔い　いつか目蓋は沈みおちて
星たちのふしぎな招きにむかって静かにみひらかれる。
エンディミオンが柏の老樹の暗がりから浮かびあがり
かなしみを湛えた水のうえに顔をうつす。

森の隅

カール・ミニッヒに

褐色の栗の樹々。老人らの姿がそっと吸われてゆく
静かな夕暮のなかに。美しい木の葉はしめやかに萎れ
墓地でつぐみがあの死んだ従兄とたわむれている。
ブロンドの髪の教師がアンジェラのお伴をしてゆく。
死の清らかなしるしが教会の窓から見つめ——
だが底にしずむ血のような色はかなしみに充ちて暗い。
今日　門はひらかず　寺男が鍵をあずかっている。
庭でむつまじく亡霊たちと語りあう妹。
古い酒蔵のなかで葡萄酒が冴えた金に熟して
甘く林檎がにおう。歓びのかがやきも間近い。
この長い宵を子供らは物語に聞きいってすごす。
柔らかな狂気にもしばしば真実が訪れてくる。
青は木犀草の香りを溢れさせて流れ　部屋に蠟燭の灯火。
こうしてつつましい人びとの場所は心地よく整い
孤独ないのちは森の縁をひっそりとくだってゆく。
夜が安息の天使となって敷居ぎわに現れる。

きよらかな秋

こうして年はおごそかに終る
金いろの葡萄と果樹園の実りにみち。
森はあたりに深い沈黙をひろげ
孤独な者の伴侶となる。
すべていい——と農夫がいう。
長く静かにながれる晩鐘は
冬にのぞんで明るい勇気をあたえる。
旅をゆく鳥の列が遙かに訣れをつげる。
愛のこのやさしい時の訪れ。
青い流れを小舟に乗ってくだると
ああ　景色は景色に美しくならんで
すべてが休らいと沈黙のなかに沈む。

農夫たち

鴉の群

天の黒い一角をよぎって急いでゆく
真昼に鴉の群がかたい叫びをあげ。
かれらの落す影は牝鹿のかたわらを掠め
時たまに羽を休めて不興げに呟くのが見える。
ああ　褐色のしじまをなんと乱すことか。
生み月の予感に心を奪われる女のように
耕地がうっとりとまどろんでいるのに。
時たまにかしましくいさかう声も聞こえる
どこかに嗅ぎつけた腐肉をあらそい。
突如　翼を北の方へめぐらし
弔いの行列のように消え去ってゆく
欲情にふるえて痙攣する風のなかを。

冬に

白く冷たく耕地が光っている。
空は荒涼として寂しい。
池のうえにこがらすの群が舞い
獵人らが森を降りてゆく。
黒い木立の枝に沈黙がいる。
明りが小屋をちらと洩れる。
まれに遙かな遠くで橇の鈴が鳴り
ゆっくりと灰色の月がのぼる。
畔道で獣が静かに朱にそまって
鴉らが血の溝でゆあみをする。
黄いろく丈長く葦がふるえる。
寒さ　煙　うつろな森に足音。

（つづく）

いこともあつた。その癖「お父さんが戦地で苦労していらつしたのに、大事にしなくてはなりません。」といふのが口癖であつた。生きて帰つてもらつたので、もうどんな苦労をしても構ひませんなどとも言ふのであつた。その心根を疑つたことはなく、いぢらしいものに思ひ出、征後に出産をして、暫くは人を雇つたものの、その女が嫁いで行くと後は仲々人手が無くて、兎も角も一人で切り抜けて来てゐた苦労も言ひ尽せぬものがあつたらうと察するのであつた。しかし自分には又一人の心の中に、誰にも言ひ得ず一人で考へねばならないものが戦地から持ち越されてきてゐた。家族の者達が取り巻いて身親に自分を見てゐるのに、彼等を見てやる余裕はなく、何も彼もこめて外界がもの倦かつた。妻が留守中に書き続けてゐたといふ日記なども、それをきいた時は何か心を惹かれながら、妻が、生きて

帰つてもらつたので、もう何もいらないと言つたやうな安心の仕方を見せるので、その妻の筆を執るのを怠つてしまつてゐる日記を、溯つて訊き出すことを自分も忘れて殆ど省みなかつたのであつた。

寧ろ斯うして縋りついてゐる家族といふものをこそ、何か振り捨てねば居れない悲しみといふものを胸の中に持つてゐた。それを一通り反省し責めてみることは勿論知らないではなかつた。併しあの時代に西行とか長明が家を捨てて出離せずには居れなかつたきびしい潔癖の中にのみ純粋な生があり得たことを想つて苦しんだ。そして、それは自分を自分といふぎりぎりの狭さに小さく位置せしめること、自分を断絶して、その断絶によつて起る渇望の中にのみ純粋に生の形式を見出して行つたのではなかつたか。自分は而も今ここで何をしてゐるのだ。自分はここにひとり来てゐる。隔絶してゐる。相当の覚悟も（時にはその覚悟で自分をぞつとさせるやうな）してゐる筈だ。もはや誰も妨げない。自分は自分ときり向き合つてゐるのだ。もう他の何ものかが、又他の何ものをも捉へることはない。

――そして自分は自分をここにもつてゐる、こんなみぢめな陰い混乱として。そして自分を見るかはりに障子を見たり、自分が見る代りに妻の日記を思ひ出したりしたりしてゐる。

――しかし、遁れてみるがいい、障子へなりと、妻子の目へなりと。お前自身を「彼」――さうだ、「彼」などと安易な自分を甘かした客観化など試みるよりも、その方が正確にちがひない。さうして、この障子の表情によつて一喜一憂する（まるでそれよりほかに今の自分は存在してゐないといふ有様だ）身近さであるやうに、妻子も同身ともいつていい身親さで自分で気附かないうちにあんなに鋭敏にお前を気附いてゐるのだ。あんなに烈しい鋭敏さを知つてゐるか。あの、出征中に一日も欠かさず日記を書いたり、帰つてくると、へとへとに性根もなく疲れてゐるといふ鋭敏さ！

すつと起ち上つて、妻に日記を送るやうに手紙を書かうとした。しかし何よりもこの暗さをとび出したかつた。（電話をかけてもいい、手紙をここから出して、又送つてくるまでには五日もかかるかもしれない。）さう思ひ直し、障子を開けて雪の吹き込んでゐる縁に出た。そこに下がつてゐる凍てついた手拭を摑むと帳場の方へ下りて行つた。

（つづく）

田中克己
中国后妃伝
本書の、呂后、蛸飛燕、則天武后、楊貴妃、西太后、いづれも皇帝の寵愛を得て高貴の位にのぼつた運命の女性であり、ある者は艶麗をもつて、ある者は行使した絶大な権力によつて、後世に伝つた。
二四〇円
GREEN BELT SERIES
筑摩書房

コギトの思ひ出

田中克己

話が前後するが、昭和九年卒業前後の日記を見てゐると（この日記は冒頭に「わが恋ひとわれとを飢餓と霜雪とより守りたまえ、神よ」とドイツ語で書き、「恋ひは過ぎやすく、飢ゑは永遠なり」との箴言をも附してゐる）、昭和九年の二月十三日からこの日記帳ははじまるが、ずいぶん詩を作つてゐる、といふより詩で書いた日記みたいで、散文的にはあまり資料にならない。十三日の詩は、どこにも発表し得なかつた。いやな作である。題はなくて

せむかたなく愁しきこころを抱き

外濠通ふ伝馬船を見
冷き水を見てゐしが
いつしか心は大いなる愛の上に移りにき

われは愛すべからぬ人をおもひ
ひとはわれをかなしくしぬ
われは飯を求めしがひとびと酷くこれを
拒みたり
大いなる天より何ぞも降り来らむその日
日の飯

心と腹とひもじければひとびとに交らひ
ふたつながら満すことを得ず
ただ一人のひとによりてともに泣きしが
かれにさへ権力なかりき

ふたりして思ふらくは「地二つに割れ
われらを生きて埋めよ」と
あるひはわれら一雙の豺狼となり
巷にありて他人を喰ひのまむことを

終電車

河野仁昭

投げすてられた古タイヤのように
体を車掌台の柵にひっかけて
電車とともにぐらりと揺れ
揺れてはぎょぶりと吐き
吐いては鼻をつまらせて車掌を怒鳴っている
酔っぱらいのおっさんよ
しょうむない若ん僧が
飯場で今日もえばったんか
競輪の負けでもこんで来たんか
寝しずまった夜半の街を
鐘をふたつたたいて電車ははしり
時を告げる雄鶏のように
車掌は停留所の名を呼称する
へ次は　河原町二条ォ……
阿呆奴が　気どりくさって
ほら！
反吐でもくらえ言うとるんか
ドアが開いて幾人か降り
乗りこんでくる者はなく
ドアが閉ってふたたび電車ははしり
おっさんよ
おまえのおかみさんは
やさしいか
ぼろぎれのように
餓鬼がごろごろ寝とるんやろ
へ次は　河原町丸太町ィ……
かまうこたない
おっさん　吐け！
吐け！　吐け！
怒鳴りたいだけ怒鳴ったれ！
車掌さんには気の毒でも
どないしようもあるもんか
誰かて怒鳴りたおしたいにや
吐きだしてしまいたいんやがな
へ次はァ　河原町今出川ァ……
銀閣寺方面の方はお乗りかえ願います
通路に落ちとる野球帽
おっさんのかいな？
洟かみいな
顔のくちゃくちゃを拭いいな
歩けるんかいな？
ええ？　おっさん
なんや　泣いてはるんかいな……

かくてわれら遂げ得ぬのぞみに焦れ
われは男なれば外にありて侮られ
かれは女なれば内にありて哭き
夜　臥床に入りて人間の営みのみをつくしぬ。

これは想像の唄であるが、全然、対象なしの想像ではないことはお察しの通りである。わたしはいまの妻とこのころ恋愛してゐて、同時にわたしの奉ずる「働かざるもの食ふべからず」との教へを、彼女にも強ひたので、彼女は敢然と（わたしにはさう思へた）動めに出たのである。動め先や収入などの話はよそう。就職率五―六パーセントといふ国立大学文学部卒業を目前にして、わたしは未来をかう描いた。これがみな誤つてゐたことなぞ誰が知らう。

松本悦治氏は自ら詩人でまた伊東静雄の解説者として良い論文を書いておいでであるが「日本ロマン派の抒情――伊東静雄論――」と題する論文（日本文学九ノ九）では、コギトの仲間は

「没落者としての心情と、先行者としてのプロレタリア文学へ入つて行けぬ不安とを「生の意識」の烈しさによつて超えやうとする願望が見られる。一口にコギトといつても、保田や肥下恒夫の如き豪農、豪族の子弟から田中克己のように就職先をさがして歩か、ねばならないものまで、その生活程度にかなりの差はありながら、彼等をコギトといふ一つのサロンに集らせた内的原因は、その時代閉塞感からの脱出という点にあつたといえよう。」と見事にわり切つておいでである。わたしの定義はまことに敬服のほかないが、その生活程度がかなりの差を保田、肥下との間にもつてゐたとは思へない。（資産程度といふ言葉なら認める）なるほど保田は両国の大相撲をカブリツキで見る贅沢をしてゐた由である（級友の話）が、わたしはわたしなりに卒業論文の資料探しに名を借り――実は佐藤春夫先生の「女誡扇綺談」や「霧社」に惹かれて――台湾まで旅行したりしてゐるのだ。高見順や亀井勝一郎などの同時代の大学生とくらべて、少しもミミっちいことをささなかつた父――すでに亡くなつた――に感謝すると同時に、わが家を没落せしめた明治維新をのろふよりほかない。しかしこの同じことが豪農肥下家に十何年して訪れることなぞ、わたしたちは想像もしなかつた。ただブルジョア支配の末期でわれわれは一様に没落しつつあると感じ（考へたつもりであつたが）、悲愴になつてゐたのである。ともに父や母を早く失つて兄姉に育てられた中島、松下の両哲学青年、ドイツ語をやつた海井に比べると、わたしは現世的に恵まれてゐたが、働かねばならないと感じこれをかなへささない社会を悪罵してゐたのである。現に翌日はケロッとして

ゆふぐれになると帰るひとびとの様に
わが魂はいつか性（ナトゥール）として汝の魂を索（もと）めるといふフラグメンテと

果樹園叢書
詩集 花と息吹
堀之内 歴
花と死
毒だみ／百の棺／旅の空／感情／白い死／死体と消滅／霊魂／春と病人／死のとき／けむり／死の能面／死の化石
鳥・虫・子供
鳩・鳩・鳩／毛虫／蛙のかおぶれ／メロン・メロン／赤穂／春の食事／チビ助のお話／五月うまれ／宵がかり／子供の日に
息吹
弛緩／音響地帯／逆境／お客／第二室戸／夜さむ／オンボロ／放念／剝き身／休止者／靖びた眼醒／柿一つ／事後／にし／月とびつこ／放心
果樹園社
〒共 300円

山腹に隠れた村村から挨拶が送られる
街は日食で忙しい
天文台へは臨時に電車が出
新聞社では新しい社員が叱られてゐる
わたしは山腹の家へ帰りたい
老いた父母を慰める方法を一つも
学校生活では教へてもらへなかつた

と書き、ゲルハルト・ハウプトマンの「青い花」と題する詩を訳しかけてゐる。東洋史専攻のくせにテキストをどこで手に入れたのだらう。

（つづく）

ヘリック詩抄（四十六）

森　亮

さだめ

痩せぎすの家畜たちが
牧場（まきば）で草を食（は）んでゐるときに、
太っちょの牡牛（をうし）が
先づ屠所（としよ）に引かれてゆく。

★

安全第一

いくら海が穏やかだと言って
陸地に越したことはない。
浮き浮きと踊って通った灘（なだ）が
後にはその船の墓場になりかねない。

★

おかどちがひ

はつかねずみを畜生！なぜ言って責めるな。
奴らは君の家の小麦を一臼（ひとうす）ほどもたべない。
罵（のの）るなら、君んとこの子供たちになさいよ。
彼等こそ君の小麦を食ひつぶすのだから。

今回紹介する三篇「さだめ」（一九六）、「安全第一」（二一二）、「おかどちがひ」（三五九）の原詩はいづれも二行詩である。それらはどれもエピグラムの本道を行く知的、教訓的詩篇で、多少とも苦味の加はつたため平板に陥る一歩手前で踏みとどまつてゐる。拙訳は自由な口語訳で、殊に二行詩を散開させて四行詩にしたので、エピグラムの鋭さは失はれたが、視覚に訴へる要素が加はつて絵のない絵本（漫画本）の一ページといふやうな物になつた。

日本の詩

美堂正義

詩集「花と息吹」はさわやかな読后感をもつて、日本への郷愁をかき立ててくれる。

「果樹園」誌上で読ませて載いた詩も、こうして一冊の本にまとめられて再読すると、違つた感銘と力強さを持つてゐる。それに詩集が大判なので、一層余情があって好もしい感じを与へてくれる。

詩は「花と死」「鳥・虫・子供」「息吹」の三部作から編集され、それぞれに特長を発揮して妙を得て、それぞれの特長が個性を如何なく表はしてゐる。

著者の最も親しい貌はどのパートにあるだらうかと、私は考へて見るのだが、軽妙さは「鳥・虫・子供」であらう、短い詩句の中に圧縮された詩情は著者の最も得意であらう。「赤穂」のタッチは現代絵画のやうに明るくて、感覚的に歌ひ上げられてゐる。「春の食事」はレモンの香りが私の鼻先にまで屈きさうである。「子供の日に」は私に似た無精者の持つ心情、その他子供を主題としたものは、皆んな微笑を誘ひさうである。「弛緩」のゆつくり　ゆつくり　海上を　たのしみながら　上つている　の台風の表現はいま迄誰もこころみなかつたものである。「柿一つ」は著者を鋭ぎ澄まされたナイフで、すぱつと切つた心好い感じと心構えがにじみ出てゐる「事後」大阪は台風コースに依る故か台風の詩が多い。台風が人間の生活や精神に及ぼす

影響が強い。この詩のやうに明るいのは、それらの詩のどれにも見受けられるが、これも著者の心の明るさとくつたくない本性が充分出てゐる。これは持味である故巧まずに泌み出てゐる。

「花と死」に収められてゐる作品は、私の最も身近にある詩境ではないかと、そのやうに考へるのだが、私より簡潔な詩句は美事であると思ふが、「毒だみ」はとり分けて美しく書かれてゐる。「旅の空」のキラ〳〵語りかけている、私は思はず天を仰ぐ、の美しさ、「春と病人」の　とにかく春が来ている　今朝俺は　生きていてよかつたと思ふ　の書き出しはしつとりとしてゐる。「死の化石」の一編は日本人として、私のやうな戦前の人間には充分同感出来る。日本敗戦のフィルムはテレビや映画で度々見るが、その度に敗けたものはいつもぼろくそに云はれ、現代人の歴史観といふへんてこな立場から、ゆがめられた編輯の下に映し出されて、腹の立つことが度々である。失はれたものへの愛惜は昔への日本の回帰ではなく、無駄に死んでいつたといふぶじよくに依つて葬られた、私達の同胞に対しての怒りである。それらの誤つている人達には、私の立場から云つて色々と言ひたいことはあるけれども、怒りを持つて反撥したい。この詩は日本人としての心を表はしてゐる。

簡単ではありますが、著者に一言御礼を申述べて、今後の御発展を祈ります。

正説、水晶観音

―伊東静雄研究餘録―

小高根二郎

伊東静雄が死ぬ二年前になつて、弟子の斎田昭吉に口述した敢文に、「水晶観音」がある。

諫早から有明海沿ひに三四里北上したところにYという部落があつて、そこから谷川沿ひに多良岳を分け入つたところにある御堂の本尊――水晶観音によせる思慕である。

なんでも堂守の尼さんは姉江川ミキさんの友人とかで、朝夕「南無、大仁、大悲の観世音菩薩」と唱へると、伊東の平癒を祈つてくれてゐるといふのである。その由をミキさんから伝へ聞いた伊東は、いつしらず「なむ、だいに、だいひの、かんぜおんぼさつ」と名号を呼んでゐる心境を伝へてゐる。

ところで、この伊東の口述は間違つてゐたのである。少年の頃の遠足の思ひ出と、ミキさんの話とがこんぐらがつて、空想上の水晶観音を伊東の脳裏に浮べてゐたのである。

伊東が推定してゐる多良岳の麓のYという部落とは矢上町のことであり、そこにある観音は「滝の観音」――俗に「御手洗(おちようず)の観音」と呼ばれ、「水晶観音」とは別のものである……とは、諫早在住の詩人上村肇の教へるところである。即ち、矢上町とは反対に諫早の南方、橘湾沿ひの北高来郡森山村唐比の補陀林寺の本尊が正説「水晶観音」であつたのである。

「諫早市史」第三巻第十二章の伝へるところによると、同寺は曹洞宗に属し、本尊は十五糎ほどの水晶の観世音菩薩の坐像で、子供の守護仏として南・北高来郡の婦人の信仰を一身に集めてゐる由である。なほこの観音には、次のやうな由来記があることを伝へてゐる。

歌集　捜神

前川佐美雄

戦後はじめての歌集。昭和二十三年から三十年に至る八年間の精髄一、一七四首を収録。

定価一〇〇〇円

東京都千代田区神田神保町一ノ三
振替東京四六九六

昭森社

千年も以上の昔、朱雀天皇の御代に、北高来郡は唐北に、渡辺四郎五郎渡という豪族が住んでゐた。そのひとには虎御前という美しい姫があつた。彼女が物心ついた頃、不幸にも両親があひついで亡くなつた。彼女は日夜泣き悲しんだことはもちろんである。ところが、泣きじやくる姫をあやして乳母が庭の隅にゆくと、不思議と姫は泣きやむのであつた。いや、泣きやむどころではない、姫は庭隅にある楠のまわりを廻つたり、そのなめらかな木膚を愛撫して、楽しげに遊び戯れるのであつた。このさまを見て、誰いうとなく、楠は姫の婿殿だ……ということになつた。

姫が十五才になつた或る夏の日のことである。姫は突然、この楠で刳舟を作つて、湖に浮べてくれ……と言ひだした。乳母をはじめ周囲の者がなだめたが、いかな姫はきゝいれなかつた。やむをえず楠の大樹を伐り倒すと望みどほりの舟が作られた。

盆の十六日に進水式が行はれることになり舟に乳母や小間使が乗りこんで、水上に押し出さうとしたが、どうしたわけか、刳舟は微動だにしなかつた。占師が呼ばれてうらなつた結果、姫と乳母だけが乗れば進水まちがひなしとの判定がでた。そのとほり二人だけが乗ると、舟はひとりで走りだし、湖心に達したとおもふころ、舟は渦巻に巻かれると、あれよ……あれよ……というひまに、湖の底に沈んでしまつた。早速、救助の舟は漕ぎだされて乳母だけは助けだされたが、姫と舟はまる。

鐘が鳴る

浅野晃

日はわたくしにささやいた
さあ、いつしよに舞へ――と
路上に塵は舞ひ
烟は軽くあがる
けれど彼は傷ついたままだ
誰が扶けて舞はせるのか
みんな流れへ赴いて
浮いたり沈んだりだ
短い日がくれる
黄いな月が出る
月はわたくしにささやいた
さあ、いつしよに舞へ――と
けれど彼は横たはつたままだ
みんな浮いたり沈んだりだ
あれは何だ、鐘の声だ
鳴つてゐる、幾千の鐘が
幾万の鐘が、幾億の鐘が
鳴つてゐる、わたくしは聞く
彼が立ちあがる、そして
わたくしにかうささやく
さあ、いつしよに舞はう
舞ひながら過ぎて行かう――と
かくてわれらは過ぎて行つた
歌ひながら、舞ひながら
ここの巷を過ぎて行つた
すべての墓を超えて行つた。

小高根二郎

詩人、その生涯と運命

―書簡と作品から見た伊東静雄―

わが国の伝記文学に新しい分野をひらいた傑作であろう……ゲーテにおけるエッカーマン、サミュエル・ジョンソンにおけるボズウェル。これらの伝記作家に範を仰ぎ、師の生活信条や詩精神をわがものにすることによって、詩人像を再現すべくあらゆる努力を傾けたのだ

〔東京毎日新聞〕

この伝記には伊東と交遊のあった詩人や批評家がつぎと登場して、さながら劇中劇のようなおもしろさで、昭和十年代文学の一面をえがく

〔東京新聞〕

近刊　新潮社

たと戻らなかつた。

このことがあつてから、毎夜のこと、あたりに機を織るやうな音がして、村人たちを怖れさせた。

しかし、星うつり世も変り、湖上にも五百年の歳月が流れて、この悲劇も村人に伝説として語り伝へられるだけになつた。後柏原天皇の文亀三年のことである。この年は夏から秋にかけて関西は大日照となり、雨は一滴も降らず、万物は枯れ果てゝ大地は沙漠となるのではないかと憂はれた。天皇はことの重大さを憂慮されると、諸国に命じて雨乞ひの祈願を命じられた。しかし、その祈願の諸声も天に通じた模様は一向に見えなかつた。

或る夜、天皇の夢枕に全身透明な観音大士がたゝずみ給うた。

「肥前唐比の竜神に祈れよかし」

と告げると、その姿は掻き消えてゐた。早速土地の守護職西郷石見守に勅命が下つた。石見守は深堀の菩提寺から融通阿闍梨を招くと、二十一日間の法華読経で祈願を行はせた満願の日となつた。夜明けからの雨空、はやがて沛然たる豪雨をもたらして、西国の全体に洪水を起したほどであつた。

夕方、雨がやんだとき、例の湖心から一艘の刳舟が忽然として浮びでた。舟の中を改めると不思議や一躰の水晶観音がましました。石見守はますます驚ろき畏んで、同年八月に湖畔の景勝の地に薬葺の小堂を建立して祀りもうした。これが補陀林寺の水晶観音である。

ちなみに、伊東の平癒を祈つてくれた堂守は、高森カツコという歌のたしなみのあつた尼さんだつた由であるが、先年亡くなつたとのことである。

編集後記

今月は妙な月であつた。

十月十日オリンピックの開幕から終幕までの二週間、文字どおり世界の若さと力が日本中に爆発した。その前後この国の文化人の一部で例の倒錯的な発言がジャーナリズムの片隅に胡坐をかいているのを発見した。一と頃はやつた逃亡兵を英雄と曲筆したあの歪んだ論理である。スポーツで競う若さと力をいきなり戦争に直結したり、その勝負が結局はナショナリズムを昂揚して国粋主義を誇発させる危険があるというのである。

このオリンピック開催期中の十二日みごとに打ち揚げた三人乗り宇宙船「ボスホード」を世界に誇つたフルシチョフ氏が三日後の十五日には失脚していた。

翌十六日には、その失脚を祝福する花火のように中国はロプノル湖付近にウラン二三五の原爆を打ち揚げた。

二十五日にはもはや拾収つかなくなつた経済政策を前癌症状でカモフラージュ？　して池田首相は花道から消えていつた。入院すべきはもともと彼の倒錯的経済政策だつたのだ。

世界の政治や外交が今日ほど信用しがたい時代はまたとあるまい。それに比して詩人の営みはなんといじらしくまつとうすぎていることであろう。近刊された殿岡辰雄氏の豪華な詩集「重い紅」は恐らく彼の六十年の生涯のすべてが賭けられた業績だろう。VIKINGの広瀬正年小詩集「堀之内歴氏の「花と息吹」」共に今日の政治や外交より遙かに信憑性がある。（O）

果樹園　第一〇六号（毎月一回一日発行）
昭和三十九年十二月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所　果樹園社
定価　四十円　送料　十円

果樹園　一〇六号　昭和三十九年十二月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料十円